

静岡県磐田郡豊岡村

押越・社山古墳群
調査報告書

1 9 8 3

静岡県磐田郡豊岡村教育委員会

静岡県磐田郡豊岡村

押越・社山古墳群 調査報告書

1 9 8 3

静岡県磐田郡豊岡村教育委員会

発刊にあたって

雄大な天竜川は、その流れをほしいままにし、その流れによって創生された洲は、地味豊かな天竜平野を形成しました。往古より住民は河水に侵されない丘陵に住居を構え、農耕にいそしんでいましたが、丘陵といえども想像を絶するような大洪水により、丹誠込めて作った田畠や家を流されること数限りなく、その水害にもめげず、この土地を愛し続けてきました。

このような天竜川との戦いの地でありながら、戒々の遠い祖先は、その足あとを磐田原台地の北端である丘陵に残してくれて有ります。

近年の高度経済成長による開発の波が我々の地にも及んできています。特に先人の残してくれた文化遺産といえども、開発の手はゆるむことを知りません。従って、開発と文化財の保存は重要な問題になってきています。

さて、今回上神増押越古墳群（昭和45年度発掘調査）が土地改良事業（田床改良事業）に伴い、その改良上として最良の土質であることからこの地が選定され、また、社山古墳群（昭和46年度発掘調査）が広域簡易水道事業に伴い、その配水池造成地としてこの地が選定されました。それぞれの開発予定地に存在する古墳群の記録保存をはかる目的に発掘調査が行われ、考古学の権威者である日本考古学協会会員、久永春男先生を調査団長として担当していただき、調査に当られた諸兄の熱意により、本調査が無事完了したことは大変喜ばしいことです。

ここに調査報告書を発刊するにあたり、昭和45年発掘調査開始より12年間の永きにわたり、ご指導下さった久永春男先生はじめ、七原恵史（日本考古学協会会員）先生を主任として、諸先生方並びに、終始調査に深い理解とご協力をいただいた関係業者・地主・地元上神増・社山地区の方々、調査に参加された各方面の皆様に厚くお礼申し上げるとともに、本書がより多くの人々に活用されることになれば幸いです。

昭和 58 年 3 月

静岡県磐田郡豊岡村教育委員会

教育長 鈴木 博

押 越 古 墳 群

例 言

1. 本書は静岡県磐田郡豊岡村押越古墳群の調査報告書である。
2. 押越古墳群の調査は、田床改良事業による土砂採集によって壊されことになったので、これに先立って実施したものである。
3. 本書の遺物写真の番号は、挿図番号である。
4. 本書に収録した写真は、久永春男、松原尚夫、七原恵史、仙田作吉、木村哲雄、川合昭二が撮影した。
5. 出土した遺物の整理・復原・実測・トレースは、各古墳の調査担当者（執筆者）の他に、東海考古学研究会の奥崎万里子、小木卓也、秋田文代、谷口静子、愛知県貝塚山貝塚資料館嘱託丹羽博、立正大学学生竹内宇哲各氏の協力を得た。
6. 本書の編集は七原恵史、仙田作吉、木村哲雄が行ない、久永春男が監修した。
7. 本書の執筆者は末尾に示した。
8. 本古墳群の調査は下記の者が行なった。

調査担当　・ 日本考古学協会員 久永春男

調査員　・ 斎藤嘉彦、七原恵史、森達也、佐吉政浩、久永貞見

東海考古学研究会　・ 仙田作吉、辻秀樹、松林幸夫、小出良信、木村哲雄、畠田静子、坂野和信、山崎二三男 愛知大学学生　・ 高柳正美 静岡県立二俣高等学校　・ 小木卓也、鈴木茂男、鈴木博美、鈴木民江、松下千鶴、藤下純子、藤田美恵子、山本明代、加藤秀子、岩根ちまえ、鳥居久美子 豊岡村　・ 古川栄一、川合房子、藤森久雄、藤森宏、藤森昌好、秋山辰夫、藤森とみえ、藤森はるゑ、藤森幸子、秋山博、加藤忠一、大石吉平、太田忠藏、横山鉄雄、伊藤熊次、工藤金次郎、早川治雄、藤森康行、佐藤猪恵、太田みよ、寺田ちえ子
(順不同) 森町　・ 大場栄治 愛知県立緑丘商業高等学校社会科研究クラブ　・ 羽佐田和正、内田博明、伊藤一也、種垣康平、井上勝則 愛知県立中村高等学校生徒　・ 伊藤義人、早川寛 愛知県立明和高等学校生徒　・ 鈴木健一、友田倫男、高橋明男、竹田由美子 豊岡村立豊岡中学校生徒　・ 大城正博、松島茂、松島睦典 名古屋市立千種台中学校生徒・ 岩崎直也、津金倫明

豊岡村教育委員会　・ 教育長太田孝之、川合昭二、鈴木真美、高橋陽、小野田和代、中村和美、鈴木政好

目 次

発刊にあたって

例 言

第1章 位置と地形・調査の経過	1
1. 位置と地形	1
2. 調査の経過	3
第2章 押越第1号墳	5
1. 位 置	5
2. 調査の経過	5
3. 墳 丘	5
4. 石 室	8
5. 遺物の出土状態	9
6. 遺 物	9
7. 小 結	9
第3章 押越第2号墳	10
1. 位 置	10
2. 調査の経過	10
3. 墳 丘	11
4. 石 室	11
5. 遺物の出土状態	14
6. 遺 物	16
7. 小 結	17
第4章 押越第3号墳	18
1. 位 置	18
2. 調査の経過	18
3. 墳 丘	18
4. 石 室	20
5. 遺物の出土状態	22
6. 遺 物	23
7. 小 結	26

第5章 押越第4号墳	28
1. 位 置	28
2. 調査の経過	28
3. 墳 丘	28
4. 石 室	29
5. 遺物の出土状態	31
6. 遺 物	33
7. 小 結	42
第6章 押越第5号墳	43
1. 位 置	43
2. 調査の経過	43
3. 墳 丘	43
4. 石 室	45
5. 遺物の出土状態	47
6. 遺 物	48
7. 小 結	49
第7章 押越第6号墳	50
1. 位 置	50
2. 調査の経過	50
3. 墳 丘	50
4. 石 室	52
5. 前 溝	55
6. 遺物の出土状態	55
7. 遺 物	57
8. 小 結	64
第8章 押越第7号墳	66
1. 位 置	66
2. 調査の経過	66
3. 墳 丘	66
4. 石 室	67
5. 遺物の出土状態	70
6. 遺 物	71
7. 小 結	72

第9章 押越第8号墳	73
1. 位 置	73
2. 調査の経過	73
3. 墳 丘	73
4. 石 室	74
5. 遺 物	77
6. 小 結	77
第10章 押越第9号墳	79
1. 位 置	79
2. 調査の経過	79
3. 墳 丘	79
4. 石 室	79
5. 遺物の出土状態	82
6. 遺 物	82
7. 小 結	82
第11章 押越第11号墳	83
1. 位 置	83
2. 調査の経過	83
3. 墳 丘	83
4. 石 室	86
5. 遺 物	86
6. 小 結	87
第12章 押越第12号墳	88
1. 位 置	88
2. 調査の経過	88
3. 墳 丘	88
4. 石 室	91
5. 遺物の出土状態	91
6. 遺 物	92
7. 小 結	97
第13章 押越第13号墳	99
1. 位 置	99
2. 調査の経過	99

3. 墳 丘	99
4. 石 室	99
5. 遺物の出土状態	102
6. 遺 物	102
7. 小 結	104
第14章 押越第14号墳	105
1. 位 置	105
2. 調査の経過	105
3. 墳 丘	105
4. 石 室	105
5. 遺物の出土状態	107
6. 遺 物	107
7. 小 結	110
第15章 押越第16号墳	111
1. 位 置	111
2. 調査の経過	111
3. 墳 丘	111
4. 石 室	111
5. 遺 物	112
6. 小 結	114
第16章 押越第20号墳	115
1. 位 置	115
2. 調査の経過	115
3. 墳 丘	115
4. 石 室	115
5. 遺物の出土状態と遺物	116
6. 小 結	117
第17章 結 語	118

挿 図 目 次

第 1 図	押越古墳群(1)・社山古墳群(2)位置(1:25,000)	1
第 2 図	押越古墳群北尾根支群付近地形図	2
第 3 図	押越第1号墳墳丘実測図	6
第 4 図	押越第1号墳石室実測図	7
第 5 図	押越第1号墳出土銀環実測図	9
第 6 図	押越第2号墳墳丘実測図	12
第 7 図	押越第2号墳石室実測図	13
第 8 図	押越第2号墳遺物出土位置図	14
第 9 図	押越第2号墳出土須恵器実測図	15
第 10 図	押越第2号墳出土鐵製品実測図	16
第 11 図	押越第3号墳墳丘実測図	19
第 12 図	押越第3号墳石室実測図	21
第 13 図	押越第3号墳遺物出土位置図	22
第 14 図	押越第3号墳出土須恵器実測図	23
第 15 図	押越第3号墳出土土製漆玉実測図	24
第 16 図	押越第3号墳出土銀環実測図	25
第 17 図	押越第3号墳出土ガラス製小玉実測図	25
第 18 図	押越第3号墳出土鐵刀実測図	26
第 19 図	押越第3号墳出土鐵劍実測図	26
第 20 図	押越第3号墳出土砥石実測図	27
第 21 図	押越第4号墳墳丘実測図	29
第 22 図	押越第4号墳石室実測図	30
第 23 図	押越第4号墳遺物出土位置図	32
第 24 図	押越第4号墳出土土師器実測図	33
第 25 図	押越第4号墳出土須恵器実測図	35
第 26 図	押越第4号墳出土鐵刀実測図	37
第 27 図	押越第4号墳出土刀子・銅実測図	38
第 28 図	押越第4号墳出土鐵鎌実測図	39

第 29 図	押越第4号墳出土馬具実測図	41
第 30 図	押越第4号墳出土玉類実測図	42
第 31 図	押越第5号墳埴丘実測図	44
第 32 図	押越第5号墳石室実測図	46
第 33 図	押越第5号墳遺物出土位置図	48
第 34 図	押越第5号墳出土須恵器・土師器実測図	48
第 35 図	押越第5号墳出土鐵刀実測図	49
第 36 図	押越第5号墳鐵鎌実測図	49
第 37 図	押越第6号墳埴丘実測図	51
第 38 図	押越第6号墳石室実測図	53
第 39 図	押越第6号墳遺物出土位置図	55
第 40 図	押越第6号墳石室内山茶碗出土状態図	56
第 41 図	押越第6号墳出土蓋環実測図	58
第 42 図	押越第6号墳出土須恵器実測図	59
第 43 図	押越第6号墳出土須恵器・山茶碗実測図	60
第 44 図	押越第6号墳出土須恵器実測図	61
第 45 図	押越第6号墳出土須恵器実測図	62
第 46 図	押越第6号墳出土須恵器実測図	62
第 47 図	押越第6号墳出土土師器実測図	62
第 48 図	押越第6号墳出土金環実測図	63
第 49 図	押越第6号墳出土刀子実測図	63
第 50 図	押越第6号墳出土鐵鎌実測図	63
第 51 図	押越第6号墳出土鐵刀実測図	63
第 52 図	押越第6号墳出土砥石実測図	64
第 53 図	押越第7号墳埴丘実測図	67
第 54 図	押越第7号墳第1次石室実測図	68
第 55 図	押越第7号墳第2次石室実測図	69
第 56 図	押越第7号墳遺物出土位置図	71
第 57 図	押越第7号墳出土須恵器実測図	71
第 58 図	押越第7号墳出土鐵器実測図	71
第 59 図	押越第7号墳出土金環実測図	72
第 60 図	押越第8号墳埴丘実測図	74

第 61 図	押越第8号墳石室実測図	75
第 62 図	押越第8号墳第2次床面実測図	76
第 63 図	押越第8号墳第1次床面遺物出土位置図	77
第 64 図	押越第8号墳出土須恵器実測図	77
第 65 図	押越第8号墳出土刀子・鉄鏃実測図	78
第 66 図	押越第9号墳墳丘実測図	80
第 67 図	押越第9号墳石室実測図	81
第 68 図	押越第9号墳出土小玉実測図	82
第 69 図	押越第9号墳出土金環実測図	82
第 70 図	押越古墳群中尾根支群地形図	84
第 71 図	押越第11号墳石室実測図	85
第 72 図	押越第11号墳出土丸玉実測図	87
第 73 図	押越第12号墳石室実測図	89
第 74 図	押越第12号墳出土装身具実測図	92
第 75 図	押越第12号墳出土須恵器実測図	93
第 76 図	押越第12号墳出土須恵器実測図	94
第 77 図	押越第12号墳出土須恵器・土師器実測図	95
第 78 図	押越第13号墳墳丘実測図	100
第 79 図	押越第13号墳石室実測図	101
第 80 図	押越第13号墳出土須恵器実測図	102
第 81 図	押越第13号墳出土須恵器実測図	103
第 82 図	押越第13号墳出土鉄刀実測図	104
第 83 図	押越第13号墳出土鉄鏃実測図	104
第 84 図	押越第14号墳石室実測図	106
第 85 図	押越第14号墳出土須恵器実測図	107
第 86 図	押越第14号墳出土須恵器実測図	108
第 87 図	押越第14号墳出土鉄刀実測図	110
第 88 図	押越第14号墳出土鉄鏃実測図	110
第 89 図	押越第16号墳石室実測図	112
第 90 図	押越第16号墳出土管玉実測図	112
第 91 図	押越第16号墳出土鉄鏃実測図	113
第 92 図	押越第16号墳出土馬貝実測図	113

第 93 図	押越第16号墳出土須恵器実測図	113
第 94 図	押越第20号墳埴丘実測図	116
第 95 図	押越第20号墳石室実測図	116
第 96 図	押越第20号墳出土須恵器実測図	117
第 97 図	押越第20号墳出土鉄刀実測図	117

図 版 目 次

図 版

- 第 1 (1)屯貫地から押越古墳群を望遠する（西から）
(2)押越第 3 号墳から見下ろす（北東から）
- 第 2 (1)押越第 1 号墳石室（南から）
(2)押越第 2 号墳石室（南から）
- 第 3 (1)押越第 2 号墳羨道部の立石（西から）
(2)押越第 2 号墳羨道部立石近景（南から）
(3)押越第 2 号墳羨道部立石を玄室内からみる
(4)押越第 2 号墳遺物出土状態
- 第 4 (1)押越第 3 号墳石室（南から）
(2)押越第 3 号墳石室（北から）
- 第 5 (1)押越第 4 号墳石室（東から）
(2)押越第 4 号墳石室（西から）
- 第 6 (1)押越第 4 号墳羨道左側壁（南から）
(2)押越第 4 号墳石室内遺物出土状態
(3)押越第 4 号墳前溝（西から）
(4)押越第 4 号墳石室内遺物出土状態
- 第 7 (1)押越第 5 号墳石室（南から）
(2)押越第 5 号墳石室（北から）
- 第 8 (1)押越第 6 号墳石室と前溝（南から）
(2)押越第 6 号墳前溝（西から）
- 第 9 (1)押越第 6 号墳間仕切石の状態（羨道から）
(2)押越第 6 号墳上方からみた間仕切石の状態（西から）
(3)押越第 6 号墳石室全景と前溝の状態（南から）
- 第 10 (1)押越第 6 号墳鐵刀・金環出土状態
(2)押越第 6 号墳石室內山茶碗・刀子・古錢出土状態
(3)押越第 6 号墳金環出土状態
(4)押越第 6 号墳羨道部における掻取出土状態
- 第 11 (1)押越第 7 号墳大井石・閉塞石の遺存状態
(2)押越第 7 号墳清掃後の石室

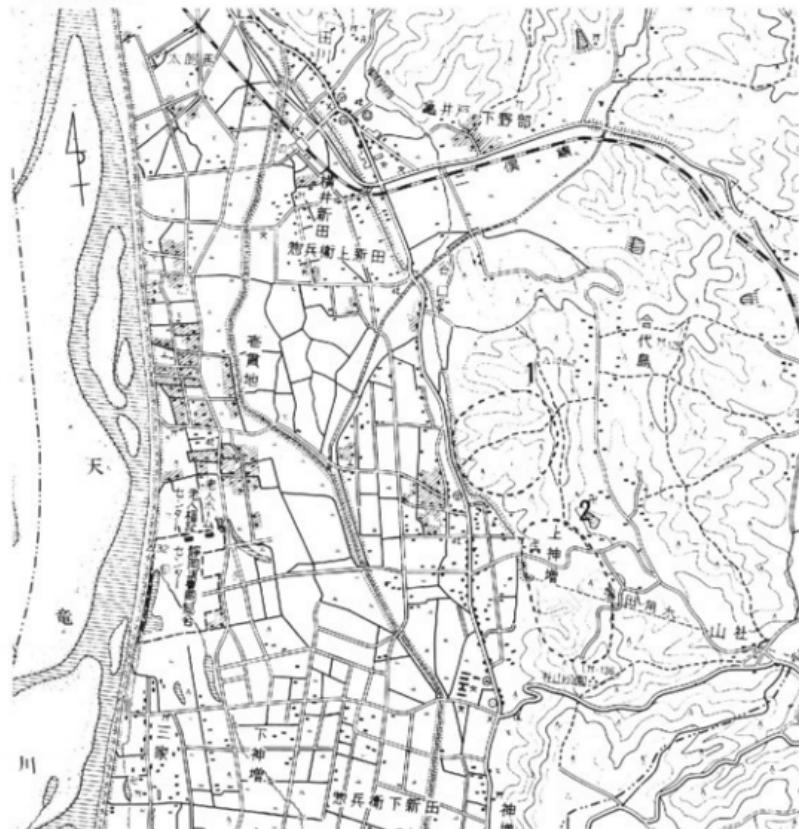
- 第12 (1)押越第8号墳石室（敷石は第2次）（南から）
(2)押越第8号墳石室（敷石は第1次）（南から）
- 第13 (1)押越第8号墳奥壁
(2)押越第8号墳閉塞石（南から）
(3)押越第8号墳刀子出土状態
(4)押越第8号墳閉塞石（石室内から）
- 第14 (1)押越第12号墳石室（南から）
(2)押越第12号墳奥壁
- 第15 押越第2号墳出土須恵器
- 第16 押越第4号墳出土須恵器(1)
- 第17 押越第4号墳出土須恵器・土師器(2)
- 第18 押越第5号墳・第7号墳・第8号墳・第13号墳出土須恵器
- 第19 押越第6号墳出土須恵器(1)
- 第20 押越第6号墳出土須恵器(2)
- 第21 押越第6号墳出土須恵器・山茶碗(3)
- 第22 押越第6号墳出土須恵器(4)
- 第23 押越第12号墳出土須恵器(1)
- 第24 押越第12号墳出土須恵器(2)
- 第25 押越第12号墳出土須恵器(3)
- 第26 押越第13号墳・第16号墳・第20号墳出土須恵器
- 第27 押越第14号墳出土須恵器(1)
- 第28 押越第14号墳出土須恵器(2)
- 第29 押越第14号墳出土須恵器(3)
- 第30 押越第1号墳・第3号墳・第6号墳・第7号墳出土金環・銀環 第4号墳・第9号墳出土玉類
- 第31 押越第3号墳出土土玉、第5号墳・第8号墳・第13号墳・第20号墳出土鉄刀、刀子
- 第32 押越第4号墳出土鐵鏃
- 第33 押越第4号墳出土鐙・刀子・馬具
- 第34 押越第5号墳・第7号墳・第8号墳出土鐵鏃、第7号墳出土人骨
- 第35 押越第7号墳出土鐵鏃・鐙・刀、第16号墳出土馬具・鐵鏃・管下

押越古墳群

第1章 位置と地形・調査の経過

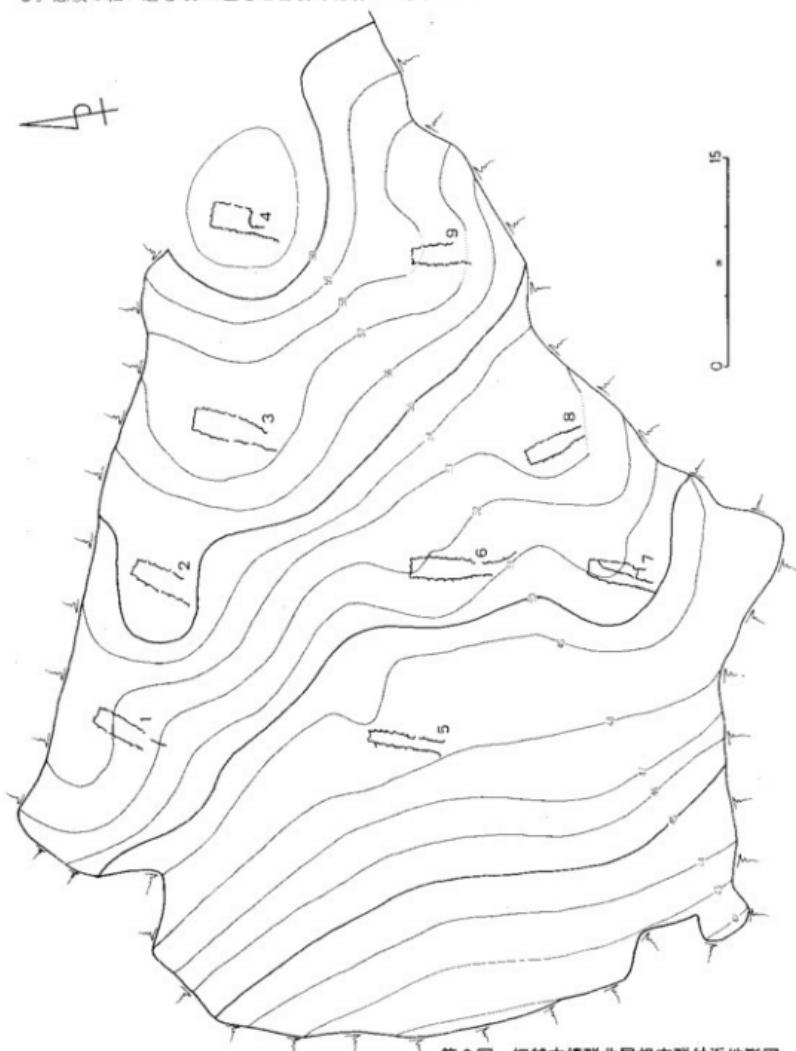
1. 位置と地形

上神増押越古墳群は、豊岡村のはば中央で、磐田原合地の北端に位置し、天竜川の東、約1kmの地点にある。



第1図 押越古墳群(1)・社山古墳群(2)位置 (1 : 25,000)

東海道線磐田駅より天竜市に通じる主要地方道磐田一天竜線を、遠州鉄道のバスで北上し、磐田駅より北へ 16 km の地点に「豊岡郵便局前」の停留所がある。ここで下車し更に北へ 200 m の所に上神増押越古墳群の入口があり、これより浅羽用水を渡り、県道から 200 m ほどで急坂にさしかかる。急坂の細い道を 30 m 登ると古墳群北端にたどりつく。



第2図 押越古墳群北尾根支群付近地形図

古墳群は磐田原北端近くに位置しているが、磐田用水が下をくぐっている上神増一社山の鞍部を境にして、それより南方の、平坦面に茶園の展開する台地とはいさか様相を異にし、古墳群周辺は開拓の進んだ丘陵性台地である。鞍部以南の平坦面が更新統上部に属する磐田原礫層を乗せているのに対し、古墳群の存在する合代島一上神増地区は磐田原の基盤である鮮新統の掛川層群で形成されている（註1）。標高は古墳群背後の尾根で 105.2 m を示し、多くの侵蝕谷によって分断された幾條かの尾根が舌状に低地に臨んでいる。

古墳群はそれらのうち、掌状に分岐した北中央・南の二本の尾根の、標高 50 m ~ 90 m 付近に分布し、北側の尾根に 1 号墳から 9 号墳があり、中央尾根には 11 号墳から 15 墳があり、南側の尾根には 20 号墳、21 号墳が点在している。

そして、丘陵の麓西方へ天竜川までは標高 25 m ~ 30 m の沖積地が展開し、東には、丘陵に囲まれた合代島・社山の集落がある。
(川合)

註1 20万分の1 地質図「豊橋」工業技術院地質調査所 1972年

横山次郎、森下晶、糸魚川淳二『日本地方地質誌、中部地方』改訂版 聖書店 昭和 50 年

2. 調査の経過

本村では、昭和 44 年度から豊岡村南土地改良区が創設され、田床改良事業が行なわれることになった。これは、天竜川の砂利乱掘によって河床が低下し、水位が下ったため、水稻作ができなくなったので、水田の床を下げるとともに赤土の床に作り替える工事である。これに必要な赤土が上神増押越の山地の赤土で、農林省の検査にも合格し、また近距離にあって好都合であるのでここから採土することになり、作業が開始された。

ところが、昭和 45 年 4 月に、1 通は村長宛、1 通は教育長宛の封書が来た。これには、本村の採土現場で古墳が破壊されているとのことであった。また、県教育委員会文化財係担当池谷和三先生からも問合せの連絡があったので、文化財調査員が急いで現地に出向いて、事実を確認した。そこで作業を中止するよう指示し、木村教育委員会に調査結果を報告し、県教育委員会池谷先生の米料を依頼し、採土業者にも 4 月 10 日現地に集合するよう連絡した。

4 月 10 日に県教育委員会文化財担当池谷和三、斎藤氏と本村、助役稻葉正睦と筆者が加わり、午前 10 時に集合し、現場を視察したあと、午後から前後策を検討した。席上、池谷氏から文化財保護法の解説と、調査の経費などについて説明があった。また、古墳の分布調査の必要があるので、磐田市教育委員会の平野和夫氏に依頼することにしたが、雨にわざわいされて中止になった。この後、調査担当者を日本考古学協会久永春男氏に依頼することに決定し、4 月 15 日に来村していただいた。

この結果、22 基の古墳が確認された。同日、調査経費の支弁、準備品、調査日程などについて業



調査開始頃の状況、中央が第6号墳



第6号墳埋土排除作業、後方は第2号墳



第5号墳石室実測状況



者を交えて協議し、5月10日から調査を開始することが決定した。

調査開始などの準備をして、4月21日に古墳群付近の立木を調査し、午後から教育委員会と業者、地主が集まり、細部について協議した。翌22日は地主の承諾を受けるため各所を訪ねた。その後、宿泊所、食事、人夫についてそれぞれ手配し、5月10日から調査にとりかかった。

(川合)

左下：探土工事が進み、第6号墳前溝まで近づいた。

下：探土工事で押越古墳が消滅はじめた。



第2章 押越第1号墳

1. 位 置

第1号墳は、北西にのびる支丘の稜線上にあり、押越古墳群の北西端にあたる。第1号墳の東側には第2号墳があつて墳裾を分つており、南へ18mの地点には第5号墳がある。第1号墳の築かれている地点の標高は53mである。

2. 調査の経過

第1号墳には、大きな盗掘坑があけられていて、石室内はほとんど荒されてしまっているものと予想され、調査はそれ程時間を要しないものと考えられたので、他の古墳の調査状況をみながらすすめることとし、7月25日から開始した。

しかし、石室内におちこんだ土砂を運び出すのに3日かかり、細部の清掃にはさらに2日間を要した。これに加えて、羨道部から前庭部にかけては、大きな石が横たわっており、石室の延長かあるいは天井石が盃掘に際して放り出されたものか、判断に迷うもの多かった。その都度検討しながら除去し、残すべきものは残した。また右側壁が左側壁に対して長いことから、右側壁背後の墳丘を清掃して、側壁であるか否かを確認することにした。墳丘の表土を剥いでいくと、葺石状の石が散布していたので、改めてこの部分を拡張したが、葺石は、墳丘を覆うものではなく、部分的なものとわかった。

石室の清掃を終了してから、写真撮影を行い、実測にとりかかった。石室の平面図を作成する途中で、奥壁近くの敷石の間から銀環が発見された。盃掘によって石室内の遺物はほとんど持ち去られたが銀環だけは見落したものであろう。

石室の調査が終ろうとする頃、第5号墳や第6号墳の石室前端に溝が掘られていることがわかったので、本墳にもそうした溝があるのではないかと考えられたので、掘りさげてみた。はたして、第1号墳にも溝は掘られていた。また、最後に側壁をとりはずし、掘り方が、石の直後にあることも確認して調査を終了した。

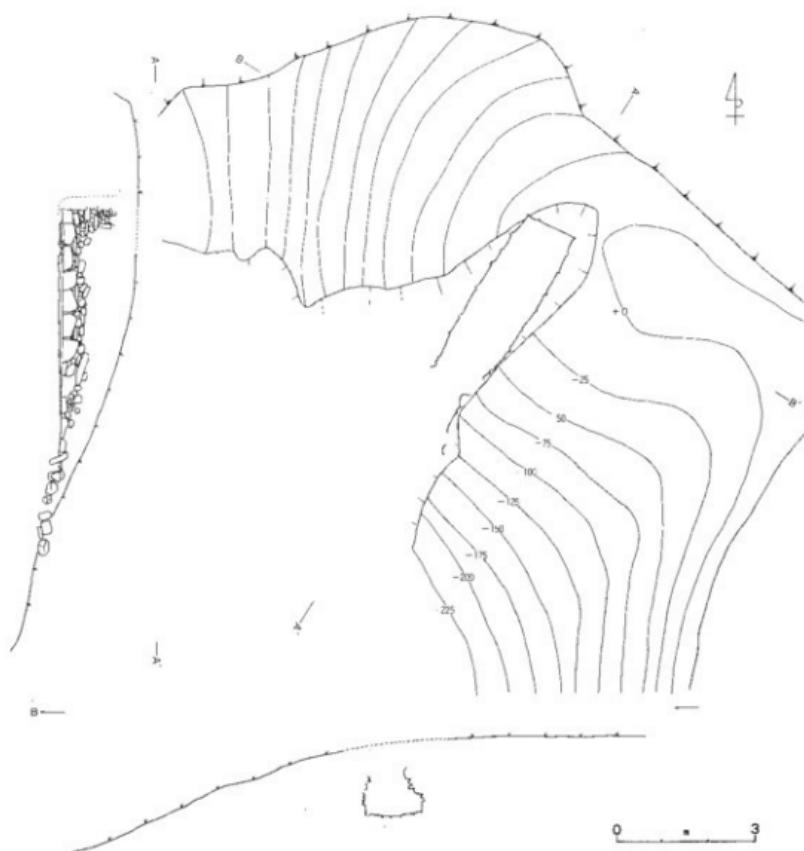
3. 墳 丘

第1号墳は、支丘の北西端の斜面を掘りさげて築いている。そのため自然地形とほとんど区別がつかない状態である。

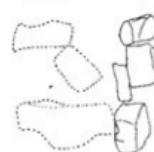
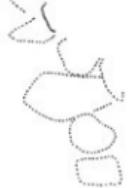
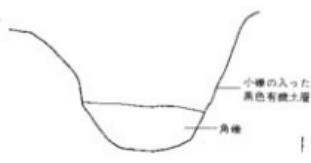
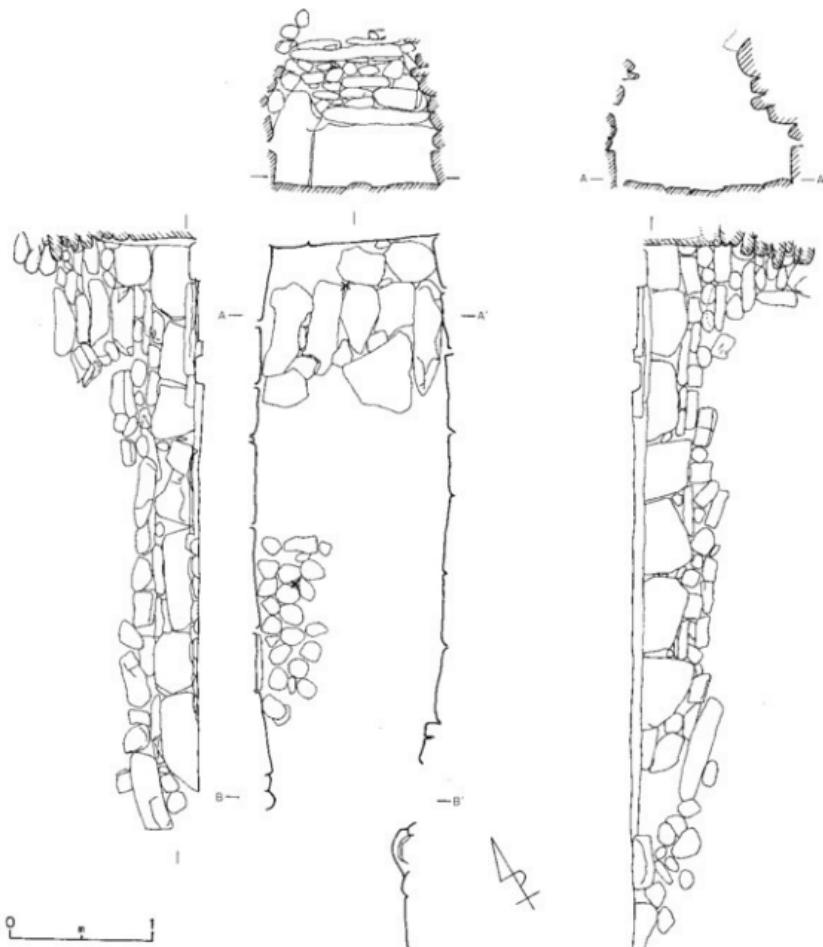
第1号墳の頂部にも石室をほとんど掘りだした大きな盃掘坑があけられている。盃掘の際にも墳丘頂部の盛土や石室の土砂も、石室前方の南西側斜面にかきおろしており、墳丘の北西側と

南東側の形状を大きく損うことにはならなかったものとみられる。

墳丘の等高線は、±0 cm を除いて -25 cm から -300 cm まではば等間隔で、半円形を描いて緩傾斜をなし、支丘傾斜面と区別できない。しかし、第2号墳との境では±0 cm から -100 cm の等高線は弯曲していて、第2号墳との境は掘りさげて区画しているようにみえる。また石室の調査終了後、石室の掘り方を調べたところ、石室の奥壁部で地山を旧地表から 1.20 m 掘りさげて構築し、天井を覆う土は約 50 cm であることが明らかになった。ただし現状における覆土の厚さは、古墳築



第3図 押越第1号墳墳丘実測図・第4図 押越第1号墳石室実測図(×は銀環出土位置)



小礫の入った
黒色有機土層

角地

成後、墳丘上に積成した腐植土も考慮に入れなければならないのも、もとは 40 cm 程度であったとみられる。墳丘の直径は、8 m 前後を目ざしたものであろうが隣接する第 2 号墳と墳域を共有しているので、実際には北西から南西にかけて半円形をやや上回る程度ではなかつたかと考えられる。墳丘の高さは石室床面から 1.60 m はあったであろう。

4. 石 室

第 1 号墳は、主軸を北東 - 南西にとり、南西に開口した横穴式石室である。

石室の平面形は、わずかに胴張りがある徳利形で、その規模は奥壁部で 1.10 m、胸部の最も幅の広いところで 1.35 m である。

玄室と羨道の境の東壁の石は抜きとられており、西壁の側壁には、間仕切り石（狭門）ではなく、その境界はあまり明瞭でないが、側壁の石積みをみると奥壁から 4 m のところまでは、大楽地産の石が多く使用しているが、それから前方は長めの河原石をごぼう積みに積んである。本古墳群の第 5 号墳において玄室に大楽地産の石を主に使用し、羨道部に天竜川の河原石を使って意識的に玄室と羨道部をかえているので、本古墳においても同じ築造法をとっていると考えると、石の使用法が違う地点が玄室と羨道の境になる。以上のことから玄室は長さ 4 m、羨道部の巾 1.05 m であるということができる。羨道部の左側は石組は全くなく、右側は、玄室の前端から 3.5 m まで石組があるけれど、羨道として確認できるのは、1.0 m までである。

奥壁部は、遺存状態がもっとも良好で床面からの高さは 1 m である。大楽地産の大石を 2 個すべて、そのうえに大楽地産の石を中心にならべて天竜川の河原石を使用して積まれている。この方法は側壁においてもみられ、基部には大楽地産の石をおき、その上に玄室においては大楽地産の石を中心にならべて天竜川の河原石を中心に積んでいる。持ち送りは奥壁部においては明確であるが、他の部分では崩落していて不明である。天井石は盗掘によって抜きとられており、前庭部にその一部だと思われる破碎した石が散らばっていた。

前庭部の東側には東側壁から続く大形の石があった。これらの石は外開きになっており、東側壁の延長のようにみえた。しかし個々の石は任意に置かれたものであり、盗掘の際にとりだされたものと判断した。

調査の最後の段階で奥壁と左右両側壁の背後にトレチを入れた。この結果石室の構築において地山は 1 m ~ 1.2 m 挖りこんでいること、石室の石組の背後は直ちに地山になっており、掘り方は、最少限にとどめていることが明らかになった。また玄室の前端床面を精査したところ、石室床面の前端から前庭部にかけて V 字形の前溝が掘りこまれていることも明らかになった。溝は、基盤を掘りこんでいて、底部に角礫が、上部に黒色有機土層が埋積していた。溝の幅は、石室の幅と同じ 1.0 m で石室の前端から 1.8 m の地点では 1.5 m である。

床面の敷石はおおかた抜きとされていたが、遺存した敷石には二通りの使用が認められた。ひ

とつは大業地産の平たい石のグループであり、他のひとつは大窓川産の小児頭大の河原石のグループである。前者は石室の後半に用いられ、後者は石室の前半に用いられている。石室の床面は、中央が側壁基部より 10 cm 前後低くなっている。排水施設は認められなかったけれど、排水の便を考慮しているように思われる。

5. 遺物の出土状態

押越第 1 号墳から出土した遺物は、銀環 2 個と鉄鏡である。

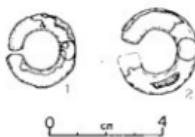
銀環のひとつ（第 5 図の 1）は奥壁から 30 cm、石室の中軸線よりやや西寄りで、大業地産の敷石の間に落ちこんでいた。他のひとつ（第 5 図の 2）は、奥壁から 2.4 m、西側壁から 25 cm の地点にある川原石を用いた敷石の間から見出された。鉄鏡は奥壁寄りの敷石の下から出土した。

6. 遺 物（図版第 30）

銀環（第 5 図の 1・2）両者ともに銀鍍金である。1 は長径 2.6 cm、短径 2.4 cm、直徑 0.5 cm、2 は長径 3.1 cm、短径 2.8 cm、直徑 0.7 cm である。1 は全体に腐蝕しており、鍍金の一部が残っているだけである。2 は約半分が残っている。

7. 小 結

第 1 号墳は、石室全体を徹底的に盗掘されていて、古墳に供献されたであろう遺物はほとんど持ち去られ、わずかに見逃された銀環



第 1 号墳出土銀環実測図

2 個と鉄鏡の破片が残されていただけであった。

現在する古墳の規模や石室の形態は、本古墳群の平均的な姿である。残された遺物も、やはり同様である。銀環 2 つは対になっておらず、複数の被葬者があったことを語っている。こうした点をみると、本古墳の被葬者は、律令制下の郷戸主の中のやや裕福な階層であったと思われる。築造の年代も、本古墳群成立時と同じく 6 世紀中葉から 7 世紀初頭になろう。

（木村・辻）

第3章 押越第2号墳

1. 位 置

第2号墳は、北西側で第1号墳と墳裾を分ち、東へ1mを隔てて、第3号墳がある。標高は54mである。

2. 調査の経過

昭和45年7月16日に、墳丘を測量。発掘調査は、7月21日から10月25日までの12日間を要した。

すでに、墳頂部の天井石は抜き取られて、奥壁も見える状態であった。石室は、南西方向に開口していることがわかったので、盗掘坑から羨道へ向って発掘を開始した。

天井石は、3枚現存していたが、3枚とも南東に傾いて落ち込んでいた。3枚の天井石は、砂岩で、厚さは15~20cm、幅と長さは、それぞれ、35cm×110cm、40cm×120cm、60cm×120cmのものであった。

天井石を取り除いたところ、石室内の埋土は敷石面まで30~40cm程の厚さに堆積しており、天井石が崩落する以前に石室内に埋土が堆積していたことを物語っている。天井石を除去した後、続いて、石室内の埋土の除去にかかった。埋土内から犬の首輪と犬骨1頭分が出土した。この犬は、盗掘坑内に落ち込んで、そのまま息絶えたものであろう。この犬の死骸の下から、鉄錆が発見された。

さらに埋土を除去していったところ、敷石面直上で、奥壁から0.7m、東壁から3.4mの位置で刀子が、さらに、奥壁から1~2.3mで、東壁より鐵錆が7片出土した。また、奥壁から2.6~3.4mの範囲の東壁より、提瓶が2個、脚付小形偏平広口壺1個、高杯1個、横瓶1個、脚付盤1個の合計6個体分の土器が発見された。また、脚付小形偏平広口壺と提瓶の肩部上から風化して部位の判然としない人骨片が検出された。

さらに、石室内の埋土を除去すると、敷石が確認された。敷石は、奥壁から1.55mまで、東壁から0.4~0.8mの間までは、拳大から人頭大の円礫が敷きつめられていたが、それ以外では、偏平な大粒地石と呼ばれる砂岩の割石が敷きならべられていた。出土遺物や人骨片、それに、敷石の様子から考えて追葬が行われたもののごとくの感を深めた。

石室の平面形は、舟底形を呈している。玄門と羨道の境には、東壁から石室中縦線に直交して西方に突き出した高さ0.3m、長さ0.4mの割石で区画されており、西壁には、幅0.15m、高さ0.35m、厚さ0.1mの割石が立てかけてある。この二つの石が、玄門である。

側壁は、西側壁では、崩落が少なく古墳築造当時の様子をしのばせているが、東側壁では、崩

落が激しいだけでなく、盗掘坑付近の側壁の割石は一部抜き取られているものと考えられる。

石室の測図をするかたわら、羨道部の発掘に着手した。玄門から南西に羨道の存在が考えられたが、閉塞石があるので、まず、閉塞石の平面図、断面図を作成した後、閉塞石を取りはずした。閉塞石は、西壁よりにあるだけで、東側半分では見られなかった。この点から考えて、2号墳は片袖式石室を持つ古墳である。閉塞石の数は、ひとかかえほどの石が31個、人頭大の石301個、挙人の石147個、合計479個を数えるが、ほとんど天龍川の川原石である。

閉塞石を取り払ったところ、西壁は最下段には、割石の長軸を縦に立てかけ、その上に割石を4～5段積みあげている。羨道部中央で、西壁から65cm東方に割石を2個たてかけ、羨道部の東側の位置を示していた。

閉塞石除去後、前庭部の傾斜の仕方と遺構の存在を確認するために、石室中軸線上の前庭部に幅50cm、長さ5mのトレンチを設定し、発掘した。黒色有機土層が認められ、その下が地山面にあたることが確認できた。この地山面は、奥壁から5～6.5mまで、ゆるやかに下っているが、6.5mの地点から急激に下がり、7.35mで最も深く、8.5mで上がっており、幅3mほどの溝状遺構になった。これは、墓道としての役目を持っていたもので、さらに溝状遺構を追究したところ古墳を取り巻くような状態で墓道が続いていることがわかった。

前庭部の調査後、掘り方を確認するために側壁の一部を取りはずしたところ、東壁側では、壁面から約25cm、奥壁で35cm、西壁側では30cmに地山を確認できた。

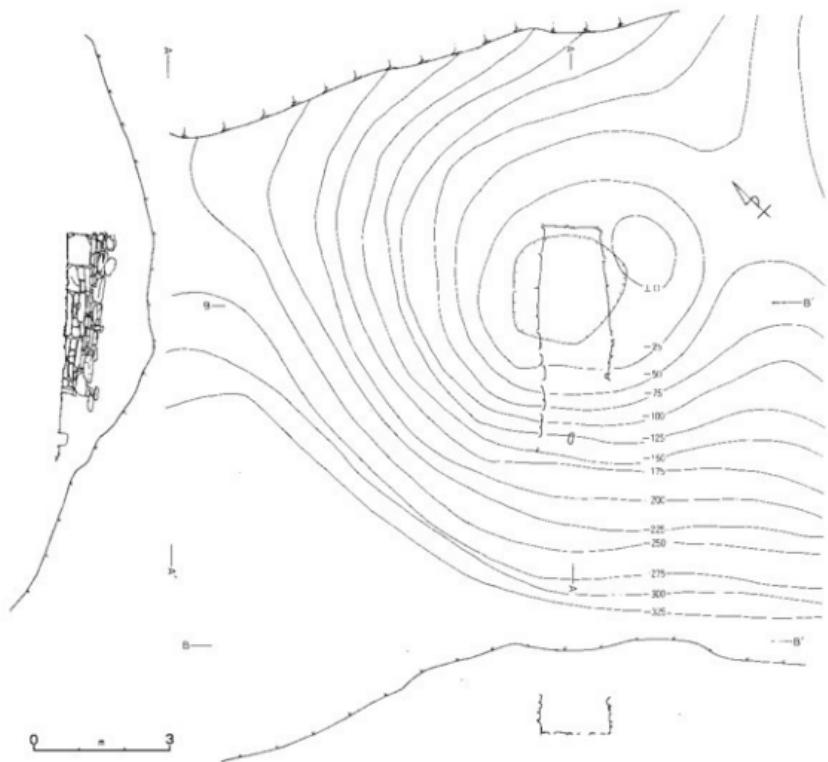
3. 墳丘（第6図）

墳丘は、石室奥壁よりにうがたれた盗掘坑によって乱れているが、ほぼ古墳構築当時の現状を残しているものと思われる。東から西に傾斜する尾根上に築かれており、地形測量図をみると東側の第3号墳は標高56mの等高線が円を呈しているが、標高55mの等高線では、西側に袋状に出っ張っている。墳丘測量の結果では、+0cmの等高線は円を描く。-25cm、-50cm、-75cmの等高線は、墳丘の南東側でくびれており、かつては東の第3号墳の墳丘とは明確に区別されていたものであろう。古墳の大きさはほぼ径10mで、高さは1.8mであると考えられていたが、前庭部の発掘により、墓道の前端までを墳丘範囲とすると大きさは、ほぼ14mをはかる。

墳丘の高さについては、石室内の現状をよくとどめている場所ではなかったところ、石室の高さ1.4m、天井石の厚さ20cm、それを覆う封土の厚さ50cmを加味すれば、2.1mになる。しかし、墳丘の最高点は、石室の東側にあって、比高差は30cmある。流された封土を30cmとすれば、墳丘の高さは2.4mほどである。

4. 石室（第7図）

内部構造は、主軸を北東～南西にとり、南西に開口した横穴式石室である。

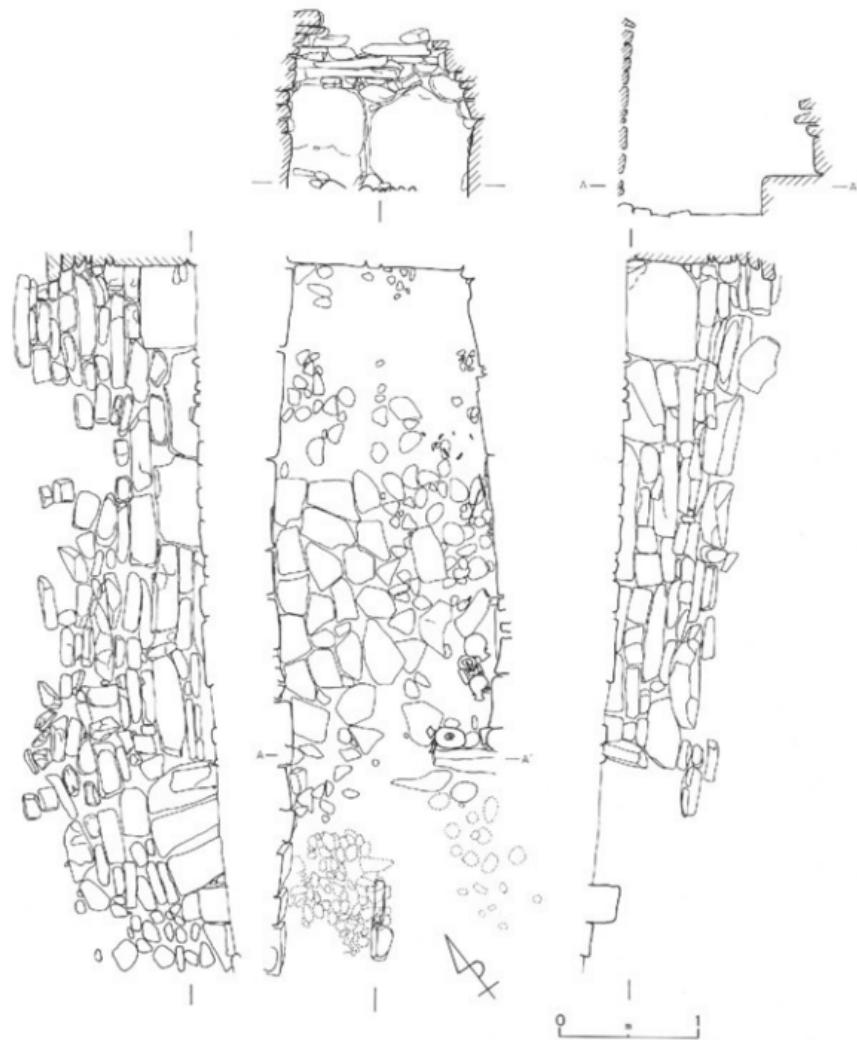


第6図 押越第2号墳墳丘実測図

石室は、全長 5.1 m 、玄室は長さ 3.5 m 、幅は奥壁で 1.25 m 、中央部で 1.55 m 、玄門で 1.25 m でやや胴張りしている。玄室と羨道との境の東壁に長さ 0.5 m 、幅 0.2 m 、高さ 0.3 m の割石を石室中軸線に直行するように置いて区画し、片袖式の石室としている。玄門から羨道入口までの距離は 1.6 m である。また石室中軸線上の奥壁から $4.4\sim 5.0\text{ m}$ の位置に2枚の平たい石を立てている。石は長さ 0.3 m 、厚さ 0.08 m 、高さ 0.25 m のものと、長さ 0.25 m 、厚さ 0.15 m 、高さ 0.1 m のものである。閉塞石は、玄門から羨道入口までに積み上げられ、割石を少し含むがほとんど円錐である。数は、ひとかかえほどの石31個、人頭大の石301個、拳大の石147個で、合計479個であった。

石室の奥壁は幅 0.55 m 、高さ 0.8 m のものと幅 0.75 m 、高さ 0.8 m の2枚の大きな割石を立てかけ、さらに横長の割石を3~4段に積み上げている。側壁についてみると下方に長さ $0.6\sim$

1.0 m、高さ 0.2 ~ 0.6 m の大きな石をすえ、その上に長軸を横にして割石を積み上げている。東壁は、5 ~ 6 段割石が積まれているが、上部の側壁の乱れが考えられる。西壁は、10段ほど割



第7図 押越第2号填石室実測図

石を積み上げてあり、ほぼ古墳構築当時の現状をとどめている。

石室横断面は、上に行くに従い幅のせばまる持ちおり手法がとられている。それは、石室基部の最大部が1.5mに対し、天井石が1.2mしかないことからもうなずける。

羨道部側壁は、玄室の側壁のつくりとは違い、最下段の割石の長軸をほぼ垂直にたてかけ、その上に長軸を横にした割石を積み上げている。

石室内の敷石面は、ほぼ水平であるが、玄門から羨道部に至ってゆるやかに傾斜を見せ、前庭部に至って急激に下降し、奥壁より7.5mの位置で溝状に掘りくぼめられた墓道に至る。

掘り方を調査した結果、石室の構築方法は、まず尾根上の微高地を1mほど掘り凹め、奥壁に2枚の割石をたてかけ、さらに石室内の床面を平面プランにそってほり凹めた後、基底部に大きめの割石をおき、割石をさらに長軸を横にならべ、壁面裏側に土を入れてつき固め、安定性をもたせた後に、天井石を載せたものと考えられる。なお、敷石には、初め割石を敷きならべていたものであろう。しかし二次埋葬時には、一部を円礫にしたものと思われる。

石室の構築に使われたこれらの石は、割石は大奈地石と言われる砂岩で、本古墳から北方2.8km離れた大奈地で切り出されたものであろう。円礫は、西方1.5kmの位置を流れる天竜川の河原石を求めたものであろう。

5. 遺物の出土状態（第8図）

第2号墳から出土した遺物は、須恵器の脚付小形偏平広口壺1個、高杯1個、提瓶2個、小形横瓶1個、脚付蓋1個、さらに鉄製品として刀子1口、刀の鏽1口、鉄鍔7本が出土した。

このうち、脚付小形偏平広口壺と高杯、提瓶は、奥壁より2.6mから3.1mの範囲で、東壁寄りにかたまって出土した。2個の提瓶は、南又は南東に口縁部を向け、偏平な横腹を下に向けていた。この2個の提瓶にはさまれた形で、脚付小形偏平広口壺は、底部を上に口縁部を下にした状態であったし、高杯は横転して口縁部を西方に向いている。4個体とも敷石面より、5~6cmの埋土上から出土した。脚付小形偏平広口壺と高杯、提瓶の胸部や肩部から、散乱して細片化した

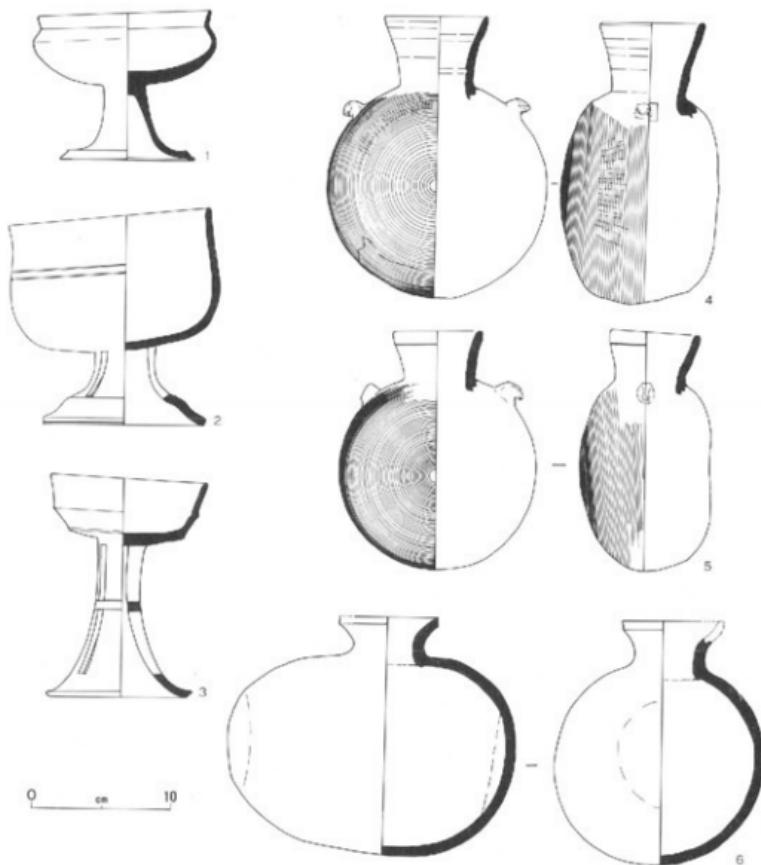


第8図 押越第2号墳遺物出土位置図

人骨片が検出された。

また、横瓶と脚付盤は、奥壁から 3.2 m から 3.5 m の範囲で、石室中軸線に直交して突き出ている玄門に接して出土した。横瓶は、口縁部を斜め上方に向けており、脚付盤は、脚が敷石面上に立ち、胴部と口縁部は、横転した状態で出土した。

刀の鉗は、奥壁から 1.15 m で、東壁から 0.4 m の位置の敷石面から検出された。また、刀子は、奥壁より 2.3 m の位置の東壁寄りで、2つに折れた状態で検出された。鉄鍔は、奥壁よりから 1.1 ~ 1.8 m の範囲の東壁寄りで、ほかかたまたった状態で8本発見された。



第9図 押越第2号墳出土須恵器実測図

6. 遺物(図版第15)

脚付小形偏平広口壺(第9図の1)口径12.4cm、器高10.7cm、脚端の径9.6cmをはかる完形品である。壺部の深さ4.2cmで、口頸部はわずかに外反し、立ち上がりは1cmをはかる。壺部は胴張りの強いもので、最大径は13.2cmである。脚端は段をつけて飾ってある。胎土は細かく、焼成も良好である。

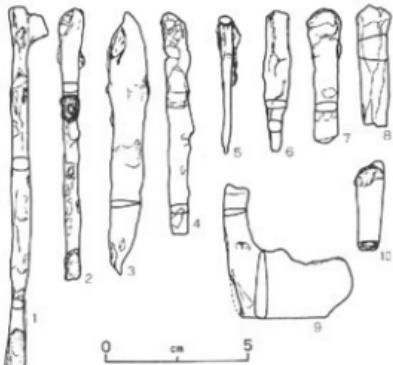
無蓋高壺(第9図の3)口径13.4cm、器高16cm、脚端の径9.8cmをはかる完形品である。壺部が小さく、口縁部には段をめぐらしている。脚は丈が高く11cmをはかり、細長い長方形の透し孔を3か所に2段あけてある。脚端は段をもって飾っており、内側を削って下方へ折り曲げてある。胎土は細かく灰褐色を呈し、焼成は良好である。

提瓶(第9図の4・5)4・5ともに鉤耳付提瓶で完形品である。4は、口径6.3cm、器高17.3cm、胴部最大径13.3cmである。鉤耳は一方を欠損している。口頸部は3.5cmでやや外反している。胴部の一方は、やや平につくられており、片一方はふくらみを持っているが、両面ともに同心円を描いている。5は、口径7.2cm、器高20.5cm、胴部最大径16cmである。口頸はやや外反しており、5cmの立ち上がりを持ち、胴部の一方は、ややふくらみが弱いのにに対し、片一方はふくらみが強い。胴部は同心円を描いている。胎土はきめ細かく、焼成は良好である。

小形横瓶(第9図6)口頸部の一部を欠損するが、口縁部はいびつになっており、長径7.4cm、短径6cm、器高17cm、長軸の胴部最大径は20.8cmで、短軸の胴部最大径は15cmをはかる。胴部は半球形のものを左右2つ接合した俵形である。また胴部は叩き目によって整形されており、焼成は良好である。

脚付盤(第9図2)口径14.6cm、器高15cm、底径11.5cmで、ややいびつになっているが完形品である。盤部は、ほぼ直立しているにもかかわらず、盤部の下胴部のふくらみが強く、口縁部がやや外反しているために全体的には丸みの強い感じがする。胴部には、2条の横線をめぐらしており、脚部には1段3組の長方形の透し孔を有し、脚部は段で飾っている。胎土は細かく灰白色を呈し焼成も良好である。

鉗(第10図の9)鉄製のもので、残存する状態から倒卵形に近い形をした鉗と考えられるものである。全体の形はどく欠損しているため、推定できる大きさは、外径が長径約6cm(現存する大きさ4.5cm)、短径が4.5cm(現



第10図 押越第2号墳出土鉄製品実測図

存する大きさ 4.2 cm) で、内径は不明であり、厚さ 0.4 cm である。装飾はない(註 1)。

刀子 (第 10 図の 3・8) 3 は刀子の身の残欠である。鉄製のもので、現存する身の長さ 9.2 cm、身幅 1.3 cm、峯幅 0.3 cm である。8 は、刀子の茎で、現存する長さは 4.2 cm、厚さは最大幅 1 cm、最小幅 0.6 cm である。

鉄鎌 (第 10 図 1・2・4～7・10) 鉄鎌は 7 本以上出土しているが、すべて尖根式に属するものである。1 は、現存長 13.3 cm で、鎌身の一部を欠損しているが 10.5 cm、茎は両丸造りと考えられるもので長さ 2.8 cm である。2 は、現存長 9.7 cm で鎌身の一部と茎を欠損している。4 は、現存長 7.9 cm で、鎌身の一部と茎を欠損している。5 は、現存長 4.8 cm で、鎌身の一部であろう。7 は、現存長 4.8 cm で、鎌身の一部である。6 は現存長 5 cm で、茎は 1.2 cm で両丸造り、10 は、茎だけで 3.2 cm の両丸造りのものである。

7. 小 結

押越第 2 号墳の石室内から出土した須恵器は、三河国における古墳出土の須恵器の第 3 型式に属する鉤付提瓶、脚付小形偏平広口壺、無蓋高杯と、同じく第 4 型式に属する小形横瓶、脚付盤であった(註 2)。また、鉤付提瓶には、人骨片がかたまって出土している。すなわち、この古墳は須恵器第 3 型式の実年代である 6 世紀代に埋葬が行なわれ、さらに須恵器第 4 型式の実年代である 6 世紀中葉から 7 世紀初頭に追葬が行われたものであろう。盗掘が行われたとしても、敷石面上に残された鏡や刀子、鉄鎌から追葬された人物は成人男性と考えられるものである。

石室は、尾根上の丘陵地を利用して築いた半地下式石室である。石室の型式は平面形が舟底形をなし、玄門の片側に割石を立てた片袖式の玄室に、羨道部をそえた一般的な型式であるが、この地方の横穴式石室の中では小形の部類に属する。

副葬品には、鉄製品や須恵器等であることから、被葬者は豪族層ではなく、普通の庶民層であったと推測される。

(住 吉)

註 1 久永春男氏の御教示による。

註 2 久永春男・斎藤嘉彦「三河国における古墳出土の須恵器の編年について」(『岩津古墳群』岡崎市教育委員会 1964 年)

久永春男・田中稔「尾張・三河における古墳出土の須恵器の編年」(『豊田大塚』豊田市教育委員会 1966 年)

第4章 押越第3号墳

1. 位 置

押越第3号墳も北西へ向う尾根の稜線に築かれており、西へ1m隔てて第2号墳が築かれ、北東には第4号墳が存し、その裾を分っている。

2. 調査の経過

第3号墳の墳丘にも大きな盗掘坑があけられていたので、石室の内部はかなり荒されているであろうし、おそらく清掃調査に終始するだろうと予想された。第1日めはこの盗掘坑を中心に幅0.8m、長さ2mのトレンチを東西方向に設定して石室の調査にとりかかった。しかし地表から1.40mまで掘り下げても石室は見出せなかった。埋積土の中から有蓋高杯の蓋、蓋杯の蓋の破片が出土した。石室は最初の予想より大きく、石室内に流れこんだ土砂は多量で作業は難行し、第3日めにようやく玄室を掘りあげた。地表から2m近い深さである。羨道部には大きな石が山積みにされていて、閉塞石あるいは盗掘の際に積みあげたものか判断に苦しんだ。慎重に浮いている石から取り除いて、「八」の字状に開口していることを確認した。一方、奥壁に接して棚状に石が配置され、棚状に横たわる石の上に刀子が奥壁に平行に置かれていた。棚状造構の清掃と測図をし遺物をとりあげた。床面の清掃調査では銀環3個と塗墨土製丸玉14個を検出した。盗掘されているけれども玉類はなお残っていることが予想されるので徹底的に床面を調査することにした。果せるかな土製丸玉は合計30個に達し、ガラス製小玉も13個、銀環は合計8個を検出した。敷石は奥壁部では小さく、玄室中央から玄室前端にかけては大槻地蔵の石が用いられている。床面の調査を終えて実測図を作成し、ひきつづいて羨道部の調査にとりかかった。羨道の西側壁は補修してあることが明らかになった。前溝の有無を調べるために羨道前端にトレンチを掘り下げるが、第6号墳のように明瞭ではない。測図、写真撮影を行ない、11月3日には側壁と奥壁をはずして掘り形を確認して現地調査を終了した。

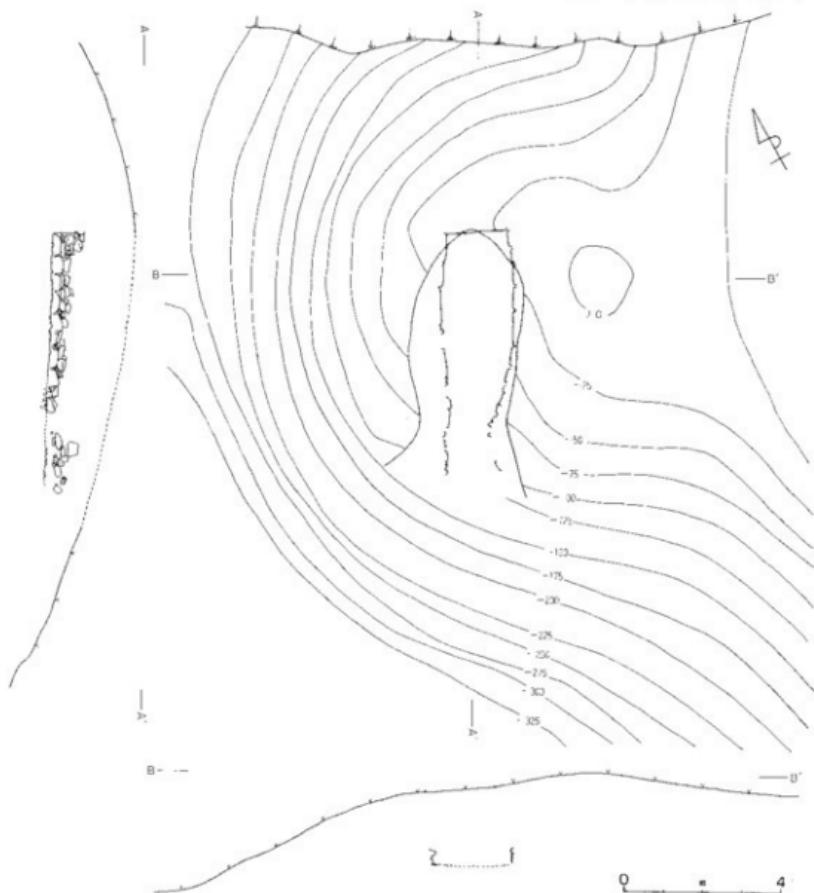
3. 墳 丘（第11図）

第3号墳の墳丘の北側は崖になっている。東側は第4号墳と、西側は第2号墳と墳裾を分ち、南側は傾斜面に連なる。墳丘は大きな盗掘坑があけられており、墳丘の形状や高さもかなり影響を受けている。

墳丘の実測図をみると、±0cmの等高線が円を描いているのみで、しかも石室より東へずれている。盗掘の際に運び出した土をここに積みあげたことが考えられる。-25cm以下の等高線は北の崖面から西側をめぐり南側にかけて半円形を描き、東側でややくびれている。墳丘の東側は丘

陵を切断することなく、第4号墳の埴裾は第3号墳の埴丘に連続している。埴丘の規模は+25cmの等高線が描く第4号墳の埴裾を東限とし、右室床面とほぼ同じ高さの等高線-200cmの描く円形と考えてよいであろう。そのとき東西の径は11.5m、南北の径は15mになろう。埴丘の高さは、現存する右室の床面から大井までの高さを1.5mと仮定し、これに盛土30cmを加えて都合1.8mはあったであろう。

なお、石室の石組みを取りはずして掘り方を調査したところ、石室東側の床面から1.3m、石室西側の床面から1.1mの高さで旧地表を示す黒色有機土層が認められた。石室を築くにあたっ



第11図 押越第3号墳埴丘実測図

て東側から西側へ傾斜している地表を掘り下げ、石室を築き上げたのち盛土したことになる。

墳丘の外部施設としての葺石や前溝あるいは列石などは認められなかった。

4. 石室（第12図）

第3号墳も北東～南西に主軸をとり、南西に開口した右片袖型の横穴式石室である。

石室はすでに盗掘されており、その際天井石の全部と側壁上方の石は抜き取られ、石室の中央では下から第2段ないし第3段めの石が残されているにすぎなかつた。かえって羨道がよく遺存していた。盗掘が墳丘の中央から行われたためであろう。

現存する石室の全長は7mをはかる。石室の平面形は中央が胸張りした右片袖型であるが、東側壁の中央部から羨道にかけては弯曲が強い。石室は全体に整備されたものとはいがたい。

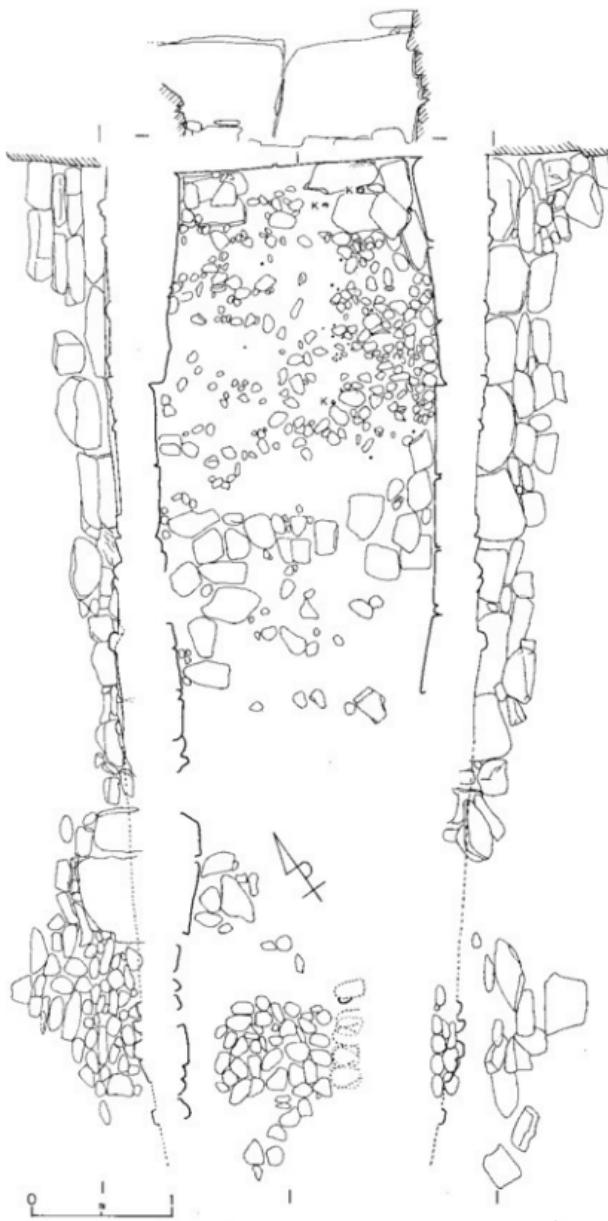
玄室の範囲は、奥壁から4.5mの地点の東側壁の最下段に、石室の主軸と直交して幅0.25m、長さ0.3mの細長い石をはめこんで石室を間仕切っているので、ここまでであったと考えられる（註1）。玄室の幅は奥壁に接する地点で1.6m、奥壁から2.3m～2.5mの地点で最大幅となり1.9m、玄室の前端にある間仕切石の内側で1.5mをはかる。羨道は間仕切石から前端まで2.5m、幅は1mである。

石室に用いられている石は、羨道の西側壁に河原石を用いていることを除いて全て大槻地産の石である。奥壁の下段には高さ0.7mの台形の2個の石を用いて構成している。奥壁のこの2つの石は、下部は掘り方一坏に立て、上部の掘り方との隙間は円礫をつめて控えている。この二つの石は正面からみると重量感を与えるが、実際には厚さ10cmにすぎない偏平な石である。またこの奥壁の両端は側壁の背後に隠れていて、奥壁がまず置かれた後に東西両側壁が寸法に合わせて積みあげたことを示している。側壁は長い石を横積みにし、隙間に小形の石を詰めて積みあげている。東西両側の掘り方は広くなく、東側では側壁の面から18cm、西側で20cmをはかるにすぎず、石組みは掘り方いっぱいに嵌めこまれている。

天井の構架状態は、天井石が全く残っておらず、石室も破壊されていて詳細はつかめないが、わずかに奥壁と東側壁の交差するところの高さ約70cmの奥壁と東側壁に掛かる長さ80cm、幅15cmの細長い石が残っていて、隣接する第2号墳および第1号墳の構築法と同一であり、第3号墳もこの高さから順次持ち送りが始ったものと想定される。現存する側壁は1.5mであるから、天井の高さもこれを下まわることはないであろう。

羨道の東側は大形の角礫を積みあげただけで雑然としているが、西側は河原石も用いてきれいに積みあげ、よく遺存している。羨道の前端の石積みは墳丘の傾斜に沿っており、かって石室の入口はこの右で示されていたことであろう。羨道には大量の石が積みあげられていたが、人形の角礫ばかりで確実な閉塞石と考えられるものはなく、石室の石をここに積みあげたものと判断した。

石室床面の敷石は、奥壁から2.5mまでは成人のこぶし大の円礫を用いているが、ここから前



第12図 押越第3号填石室実測図

方は大楽地産の偏半な石を用いている。円礫は地山の直上に敷かれているが、大楽地産の敷石が用いられている部分からは、地山は約5cm掘り下げられ、黒褐色土を敷きつめた上で敷石が置いている。これらの敷石の下からも遺物が発見されているので、本古墳も何度かの埋葬が行なわれたことは疑いない。羨道の床面には、玄室で用いられた礫よりやや大きめの円礫が二重に敷きつめられている。羨道の基盤は前庭部に向って急速にさがり前溝になる。

なお奥壁に接しては、花崗岩を積みあげた棚状の施設があった。この棚の上に刀1口が横たえられていた。石室内にこのような施設が存した例はなく、石が石室に用いられた石と異なる花崗岩を用いていること、棚状になっていることなど、後世に付設されたものと考えられる。

5. 遺物の出土状態（第13図）

第3号墳もすでに盗掘されており、埋葬時の状態で見出されたものは全くない。

遺物が出土した場所は、盜掘坑の中、石室床面および羨道の末端である。

調査にあたって最初に墳丘頂部にあけられていた盜掘坑をトレントとして掘り下げたが、その盜掘坑に埋まっていた腐蝕土の中から須恵器の蓋環と高环かと思われる破片や石に付着した鉄鎌を採取した。

石室内では、奥壁に接して付設されていた棚状の石積みの上に奥壁に沿って置かれていた鉄刀1口を見出した。この棚状の石をとりはずして、下段の石の間から4個の銀環が見出された。どれも放置された状態であった。ガラス製小玉、滑石製小玉、漆塗土製丸玉と銀環2個は棚状施設の前方で、奥壁から50cm～170cm、石室中軸線より東側壁側の床面上や敷石の間、敷石上の腐蝕土の中から散乱した状態で見出された。玉類はどれも小さく、見落しのしないものであるため盗掘の際にも見逃されたのである。

奥壁から2.5mの地点から敷石は大楽地産の偏半な石に変るが、この大楽地産の敷石の下からも銀環が見出された。敷石を替える時に先の被葬者のものを取り片付け



第13図 押越第3号墳遺物出土位置図

たものであろう。

石室前半部では東側壁にはめこまれた間仕切石の前の黒褐色土層の中から鉄鎌がひとかたまりになって見出された。また奥壁から4mの地点における黒褐色土の中で山茶碗、漆黒の須恵器の高杯脚部破片が割れて出土した。同じ地点からガラス製小玉1個が見出された。玉類が玄室後半から出土しているのにこれだけとび離れている。奥壁から3.5m、西側壁寄りの地点でも鉄鎌が出土した。鉄鎌はどれも折損し、完形はない。

通道の中央で敷石上の黒褐色土層の中から高杯の底部が見出された。この傍で黒色の躰で作られた砥石が見出された。

遺物はどれも原位置にあったものはないが玉類が比較的まとまって出土しているので遺骸を安置した場所が大よそ見当がつく程度である。

6. 遺 物（図版第30・第31）

A. 須 恵 器

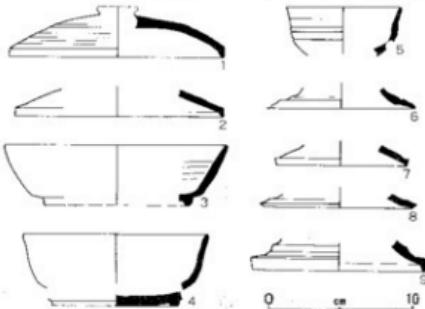
蓋坏（第14図の1・2）蓋坏の蓋が2例ある。1は凡そ半分を復原した。口径15.3cmをはかる。半球形の蓋で頂部には鋸がとれた跡が認められる。口縁は折り曲げて面をつくる。2は口縁の破片で、口径は推定14.4cmである。口縁の造りは1と同形であるが、頂部から口縁にかけては直線的である。強い火を受け、器面には鮎色の灰釉がかかり、窯衣が付着している。

坏（第14図の3・4）3は口径推定15.8cm、器高4.3cmをはかる。坏は高台のわずか外方で屈折させている。断面がU字形で外びらきの高台をつける。4の坏は3とはほぼ同じ作りであるが、下胴部はなだらかに屈折している。高台は直径9cm、底面と高台の高さが同じである。

高坏（第14図の5・6・7・8・9）高坏の坏の残欠1と脚端の破片4がある。5は小形高坏の坏部の残欠で、口径推定8cmである。口縁部はわずかに外反させ、器曲には3条の沈線をめぐらしている。黒色を呈し、焼成は良好である。6は脚端の直徑推定10cmである。脚端は急に開き、端部に段をつける。器面は漆黒色をしている。7の脚端の直徑推定9.1cm、8の脚端の直徑推定10.7cmでどちらも器形は小形であったものと思われる。脚端は面をつくる。

7の残欠の上方に透しのあとがある。

9は棚状施設の上で鉄刀といっしょに見出されたものである。脚端の直徑は推定12cmである。脚は段で飾り、端部は折り曲げて面を作る。焼成は良好である。以上の遺物の他に小破片であるため実測しえなかったが、口唇を折り



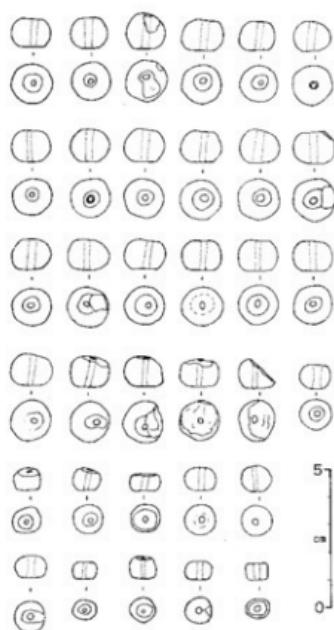
第14図 押越第3号墳出土須恵器実測図

丸めた蓋坏の蓋と思われる破片1例と直径11cmの台付盤の台かと思われる破片2片が出土した。

B 装身具

土製漆塗丸玉（第15図の1～30、図版第31） 粘土を丸め、上下を面取りし、紐孔をあけ黒色の漆を塗っている。各個体の計測値は第1表のとおりである。1～24に比べ25～30は小形である。

第1表 土製漆塗丸玉計測数値表（単位：cm）



第15図 押越第3号墳出土土製漆玉実測図

銀環（第16図、図版第30） 合計8個

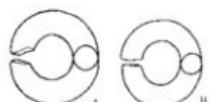
検出した。各々の寸法は第2表のとおりである。どれも銅芯を丸めて銀渡ししてある。1は出土した銀環のうちもっとも大きく、遺存状態も良好であった。5と6は形状や寸法が酷似しており対をなしている。4は環身の長径0.75

挿図番号	継 径	高 さ	備 考
1	1.45	1.1	
2	1.40	1.1	
3	1.45	1.3	
4	1.4	1.2	
5	1.4	1.1	
6	1.35	1.2	
7	1.45	1.2	
8	1.4	1.2	
9	1.4	1.25	
10	1.45	1.15	
11	1.5	1.25	
12	1.15	0.9	小形
13	1.1	0.8	小形
14	1.5	1.2	
15	1.4	1.25	
16	1.5	1.15	
17	1.05	0.85	小形
18	1.1	0.8	小形
19	1.45	1.15	
20	1.4	1.15	
21	1.4	1.15	
22	1.4	1.2	
23	1.45	1.15	
24	1.4	1.15	
25	1.45	1.15	
26	1.4	--	欠損
27	1.45	1.1	
28	1.05	0.6	偏平
29	1.1	0.85	小形
30	1.1	0.9	"
31	--	--	"
32	--	--	大形

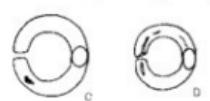
cm、短径 0.45 cm、断面梢円形の銅芯を折り丸めており、他の 7 例と造りが違う。7 と 8 は細身の環で、その所為か腐蝕が著しく、とくに 8 は辛うじて、鍍金した銀が残っているだけである。

第 2 表 押越第 3 号墳出土銀環数値表 (単位 cm)

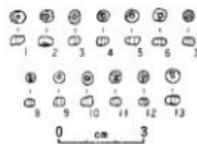
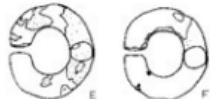
插図番号	環の大きさ		環身の太さ		備考
	長径	短径	長径	短径	
1	3.4	3.1	0.9	0.9	
2	3.1	2.8	0.75	0.75	
3	2.95	2.1	0.75	0.55	
4	2.9	2.15	0.75	0.45	
5	3.4	2.9	0.8	0.75	5 と 6 は対をなしている
6	3.3	2.9	0.85	0.75	
7	2.7	2.5	0.35	0.3	
8	2.35	-	0.5	0.4	



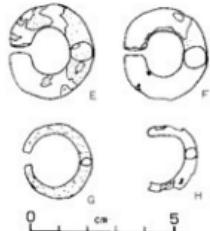
ガラス製小玉 (第17図)



紺色のガラス製の小玉である。各個体の計測数値表は第 3 表のとおりである。いずれも不揃いで、破損が著しいものがある。



第 17 図 押越第 3 号
墳出土ガラス製小玉
実測図



第 16 図 押越第 3 号墳出土銀環実測図

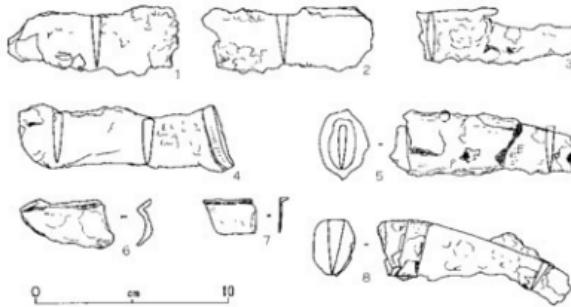
C 鉄器

鉄刀 (第 18 図の 1 ~ 7) 1 ~ 3 は同一個体と考えられる。1 と 2 は身で、みね幅 0.5 cm ~ 0.6 cm、身幅は 2.5 cm ~ 2.6 cm である。3 は茎と思われる。どれも風化が著しい。

4 と 5 は同一個体である。4 は身で、現存

第 3 表 ガラス製小玉計測数値表 (単位 cm)

插図番号	直 径	厚 さ	備 考
1	0.5	0.25	
2	0.5	0.35	
3	0.5	0.3	
4	0.55	0.35	
5	0.45	0.3	
6	0.45	0.3	
7	0.55	0.25	
8	0.5	0.3	
9	0.45	0.3	
10	0.45	0.3	
11	0.45	0.3	
12	0.4	0.3	
13	0.4	0.25	



第18図 押越第3号墳出土鐵刀実測図

する長さは11cm、中央部でみね幅0.6cm、身幅2.5cmをはかる。5は柄で、長径3.2cm、短径2.6cmの楕円形の柄に茎がさしこまれていて、木質部は腐蝕して空洞になっている。

6と7は鉄鍔とともに石室東袖部で見出された。4・5とは別個体の鍔であろう。

鉈（第18図の8）鉈の柄の部分と考えられる。鉄刀といっしょに鞘状施設から見出された。柄と身の境に幅1cm、長径3.0cm、短径2.2cm断面楕円形の貴金貝がつけられている。盗掘の際にもちこまれたものかも知れない。

鉄鎌（第19図の1～16）鉄鎌は玄室入口東側で相当量出土したが、腐蝕が著しく、形状を知りえたのはわずかである。1～8と9～

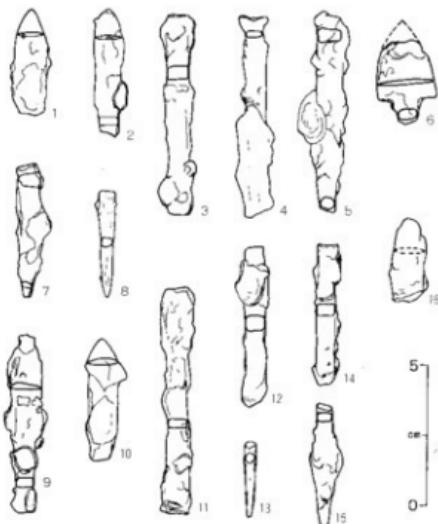
16は出土地点が異なるが、1・2・10・16は

丸造柳葉式とみなしうる。6は棘籠被三角形式である。9は尖根式片丸造柳葉式である。

砥石（第20図）黒色の砂岩系の自然石で、その一端を研磨に用いたもので、平滑になっている。石質は軟かく、粒子も細かい。

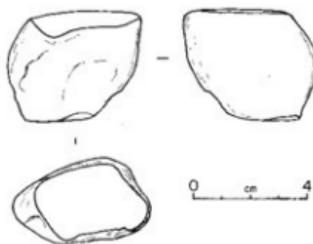
7. 小 結

第3号墳も盗掘に会い、遺物はことごとく持ち去られた。わずかに遺存した須恵器を手がかりに築造年代を推定すると、無蓋高壺の壺は第3型式に比定できるものであり、古墳築造の年代を



第19図 押越第3号墳出土鐵鎌実測図

ここに求められる。いっぽう、高台付の碗と壺は第5型式に比定できるものであり、この時期まで追葬が行なわれたものと考えられる。両者の中間に比定できる遺物は見当らないけれど、この時期だけ埋葬がなかったとは考えられない。壺の際に持ち去られたものであろう。



第20図 押越第3号墳出土砥石実測図

こうした点を考慮して、本古墳の築造年代と埋葬期間を推定すると、6世紀中葉から7世紀初頭までになろう。

また、複数の被葬者が長期にわたって埋葬されたことがわかる。そして被葬者は、豊かとはいえないまでも、装身具を身にまとうことのできた、庶民層のうちでもやや裕福な階層であったといえよう。

(七 墓)

第5章 押越第4号墳

1. 位 置

第4号墳は、北西に延びる丘陵の尾根を登りつめたところに築かれており、北支群中最も高い地点に築かれ、標高61mである。第4号墳の西約15mに第3号墳、南西約20mに第9号墳がある。

2. 調査の経過

7月17日に伐採および墳丘測量を終り、7月24日より調査にとりかかった。

第4号墳も墳頂部に東西約3m、南北約6m、深さ0.3mの箱円形の盜掘坑があけられていた。石室の方向を確認するため、この盜掘坑の中央に東西2m、南北1mのトレンチを設定した。しかし1m余掘り下げても石室は把握できなかったので、順次掘りひろげ、4日目にしてようやく石室の一部を見つけることができた。これが右袖部であることがわかったのは次の日のことである。その後、敷石を手がかりにして掘り進め、石室の全体を確認することができた。しかし左側壁は玄門より約2.4m、右側壁は約1.8mまで最下段の石が遺存していたが、それより先には石組は発見することができなかった。羨道は比較的よく残っていた。玄室入口附近の床面および袖部から、須恵器・上師器・武具類が多数出土した。

玄室より出土した遺物の実測図作成と写真撮影をおこなった後、遺物を取りあげ、調査の都合上7月31日いったん作業を打ち切り、8月5日より再開し、床面の清掃と石室の実測と掘り方を調べ、8月20日調査を終了した。

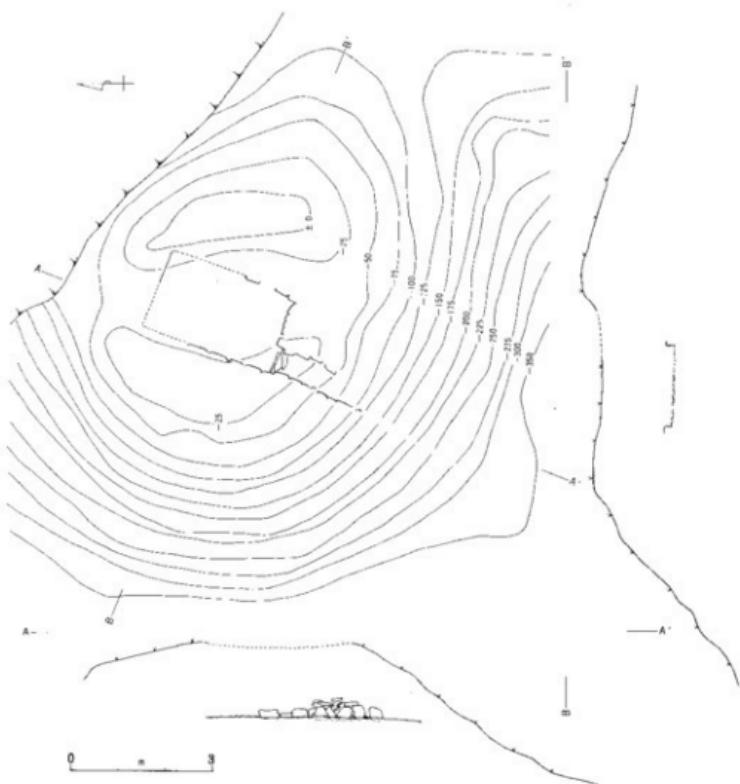
本古墳の調査が予想以上にかかったのは、石室の石がほとんど抜きとられていたこと、そのため調査の範囲が定まらなかったことがあげられる。加えて、敷石面より10~20cm上には赤土が埋積して固くしまっており、掘りさげるのに齒鋸を力いっぱい振りおろさなくてはならなかったこともあげられる。また石室の幅が2m以上あり、当初設定したトレンチより広かったことも作業の進行をおくらせた一因でもあった。

3. 墳 丘（第21図）

第4号墳の墳丘の北東側は谷になっていて急斜面になっている。また本古墳も他の古墳と同様墳頂部に盜掘坑が掘られており、墳丘は椿円形を呈している。

墳丘の実測図を検討すると、-50cm~-300cmの等高線は墳丘の北西から南西にかけてほぼ等間隔で半円を描いており、この部分は凹状を保っているようにみえる。

次に等高線と石室の位置関係をみると、石室の前端が-100cmの等高線に一致している。



第21図 押越第4号墳墳丘実測図

この-100cmの等高線は、石室を中心をおいて描いた円になるので、これが墳丘の端とみなすことができよう。そしてその直径は約8mである。しかし、墳丘の東側の等高線はもうひとつのマウンドを形成しており、盗掘の際に掘りあげられた土がここに積みあげられたものと考えられる。側壁や大井石が抜きとられているので、墳丘の高さを知る手がかりはないけれど、他の古墳と同様に石室の高さを1.5mあったものとして、この上にかむせる封土を50cmとすれば、石室床面から2mはあったものと思われ、現存する墳丘よりさらに1mは高かったものと思われる。墳丘上には、葺石等の外部施設は認められない。

4. 石室（第22図）

押越第4号墳の内部構造は、南北に主軸をとり南に開口した右片袖式の横穴式石室である。



第22図 押越第4号填石室実測図

石室は盜掘等によって破壊がひどく、特に玄室は奥壁をはじめ而側壁の石組は大部分抜きとられていて、旧状を保っていたのは羨道左側壁だけである。

石室は床面に遺存していた敷石および、抜きとられた石の痕跡から推定した平面形は、中央部でわずかに脚張りしているが、ほぼ長方形を呈していたと考えられる。

石室の全長は 7.25m と推定でき、このうち玄室の長さ 4m 、幅は奥壁と考えられる部分で 2.5m 、袖部で 2.25m と推計でき、玄室に比べてよく遺存した羨道部の長さは 3.25m 、玄門部で幅 0.8m 、羨門部で 0.75m を割る。

玄室右側壁は袖部から 1.8m 、左側壁は玄門部より 2.4m まで遺存しているが、両側とも最下段の石が残っているだけであった。袖部は長さ 1.5m 、高さ 0.7m 、石組は $3 \sim 4$ 段まで残っている。羨道の左側壁は右側壁に比べてよく残っている。羨道と玄室との境には、 $0.6\text{m} \times 0.3\text{m} \times 0.1\text{m}$ の偏平な石3個を使用して間切がしてある。石のひとつはほぼ垂直に立て、その前に2個の石を積み重ねて間仕切石としている。

石の積み方は、玄室と羨道において違いが見られる。すなわち、玄室では最下段に長方形の石を横に置いているが、羨道では、最下段に $0.6\text{m} \times 0.3\text{m}$ の石を縦に置き、その上に $0.3\text{m} \times 0.2\text{m}$ 程度の石を傾斜の傾斜に合わせるように小口積みにし、さらに羨道入口の羨門にあたる部分には $0.4\text{m} \times 0.2\text{m}$ の石を垂直に置いている。この垂直に立てられた石は、羨門として置かれたと推定される。

敷石は玄門より約 1m の所から、奥壁に向かって遺存していた。この敷石は、さしわたし $17 \sim 18\text{cm}$ のやや大きめの河原石と、 10cm 程度のやや小形の河原石をとりまぜて使用している。敷石も盜掘の際に移動した痕跡がある。なお、羨道には敷石や閉塞石は全く見当らなかった。

石室の構築にあたって地山を東西 $3.8\text{m} \times$ 南北 8m 、深さ 1m 、長方形で石室の寸法よりやや大きめの土塙を掘り込んである。石組はその土塙から約 20cm 内側に並べ、石組と地山との間に小砂利の多い黄褐色土を入れ、つき固めて側壁が倒れないようにしている。

前溝は羨道部の前端から始まり、南へラッパ状に開いている。羨道前端から約 2.4m まで確認されたが、その先は採土のために壊されている。溝の断面はU字形を呈し、羨道部前端で幅 $0.6\text{m} \cdot$ 深さ 0.7m 、羨道部から 2m の所で幅 $1.2\text{m} \cdot$ 深さ 0.7m 、崖面で幅 $1.8\text{m} \cdot$ 深さ 0.6m を測ることができる。溝の中は黒色有機土が厚く堆積しており、溝の中からは須恵器の小片が発見されたのみである。

5. 遺物の出土状態（第23図）

第4号墳の遺物は、(1)玄室・(2)羨道・(3)前溝の各地点より出土している。

(1)玄室 玄室内からは多量の出土品があった。

ガラス製小玉4個・土製丸玉1個が、玄門より奥壁に向かって 1.5m 、右側壁より 1.2m の

所を中心に散乱した状態で敷石の間から発見された。

武具類としては、鉄刀・鈇・刀子・鉄鎌・馬具がある。



第23図 押越第4号墳遺物出土位置図

鉄刀（第26図の2～4）は、右側壁より0.2mの所において切先を床面に立て、袖部にもたせかけた状態である。（第26図の5）は袖部にもたせかけてあったものが、床面に倒れた形で出土している。（第26図の6）は袖部より2.1m、右側壁より1.2mの位置で敷石面より切先部分を東に向かた状態で出土している。

鈇（第27図の2）は袖より1.9m、右側壁より1.4m、（第27図の3）は袖より2.8m、右側壁より1.7mの地点の敷石面より出土した。

土師器の脚付盤（第24図の1・2）は袖部に接し、右側壁より0.8m～1mの位置にえ置かれていた。（第24図の1）の盤上には馬具（第29図）が、（第24図の2）の盤上には鉄鎌（第28図）が東となつて出土している。また、玄室床面からも鉄鎌の破片が散乱した状態で発見された。

刀子は2口発見され、（第27図の1）は袖より2.5m、右側壁より1.8m、（第27図の2）は、袖より1.7m、右側壁より1.2mの床面において出土した。

須恵器と土師器の大部分は、玄門より1m、左側壁より0.8mを中心とした地点から出土している。

土器師の脚付盤(第24図の3～6)を左側壁に接して4個並べ、その右に須恵器(第25図)の平瓶・疊・提瓶・盤(2個体)・短頸壺・長頸壺(2個体)・蓋壺(4個体)・土師器の小皿が整然と並んで発見された。

しかし、これらの須恵器には若干の時間差が認められるのは、最後に埋葬された時にその位置に片付けられたが、石抜きがおこなわれた時に片付けられたかさだかではない。

(2) 美道 美道入口の表土下0.5mの所において、土師器の高环脚部(第24図の8)が割れた状態で出土した。墓前祭に使用したものと思われる。

美道右側壁上で、鉄刀(第26図の1)と鍔(第27図の1)が出土している。鉄刀は切先を南東に向けており、鍔は鉄刀の北10cmの所から発見された。これは、石の抜き取りの時に、この位置に移したものと推定される。

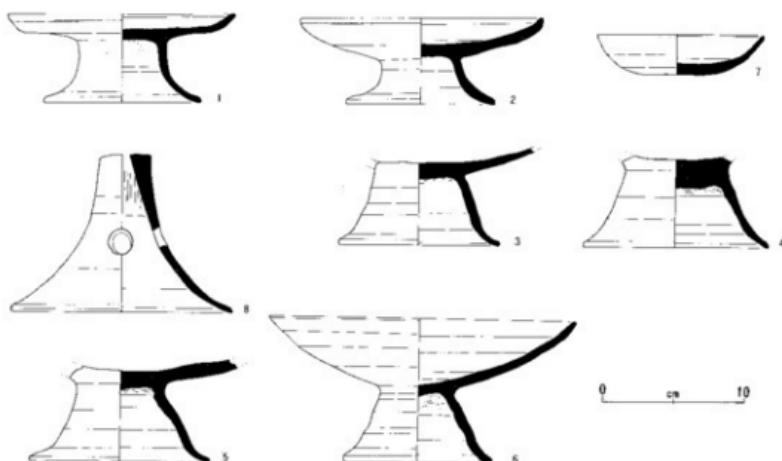
(3) 前溝 前溝内に堆積していた黒色有機土層中から、須恵器の破片が1片発見された。蓋壺の蓋であろうと推定される。

6. 遺 物 (図版第16・17・31・32・33)

第4号墳から出土した遺物は、土師器・須恵器・武具・装身具がある。

A 土師器

高環(第24図の8・図版第17) 脚部のみ発見され、脚高11.2cm・脚端径15.6cmを測る。



第24図 押越第4号墳出土土師器実測図

脚の下半は緩やかな曲いで外反し、円孔を3ヶ所穴けている。器壁は指横ナデ調整がほどこされ、色調は黄褐色で焼成は軟質である。

脚付盤（第24図の1～6・図版第17）

6個体発見された。脚の形態により、2類に分類することができる。各部の寸法は第1表のとおりである。

第1表 第4号墳出土脚付盤計測値（単位cm）

補圖番号	盤　　径	器　　高	脚　　径	盤　　径	備　　考
1	15.9	6.4	11.0	4.5	
2	17.0	6.4	10.5	3.4	
3	21.7	10.3	10.2	4.9	
4	—	—	12.6	5.4	
5	—	—	13.1	5.4	
6	—	—	11.3	5.1	

1類（第24図の1・2）脚はゆるやかに外反し、脚部は丸く仕上げられている。口縁端は段をもって飾ってあり、器体には赤色顔料が全面に塗布されている。焼成はややまく、胎上は上質の粘土が使用され、器壁は指横ナデ調整がされ、ていねいに仕上げられている。この脚付盤上に、馬具・鉄鎌がのせられていた。

2類（第24図の3～6）脚高は1類に比べて高く作られ、脚はハの字状に広がり、脚端は丸く作られている。作りは第1類に比べて雄で、胎土も精選されておらず、5mm程の小石を含んでいる。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈している。調整はヘラ削り調整がされた後、指横ナデ仕上がりされている。

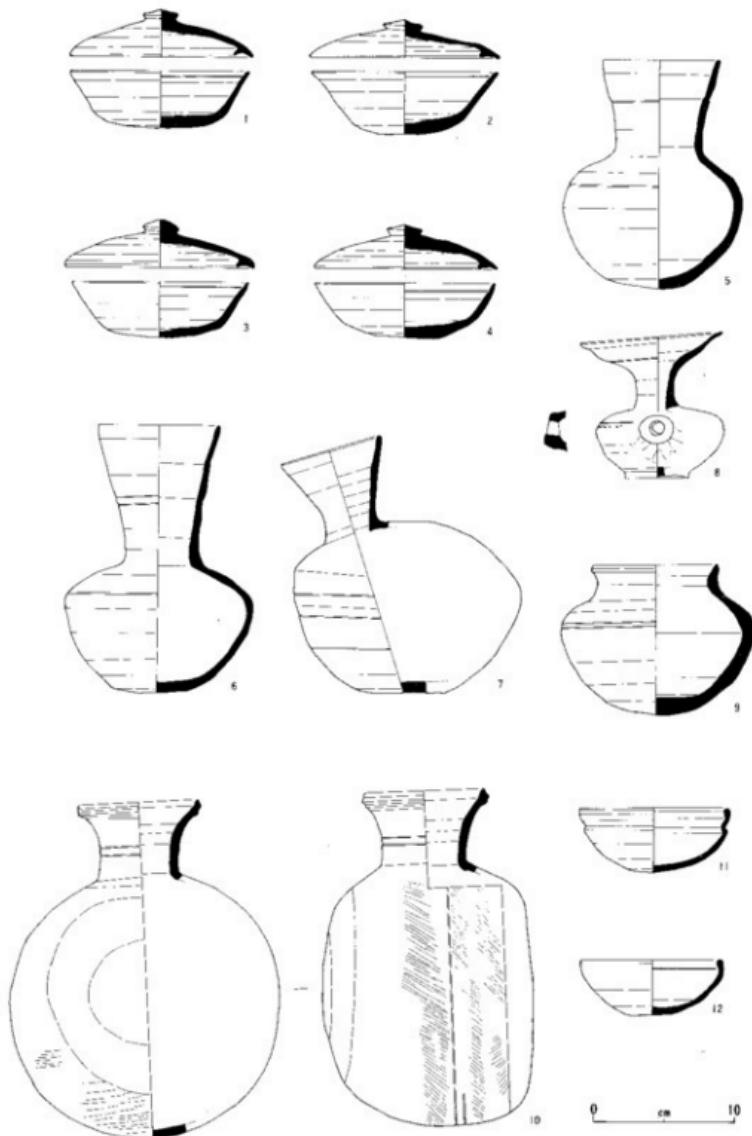
小皿（第24図の7・図版第17）器高5.2cm・口径11.6cm・底径5.2cmを測る。半球形を呈しており、口端は丸く仕上げられている。焼成・胎土・作り等は脚付盤第1類と同じで、赤色顔料が全面に塗布されている。

B 須恵器

長頸壺（第25図の5・6・図版第16）5は器高16.5cm・口縁径8.2cm・口頸部高6.6cm・最大胴径12.6cmを測る。胴は偏球形を呈し、肩部と頸部中央に1条の沈線がめぐらされている。口縁は斜め上方に開いている。下脚部はヘラ削りされている。色は灰白色を呈し、焼成は良好である。

6は器高19.2cm・口縁部径8.4cm・口縁部高10cm・最大胴径13.2cmを測る。胴は偏球形を呈し、肩部に1条、頸部中ほどに2条の沈線がめぐらされている。口縁は斜め上方に開いている。下脚部はヘラ削りされ、焼成は良好である。上胴部は黄緑色の自然釉がよくかかっている。

耳壺（第25図の8・図版第16）器高10.1cm・口縁部径10.1cm・最大胴径9.1cm・高台形4.5cmを測る。偏球形の胴部にラッパ状の口頸部がつき、注口部は突出しており、底部には高



第25図 押越第4号墳出土須恵器実測図

台が付けられている。肩部に2条の沈線をめぐらし、その間に梯状器具による刺突列点文が斜めにほどこされている。口頸部中央にも1条の沈線がめぐらされている。下胴部はヘラ削り調整がおこなわれている。焼成は良好で、黄緑色の自然釉が上胴部に多量にかかり、列点文も一部消えている。下胴部は灰白色を呈している。

提瓶(第25図の10・図版第16)器高24.2cm・口縁部径8.4cm・口頸部高6.8cm・最大腹径18.2cmを測る。胴部の接合部には2条の沈線を縱にめぐらし、その上にタヌキ目調整が斜めにほどこされている。口縁部は段をもって飾ってあり、頸部中ほどに2条の沈線がほどこされている。上胴部は灰白色、下胴部は黒灰色を呈している。焼成は良好である。

平瓶(第25図の7、図版第16)器高18.5cm、口径7.3cm、最大胴径16.1cm、底径5.1cmを測る。下胴部は偏球形を呈し、ラッパ状の口頸部がつく。下胴部に3条の沈線をめぐらせる。焼成は良好である。

短頸壺(第25図の9・図版第16)器高10.2cm・口頸部径8.8cm・最大腹径13.7cmを測る。球形の胴部に短い頸部を付けてある。口縁は段をつけて飾っており、肩部には2条の沈線がめぐらされている。焼成は良好で上胴部には薄黄緑色の自然釉が部分的にかかっている。

碗(第25図の11・12・図版第16)2個体ある。11は器高4.6cm・口径10.5cmを測る。半球形を呈し、口縁部に近い部分に段をもって飾り、口端は丸く仕上げられている。焼成は良好で、色調は灰色を呈している。下胴部はヘラ削り調整がされている。12は器高3.9cm・口縁部径9.8cmを測る。偏球形を呈し、口縁部に1条の浅い沈線がめぐらされ、口端は丸く作られやや内窵している。焼成は良好で灰色を呈し、下胴部はヘラ削り調整がなされている。

蓋坏(第25図の1~4・図版第17)4個体発見され、各部の寸法は第2表のようである。

第2表 第4号墳出土蓋坏計測値(単位cm)

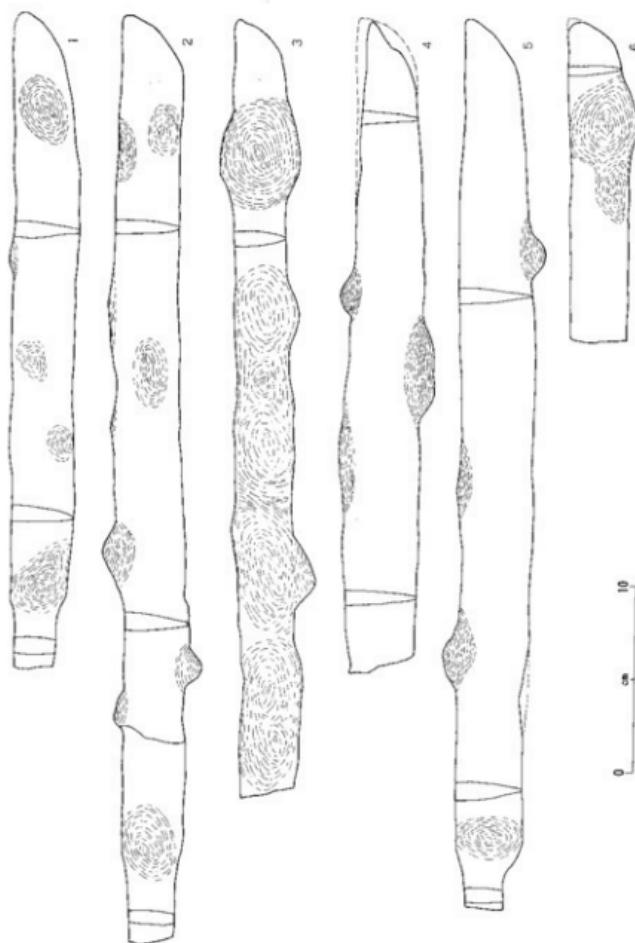
插図 番号	蓋			身	
	蓋受け・口径	口 径	器 高	口 径	器 高
1	10.2	12.8	3.4	12.6	4.1
2	10.7	13.4	2.7	13.1	4.5
3	11.1	13.2	3.4	12.4	4.0
4	10.4	13.0	3.2	12.7	3.9

蓋はいずれも頂部に宝珠形のつまみが付けられており、内側には縁受けが内窵してつけられている。焼成は全体にややあまい。1は上面全体に飴色の自然釉がかかり、2・3は部分的に飴色の自然釉がかかっている。4は黄褐色を呈している。

身は碗形を呈している。口縁部は丸く仕上られ、口縁内側には1条の沈線がめぐらされている。焼成は全体にあまく、色は灰白色を呈し、下胴部は横ナデ調整がなされている。2・3にはススが付着している。

C 武 具

直刀(第26図の1～6) 6口出土しているが、破損がいちぢるしく、完全なものはない。1は羨道右側壁上、2～5は玄室袖部にもたせかけてあったもの、6は玄室敷石上から出土したものである。各部の数値は、第3表のとおりである。



第26図 押越第4号墳出土鉄刀実測図

第3表 第4号墳出土鉄刀計測値（単位cm）

標印番号	全長	刀身部長	把部長	身幅	峰幅
1	35.3	31.6	3.7	3.4	0.7
2	49.2	44.2	5	3.4	0.7
3	41.7	41.7	—	2.7	0.8
4	35.2	35.2	—	3.6	0.8
5	47.7	44.5	3.2	3.9	0.9
6	17.4	17.4	—	2.8	0.6

1・2は把部の途中から欠損し、3・4は刀身途中から欠損している。3は刀身全体に鏽が厚く付着し、4は切先部の破損がいちぢるしい。5は把部の途中から欠損し、6は切先のみ発見された。

刀子(第27図の4～5・図版第33) 2口あるがいずれも切先は欠損している。

4は全長11.1cm・刀身法4.8cm・茎部長・6.3cm・身幅1.7cm・峰幅0.7cm・茎部最大幅1.4cm・厚み0.5cmを測る。刀身断面は梢円形・茎部は長方形を呈し、両闊作りである。

5は茎部も途中で折れており、全長6.3cm・身幅1.3cm・峰幅0.4cm・茎部最大幅1cm・厚み0.3cmを測る。茎部は長方形を呈し、両闊作りである。

鉗(第27図の1～3・図版第33) 3個出土している。いづれも倒卵形である。

1は長径8.3cm・短径7.7cm・厚さ0.5cmを測る。直刀1のものと推定される。

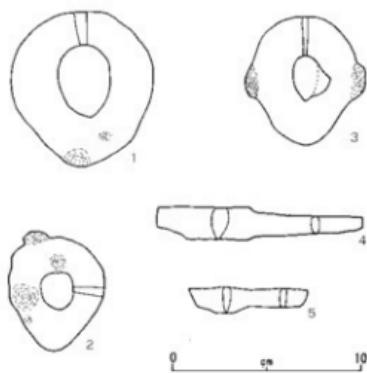
2は長径6.9cm・短径5.4cm・厚み0.4cmを測り、鏽による破損がいちぢるしい。

3は長径6.1cm・短径4.9cm・厚み0.3cmを測る。鏽による破損がひどく、剥離がいちぢるしく、3片に折れて出土した。

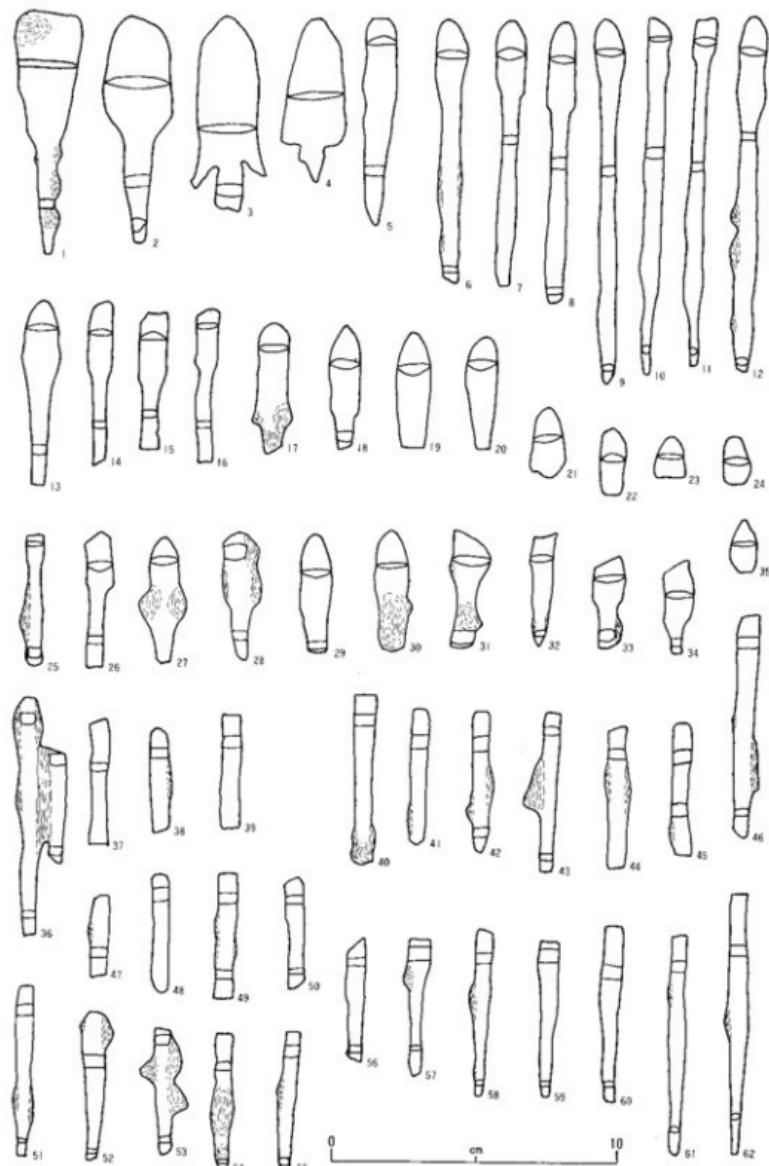
鉄鎌(第28図・図版第32) 出土した鉄鎌の大部分は、玄室袖部に接してすえ置かれた土師器の脚付盤上から出土している。これら鉄鎌は鉄鏽のために付着しており、完全な形で計測したものは数少ない。総数で約60本あると考えられる。これら鉄鎌は8形態に分類できる。

1類(第28図の1) 鎌長8.1cm・鎌身長4.5cm・身幅2.4cm・厚さ0.4cmを測り、笠被の部分は一部欠損している。両丸造椿葉式である。

2類(第28図の2) 完全に残っており、鎌長8.6cm・鎌身長4.9cm・身幅2.4cm・厚さ



第27図 押越第4号墳出土刀子・鉗実測図



第28図 押越第4号墳出土鐵鎌実測図

0.25 cmを測る。方頭広根斧筒式である。

3類(第28図の3) 鋼長7cm・鎌身長5.2cm・身幅2.1cm・厚さ0.4cmを測り、笠破の部分は欠損している。笠破両丸造脇抉柳葉式である。

4類(第28図の4) 鋼長5.9cm・鎌身長4.6cm・身幅2.2cm・厚み0.35cmを測る。笠被狭峰両丸造三角形式である。

5類(第28図の5・32) 5は鋼長7.4cm・身幅1cm・厚み0.3cmを測り、円頭片丸造細根斧筒式である。

6類(第28図の6・7・9・11・14・16・21・24・25・33・34) 全長を測りえたものは9のみで、鋼長13cm・鎌身長2.2cm・身幅1cm・厚み0.3cmを測る。その他の鎌はいずれも一部が欠損しているが、鎌身長2cm・身幅1cm・厚さ0.3cm前後を測ることができる。両丸造笠鑓筒式である。

7類(第28図の10・22・23・31・35) いづれも欠損しており、全長を測りえたものはない。片丸造笠鑓筒式である。

8類(第28図の8・12・13・15・17~20・26・27・29・30) いづれも茎部を欠損しているが、鎌身長4cm・身幅1cm・厚み0.3cm前後を測ることができる。両丸造柳葉式である。

馬具(第29図・図版第33) 脚付盤上から一括出土している。鉄鋸等により破損がいちぢるしい。

鏡板(第29図の1・2) 鏡板の形状は楕円形素環で、1は長径9.5cm・短径8.1cm、2は長径9.0cm・短径7.8cmを測る。いづれも立身の一部を残しており、1に接着する鉄片は引手壺の一部と思われる。

衝(第29図の9・10) 径1cmの丸棒を中心で連結した2連式であると推定される。

引手(第29図の7・8・13・14) 棒状で現長12.8cm・径0.9cmを測り、断面は円形である。棒状端に円環部を作り出している。

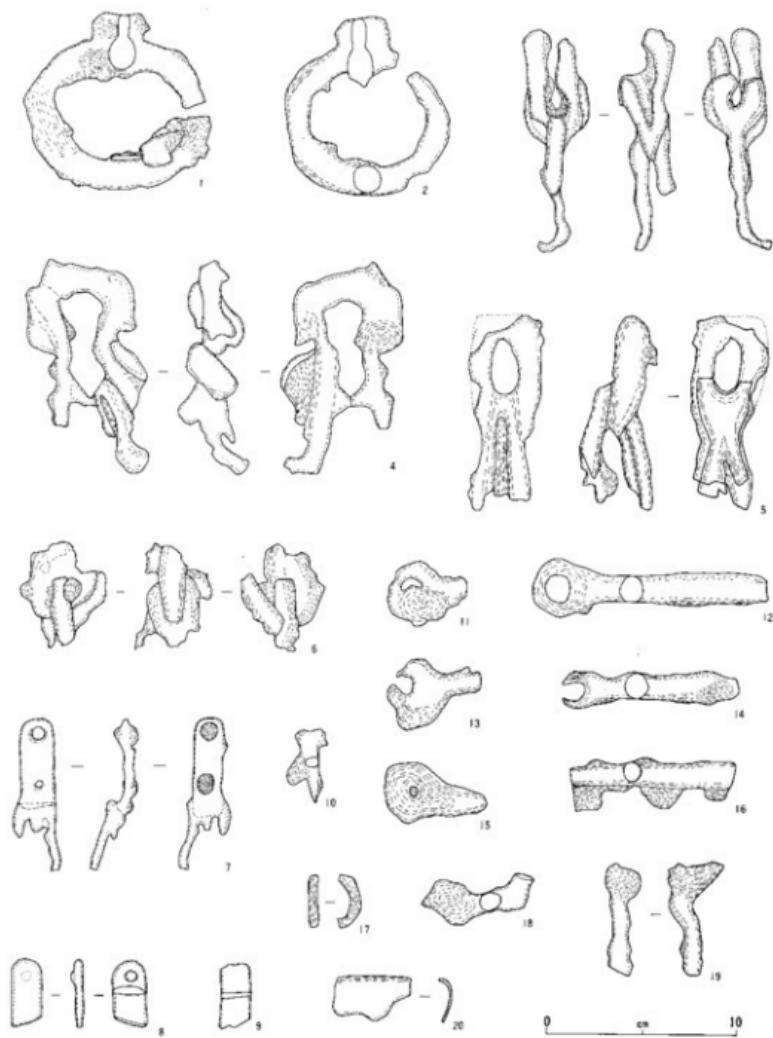
引手臺(第29図の4・16・20) 長さ7.5cmの長円形を呈し、一端の環には手網を接続するための環がみられる。

兵庫鎖(第29図の3・5・6) 鎖は梢円形を呈し、長径6cm・短径3.8cm・鎖の断面は円径で径は0.8cmを測るもの、繋ぎあわせたものである。

帯金具(第29図の11・17・18) 11は鉄板に2個の鉢が打ってあり、全長5.3cm、幅1.7cm・厚み0.4cmを測る。その先に径0.3cmの留め金具が付いている。17・18は帯金具の残欠で、17には鉢が認められる。

鎖(第29図の12) 全長3.9cm・径0.5cmを測り、頂部を平らにしたものである。

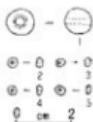
不明鉄製品(第29図の15・19) 馬具のどこかに使用したものと推定され、両方とも欠損している。



第29図 押越第4号墳出土馬具実測図

D 装身具

土製丸玉(第30図の1・図版第31)1個のみ発見された。長径1.2cm・短径1.1cm・孔径0.3cmを測る。両側穴孔で一部欠損している。色調は茶褐色である。



ガラス製小玉(第30図の2~5・図版第31)4個発見され、片側穴孔で 第30図 押越第4号
色調は青色を呈している。各部の寸法は第4表のとおりである。

第30図 押越第4号
墳出土玉類実測図

第4表 第4号墳出土ガラス製小玉計測値(単位cm)

押岡番号	長 径	短 径	孔 径	備 考
2	0.4	0.25	0.1	
3	0.32	0.2	0.09	
4	0.4	0.25	0.1	
5	0.35	0.27	0.1	一部欠損

7. 小 結

押越第4号墳は、直徑8m・高さ2mの円墳で、内部主体は右片袖式の石室である。

石室は盜掘や石の抜き取りのため、細かく計測できないが、敷石および石の抜きとり痕によって推定すると、石室全長7.25m・玄室長4m・玄室幅2.25~2.5m、狭道部長3.25m・幅0.75mである。これを宋尺にあてはめると、全長29尺・玄室16尺・玄室幅9尺~10尺・狭道部長13尺・狭道部幅3尺になる。第4号墳の石室築造に際しては、宋尺を用いたものと推定される(註1)。

遺物は玄室詫部を中心須恵器や武具等が多数出土している。出土した須恵器は、尾三地方古墳出土須恵器編年から第3型式の古い時期にあたる提瓶、第3型式の新しい時期に属する長頸壺・短頸壺・平瓶、第4型式にあたる罐・碗、第5型式にあたる蓋壺など各時期のものがある。築造年代は6世紀中頃から7世紀初頭にかけて数次にわたり追葬がなされたと推定される(註2)。

第4号墳は、押越古墳群北支群中最大の規模を持ち、石室内から出土した遺物の種類と量も豊かであることなどから、北支群中の指導層の墳墓と推定される。

(仙田)

註1 久永春男・齊藤嘉彦他「天神山古墳群」1969年 岡崎市教育委員会

註2 久永春男・田中稔他「守山の古墳」1963年 守山市教育委員会

第6章 押越第5号墳

1. 位 置

第5号墳は押越古墳群の最西端にあり、また一番低い位置にある。標高は49mである。周囲には真北に10mへだてて第1号墳があり、東南東7mに第6号墳、南南東8mに第7号墳がある。

2. 調査の経過

第5号墳の調査は、7月24日から開始した。調査は、墳頂にあけられた盗掘坑から開始した。盗掘坑の中には、他の古墳にあけられた盗掘坑のように、単にくぼみになっているだけではなく、生ごみ、おもちゃ、あき缶など、雑多なものが捨てられていた。これらを掘り出してやっと石室にたどりついた。第5号墳が、古墳群の中でいちばん低いところにあり、民家にもっとも近いところから、恰好のごみ捨場にされたものと思われる。

石室を埋めていた土を運びだして行くと、石室はかなり深いことがわかつた。石室入口の右側で鐵刀や無蓋高杯の破片が出土した。石室の入口には多数の石があったが、閉塞石とは断定しがたかったが、一応実測図は作成した。石室はまた、前後2室になってるようで、2個所に柱状の石をたてて区切っている。

石室の清掃後、写真撮影を行い、実測図を作成した。石室が深いので、こうした場合に古墳の前部はどうなっているのか見極める必要があるので、石室の前方7mまで掘りすすめた。

石室の前方は、浅いU字形をなしており、石室の前端から7.3mの地点で、焼土とともに土師器の高杯が出土した。さらにこれより1m前方に、不整円形のピットがあり、このピットに注ぎこむように、丘陵上方から溝があることがわかつた。このピットよりさらに南へ掘りすすめたいと思ったけれど、時間的に余裕がなく、完掘できないままに打ち切らざるを得なかつたのは残念である。

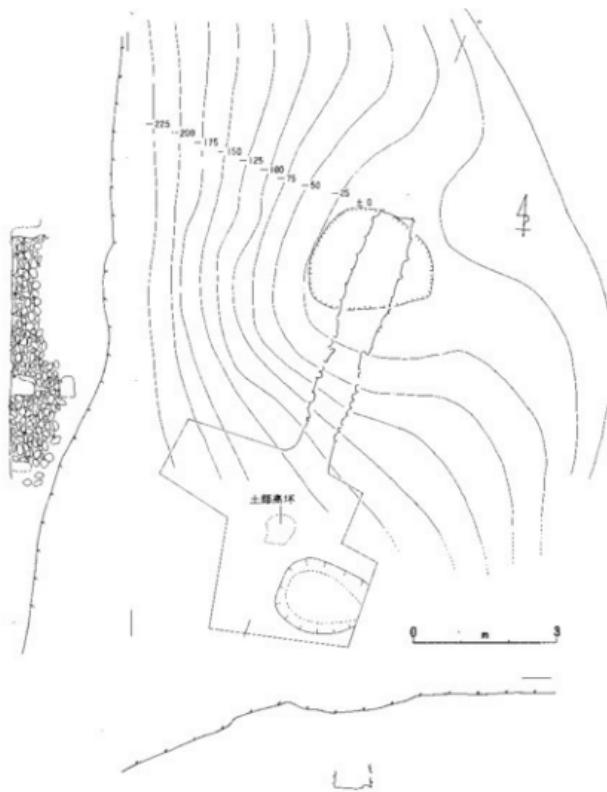
3. 墳 丘（第31図）

第5号墳にも、墳頂部に南北径約2m、東西径約2.5mの床面まで達する盗掘坑があけられていた。盗掘の際に石室内の土は外へ投げだされたものとみられ、旧状は若干の変化を受けているものと思われる。墳丘の範囲は必ずしも明瞭ではない。

現存する墳丘の平面図によれば、上0cmの等高線と-25cmの等高線は西へ半円を描いて突出しており、-25cmの等高線内に石室があるので確実な墳丘である。+25cmの等高線は墳丘北東側の丘陵傾斜面であるなら西側へ張り出すべきであるが、逆に東側へわずかに張り出していく、丘陵斜面と墳丘が仕切られていたものと考えられる。-50cmから-150cmに至る等高線は半円

形を描いており、石室の前端に達しているので、流土の影響を受けてはいるが、墳丘の範囲と考えてよからう。

北側においては-25 cm～-75 cmの3本の等高線がわずかに弯曲しているので、このあたりで丘陵傾斜面と墳丘を区切ったものと考えられる。こうした点を考慮すると、墳丘は直径8 mはあったものとみなされる。墳丘の高さは、石室が天井部の高さまで掘り込んで構築されているためさして高くなく、天井部の厚みを30 cmとし、さらにその上の盛上を50 cmとすると0.8 m前後であったと考えられる。墳丘には葺石や貼石など外部施設は認められず、周溝もまた存しなかった。



第31図 押越第5号墳墳丘実測図

4. 石室（第32図）

第5号墳も地山の小礫を含む赤褐色土層を掘り下げて構築された地下式とよびうる横穴式石室である。石室はN—14°—Eに主軸をとり南側に開口している。

石室は奥壁から3.5mと5.25mの2つの地点の両側に柱状の石をたて、前後2室にしている。

後室は中央部がわずかにふくらみをもった長方形で、幅は奥壁に接する地点で0.75m、奥壁から1.75mはなれた後室中央部における最大幅は1.05mで、前室との境の幅は0.7mである。奥壁は高さ0.85m、幅0.70mの大きな大業地産の石を1枚すえ置いている。

奥壁と側壁根石の積みかたは異なっている。西側壁では奥壁側面と根石内面とが接している。しかし東側壁においては奥壁側端と根石側端とが接し、西側壁根石が固定されたのち東側壁根石によって奥壁部における幅が調整されている。

両側壁の根石は床面を掘り窪めて、ひとときわ大きな川原石を横に並べ安定させている。根石の配列状態をみると、玄室前端は両側壁とも他のものと比較して小さく、さらにその直後の根石も含めた部分においては、接する隙間が大きく、東側壁では石をつめ補足している。つまり玄室の長さが決っていて奥壁を置いたあと玄門柱をおきそのち玄室前端部根石を順次配置し、玄門柱付近にいたって適当な石が不足したところで補足的な石積みが行なわれたものとみられる。

両側壁の2段目から上は根石とは反対に大竜川の川原石の小口面を石室内に向けた小口積みであり、表面的には一見雑然としているが玄門の柱石の高さまでは、ほぼ均等な石を積み上げて隙間には小石や粘土を詰めている上部は崩れが大きい。

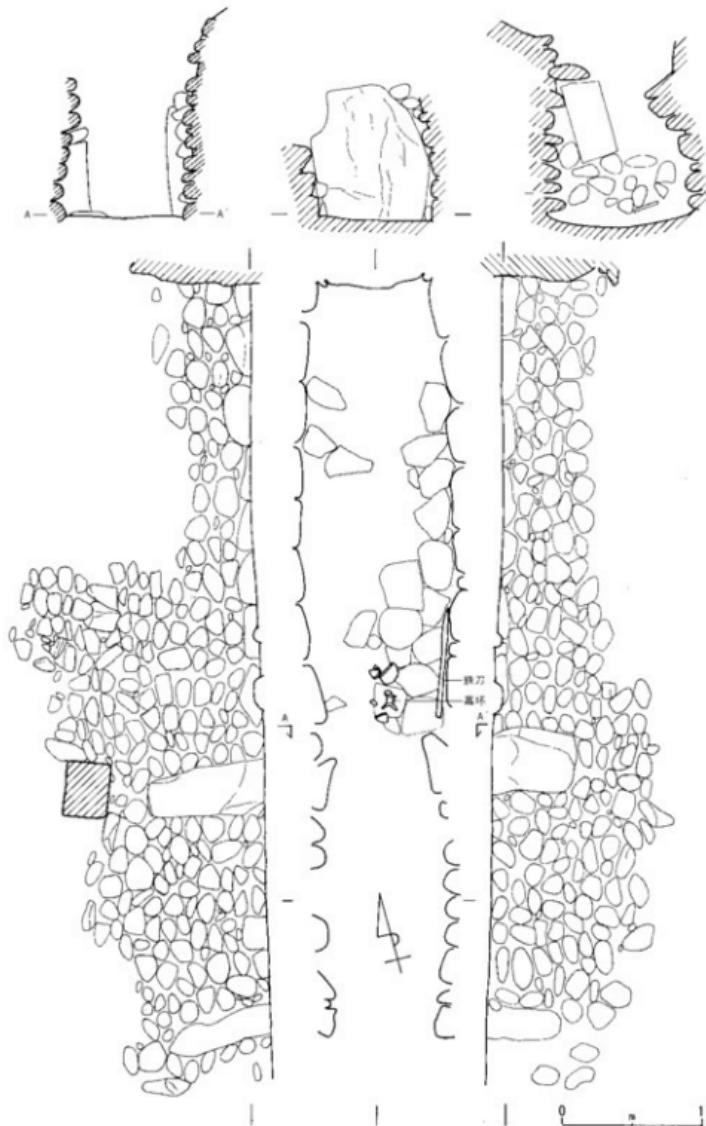
東側壁は上部がやや内側へせり出しているのに対して西側壁はほぼ垂直に立ち上がっている。前室と後室の境にある柱石は床面を掘り窪めて立てられ、高さは東側が0.6m西側が0.8mである。

東側の柱石は大業地産の石を用いて垂直に立て、どっしりとした安定感があり、西側の柱石は大業地産の幅がせまい縦長の石を斜めに立てており掘り込みも東側よりやや浅めである。

両柱石は玄室の側壁前端よりも内面へ出張り前室へ八の字形に開いている。

敷石は盃掘によって荒されていたため東側壁に沿って玄室前端部まで残存していたに過ぎなかった。玄室の床面には第6号墳、第8号墳でも見られるように、大業地産の扁平な板状の石を用いて敷石としている。

前室は後室と同様に中央部がわずかにふくらみをもった長方形で、長さ1.75m、最大幅0.85m、入口の幅0.75mである。羨道部両側壁の構築状態は玄室と多少異なり、川原石を用いた単純な小口積みである。



第32図 押越第5号墳石室実測図

前室部の側壁は玄門柱石の上部に残存する天井石の遺存状態からほぼ原形をとどめていると考えられる。両側壁の床面からの高さは東側壁が1.1mで内側へやせり出し、西側壁は1.35mで垂直に立ちあがり25cm程度高い。

また前室入口には両側に床面を掘り窪めて立てられた柱石があり、石室の区切りとしている。柱石は前室と後室の境にある柱石よりもやや小さな同じような形状を示す石である。入口西側の柱石前端には、外へ開いた形でさらに斜めに一列の側壁が積みあげられているが、これらの石は柱石の裏側へくいこんで積まれ、柱石をささえているようであった。

前室の床面は敷石がなく浅いV字形をなし入口へ近づくにつれて側壁最下端よりも低くなっている。石室入口の高さは奥壁付近よりも30cmほど低い。排水の便をなしていたのではなかろうか。

前室には川原石が側壁上面までぎっしりと積みこまれていた。この閉塞石の堆積状態は玄門部では奥壁に小口面を捕えてほぼ垂直に床面上から積みあげられ、唯一現存する天井石との間には10cmの隙間があった。しかしそこから狭道部にかけてはまったく無秩序に大小の川原石が積み重なり投げこまれたごとくである。そして中ほどには天井石に使用される位の大楽地石が1個だけ出張った西側壁の下へもたれかけた状態で他の閉塞石にまじってみられた。

天井石は玄門部から前室部中央にかけて3枚のみ残存していたが玄室にはまったくみられなかった。

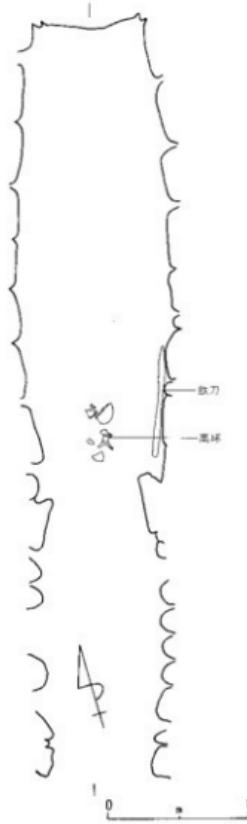
しかし玄室部において天井部に架構したと思われる大楽地の石が2個落ちこんでいた。その1つは奥壁から1mの位置で他の1つは玄室前端にあった。しかしこれら2つの石の大きさは現存する天井の幅よりはやや小さすぎ、天井石の架構にあたっての側壁に持ち送りがおこなわれていない点からも木材をわたしてその上にのせたものと考えられる。なお玄室前端にある天井石の両側をみると1つだけ立てられた川原石があり、その直前から前室の天井石が始まっている。この状態と側壁残存状態を観察すると前室と後室の天井は段差がつけられていたものと思われる。

5. 遺物の出土状態（第33図）

第5号墳の遺物は後室と前庭部から出土した。後室では奥壁から3m隔った石室中央敷石面から須恵器の無蓋壺が壺部を奥壁に、脚部を前室に向けて倒れていた。壺部は餅片となって散らばっていたが、これは直立していたものが落石等によって倒れたものと考えられた。

奥壁から2.7m隔った左側壁にそった敷石面から直刀1振、および鉄鎌が見出された。また奥壁から1m隔った東側壁と敷石の間から鉄鎌が見出された。

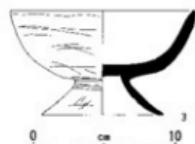
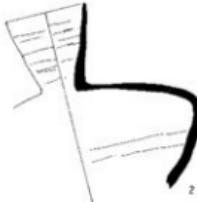
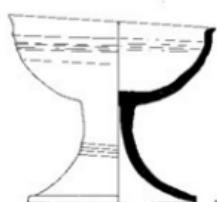
直刀は東側壁とほぼ10cmの間隔をもって平行におかれ、切先を奥壁に、刃を石室内に向けていた。そして柄頭の部分において鏃が、切先の所では責金具の残欠を見出した。さらに直刀直下の



第33図 押越第5号墳
遺物出土位置図

遺物出土位置図

高壺（第34図の3）壺部および脚部をわずかに欠失している。口径13.1cm、脚部6.8cm、器高7.5cm半球形の壺部は口端は薄く仕上げられている。脚は太く丈が低く外反気味に作られている。茶褐色を呈している。



第34図 押越第5号墳出土須恵器
土師器実測図

敷石の間から鉄鎌を検出した。石室前端から1.93mはなれた石室中軸線の延長上の前庭部黒色有機土層中から土師器の高壺1個およびそのまわりから破碎された平瓶が1個出土した。

この他盃掘坑の中から後世に投げこまれた廃棄物と混在して2本の鉄鎌が発見された。

なお前庭部にあるピットの中から横瓶の破片が見出されているが、この破片は第6号墳前庭部から出土した横瓶の一部であった。

6. 遺 物（図版第18・31・34）

A 須恵器

無蓋高壺（第34図の1）壺部および脚部をわずかに欠失している。壺部直径14.6cmで口端は軽く外反し壺上部に3条の浅い凹線がついている。脚部は中ほどに1条の低い突唇があり、その下に2条のヘラ描きによる斜線が刻まれている。透孔の形式化したものであろう。脚端はわずかに肥厚させてあり、脚端の径11.1cm、器高は13.4cmである。

平瓶（第34図の2）口端部および腹部を大きく欠失している。

口径5.7cm、腹部最大径推定14.5cm、器高推定14.5cmである。口頭部は単純に直口する外開きで胴部の上面も丸味も少なく下脚部との境はやや角ばり、上面に自然釉がかかっている。

B 土師器

高壺（第34図の3）

壺部および脚部をわずかに欠失している。口径13.1cm、脚部6.8cm、器高7.5cm半球形の壺部は口端は薄く仕上げられている。脚は太く丈が低く外反気味に作られている。茶褐色を呈している。

C 鉄製品

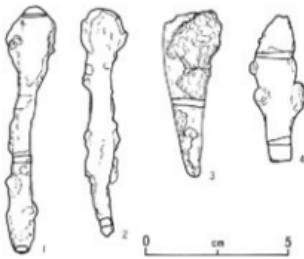
直刀(第35図) 切先の先端と茎の一部を欠いており、現存する部分の長さは81.5cmである。刀身は79.4cmを測り、平棟平造りで切先はややふくらみをもつ。身幅は2.8cm～3.4cmで棟の厚みは0.7cmである。下部は棟側に闇を作った片闇式で茎の長さは21cm、幅2.3cmで刀身の刃先と同様にとがり、断面は逆三角形を呈する。

鉄鎌(第36図の1～4) 鉄鎌は4本検出されたが3形式に分類される。

1は丸丸造り柳葉式で茎の先をわずかに欠失し、現存する部分の長さは10cmである。身は長さ4.6cmを測り、笠破5.4cmである。身幅は1.3cm、笠被は0.9cm、茎径は0.4cmである。

2は丸丸造り鑿箭式で茎の先をわずかに欠失し、現存部分の長さは9cmである。身幅は1.3cm、茎の長さは0.5cmである。

3・4は刀子形をした片刀箭式で身はふくらみをもち身の長さはともに5.6cmあり、3の身幅は1.4cm、茎の径は0.7cmであり、4の身幅は2cm、茎の径は0.3cmである。



第36図 押越第5号墳出土鐵鎌実測図

7. 小 結

押越第5号墳の築造年代を知る手がかりとしては、後室から出土した須恵器の無蓋高杯および前庭部から出土した提瓶がある。石室は盜掘されており、これらの須恵器の他にもなお若干の遺物があったことが予想される。無蓋高杯は杯部が大きく、脚部においては脚端に段が見受けられない。平瓶も下胸部との境は角ばかり、第4形式に属するものであり、古墳の築造時期は6世紀中葉から7世紀初頭に求められる。

第35図 押越第5号

墳出土鐵刀実測図

第5号墳の石室各部の寸法が25cm単位の位数をなしており、構築にあたって宋尺が使用された可能性がある。玄門部における柱石の立て方はやや不自然であり、前室側の末端では斜めに75cmの幅を有する。しかし玄室の長さが両柱石の中点でという考え方において見い出された70cmという幅は奥壁部、羨道部の幅より5cm少ないけれどこれは前庭部から石室を望んだ時、前室と後室の区切りが明確にわかり奥壁を一枚岩のごとく見せる効果をもっている。

(小 出)

第7章 押越第6号墳

1. 位 置

押越古墳第6号墳は、北西へ向う尾根と西南へ向う尾根にはさまれた西向き斜面の中腹にあり、押越古墳群を形成する9基の古墳のはば中央にあたる。標高は50.60mである。

2. 調査の経過

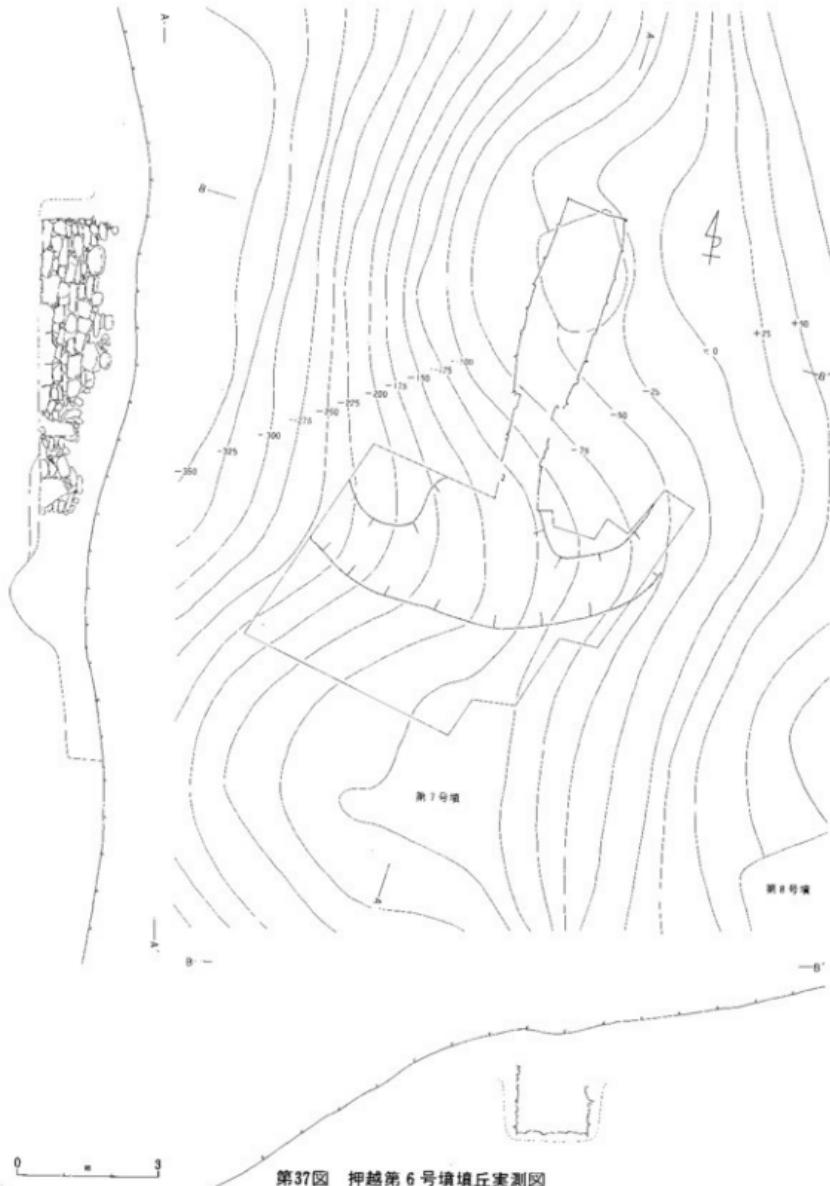
第6号墳も他の古墳と同様に墳丘頂部に約4m²、深さ約20cmの盗掘坑があけられていた。まず石室の方向をつかむため、この盗掘坑を中心に東西2.3m、南北0.8mのトレンチを設定した。表土から深さ約30cmで石組みが現れた。この石組みを追って掘り広げ、石室が南北に主軸をとっていることを確認した。表土には木や籠の根が張っていてこれを掘りおこすのに骨が折れた。次に石室内におちこんだ天井石や埋積したおびただしい土砂を運び出すのに多大の労力を費した。調査を開始して第4日めになって石室が前後2室に分れており、両袖型の石室であることが判明した。第5日めの7月25日に後室の奥壁寄りの地点で石室の上端から約50cm下に山茶碗と古鏡と刀子が一括して埋葬されているのが見出された。写真撮影と測図を行なって遺物を取り上げ、さらに床面まで掘り下げたが、石室床面に達したのは調査開始後第7日めである。前室、後室の沿掃が終了したところで羨道部の調査にとりかかった。羨道部は、成人のこぶし火の河原石を積み重ねて閉塞しており、この閉塞石の間とその前方には濃い黒色土が堆積していた。この閉塞石の清掃と黒色有機土を追求したのであるが、黒色有機土は羨道前端全面に堆積しており、この中から須恵器の蓋坏、盤、高坏等があるいは横転し、あるいは倒立して出土した。したがって調査区域をさらに拡張する必要が生じたが、調査員の都合もあって7月31日いったん作業を打ち切った。

8月15日から調査を再開し、夏期休暇後も各日曜、祭日を調査にあて、黒色有機土が石室の前方に掘られた溝状構造に堆積したものであることを明らかにした。また、前室と後室の間の間仕切石をとりはずし、測図を終了したのは11月3日で、調査を開始してから延べ30日を費した。

3. 墳 丘（第37図）

押越第6号墳の墳丘は北西方向の尾根と南西方向の尾根にはさまれた小侵蝕谷に築かれている。

この小侵蝕谷は約25度の緩傾斜をなしているが、標高53mを過ぎると急に半円形のテラスをつくる。そこに第6号墳の墳丘がある。墳丘の頂部には東西2.4m、南北1.9m、深さ約20cm



第37図 押越第6号塗填丘実測図

の土坑が掘られている。木古墳群9基のうち第7号墳を除いた他の古墳はどれも盜掘されているので、本古墳もその例にもれなかったかも知れないがしかし本古墳の石室上部では山茶碗、刀子、古錢などを組みにして埋納されているので、これらの品々を埋めるために掘られたものと考えたい。そしてこの時に墳丘は若干の改変を受けたであろう。

墳丘の実測図を検討すると、±0cm～-75cmの等高線は半円形の墳丘頂部を示しており、-100cm～-275cmの等高線が斜面を表し、北側では谷の斜面に連なり、南側では隣接して築かれている第7号墳および第8号墳に連なっている。現存する墳丘からこの規模を推定すれば、東西の直径9m、南北の直径10m、高さ約3mである。しかし、丘陵の上方から流れる土砂と第8号墳から流れてくる土砂をかぶっていることや、墳丘もとくに西側へ向って土砂が流れていることを考慮に入れなければならない。土砂の移動が予想以上に大きいことは、石室の前方に掘られた溝状追構が表土下1.2mであったことや第6号墳と第5号墳との間の表土から旧地表までが約30cmあったことによって知られる。

墳丘の規模を知る手がかりは、石室の前方に掘られた溝状追構であるが、この溝は、幅1.3m、深さは石室の床面から1.2m、墳丘の東側から南側を通り、北西方向へ向って弧を描いている。この溝をはさんで第7号墳の墳丘と裾を分っている。従って築造時の墳丘は溝を南の端としていたとみなしうる。溝の描く弧を基にすれば墳丘の南北の直径は11mになる。溝が古墳をめぐっていないので東西の径は計測しがたいが、東側は丘陵の頂部に連なる斜面であるから自ら限界され、+25cmの等高線までであったろう。西側は-200cmの等高線が石室の床面と同じ高さになるので、これを指標にすれば東西の径は8mである。

墳丘の高さは、現存する石室の床面から2mをはかる。石室の奥壁および側壁は1.5mまで遺存し、その上に約50cmの封土がある。かつての墳丘の高さは、現存する石室の側壁の上に構築された天井の厚さと、流失した土砂を70cm～80cmとすれば、その高さは2.2m～2.3mであったろう。

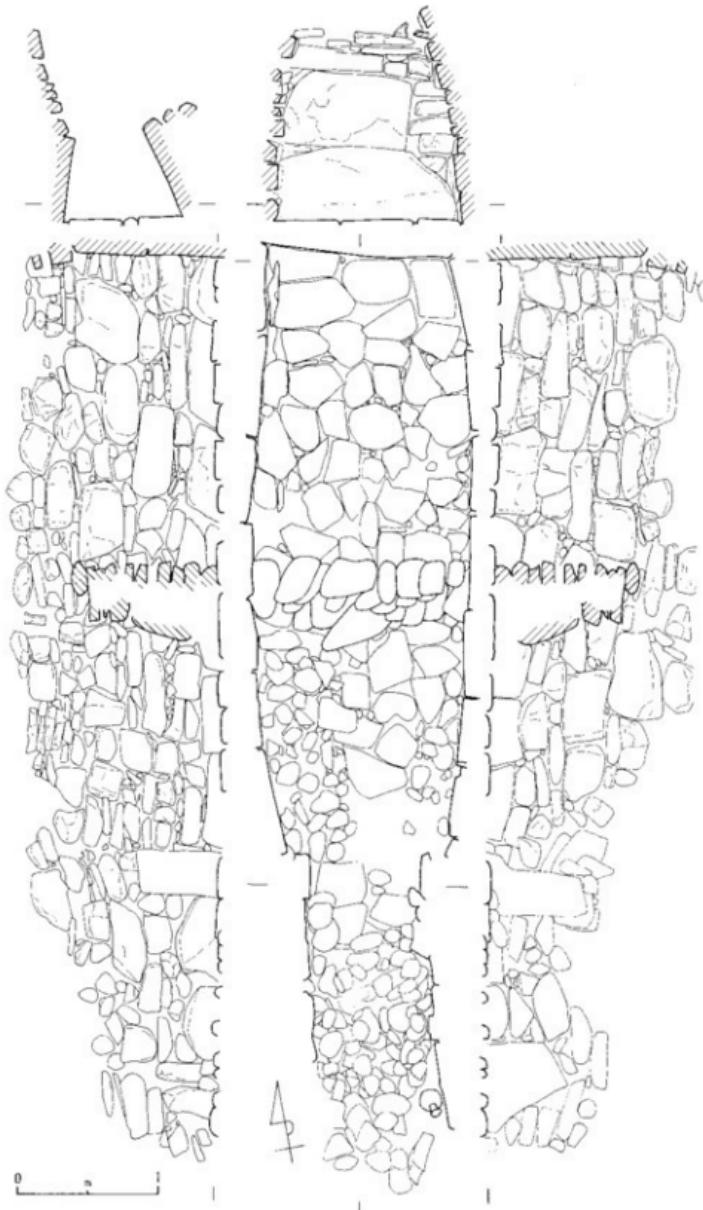
墳丘上には葺石や列石等は認められなかった。

4. 石 室（第38図）

第6号墳の内部構造は、南北に主軸をとり、南に開口した両袖型の横穴式石室である。

石室はかつて山茶碗と刀子と古錢を埋納した折りに掘りさげられたが、それも後室だけで、しかも床面までは達しておらず、崩落した部分を除いてよく旧状をとどめていた。

石室の平面形は、石室中央部でわずかに胴張りしているが、ほぼ長方形である。石室の全長は6.3m、玄室の幅は奥壁に接する地点で1.25m、玄室の中央で1.5m、奥壁から4.25mの地点の両側に長方形の石を内側に傾けて立て袖をつくっているが、この袖部で1.1mをはかる。この玄室の奥壁から2mの地点で玄室が胴張りするところに細長い転石を午傍積みにして前室



第38図 押越第6号填石室実測図

と後室を開口切っている。羨道は長さ2m、幅は玄室との境で0.8mをはかるが前端では1mで、わずかながら外に開いている。

石室の構築にあたっては地山を約0.7mの深さまで掘り込んでいる。その掘り方は石室の寸法よりやや大きめで、石は掘り方にもたらせている。羨道部の掘り方はU字形である。奥壁の最下段には高さ0.5m、幅1.5mの合形の一枚の石を据え、その上に高さ0.55m、幅0.9mの長方形の石を西側に寄せ、かつ下段の石より前方に1~2cmを持ち送り、東側壁の隙間を小形の石を用いて補充している。奥壁に用いられたこの2個の大形の石は、正面から見たときに受けた印象はどの厚さではなく、約20cmの厚さの偏平な石で、地山にもたらせてある。奥壁の2個の大形の石はまた、西側壁の背後に掛けている点で、奥壁を掘てから西側壁の構築にとりかかっていることは明らかである。つぎに東側壁、西側壁はともに最下段には平らな一面をもつ細長い石を据え、その上に方形、長方形の石を配し、隙間を小形の円礫で塞いで上方に達する。側壁の現存する最高の高さは東側壁で、1.4mである。側壁の持ち送りは西側壁では少なく、約5度、東側壁は下から第2段めから始まってその角度は約10度である。側壁の高さが1.4mであったと仮定し、上記の角度で持ち送りが行なわれたとすれば天井の幅は奥壁付近では0.9m、玄室中央では1.2m、袖部では1.0mになる。しかしここに構架しうるだけの大きさの石は見当らなかった。石室内に落下していた石は直径1m、円形の石が1個あったが、これがもっとも大きい石である。これ以外に墳丘の内外にも丘陵上にも天井石に該当するものは見出されなかった。天井石がなかったとすればそれに代るのは丸太などであったことが考えられる。

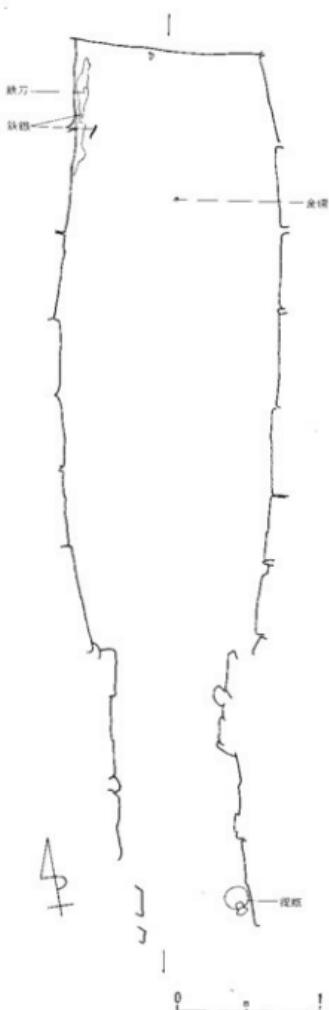
玄室と羨道の境の東西両側壁にはそれぞれ1個ずつの長方形の石が置かれ、袖をつくっているが、東側の石は25度、西側の石は10度それぞれ内傾させている。この石の傾斜は玄室の持ち送りの角度より大きく、羨道の側壁はほぼ垂直であるので、石室の内側からも外側からもきわだった印象を与えていた。この2つの石は、地山との間に上砂と円礫をはめこんで傾斜を強くしている。

羨道は、地山をU字形に掘り込んでおり、この掘り方一杯に側壁を飲めている。羨道の側壁は垂直で、高さも1.0m未満で、持ち送りはない。

玄室の床面には大槻地産の偏平な石をぎっしり敷き並べ、隙間を小形の円礫でふさいでいる。この敷石は側壁に沿ってます並べ、順次中央に及んだもので、とくに側壁に接している敷石から外すのは容易でなく、またいったん外すと再びもとどおりにはできない程無駄なく敷きつめられていた。石室の築造にあたった人々が石の使用によく通じていたことを思わせる。敷石は前室前端の袖部では一部抜きとられ、円礫を用いているが、この円礫の下から鉄鎌が出上しているので、第2次埋葬にあたってこの部分を補ったことが考えられた。羨道の床面は玄室と羨道の境にある長方形の石から前方にかけて、玄室の床面より5cm高く敷石を並べて玄室と区別している。閉塞石は成人の両手で握る大きさの円礫を用いて、羨道いっぱいに山積みしている。

5. 前溝

第6号墳の石室の前方には溝が掘られていた。溝は羨道の前端から南へラッパ状に開いて、石室の東側から始まり南側を通って西側に向う弧状の溝に連なる。



石室の前方を通過する溝は石室の東側から始まっているが、確認したのは-50cmの等高線からである。溝はこの地点では1m弱であるが次第に西へ向って傾斜し、その幅を広げ、石室の前方を通過した地点では1.5mになる。その傾斜は約35度である。溝の深さは石室床面を基準にすると1.2mである。

溝の中には黒色有機土が厚く堆積し、溝の底からは遺物が多数発見された。遺物は東側の高い地点から西側の低い地点へ流れたように散っていた。溝の中で割れて見出された横瓶の破片のひとつは、西方の第5号墳の前溝から発見されている。このことはまた第6号墳の前溝が第5号墳の前溝と合流することをも示している。

前溝は石室の前端から始めてただちに弧状の溝に連なっている点で、この二つの部分は第6号墳の築造時に掘られたものであることを思わせる。溝が掘られ、第6号墳の埋葬が終った後は墳丘や丘陵上方から土砂が堆積しさらに第7号墳が構築を開始し、その封土が堆積したものである。

6. 遺物の出土状態（第39図）

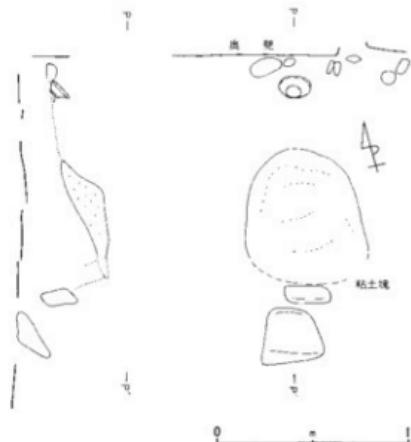
第6号墳の遺物は土として次の地点から出土した。(1)土坑の中(2)後室上部(3)後室床面直上(4)前室床面(5)間仕切石の下(6)羨道(7)前溝である。

(1) 土坑の中 墳丘頂部にあけられた土坑をトレシチとして利用して発掘調査を開始した最初の段階で見出した。須恵器の破片2つで、ひとつは蓋

第39図 押越第6号墳遺物出土位置図

坏と考えられた。

- (2) 後室上部 後室の床面から約30cm上、奥壁の下から2つめの台形の石の下端に接するところから山茶碗1個、古銭1枚、鉄刀1張が見出された。山茶碗は奥壁へ向って傾き、鉄刀がその傍に切先を奥壁へ向って置かれ、古銭は山茶碗の西へ20cm離れて出土した。これらの遺物は中世に埋納されたと推定されるが、この時石室はすでに土砂が堆積していたのであろう。
- (3) 後室床面直上 後室の西側壁に沿った敷石の上で2口の大刀が切先を南に、刃部を上に向けて置かれていた。大刀は腐蝕して敷石に密着していた。大刀の上には鉄鎌も置かれていたようではあるが付着していた。また大刀についた鉗に混って頭蓋骨の一部かと思われる骨も付着していた。鉄片2つは奥壁寄りの敷石の間から見出された。金環は奥壁から1.08m、石室の中央に単独で出土した。後室からはこれらの遺物だけで、須恵器は全く見出されなかった。
- (4) 前室から出土した遺物 前室から出土した遺物は、土師器の甕2個体分と鉄鎌である。土師器の甕は東側壁寄りの床面上5cm前後の石室内に落ちこんだ土砂の中から見出された。口縁部は2個体とも東側袖部の床面上や敷石の間から割れて出土した。大井に近い側壁が崩れ落ちた時に割れたものと思われる。土師器の破片やその下から鉄鎌が見出された。鉄鎌は西側袖部の大栄地廻の敷石から円礎に変る地点の円礎の下からも見出された。この鉄鎌は先立つ被葬者に刷えてあったものをここに片付けたものであろう。
- (5) 間仕切石の下 前室と後室の間にある間仕切石をとりはずしたが、その下から蓋坏の蓋と思われる破片が見出された。石室内で見出された唯一の須恵器である。



第40図 押越第6号墳石室内山茶碗出土状態図

(6) 羨道 羨道はU字形を呈し、前端に向ってゆるやかに傾斜して前溝に連なる。この羨道の下部には濃黒色の有機土が堆積しており、黒色土の中から須恵器の提瓶と土師器の甕と瓶が出土した。提瓶は羨道の東側前端で口縁を南に向けて出土した。土師器の甕と瓶の破片や把手は羨道西側前端から出土した。

(7) 前溝 前溝の底部からはもっとも多数の遺物が出土した。まず羨道前端から1mの地点で須恵器の甕、広口偏平壺、提瓶が黑色有機土の中からひとかたまりになって見出された。これらの遺物といっしょに鉄鎌1本が見出された。前溝の東側からは蓋坏、横版が、西側からは高

坏がそれぞれ出土した。また前溝の東側で、第8号墳との境近くでは砥石が見出された。

(8) 前庭部 前溝の上部は厚さ40cmの表土が覆っているが、この表土直下および第7号墳北側斜面、第8号墳西側斜面の表土から提瓶(第44図の3)が割れて出土した。

7. 遺物(図版第19~22・30)

第6号墳から出土した遺物とその個体数および出土地点は第1表のとおりである。

第1表 第6号墳出土遺物一覧

遺物	上師器			須恵器				惠器				鉄器										
	蓋	縁	瓢	高坏	脚付縁	蓋坏(身)	蓋坏(蓋)	偏平	平	広口	瓶	提瓶	横瓶	長頸壺	短頸壺	鉄	鐵	金	磁	刀	環	石
封土												1			1							
前室	1																					
後室																2	1					
羨道		1										1										
前溝			4	2	9	7	5	3	4	1	1			1					1		1	

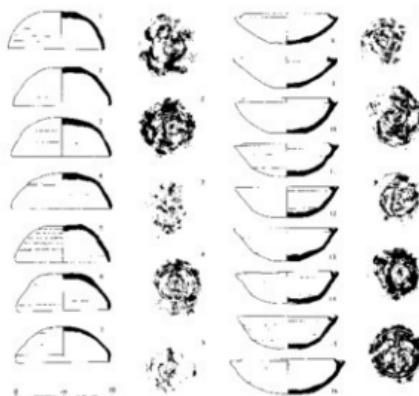
A 須恵器

蓋坏(第41図の1~7、図版第19) 蓋坏の蓋が7個、身が9個ある。蓋の寸法は第2表のとおりである。

いずれも口径10cm前後、器高4cm前後で半球形である。口縁を内凹させないもの(1~5)と口縁を2~3度内窓させて縁で頂部を整形してあるもの(6~7)の二類に分けられる。前者のうち1~2~5は頂部から口縁にかけて半円形を描くが頂部は荒く仕上げてあり、輪輪の跡が残っている。3と4は頂部から口縁に至る間を軽く屈折させ段をつくっている。1~5はいずれも頂部に1本の刻線を施している。

蓋坏の身の寸法は第3表のとおりである。

どれも口径10.5cm前後、器高3.5cm~4cmであるが1だけ11.7cm~11.9cmでひとまわり大きい。身の立ちあがりは口縁より高いもの(1~5~8)と同じ高さのもの(6~7)、口縁より低いもの(9)がある。口縁と立ちあがりの角度は90度ないし純角である。底部は窓で整形してあるもの(1~3)、難な造りで、軸轆の軸跡を粘土を加えて補修したものもある。底部に「×」形の刻線があるものが6個ある。



第41図 押越第6号墳出土蓋坏実測図

第2表 第6号墳出土蓋坏(蓋)
計測値(単位cm)

桶図 番号	口 径	器 高	備 考
1	10.1	4.0	頂部に刻線あり
2	10.2	4.0	"
3	10.4	4.2	"
4	10.6	3.8	"
5	10.0	4.0	"
6	9.6～9.8	4.0	刻線なし
7	9.8	3.8	"

第3表 第6号墳出土蓋坏(身)
計測値(単位cm)

桶図 番号	口 径	器 高	備 考
1	11.7～11.9	3.8	
2	10.7	3.8	
3	10.7～10.9	3.8	
4	10.5	3.7	底部に刻線あり
5	10.6～10.9	3.9	"
6	10.7～10.8	3.3	"
7	10.8	3.5	"
8	10.6	4.5	"
9	10.2～10.4	3.5	"

小形偏平広口壺(第42図)

の1～5、図版第22)5例
あって、各々の寸法は第4
表のとおりである。

いずれも半球形の胸部に、
口径が広く丈の低い口頸部
をつけた形状である。1と

第4表 第6号墳出土小形偏平広口壺計測値(単位cm)

桶図番号	口 径	最 大 径		器 高
		大径	小径	
1	8.2～8.5	8.8	8.2	4.5
2	8.4	8.7	8.0	4.8
3	7.8～7.9	8.6	7.8	4.2
4	9.4	10.1	9.4	5.6
5	9.4～10.3	10.1	9.4	4.7

2は胴部と口頸部の別がわずかである。ともに底部を笠で整形している。3と4は大きさこそ違うがともに頸部縮約が強く、肩部に1条の横線を施している。5は口頸部が外開きになっている点で1~4と形態が異なる。自然軸がよくかかっている。底部には笠による5条の刻線がつけられている。

高坏(第43図の1・5・8・9)4例ある。1は坏だけである。口径11.4cmをはかる。坏は2条の実帶をつけて飾り、脚にも透しが施されていた痕跡が認められる。5は脚の上端と坏の底部の残欠である。器内は1cmあって厚い。脚には透しの痕跡は認められない。焼成は良好である。8は口径10.7cm、器高12cmをはかる。坏部には2条1組の沈線をめぐらせ、口唇の内側は削って段をつける。脚はゆるやかに開き、脚端は面をつくる。脚の中央には2条の沈線を施し、この沈線をはさんで上と下に長方形の透しを1対ずつあけてある。黝黑色を呈し、焼成は良好である。9は口径16.2cm~16.4cm、器高17cm~17.3cmをはかる。坏はなだらかに内弯させ、口唇はわずかに外反させる。坏の中央部に2条の沈線をめぐらせ、脚の中央と下方に2条1組の沈線を施し、中央の沈線をはさんで幅4mmの細長い透しが一対ずつ上下に並べてあけられている。下段の透しと並んで2条の刻線がつけられている。脚はゆるやかに開いて、脚端は屈折させて面をつくっている。

脚付盤(第43図の4・11、岡版第20)2個出土した。4は口径10.6cm、器高14.1cm~14.3cm、11は口径8.8cm、器高17.8cm~18.1cmをはかる。両者ともに截頭卵形の盤部に短い脚をつけるが、5は盤部の上方に1条、下方に2条の沈線をめぐらせ、沈線と沈線の間は軽くおさえて小突帯をつくって飾る。6は盤の中央に2条の沈線をめぐらせて飾る。4・11とともに脚端は段と面をつくっている。

長頸壙(第43図の7、岡版第21)長頸壙の壙部である。肩が強く張り、最大径14.7cmをはか

第5表 押越第6号墳出土瓶計測値(単位cm)

捕獲番号	口 径	高 さ	脚		備 考
			左	右	
第45図	—	—	19.6	14.7	第8号墳の可能性あり
第43図14	—	—	14.0	12.9	口縁欠損、貼市文あり
第43図13	7.4	18.8	13.4	11.9	完形
第44図2	10.0	23.5	15.4	15.0	完形
第44図1	9.6	25.5	18.1	19.2	完形
第44図3	10.3	25.5	18.2	19.0	完形

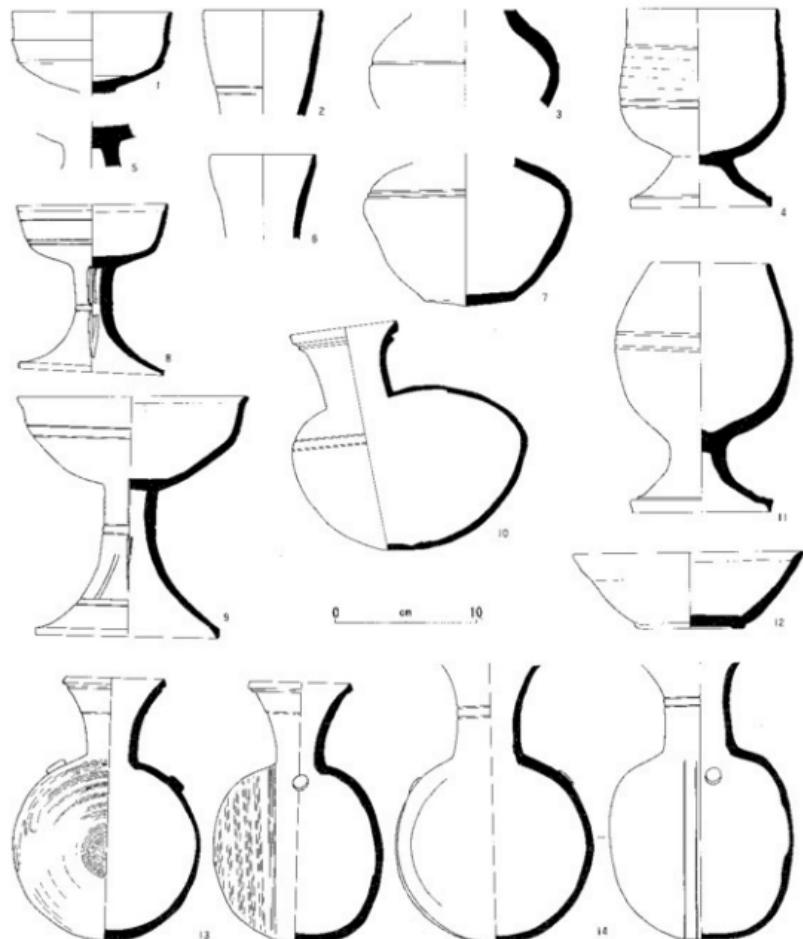
る。肩部に2条の横線をめぐらせてある。底部は笠で調整してある。壙の上部には自然軸がかかり、焼成は良好である。



第42図 押越第6号墳出土須恵器実測図

短頸壺(第43図の3) 短頸壺の胴部と考えられる。胴部の最大形は13.5 cmをはかる。胴部に1条の横線をめぐらせる。焼成は良好である。

平瓶(第43図の2・6・10、図版第20) 3例であるが、2と6は口頸部のみである。9は口径推定7.5 cm、10は口径推定8.4 cmである。尚者ともに口縁は直口である。11は完全に復原できた。口径7.7 cm、器高16.5 cm、最大腹径16.5 cmをはかる。口縁は外反し、段で飾り、肩に2条の横



第43図 押越第6号墳出土須恵器・山茶碗実測図

線をめぐらせている。焼成は良好である。9と10は第4型式に属し、11は第3型式に比定される。

横瓶（第46図、図版第22）第6号埴前溝上肩、第8号埴の埴丘上表、第5号埴前部に散乱していた破片から口頭部をのぞいてほぼ復原した。

提瓶（第43図の13・14、第44図の1～3、第45図、図版第19～21）5個出土している。おのおのの計測値は第5表のとおりである。形態上3類に分れる。

A類 胴部の表面は丸く、裏面は平らになっている。表面には細い同心円状のカキメが施されている。第45図。

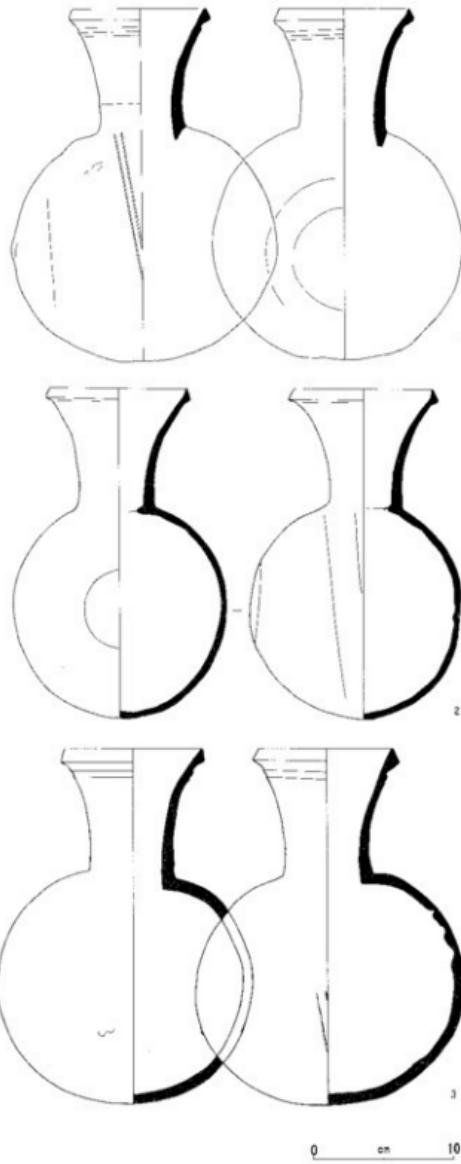
B類 胴部の表裏と左右の差が少なくなる。肩部に円形の浮文を貼布している。口縁部に段がつく。第43図の13・14。

C類 胴部は球形になり、表裏と左右の差はほとんどない。口縁端は面をつくる。第44図の1～3。

B 土器

把手付鉢形土器、盤、甕各1個体ずつがある。

把手付鉢形土器（第47図の1）
口径 15 cm、鉢形の胴部に瘤状の把手がつく。底部には甕のように孔がないのでこの呼称を採用



第44図 押越第6号埴出土須恵器実測図

した。内外両面に刷毛目の調整痕がある。

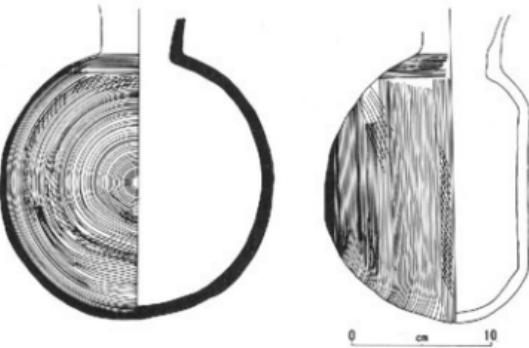
壺（第47図の2）口径10.5cm、高さ3.8cm、半球形で口縁はわずかに内凹している。底部はヘラケズリ調整がなされている。胎土は緻密で、赤褐色を呈し、焼成は良好である。

壺（第47図の3）底部が欠けている。口径11cm、胴部最大径12.

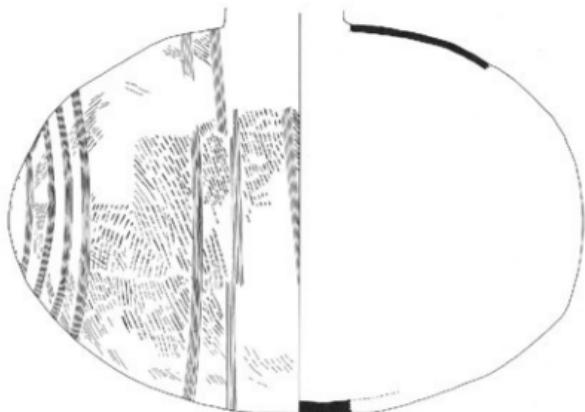
5cm、と推定される。器面の内外にハケメが認められる。器体の一部には煤が付着している。

土師器はいずれも小形である。

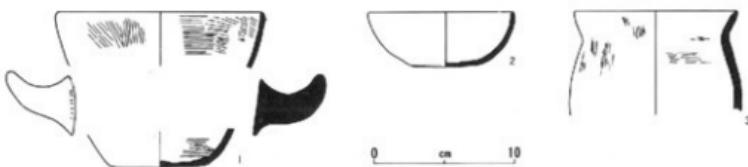
壺は第4型



第45図 押越第6号墳出土須恵器実測図



第46図 押越第6号墳出土須恵器実測図



第47図 押越第6号墳出土土師器実測図

式の須恵器と併出するものである。

C 装身具

装身具としては金環1個が後室から出土した。

金環（第48図、図版第30）銅芯金張りの環で直径1.8cm、身の太さは長径0.5cm、短径0.4cmである。小形であるが、よく光沢を保っている。



第48図 押越第6号墳出土金環実測図

D 武具

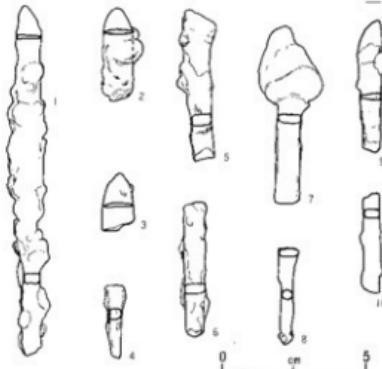
直刀（第51図の1・2）後室で二本重なって出土したうちのひとつである。敷石の上に固く付着していたので、取りあげるときに一部折損し、さらに重なった部分を分離する過程で壊れた。

1は現存する全長48cm、みね幅は切先近くで0.7cm、中央で0.9cm、身幅は切先近くで2.9cm、中央で3.3cmをはかる。柄の部分は鋸が瘤状になっており、人骨が付着している。2は1と重なって出土した。茎は長さ約3cm、軸1.8cm、厚さ0.6cmで断面形は梢円である。身はみね幅0.7cm、身幅3.6cmをはかる。関の部分は鋸が厚く付着している。身の中央から切先にむかって反りが認められる。

鉄鎌（第50図）1は前溝から出土した。全長12.5cm、片刃箭式である。2～10は前室か



第49図 押越第6号墳出土刀子実測図



第50図 押越第6号墳出土鐵鎌実測図



第51図 押越第6号墳出土鐵刀実測図

ら出土した。2と3は平造鍔笠被鑿箭式であり、9は片刃箭式で、7は平根式両丸造三角形式と推定される。

E その他の遺物

第6号墳の前溝から出土した砥石と後室上部から出土した刀子、山茶碗、古錢がある。

砥石(第52図)長さ10cmの細長い黒色の礫の一端が平らに磨耗している。石質は柔かい。

刀子(第49図)両闊式の刀子である。身が中途で折れて切先はない。現存する身の長さは13.5cm、みね幅0.9cm、身幅2.5cmをはかる。茎は長さ7.2cm、幅は闊の部分で1.8cmをはかる。茎の末端から5cmの

点に直徑3.0cmの目釘穴がある。

山茶碗(第43図の12、図版第21)口徑16.0cm、器高5.5cmをはかる。わずかに丸味をもった碗で、やや幅の広い高台をつける。行基焼の編年では石根式にあたると考えられる。

古錢 直径2.5cm、内郭は幅0.3cmで周縁である。孔郭は0.6cmの方空である。面には4字が配されているが風化が著しく、わずかに下の一字が「九」とも「元」とも読める程度である。この字が「九」の字とすればそれに該当するものはみあたらない。「元」とすれば草書体のそれで、中国北宋の太宗淳化元年(990年)に鑄造された「淳化元宝」あるいは「聖宋元宝」がもっとも近い。

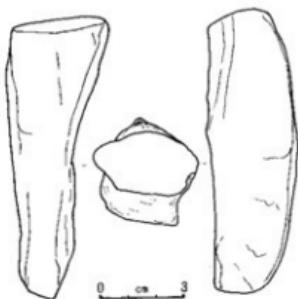
8. 小 結

押越第6号墳の石室中央には、間仕切石があって、前後2室に分れていた。石室が前後2室に分れるのは、隣接する第5号墳があるが、第5号墳の場合には柱状の石を立てて区別しただけで、前後両室は出入りが可能である。これに対して第6号墳では、間仕切とは呼ぶものの、石は天井まで積んであり、密閉してある点で、閉塞石とみなされる。従って、間仕切石は、先の被葬者と後の被葬者とを区別したものとみなされる。

第6号墳のもうひとつの特色は、盜掘にあってはいるとはいえ、石室内では、間仕切石の下で発見された蓋の破片だけであったことである。石室内で須恵器が発見されなかつたけれど、石室前端から始った溝の中に埋められていた。この溝は、石室と羨道の削岡を終了したあとで見出されたもので、遺物は最後の葬送の直前に埋納されたものと考えられる。

溝から出土した遺物のうち、上層から出土したものは第6号墳、第7号墳、第8号墳のいずれのものとも決しがたいが、羨道直下のものは確実に第6号墳のものと断定できる。溝から出土した蓋環、鏡などは、その形態上の特徴から尾張・三河古墳出土須恵器の編年から第4型式に比定でき、その実年代は6世紀中葉から7世紀初頭と推定できる(註)。

第6号墳に葬られた被葬者は複数であるが、当古墳群の被葬者たちと並ぶ、庶民層の一員であ



第52図 押越第6号墳出土砥石実測図

った。しかし、本古墳群の被葬者たちを統括するまでの実力はなかったものと推考される。

(七 原)

註 久永春男・田中稔「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』1963年守山市教育委員会）

第8章 押越第7号墳

1. 位 置

第7号墳は南西に向く支丘の尾根に築かれている、東にある第8号墳、北にある第6号墳の墳丘と裾を分っている。標高は50mである。

2. 調査の経過

第7号墳の調査は、他の古墳の調査のために人員の調整がつかなかったことと、天井石がよく遺存しているので、慎重に進めたいということで、7月20日から作業を開始した。

調査は、墳丘測量のあと、石室入口を清掃することから始めた。正面の土を取り除くと閉塞石がそのまま残っていることがわかった。続いて天井部を掘って天井石を出した。天井石の完全なものは5個発見されたが、中央部は落ち込んでいるようである。天井石と閉塞石の写真撮影と測図を行なった。石室内の調査は、日程と人員の都合上8月16日以降に持ち越した。

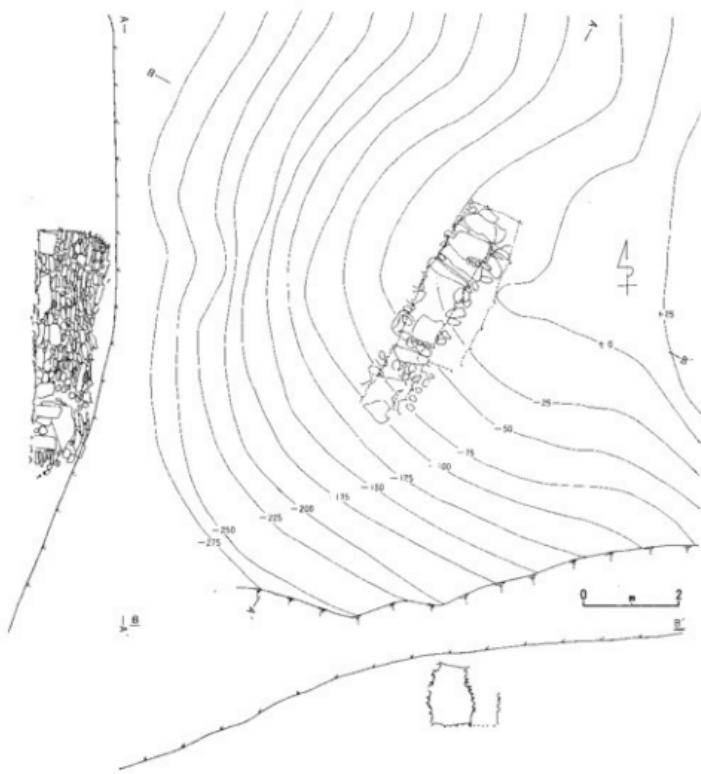
石室内に落ちこんだ石は大きく、他の古墳の調査にかかわっている人たちの応援を得て、やっと運び出した。その後、石室内の土砂を搬出して、奥壁に近いところで人骨を発見した。人骨の周辺には菅玉と金環が出土した。石室の前方では、台付長頭塙などを発見した。出土状態図の作成と写真撮影を行ない、8月19日から石室図面の作成にとりかかった。途中、台風が当たり、大雨が降って石室内に雨水が流れこんだりして、予定の変更を余儀なくさせられたりしたが、9月に入って作業を完了した。

その後、第7号墳を移築保存することが決まり、その準備にとりかかった。側壁の石に番号をつけ、順次石をはがしていくと、はからずも右側壁の背後に側壁があることがわかり、あらためて清掃を行ない、第1次石室の実測を行なって作業を終了した。

3. 墳 丘（第53図）

第7号墳も支丘尾根に築かれている。古墳は天井石もよく遺存し、石室も閉塞されたままになっていた、もっともよく旧状をとどめていた。

第7号墳の東隣には第8号墳があり、実測図の+25cmの等高線は第8号墳の墳裾になる。-25cmから-275cmの等高線は、ほぼ等間隔で半円形を描いていて、墳丘と丘陵との境界は区別しがたいが、石室の前端が-100cmの等高線と重なるので、ここを末端とし、さらに墓域を見込んで-150cmを墳丘の裾としてとらえることができよう。古墳が東隣の第8号墳と接して築かれているので、東側は墳丘を築く余地ではなく、南西側のみ整形されたものと思われる。墳丘は、完全な円墳とすれば8mになろう。



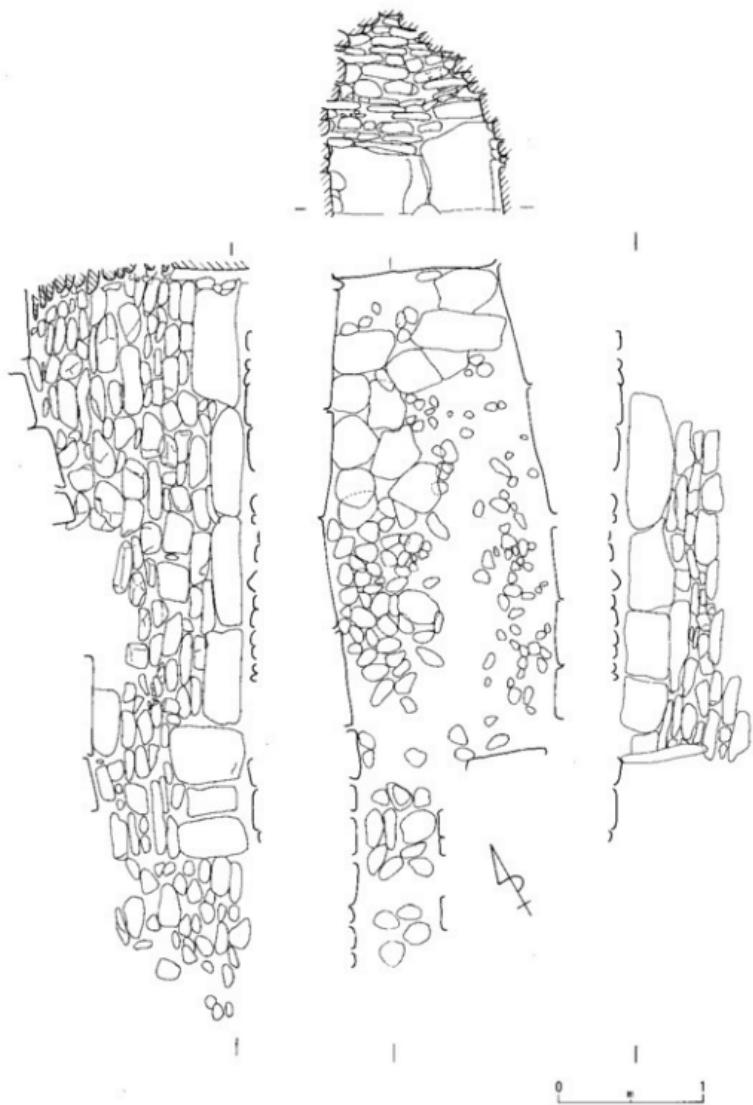
第53図 押越第7号墳填丘実測図

天井石は石室の中央部を除いて7個遺存していた。現存する天井石を覆いつくすまで封土を積みあげたとすれば、埴丘の高さは-150cmの等高線を埴壠とみて、2mであったろう。しかし古墳が再建されたものであり、天井石が石室前方では低くなっているので、なお30cm程度は高かったかも知れない。

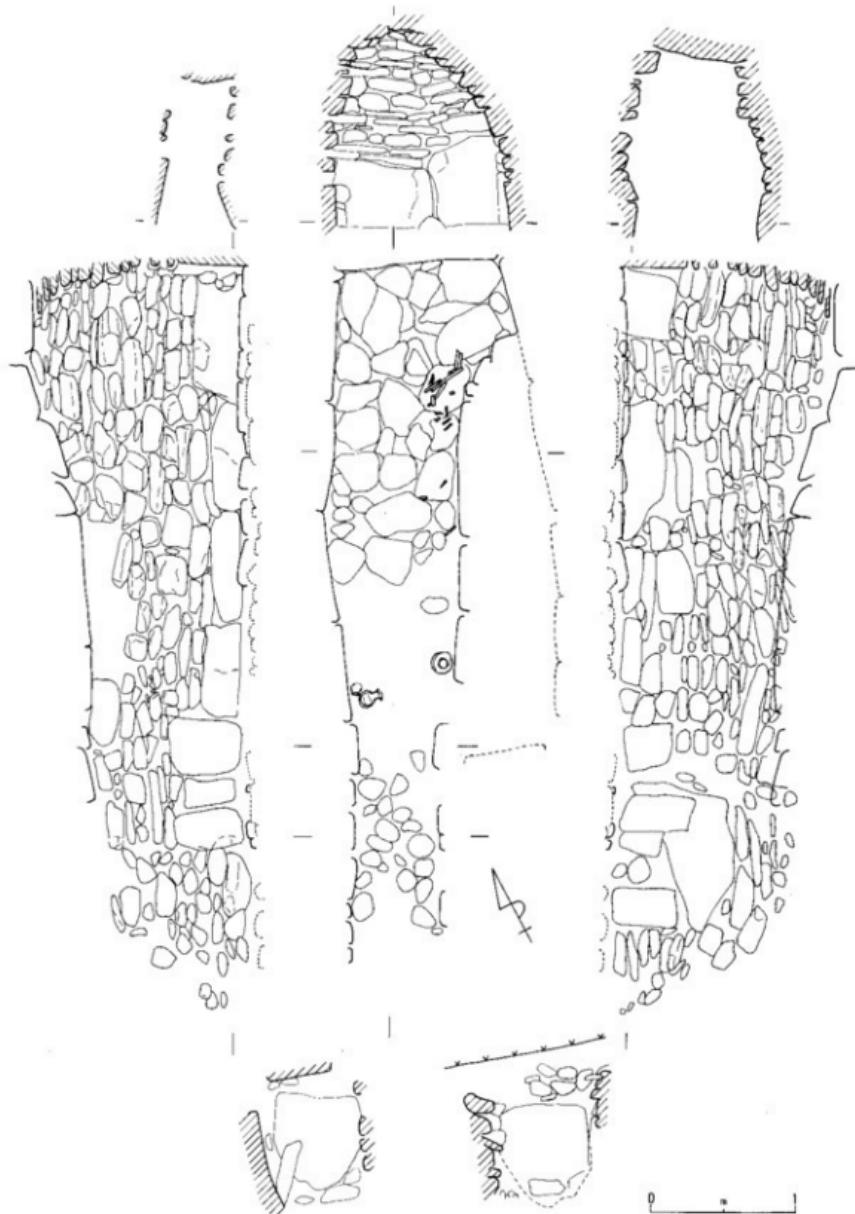
4. 石室（第54・55図）

押越第7号墳の石室は、最初に構築した石室と、補修した石室があった。

最初に構築された石室は、全長5m、右片袖式で、玄室の長さは3.5m、奥壁の幅は1.05～1.10m、中央で1.5m、袖部で1.4mとやや狭くなる。羨道は長さ1.5m、幅は狭く0.5mから



第 54 図 押越第 7 号墳第 1 次石室実測図



第 55 図 押越第 7 号填第 2 次石室実測図・閉塞石正面図・同裏面図

0.55 m である。

奥壁は 2 枚の大形の石を並べ、その上は小さい割石を平積みにし、玄室の内へ向かって持ち送りしている。左右両側壁は、最下段に長さ 0.8 m から 1 m 近い石を根石とし、その上に横長の平たい石の小口面を石室内に向けて積みあげている。

玄室左側壁は、石室補修後もそのまま利用しているが、右側壁は、奥壁からひとつめの石をその上方を除いて 3 ~ 5 段までが残っていた。右袖部は縦横約 0.6 m、厚さ約 0.1 m の平たい石を用いている。奥壁付近の両側壁は、天井に向かって持ち送りがあり、典型的なアーチになっている。

羨道部は、下段に縦長の石を用い、玄室の横長の根石とは明確に区別している。羨道入口は丸い川原石を用いている。

敷石は、玄室後半は平たい大槻地産の石を用い、玄室前半には丸い川原石を用いている。右側壁寄りの袖部で、補修壁の背後には小形の円礫が使われているが、まばらに遺存しているにすぎなかった。補修した石室の左側壁は最初に構築した側壁をそのまま使用している。右側壁は、奥壁から 0.8 m までは当初のままであるが、ここから玄室前方にかけて、側壁から 0.5 ~ 0.9 m まで内側にせり出して新たに積みなおしている。このため、石室は非常に狭くなり、1 人がやっと通れる程度である。しかしながら補修された右側壁は軽く崩張りさせている。また奥壁から 3.25 m の地点で、下段の石を内側へせり出し、ここから羨道にしている。

補修後の玄室床面には、大槻地産の偏平な礫を用いている。この敷石も玄室の前方と羨道との境あたりには遺存していなかった。羨道には、川原石を敷石として用いている。

天井石は 7 個が現存する。全て補修後に構架されたもので、狭い石室に対応した長さ 1 m 前後の石である。

床面と天井の高さは、奥壁部で 1.4 m をはかり、もっとも高く、石室中央に向かって低くなり、玄室前端から羨道にかけては 1 m である。

奥壁から 4.8 m の羨道には、さしわたし約 0.7 m、厚さ 0.1 m の円形に近い石を据え、まわりに川原石を用いて閉塞してあった。

5. 遺物の出土状態（第56図）

第 7 号墳から出土した遺物は、須恵器の短頭壺、臘、台付長頸壺、蓋壺の身と管玉、金環各 1 、刀子、鉗、鐵鍼と人骨である。遺物はいずれも第 2 次埋葬に係るものである。

台付長頸壺は、奥壁から 2.8 m の右側壁に接して直立して出土した。臘と短頭壺と蓋壺は、奥壁から 3 m 、左側壁寄りにまとめて出土した。短頭壺は羨道へ口縁を向けて倒れていた。これに接して蓋壺の身があり、臘はその中に入って、石室の中軸線上には直角に倒れて見出された。

奥壁から 0.6 m で、第 2 次埋葬にあたって補修された右側壁が狭くなりはじめたところに人骨が

発見された。人骨は1箇所にまとめられている状態で、人骨の傍から管玉、金環、鉄刀、鍔の残欠が出土した。人骨から0.7~0.8m離れた地点から鉄鏃が発見された。いずれもバラバラで先端の向きもまちまちである。

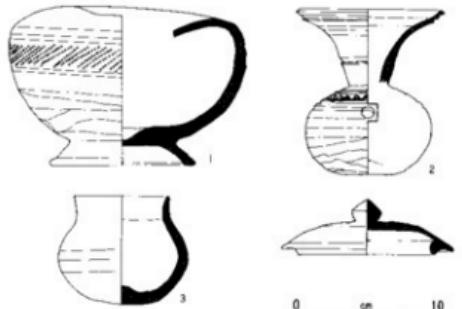
6. 遺 物

第7号墳から出土した遺物は、台付長頸壺・駿・短頸壺・蓋・金環・鉄刀・鍔・鉄鏃である。

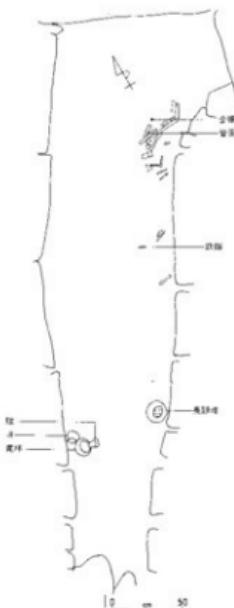
台付長頸壺（第57図の1、図版第18）、口頸部がない。現在高11.5cm、最大胴径16.5cm、胴部は丸味をもち、口頸部との境はへたってくぼみになっている。胴部上方に2条の沈線を施し、沈線と沈線の間には、櫛状器具による連續刺突文がある。下胴部はヘラ削り調整をしている。台はハの字に開き安定感がある。肩部と脚部に鉛色の自然釉がかかっている。

駿（第57図の2、図版第18）、口縁部が少しずつ欠けている。偏球形の胴部にラッパ状の口頸部がつく。肩部に1条の沈線をめぐらし、沈線の内に櫛状器具による波文を施している。胴部から底部にかけては粘土を貼りつけて厚くし、ヘラ削り調整をしている。底部の中心は粘土が達しておらず、くぼみになっている。口頸部は中央部と口縁端に各1条の沈線をめぐらし、口縁はやや内湾気味につくり、端部は面をつくっている。焼成は良好である。

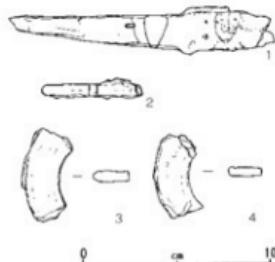
短頸壺（第57図の3、図版第18）口径6.6cm、高さ7.8cm。球形の胴部に短い頸部がつく。胴部と頸部との境はなだらかである。底部は粘土を貼りつけて補修してある。



第57図 押越第7号墳出土須恵器実測図



第56図 押越第7号
墳出土遺物位置図



第58図 押越第7号
墳出土鐵器実測図

蓋（第57図の4、図版第18）口径9.6cm、高さ2.9cmをはかる。頂部には擬宝珠形の紐がつく。身受けは口縁より下に出ている。

金環（第59図、図版第30）長径2.0cm、短径1.9cmの小形の金環である。
遺存状態は比較的良好である。

刀子（第58図の1、図版第35）関と茎の部分だけ残っていた。身幅3cm程度
である。

鍔（第58図の3・4、図版第35）破片が2個出土した。同一個体のものであると考えられる。

鉄鎌（第58図の2、図版第35）茎の残欠で計測できたのはこれだけである。



0 cm 3

第59図押越第7号
墳出土金環実測図

7. 小 結

第7号墳は天井石と閉塞石がよく遺存しており、盗掘による被害がもっとも少ない古墳であった。

石室は右片袖式で築かれていたが、のちに作りなおされた。最初に構築された石室右側の遺存状態をみると大井に近い部分が崩壊したためつくりなおしたものとみられる。補修した石室は極めて狭く、変則的であるがそれでもなお若干の胴張りをもたせてある。

本古墳から出土した須恵器は、尾張・三河地方古墳出土須恵器の第3型式に属するものであり（註）、築造年代は6世紀中葉から7世紀初頭になろう。

石室からは人骨が検出されている。京都大学雪良類研究所江原昭善教授の鑑定によると男性2体と女性1体分であるということであった。遺骸の近くからは管玉や金環などの装身具が見つかっているので、女性が身につけていたものと推定される。

（川合・七原）

註 久永春男・田中稔「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』1963年 守山市教育委員会）

第9章 押越第8号墳

1. 位 置

第8号墳は、第7号墳、第9号墳とともに、南西へ向う支丘上にあり、南西にある第7号墳、北東にある第9号墳と埴の垣を分ち、北西にある第6号墳とは5mを隔てている。標高は53mである。

2. 調査の経過

第8号墳も盗掘にあっているが、石室の入口は壊されていないようで、入口から清掃を開始した。入口には、縦に長い石を置いている状況がはっきりした。他の古墳の調査のためにも、サンプルとしておくため、測図と写真撮影を行ったあとは現況のままにしておくことにし、今度は石室の中から調査をすすめた。石室床面上から提瓶が出土した。敷石の清掃をすすめていくと、二重になっていることがわかった。石室の奥壁部は天井石も残っている。8月16日以降は石室の実測を行ない、最後に閉塞石をとりはずした。閉塞石の下を清掃すると溝があらわれた。第4号墳、第6号墳などにも溝があるので、同類のものと考えられる。溝の中には遺物はなかった。

調査の途中で雨が降って地盤が緩んだせいもある、東側にある第9号墳が崩壊はじめた。当然第8号墳にも波及することが考えられたので、前溝は完掘できずに調査を打ち切らざるをえなかった。

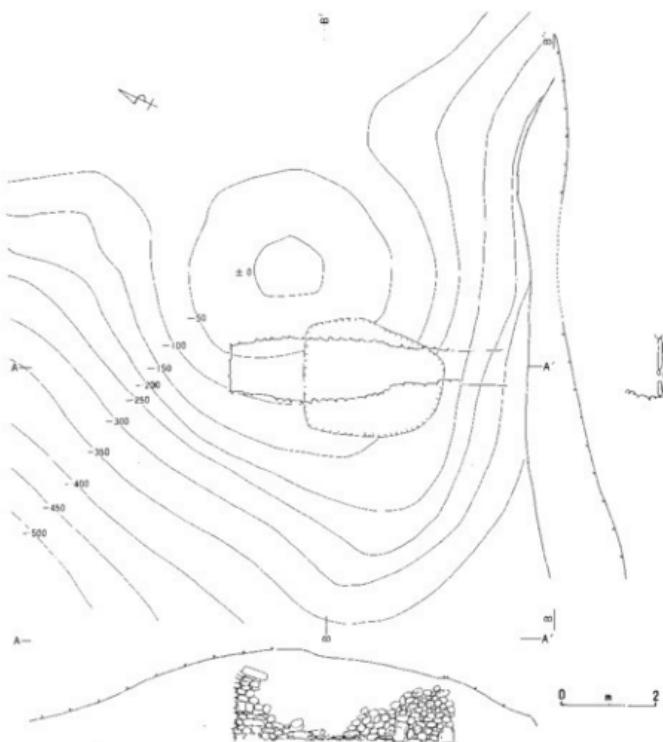
3. 墳 丘（第60図）

本古墳は東方から西方へ向かう支丘の中ほどにあるが、支丘の平均傾斜約17度に対して、本古墳設定地の基盤の傾きは約7度で、比較的平坦な地点が利用されていた。古墳築造時に若干の整地はおこなわれたろうが、発掘時の所見において基盤上に当時の地表である黒土層が厚さ15cmほど認められたことから、その整地規模はきわめて少ないことがいえる。

墳丘の規模は、直径東西11.0m、直径南北10.2mで支丘縦方向にやや長い長円形のプランを示し、石室の床面から現在の墳頂までの高さは2.4mを測る。

墳丘西南側裾で須恵器の横瓶の細片が検出されたが、隣接する第6号墳の遺物とみられるものであり、ほかには墳丘上になんの施設も見出されなかった。

なお墳丘の盛土は、支丘基盤の土と同質であり、本古墳の石室が旧地表を掘りこんでつくられていることから、石室構築時の土を封土の一部として用いたのであった。



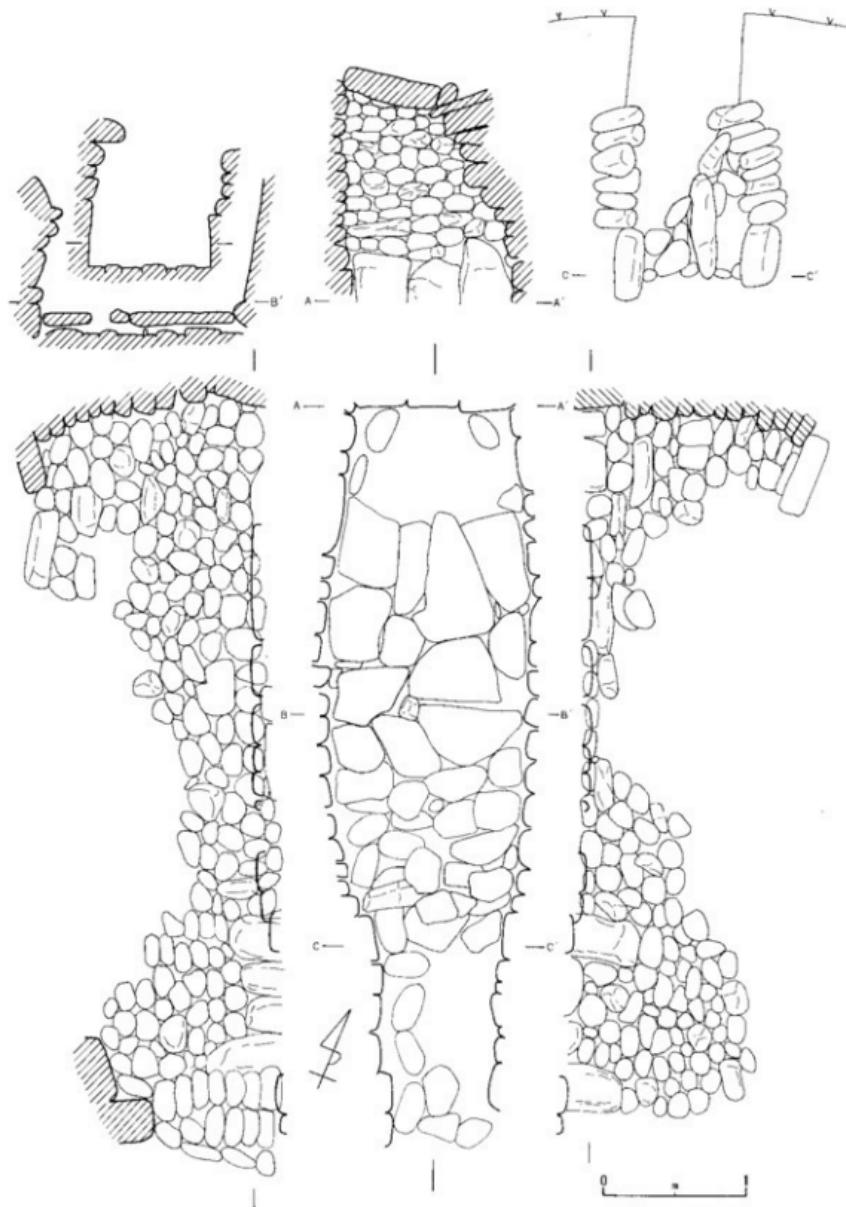
第60図 押越第8号墳墳丘実測図

4. 石室（第61・62図）

押越第8号墳の石室は、長軸を南北線より22度西に偏し、羨門が南々東を向いた横穴式石室で、全长は5.2mを測る。石室は玄室部と狭道部とからなり、その境には玄門がつくられている。石室の天井部および玄室両側壁が後世の盗掘によって石材を抜きとられ、石室はかなり旧状を失なう遺存状態にあった。

石室は、奥行き3.6m、幅は奥壁近くで1.1m、中央部の最大幅は1.45m、玄門部で0.9mであり、その平面プランは胴張りのある長方形を呈している。玄室に架構された天井石は奥壁に接した1枚のみが遺存しており、床面から天井までの高さは1.5mである。

奥壁はたけが0.60mほどの大条地石を3個縦位に並べ立て基礎をなし、その上部へさしわたし



第61図 押越第8号填石室実測図（第1次）

0.40 m ほどの天竜石を小口積にかさね、小形の大楽地石を積みあげている。

側壁は両側壁とともに大楽地石を下 1 段に配し、その上位に天竜石を小口積みしている。奥壁より内傾度を大きくした持送り手法がとられ、遺存する西側壁の上段には大井石架構のための大楽地石によるひかえ積みが、奥壁より 0.6 m から 1.2 m のところでみられる。

床面は上下の 2 層からなり、上位の第 2 次面においては奥壁付近の一部を除いて、床面幅いっぱいに大楽地石が敷きつめられている。ことに奥壁から 0.8 m の位置から 1.8 m ほどの間は平坦面をもつ大形の大楽地石が敷かれており相合としての施設であろうかと考えられる。下位の第 1 次面はさわらし 30~40 cm の天竜石が用いられ、奥壁から中央部へかけては粗く、中央部から玄門にかけては密に敷かれている。

玄室と羨道とを区切る玄門は、幅 35 cm ほどの天竜石が右側壁に相対しておかれ、玄室の入口を向方からせばめている。

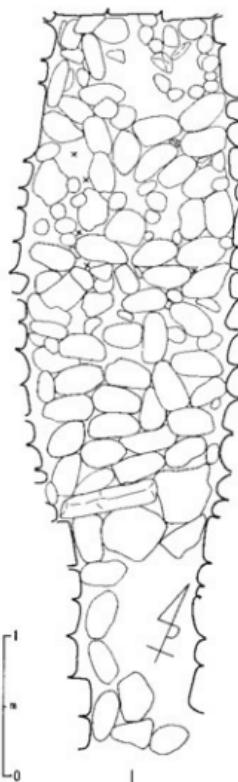
玄門からはじまる羨道部は、長さ 1.6 m ほどで、幅は玄門の位置で 0.9 m 、羨門の位置で 0.6 m とやせまくなっている。その位置に閉塞石が遺存していた。

側壁の石組みは玄室と同様な方法であるが、下段の石材が玄室では大楽地石を用いたのに対し、羨道では幅 25 cm 、高さ 30 cm 内外の天竜石が並べておかれている。羨道入口には 60 cm ほどの高さをもつ大形の石材がおかれ、羨門をつくっている。羨道部における大井石は玄門付近に 1 個をのこすが、床面からの高さは 1.2 m ほどである。また床面の敷石は長径 30~40 cm の天竜石が西側壁寄りに 7 個ほど遺存していた。この石材は玄室の第 1 次床面の敷石と同様なものであり、一層であることとも加えて、構築以来手が加えられなかったとみられる。

羨門をふさぐ閉塞石は、大楽地石と天竜石を併用して基部を構成し、上位に天竜石を組合せてふさぎ、さらに長さ 95 cm 、幅 17 cm 、厚さ 10 cm の細長い大楽地石がもたせかけてあった。

また、石室は奥壁から羨門へ向けて床面が次第に低まる傾向をなし、奥壁と羨門との間で 20 cm の比高があり、排水の便が備えられていたとみて差し支えない。

さらに、石室入口の羨門は、墳丘末端より 1.3 m ほど奥にはいった位置にあり、羨門から前庭



第 62 図 押越第 8 号墳第 2 次床面実測図

部へ向けて断面がV字状をなす前溝があり、幅0.8m、深さ0.6mをはかる。

5. 遺 物 (図版第18)

出土遺物は第2次面のものと第1次面のものとに分けられる。第2次面からは提瓶1個体、刀子1口が見出だされ、第1面からは刀子1口と鉄錠6個が検出された。

第2次面遺物 提瓶 (第64図、図版第18)は口径7cm、器高20.2cmで、偏球形の胴部は長径15.2cm、短径12.5cmである。頭部中ほどに2条の平行沈線が施され、胴部の両側面には細い整形痕が同心円状に印されている。

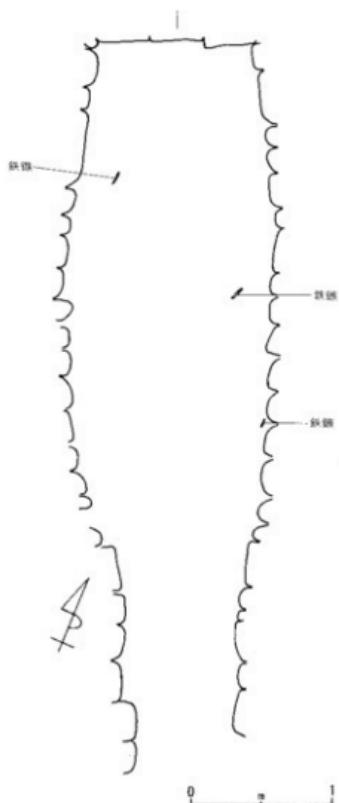
刀子は平造りのものの残片で、長さ3.4cmほどのものである。

第1次面遺物 刀子 (第65図の1、図版第34)は全長15cm、刃部の長さ8.5cm、巾1.4cmのもので背は直面で平造りをなし、刃は銀でつくられている。

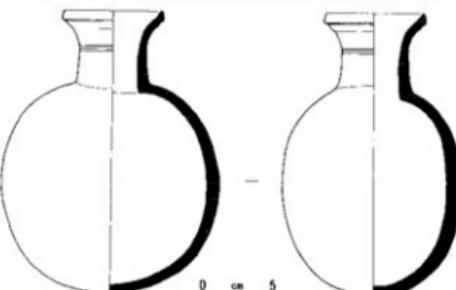
鉄錠 (第65図の2~5)は床面に散乱していたもので、第2次面からおちこんだ可能性もある。範被擊箭式で全長12cm前後のものが多く、刃部の幅は1.2cmほどである。茎部は断面が長方形をなし、先端部がとがっている。

6. 小 結

押越第8号墳の石室は、かつての盗掘によって石材が抜きとられ、玄室内の副葬品も同時にもちだされたと考えられ、玄室内に遺存した副葬品はきわめて少なかった。上下2層に敷かれた床石面からは、下層第1次面で刀子と鉄錠が発見され、上層第2次面では刀子1口と須恵器



第63図 押越第8号墳第1次床面遺物出土位置図

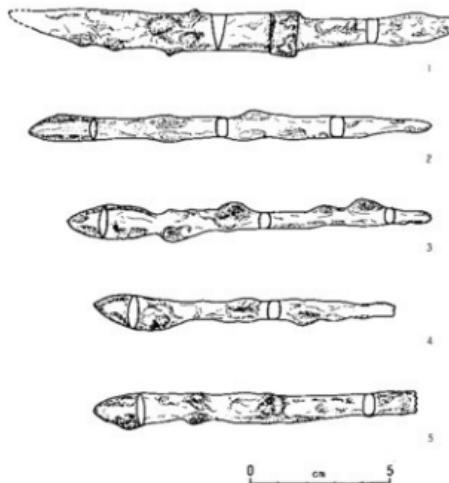


第64図 押越第8号墳出土須恵器実測図

の提瓶のみ見出された。

出土遺物のうち、提瓶はその型式が尾張・三河地方における古墳時代須恵器の編年（註1）からみると、第4型式に属するものであった。隣接する第6号墳、第7号墳、第9号墳の各墳出土の須恵器の型式と相通する意味において、本古墳の使用された一点は6世紀中葉から7世紀へかかる時期に求めることができる。

本墳の被葬者の墳丘および石室の規模は、当押越古墳群のなかでは、ふつうにみられる規模であるが、石室の構築にあたって、大楽地石と天竜石が併せて用いられ、その使用時間内に、下層よりも大形の石材をもって、玄室内の床面を敷きかえられたのであった。これらのことからみられるように、本墳は、家族墓としての性格がより合理的に設計された古墳であったといえる。



第65図 押越第8号墳出土刀子、鉄轡実測図
(坂野)

註1 久永春男・田中稔「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」(『豊田大塚古墳発掘調査報告書』1966年 豊田市教育委員会)

第10章 押越第9号墳

1. 位 置

押越第9号墳は、南西にのびる支丘の斜面にあり、北東へ4mに第4号墳、南西に6mに第8号墳がある。標高58mである。

2. 調査の経過

第9号墳は、7月14日にはまず墳丘の測量を行い、7月16日から19日にかけて発掘を行なった。発掘は、墳丘頂部にあけられている大きな盗掘坑から開始した。石室内には厚く土砂が堆積しているので、まずこの土砂を取り除かねばならなかった。石室中央部の埋積土から、刀と思われる鉄片数個を発見した。第1日めは西側壁を掘りだすのみにとどまった。翌日は、石室東西両側壁を掘り出すことを日程にし、ほぼ達成した。遺物は出土しなかった。第3日めは、石室の床面まで掘り下げ、石室を完全に清掃する作業を行なう。奥壁から3.1mほど離れた地点にあった大形の石を取り除いたところ、その下から直刀2口、銀環1個、切子玉2個、丸玉4個、小玉数個、鉄鎌の破片が採取された。さらに羨道部の清掃を続け、鉄鎌の残欠と馬具の破片などを発見した。石室の清掃が完了し、一段落ついた。その後、第5号墳、第6号墳、第8号墳の調査を手伝ったため、第9号墳の実測と写真撮影は遅れ、8月16日から23日にかけて行ない、完了した。

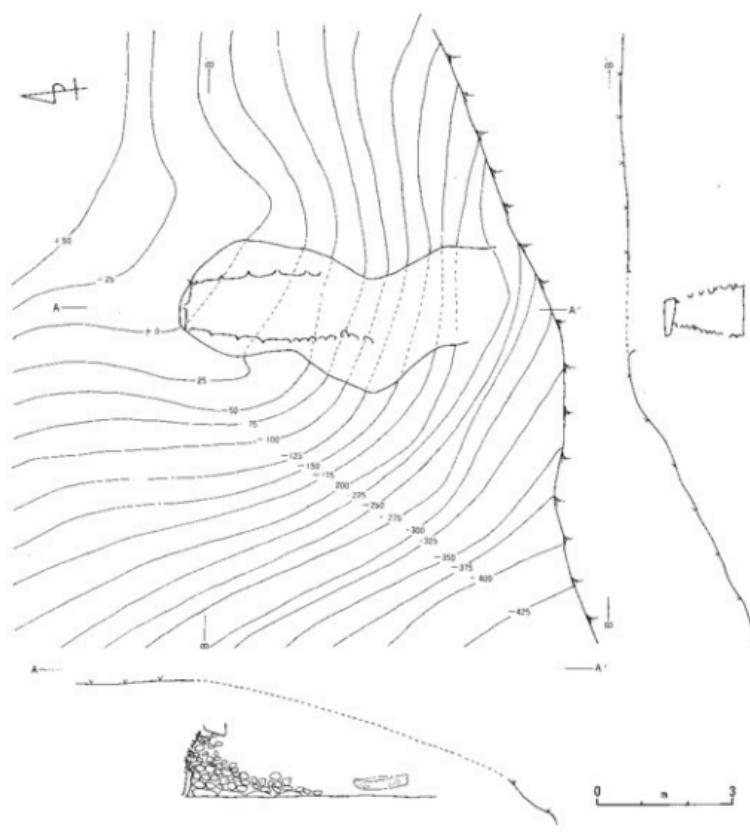
3. 墳 丘（第66図）

第9号墳の墳丘は、北側は第4号墳の墳裾になっていて、その裾から石室の奥壁あたりは平らになり、土砂が厚く堆積している。この部分と盗掘坑を除くと墳丘はなだらかな斜面になって、南側は第8号墳の墳丘と接している。墳丘の高まりが明瞭でないので、一見しただけでは丘陵の傾斜面と区別がつけ難い。

墳丘の実測図では±0から-50cmまでの等高線が南に張り出しているが、-75cmから-325cmにいたる11本の等高線は、半円形を描いており、東西両側は丘陵斜面に連なっていて、墳丘の形状が、大きな変形はないものとみられる。石室の規模からすると、-175cmの等高線が、墳丘の軸と仮定できる。墳丘の高さは、現存する石室の遺存状態を考慮に入れると、-175cmの等高線から2mをはかるものと推定される。

墳丘は、上方に第4号墳がひかえていることや、地形図も、完全な凹形を示さず、当初から半円形であったものと思われる。

4. 石 室（第67図）

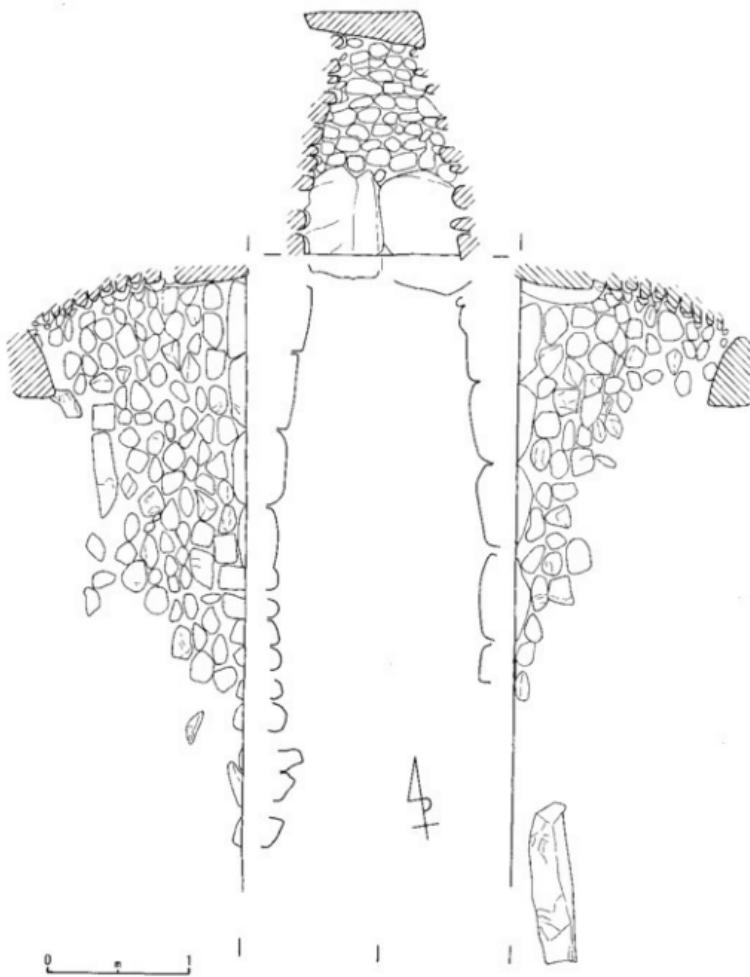


第66図 押越第9号墳墳丘実測図

第9号墳の石室は、主軸をN-7°-Eにとり、耐張りした長方形である。

本古墳も盜掘によって、天井石をはじめ、側壁の石が多数持ち去られ、旧状を留めているのは奥壁部だけであった。そのうえ、玄門部および羨道部は、土砂採取のため、調査中にも崩壊しはじめ、この部分は明確にできなかった。

現存する西側壁の根石が、石室の内側へ突き出しているところがあり、玄室の前端を示しているようにみえる。ここを玄室と羨道の境とすると、玄室の長さは3.5mである。奥壁の幅は1.05m、奥壁から1.9mの地点が最大幅となり1.4mである。羨道部は、石室内側に突き出た石から



第67図 押越第9号墳石室実測図

約2mは前方に続いていたものと推測される。

奥壁部はよく遺存していた。奥壁は2個の割石を立て、その上は川原石を用いており、左右両側壁の上方は持ち造りになつておる、天井石1個がもとのまま残つてゐた。天井石は、床面から1.6mをはかる。こうした、遺存する奥壁部をみると、天井石が残つているところは側壁の残り

もよい。このことは、逆に、大井石を構築することによって側壁をおさえる役割があるようにみえる。

側壁は、第5号墳と同様に、最下段に大形の自然石を、石室の平面プランに従って掘え、第2段から上は川原石の小口面を石室に向けて積みあげている。

石室の石組みを観察すると、各積石の間には、明らかに赤土を練って詰めた跡が認められる。あたかも練瓦を積むように粘り土をおき、また赤土をおくといった作業が繰り返されたことであろう。

床面に敷石が全くなかったが最初からなかったかも知れない。

5. 遺物出土状態

第9号墳の遺物の大部分は、玄室西側壁寄りから出土した。

銀環は奥壁から1.5m、西壁から0.2mの地点で、ガラス玉6個と水晶製切子玉2個は奥壁から1m、西壁から0.2mの地点の床面上の土砂の中からで、鉄刀のひとつは奥壁から、1.8mの地点から2.1mにかけて、他の一口は奥壁から2.3mの地点で、西側壁に密着した状態で見出された。また、ガラス製玉が15個出土した。これらの遺物が出土した付近と石室の前端付近の土砂の中から鉄鏃がそれぞれ出土した。

6. 遺 物 (図版第30)

第9号墳から出土した遺物のうち、現在確認できるのは、金環と小玉である。

金環 (第60図、図版第30) 長径3.1cm、短径2.9cm、太さ0.7cmの金環である。一部剥落しているが、遺存状態は良好である。

小玉 (第68図、図版第30) 4点である。直径1.0cm～0.8cm、高さ0.7cm～0.5cmで形態は不揃いである。¹3は底がついている。いづれもガラス製で茶褐色を呈している。

(高柳)

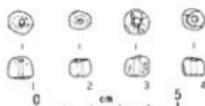
7. 小 結

第9号墳も盜掘によって変形していたが、奥壁はよく遺存しており、側壁の持ち送りの状況がよく観察できた。また石室を構築するにあたって、石と石の間に赤土を練って隙間を埋めるという手法が観察できたのも収穫である。

本古墳に供獻された須恵器は全て持ち去られているので、年代を知る手がかりがないけれど、遺存した遺物は、本古墳群のいずれかと共にするもので、6世紀中葉から7世紀初頭までと考えてさしつかえないだろう。

遺物には装身具が多く、被葬者が、一般庶民より裕福であったことを示しているといえよう。

(七原)



第68図押越第9号墳出土小玉
実測図



第69図押越第9号
墳出土金環実測図

第11章 押越第11号墳

1. 位 置

第11号墳は中尾根に存在する一群の古墳のなかで最も西の丘陵先端近くにあって、すぐ東北に第12号墳、同じく東南に第13号墳が墳丘の裾を接して並び、さらに東方8mに第14号墳、同じく30mの位置に第15号墳が続いている。なお、当第11号墳の地籍は豊岡村大字上神増字押越・字新林である。

2. 調査の経過

調査開始時すでに土取り作業により、墳丘南半が石室の前方部もろとも削り取られ、比高20m余の垂直に切り立った崖面に石室の残った部分の石組みが露出していた。

また、残された墳丘北部も封土が相当崩れ、奥壁と推定される石の上端や、天井石らしきものが一部露出していた。

調査は墳丘外形の測量ののち、まず残っている部分の石室を確かめるため、埋土の排除より始めた。石室内には粘土まじりの赤褐色土がつまり遺物は含まれていなかった。

石室床面は砂利まじりの赤褐色土で、かたくしまっており、ガラス丸玉1個、微少な鉄片1、須恵器の細片1が出土した。

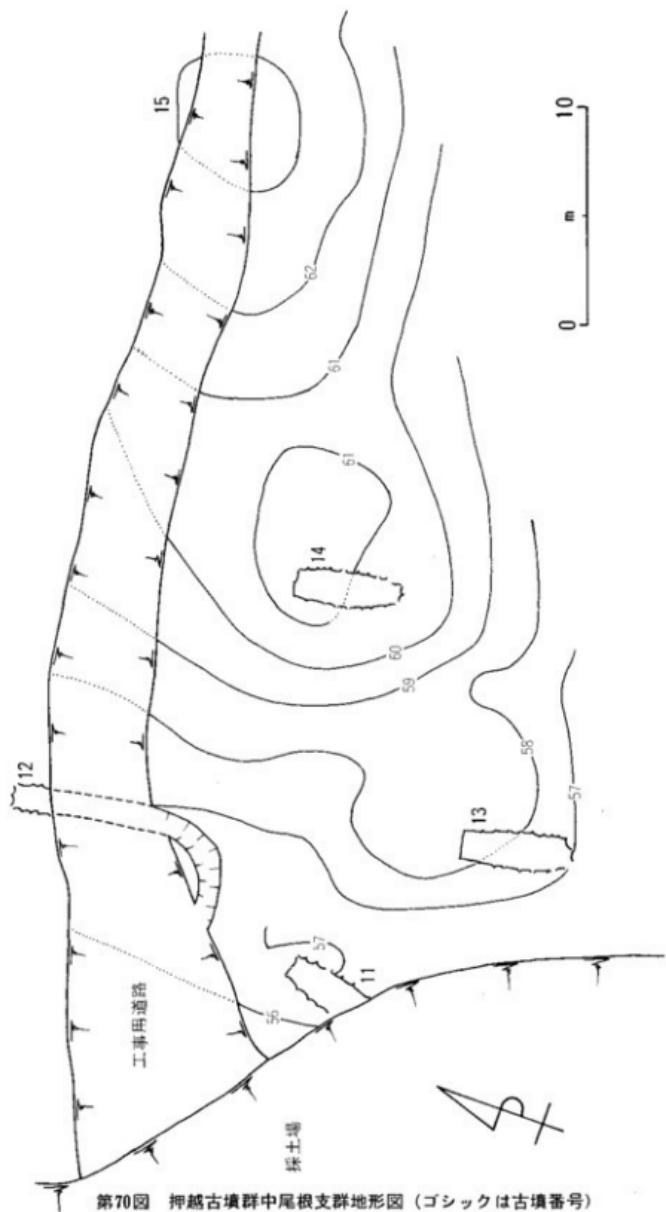
天井石は奥壁より2m前方の崖近くに東壁からはずれて石室内に落ち込んでいるが、西壁上に斜めに突出している1枚と、他に石室内に落下している2枚があったが奥壁付近の石室奥部には天井石が見当らず、側壁の石組みも西側の奥壁に接するあたりから80cmほど前方までは上部の石が取り去られており、この部分から、かつて荒らされたものと推定された。

石室平面図作成について、石室内の東西両側面及び縦断面の実測、横断面図の作成をおこない、南側の急崖にあらわれた墳丘断面の観察をしたが、絶え間なく土が崩れ落ちており、危険なため実測は不可能であった。

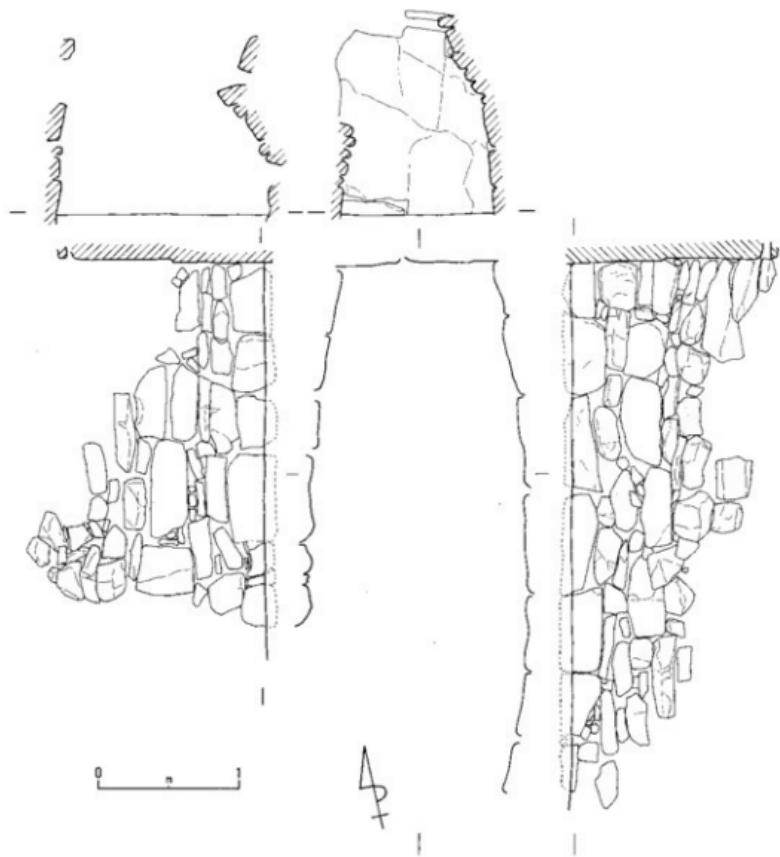
以上で一応の調査作業を終了したが、間もなく石室の石組みもろとも、墳丘の残存部も崩落し、第11号墳は消滅した。

3. 墳 丘

調査した時点において墳丘の前方部三分の一ほどは基盤の丘陵もろとも削り取られて消失し急崖となっていた。残っていた後部も封土の崩れが甚しく、特に北西部は尾根の稜線に沿って通路を仮設した際のブルドーザーによって失われ、高塚状のたかまりはすでに見られなかったが、東側三分の一ほどの墳丘は旧態を保っていた。



第70図 押越古墳群中尾根支群地形図（ゴシックは古墳番号）



第71図 押越第11号填石室実測図

墳丘は標高の高い東側からは50cmほどの高まりで、あまり目立たないが、西の低い側からは約180cmの比高がある。

築造当時の墳丘は、現状よりもいくらか高く、東側から70~80cm、西側からは2m近い高まりを見せ、直径8mをくだらない規模の円形の平面形であったと推定される。そして墳丘の裾は東北側の第12号墳、東南側の第13号墳のそれと直ちに接するほど接近した位置にある。

4. 石室（第71図）

東西方向に伸びる尾根の南斜面を掘り下げ横穴式石室を尾根の稜線の方向に直交するかたちで築いている。

石室前方部はすでに工事のため崩落し急崖となっている。崖面での観察によれば石室を築くにあたって、東側ではほぼ石室の深さに相当するだけ地山を掘り下げているが、尾根の先端に向って標高が下っている西側では、浅い掘り込みで東側の坑と同じ位置まで達している。石室の石組みも東側では地中に組み込まれているが、西側壁は半地下式ともいえる上部が地上に露出する状態であったと思われる。したがって封土も東側は少なく、西側は多量に盛り土されていたものであろう。

奥壁は高さ 1.4 m、床面での幅は 1.05 m であるが、下部で欠損部があり、長さ 0.5 m、幅 0.2 m の石で補填している。

東側壁は奥壁より 3.9 m、西側壁は奥壁より 2.6 m まで遺存していた。側壁の高さは西側の天井石の乗っていたところで 1.40 m を示し、床面の最大幅は 1.53 m である。両側壁の基礎となっている最下段の石は、いずれも比較的大形で直方体に近い整った形のものが使われ、その長辺を内側に見せる積み方がされている。すなわち、石室に必要な土坑を掘りあげたのち、奥壁がすえられ、続いてあたかも石室平面形の素描の如く、基盤となる大きさと形の比較的揃った石を置いて、その上に側壁を築いたものと思われる。

側壁の石材は長辺を奥行とし、小面を壁面に見せる小口積みがされているが、その際東壁の最も奥の石積みは、小口積みではなく壁面の安定と強度を保つため、すべて奥壁の側面を支えにして、長辺を内側に見せて積みあげているが、西壁では奥壁が西側に張り出した形をしているため、あえて強度を犠牲にしても奥壁にもたせかけず、その前面で積みあげている。なお、敷石はなかったが床面はかたくつきかためたような砂利まじりの赤褐色土が一面に認められた。

天井石は、西壁ではずり落ちながら東壁に斜めにかかっていた 1 枚は、長さ 1.5 m、幅 0.5 m、厚さ 0.3 m で重量は 600 kg 前後と推定された。また石室内に落下していた他の 2 枚もほぼ同様の大きさであったといわれているが、調査時にはすでに運び去られて確かめるべくもなかった。

なお使用されている石は全てこの地方で大槻地石と称されている砂岩の割石である。

5. 遺物

当古墳は調査前すでに荒らされていた形跡があり、遺物は極めて僅少であり、次の 3 点が床面から発見されたのみである。

丸玉（第72図） 琥珀色のガラス製で、径 8 mm、厚さは片面で 6 mm、他方で 4 mm と歪んでいるが中央に径 2 mm 弱の孔が貫通している。

また、それとは別に径1mm弱の微細な孔が縫辺に片寄って穿たれているが、
先細りとなって貫通してはいない。

須恵器 微細な小片が1片のみ出土した。器形、型式ともに不明である。

鉄片 極小の鉄片が1片のみ出土した。形状・用途ともに不明である。

④一目



0 cm 2

第72図 押越第11号
墳出土丸玉実測図

6. 小 結

第11号墳は調査前に、すでに相当破壊されており、調査期間中にも崩壊が進行しており、不明な点が多くかった。

遺物はきわめて貧弱なものしか残されておらず、明確な須恵器の出土がなかったので、築造時期の決定も困難である。

石室の築造にあたって、奥壁の床面における幅1.05mや、天井までの高さ1.40mがともに0.35mの倍数を示していることから、35cmを1尺とした高麗尺（註）の使用された可能性を考えられる。なかでも西側壁がその構築に際して強度・安定性を犠牲にしても、奥壁幅の三尺（105cm）を固執していることから、当地方に高麗尺が普及し、しかもその規則が相当強力な時期であったと想像される。

（森）

註 久永春男・齊藤嘉彦「尾張・三河地方における後期古墳の横穴式石室の築造に使用せられた尺度について」（『人神山古墳群』）1969年

第 12 章 押越第 12 号墳

1. 位 置

第 12 号墳は押越古墳群の分布する北・中・南の 3 つの尾根のうち、その中尾根の先端近くにあって、南西に第 11 号墳が南々東に第 13 号墳がそれぞれ墳丘裾を接して並び、東南約 5 m に第 14 号墳がある。

2. 調査の経過

調査前にすでにブルドーザーによって、墳丘の中央部が玄室床面にとどく深さで東西方向に切斷されており、墳丘らしい土の高まりは認められなかった。残存部は奥壁より前方約 2 m 程までと、ブルドーザーの通過路を隔てた羨門付近であった。

まず石室後部の破壊を免れた部分を発掘した。床面には敷石があり、床面及び床面直上の埋土から須恵器片及び勾玉、管玉が出土した。羨門付近の石室前方部は密に並んで分布している第 11 号墳、第 13 号墳、第 14 号墳のそれぞれの墳丘裾が尽きる低く狭い位置にあり、羨門は奥壁付近の床面とほぼ同高度であったが、羨門より外に続く溝状の掘り込みがあり、それが半円を描いて西方に続いているのを確認した。しかし第 11 号墳の北側を下ってその先はブルドーザーによって切断されて残っていないかった。この溝から多量の須恵器が出土した。石室の平面、側面、断面及び溝状遺構の測図のうち、ブルドーザーにより切断された面で墳丘の断面を確かめ調査を終わった。

また遺物の整理、測図をはじめ現地との照合など事後のまとめにあたって七原憲史、仙田作吉、木村哲雄の三氏の御協力があった。

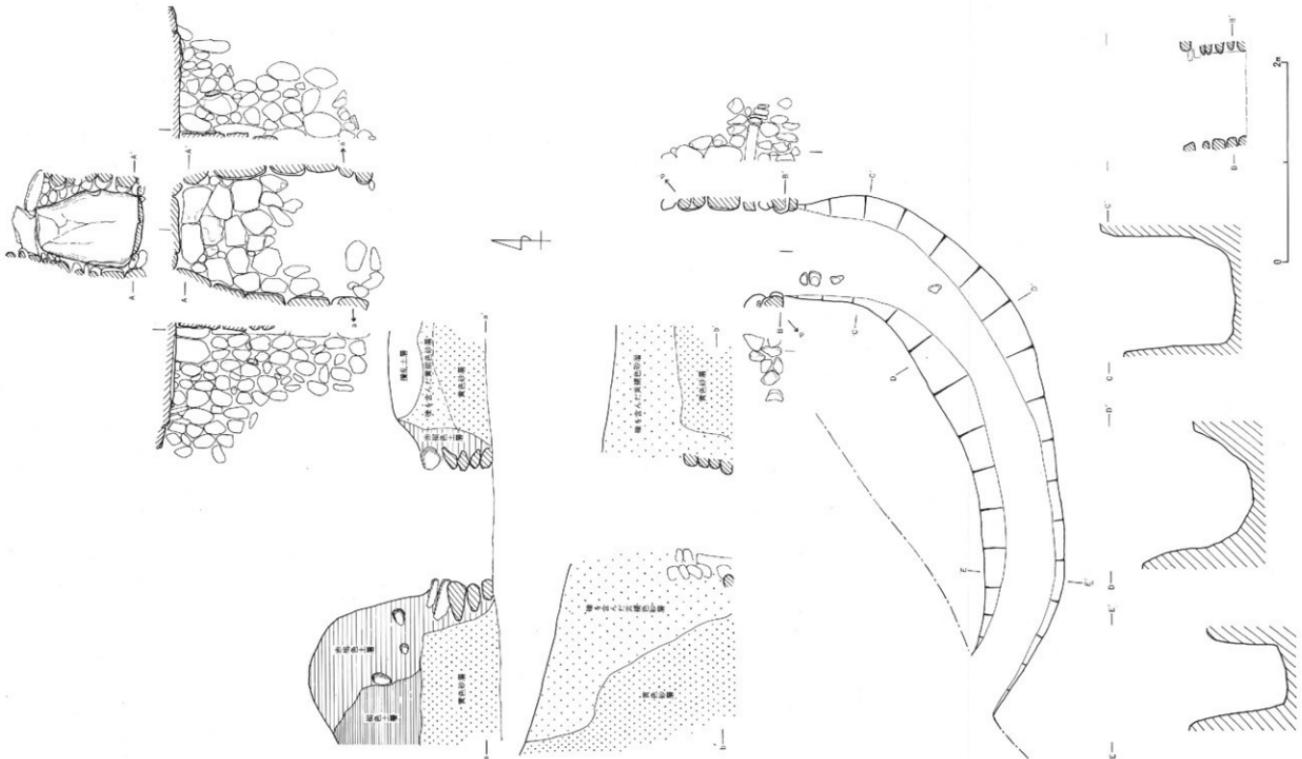
3. 墳 丘

ブルドーザーにより墳丘の中央部が幅 3 ないし 4 m にわたって削平され、石室の石組みが残存しているのは奥壁付近と羨門付近のみである。奥壁背後は急勾配で北側の侵蝕谷に落ち込んでおり、墳丘らしい高まりは認められなかった。また、わずかに残った羨門付近も第 11 号墳、第 13 号墳、第 14 号墳のそれぞれの墳丘裾の合した低い位置であり、第 12 号墳の墳丘は現在全く認め難くなっている。

築造時の墳丘は、現状からは推定が非常に困難であるが、石室の規模などから少なくとも直径 7 m は下らなかったものと推定される。

なお、羨門の外がわに土器を多量に包含する前溝が発見された。

これは羨門からいったん南へ向うが、すぐ目前に迫っている第 13 号墳や第 11 号墳を避けるか



第73図 押越第12号填石室実測図

の如く、弧を描いて西から西北西方向にゆるやかに下るもので、第11号墳の北方に至りブルドーザーにより切断され、その先はたどれなかった。前溝は羨門より第11号墳北の切断地点まで延び6mが遺存しており、幅は0.5mないし0.8m、深さ1m～1.3mの断面U字形である。

4. 石室（第73図）

第12号墳は尾根の背梁部に築かれ、石室は中軸線を稜線の方向に直交して、南1度西に羨門を開く横穴式石室である。奥壁及びその2mほど前方までと、羨門付近以南が残存しているが、石室中央部はブルドーザーにより破壊されている。石室は地山を掘り下げて、その中に築かれているが、棱線の傾斜は東に向く西に低いため、羨門部での培丘断面によれば東側では地山の黄色砂層を2.1m掘り下げているのに対し西側では1.30mの掘り込みで床面に達している。また、ブルドーザーで切断された奥壁より1.90m前方での観察によれば、西壁は黄色の砂層を約0.8m掘って石組みを構築している。東側は土が相当動かされていて上部が失われているが、石組み築造に際し東西幅2mと両側壁の石組み幅ぎりぎりの坑を掘り下げている。

奥壁は長辺1.10m短辺0.75mでその上に長辺0.50m短辺0.20mの小形の石を乗せている。床面での幅0.70m、高さは上の石の頂まで1.30m、奥壁から羨門まで5.60m、石室の幅は現存部分の最大幅が1.25mである。

石室の石組みに使用された石材は奥壁及び羨門の立石が、当村の大栗地方間に産するために俗に大栗地石と称される砂岩の割石であるのに対して、側壁に用いられているのはいずれも天竜川の旧川原の転石と思われる丸石である。基盤となる最下段は石の長辺を見せる積み方をしているが、それ以上は小口積みである。また側壁最下段の石の基部、床面を若干掘り下げたところに径10cm内外の円礫があり、奥壁基部の左右両側にも同様の例が検出された。それはあたかも石室平面形の素描を小円礫で地上に描いた如くである。すなわち、最初小円礫で地上に設計プランを具体化し奥壁をすえ、側壁の基礎となる石を長辺が壁面になるかたちで並べていったと思われる。そしてそれ以上は小口積みに積みあげていって側壁を完成させていったのであろう。

側壁の構造は、比較的大形の石は俗にごぼう積みといわれている石の上に更に石を積むという垂直に積み上げる手法をとっているが、小形の石は並存する石と石との間に上の石を乗せ上・下三つの石が安定する形で積みあげている。その際とがった端を石室内に向け、肥大した端を外側にして、壁面の石と石との間隙に粘土質の土をつめ込み、壁面が崩れ落ちてこない配慮がなされている。

奥壁より1.10m前方までは一面に、2.00m前方あたりまでは部分的に敷石が認められた。全てやや扁平な天竜の川原石が使用されており、二次的な補修や層位による変化はなかった。

5. 遺物の出土状態

石室内出土の遺物は勾玉、青玉各2個と蓋環の蓋以外は須恵器の細片のみである。岩土製勾玉と蓋環の蓋は現存する石室の先端近くの敷石面から出土したが瑪瑙製の勾玉はブルドーザーによる工事中に奥壁上端に接する埋土中から地元の中学生によって採集され、2個の青玉も埋土中で発見された。

羨門から続く前構からは、供獻時には完形であったことが予想されるような須恵器の大形片が50個余出出した。

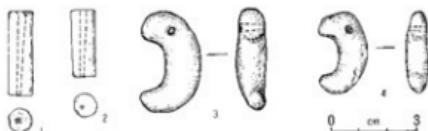
6. 遺 物 (図版第23~25)

A 装身具

管玉(第74図の1・2) 石室埋土中出土の2個がある。全ての碧玉製で表面は研磨され濃緑色の光沢を保っている。径0.85cm長さ3cmのものと、径0.9cm長さ2.4cmのもので孔はいずれも片面からうがたれたものの如くで、孔の位置は片面は中央にあって径も大きく、前者が0.3cm、後者が0.25cmであるが、他の面は中央に貫通せずかたよっており孔の径も狭くなっている、両者とも0.1cm前後を示している。

勾玉(第74図の3・4) 敷石而出

土のものと、中学生の採集により得られたものの2個である。敷石而出土のものは碧玉製でみがかれ濃緑色の光沢がある。形状はコの字形で



縦幅3.6cm、横幅2.1cm、厚さは頭

第74図 押越第12号墳出土装身具実測図

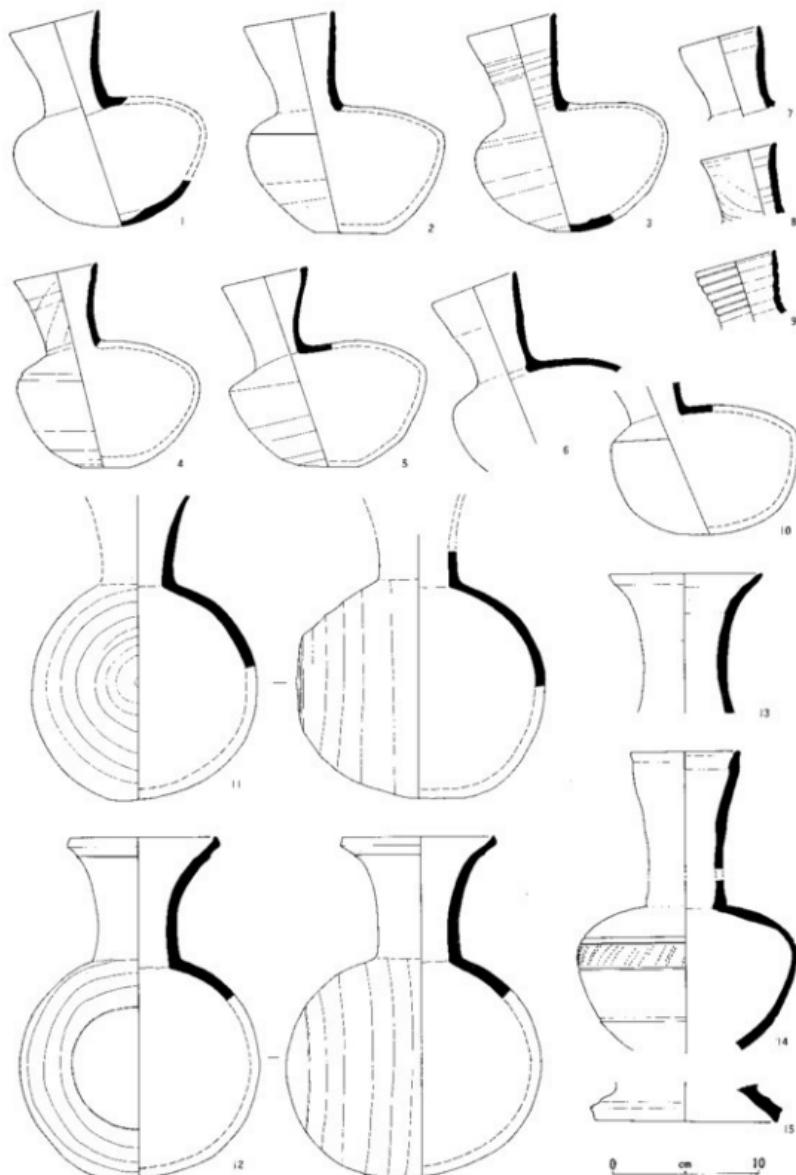
部で8.5mm、中央部で10.5mm、尾部で7mmをかぞえる。孔は片側からうがたれらしく、直徑は入口で3mm、出口は1.5mmである。

中学生が工事中に採集したもの(4)は、瑪瑙製で赤橙色半透明のコの字形で、縦幅2.95cm、横幅1.75cm、厚さは頭部で6mm、中央部で8mm、尾部で7mm、孔は一方からの貫通で、その径は入口で2mm、出口で1mmとなっている。

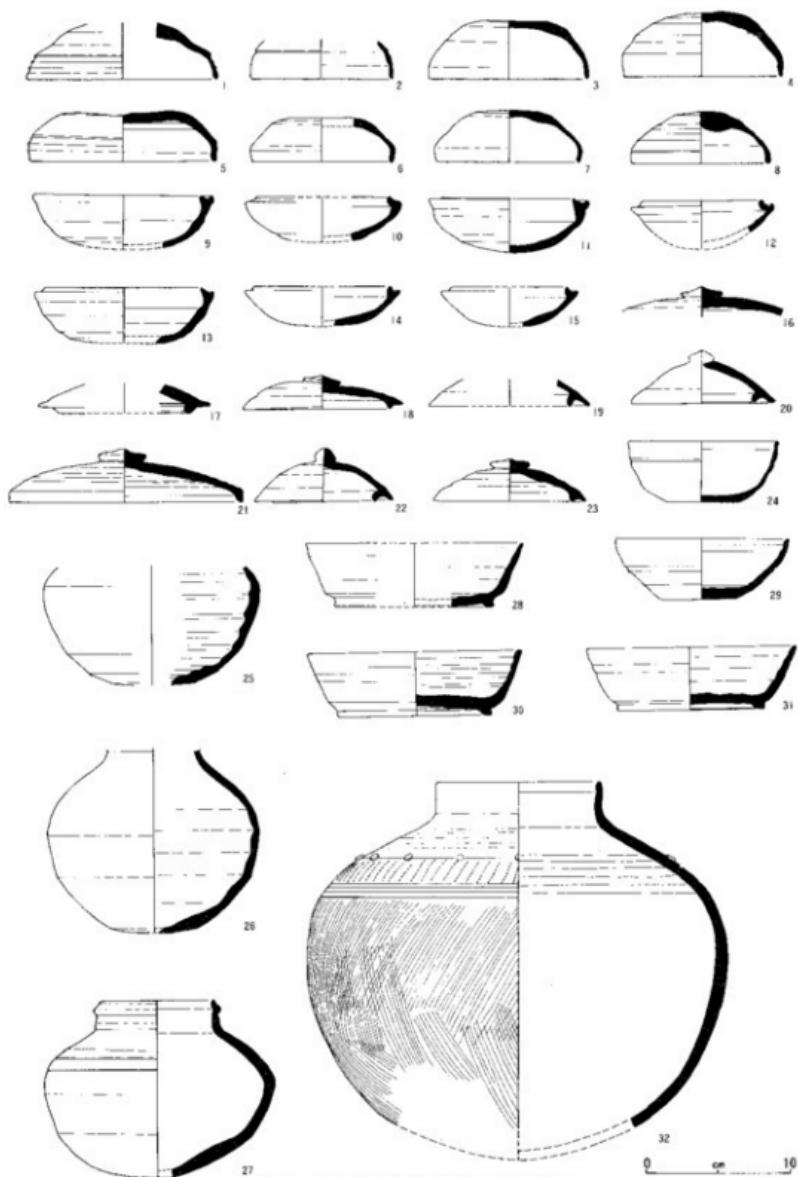
B 須器 惠

長頸瓶(第75図の13~15) 底部を欠くのみではほぼ完形のもの14と口頸部片13と2個体ある。ともに溝状遺構の出土である。前者は現存する部分の器高約21cm、口頸部の長さ11cm、口径7.6cm、肩部の最大径は15cmである。口頸は筒形、上側で屈曲して以下なだらかに底部につぼまって行く。最大径の位置に上下2本の沈線で文様帶を区切り、そのなかに梯目による列点の斜線列を印する。また、下端の径12.5cmの丈の低い脚台15は、長頸瓶にともなうものかも知れない。後者は口頸部のみで、口径10.6cm、現存する部分の高さ10cmである。外に開く口縁で文様はない。

短頸壺(第76図の26・27) 大形のものと小形のものの2個体である。大形のもの26は、口径



第75図 押越第12号填出土須恵器実測図



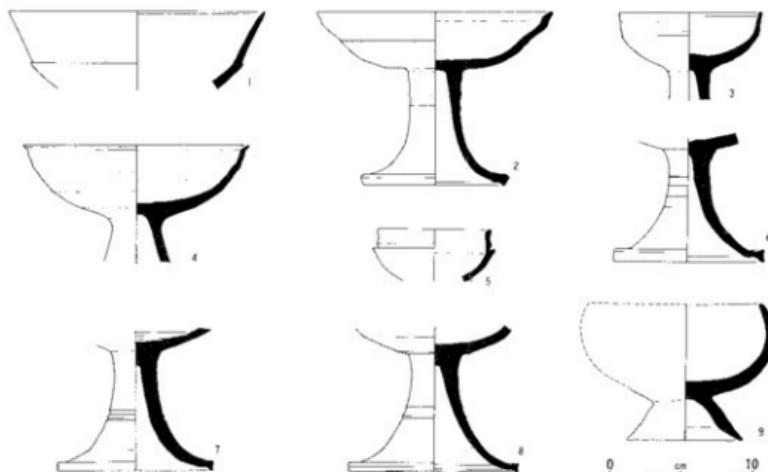
第76図 押越第12号墳出土須恵器実測図

11.6 cmで、高さ 2 cmほどの短い口頸部の下は最大幅 29.6 cm の球形の胸部となり、底部は欠損している。上胴部に幅約 2 cm の文様帶があり、櫛目による列点の斜線列が印せられており、文様帶上縁の沈線上に径 5 mm ほどの円盤状浮文を約 4 cm の間隔で連らねている。

小形のもの 27 は、底部を一部欠くのみである。口径 8 cm、口辺に突帯を有する高さ 2 cm の短い口頸から扁球形で最大幅 16.2 cm の胸部が続く、上胴部に 2 本の横線があるほか文様はない。

壇（第76図の25）口頸部、底部を欠く球形の胸部のみで、最大径 15 cm、無文で丸底らしい。

平瓶（第75図の1～10）全形を察知し得るもの 4 個体と口部を欠くもの、胸部の一部が欠損しているもの、底部を欠くものの計 3 個体。また平瓶の口頸部と推定される断片 3 個、他に胸部片と目される 1 片も加えて合計 11 個体検出された。但し、小片同士で同一個体を形成するものが存在する可能性もない訳ではない。完形及びそれに近い 7 個体は規格寸度が比較的そろっており、口径は 6～6.5 cm、頭部の高さ 5.5～6.5 cm、器高 14.5～15.8 cm、胸部最大径 12.7～13.7 cm である。底部の形状は判定可能な 6 例中、丸底は 3 個体、他の 3 例は径 3.4～4.8 cm の小平底を有する。また肩部ないし上胴部の形態は 7 例中、ゆるやかな張りをみせる、いわゆる丸肩のもの 5 例、稜をつくるて屈曲するか、稜を形成しないまでも急角度で鋭い張りを見せるものが 2 個体ある。なお丸肩としたもののなかの 1 例は部分的に屈曲度が変化し、稜をみて折れている部分もある。口頸部はいずれも単純なコップ状に外に開き、多くは文様がみられないが、



第77図 押越第12号墳出土須恵器・土師器実測図

浅い三本の沈線を有するもの 3、口縁を平坦につくっているもの 5 も存在する。また肩の屈曲部に沈線を有するものが 2 個体 2・10、幅 5 mm ほどの浅い凹線のあるものも 2 個体 3・4 ある。

口頸部のみの断片 3 個は、口径が 5.3 ~ 5.8 cm、頸部の長さ 5 cm 前後と比較的小形であり、口端付近で袋状に内弯するもの 7、ロクロ成形時に印せられたと思われる螺旋状の条線のあるもの 9 などがある。

提瓶（第 75 図の 11・12） 2 個体ある。完形のもの 12 は、口径 10.2 cm、高さ約 9 cm の口頸の下にはほぼ球形の胴部が続く、胴部は長径 17.8 cm、短径 16.9 cm とその差はすくなく長頸瓶に近い形態となっている。11 は、口頸の先端部を欠き、胴部は長径 17.4 cm、短径 15.8 cm と横瓶に似たやや横形の胴部である。以上両者とともに、いわゆる フラスコ形瓶ともいえるもので、胴部には整形痕が残り、端面を円盤で塞いで球体にしている。

高杯（第 77 図の 1 ~ 8） 8 個体あるが杯部の形状により 2 つの類型に分け得る。その 1 は口縁が外に大きく開く、杯の浅い類で 6 個体ある。内、完形に復し得る 1 個体は器高 12.5 cm、杯部の口径 16.5 cm、杯の深さ 3.5 cm、脚部の高さ 8.5 cm、脚下端の径 10 cm。外開きの大きな杯部でわずかに段があり、脚部は中空の円柱状で裾に至り大きく外反するが、段の名残りの如き節が 2 つある。脚端はわずかに下方につまみ出されたように整形されている。

杯部片は 2 つあり、前記のものと同様のつくりの口径 16 cm のものと、腰で棱をつくって外反する口径 18 cm のものとがある。

残る 3 個体は脚部片であるが、杯の基部が遺存してこの類であることがわかる。いずれも下部で大きく外反するもので、下端が下方にはみ出されたようにつくられており、2 段の段を有するものや、2 本の沈線のあるもの、沈線が彫刻化した如きものがある。脚の高さは 8.1 ~ 8.7 cm、脚端下端の径は 10.6 ~ 11.9 cm である。

他の類は小形の半球形の杯を有するもので 2 個体ある。口径は 8 ~ 10 cm で杯の途中に段を有し、杯の深さ 3 cm 前後である。

蓋杯（第 76 図の 1 ~ 24、28~31）

第 1 類

A (1 ~ 15)

蓋 8 個体と身 7 個体である。蓋は半球形で口径 9.7 ~ 13.4 cm、器高 3.2 ~ 4.5 cm、身は蹲状に蓋受けのあるもので、口径は 8 ~ 11 cm、深さ 3 cm 内外である。

B (17 ~ 20)

蓋 6 個体、身 2 個体である。蓋はいずれも擬宝珠状または円盤状の鉢をつけ、口縁内面に幅狭い縁受けがつけられている。直径 9.8 cm から 12 cm のものまである。身は半球形で、底部は厚手につくられ、平底となっている。口径 12 cm、杯深 3.5 cm、器高 4.3 cm のものと、口径 10.5 cm、杯深 3.9 cm、器高 4.4 cm のものの 2 個体である。

第2類（第76図の21、28、30、31）

蓋1個体と身3個体が出土した。蓋は唯一の石室内出土であり、円盤状の鉢を有することは第1類と規を一にするが、口縁内面に縁受けがなく、口縁端を下方へ折り上げている。口径16.3cm、高さ3.9cmである。3個体の坏身はともに角張った高台を底面いっぱいに付け、口辺は単純に外反するもので、口径14.7～15.2cm、坏の深さ3.4～3.7cmである。

なお蓋の鉢部の小片16も形態から、この類と思われる。

土師器（第77図の9） 高坏形の断片が出土した。口径約12cm、坏深約5.5cmの半球形塊形の坏に高さ約3cmの丈の低い脚台を付したものである。

7. 小 結

当古墳出土の須恵器は蓋坏の第2類が明らかに第6型式の特徴を具备しているが（註1）、他は器形や文様の少なくなっていること、縁受けのある蓋の出土、高坏の脚の透かしのないことなどから第5型式に比定される（註2）。

しかし長頸瓶や短頸壺の一部に列点斜線列や円盤状浮文がわずかにみられたり、小形高坏の口辺に大きな段のあるものなど第4型式に接近する要素がうかがわれた。

また蓋坏第1類の身の口径が10cm内外、最大12cmと漸次縮少化をたどる第5型式の坏身から見ると、まだ比較的人形であることなどから、第4型式の残影をいまだとどめている第5型式の古い時期と推定される。なお、当墳出土の須恵器の口縁内面に指頭でこすった如き浅い凹線が應々見られるのも特徴であり、同一の陶工集団の手になったものであるかも知れない。したがって第12号墳の築造は当地方で第5型式の須恵器の用いられたはじめた時期……それは三河地方から類推すれば7世紀代の前半——と思われる。

また石室の寸法に35cm単位の高麗尺の用いられた形跡がうかがわれる、すなわち奥壁幅70cmは2尺、奥壁から羨門まで560cmは16尺ということになる。このことは大化改新前後か、あるいはそれ以前にすでにこの地方に度量衡に示されるような統一的支配が及んでいたことを示している。

そして第6型式の須恵器の出土でわかるように最初の埋葬以降、追葬がおこなわれてきたことが明らかである。その最後の時期が第6型式の時期である。

羨門に至るまでの溝状道構は明らかに外部から古墳入口に至る為のもので、本来は直線状に造らるべきものが既築の古墳々丘の制約からこれを回避し、曲路をとったものと推測するならば、当12号墳は11号及び13号墳などよりは新しい時期のものと考えることもできる。

また、当時の集落から古墳に至る墓道を想定し、枝道から分岐した墓道に達なる個々の古墳群をひとつの単位群とみるならば（註3）、当12号墳は、11、13、14号墳と同様羨門を南に開口しながら、参道を南に向けず——すなわち北進して古墳に至る道ではなく、北方ないし西方か

らくそれはブルドーザーで破壊されて後門より6m先までしか迫れない〉迂回して参道がつけられている事実から、あるいは、第11、13、14号墳などと近接する位置にありながら異なる単位群に帰属する古墳であったのかも知れない。

そして、この前溝には多量の須恵器が献供されていた事実から、石室に至るための参道的役割のみでなく、祭事の場としても重要な意義を持つものであったと思われる。

また献供された須恵器の器形も蓋環（50.9%）、平瓶（20%）、高环（14.5%）が多く、祭事の際献げられた品物の内容をある程度予想させるものがある。

また破壊されているとはいえ、奥壁から2m前方までの石室の主要部分が残っていたのに鉄器の出土が皆無であり、玉類と須恵器のみの副葬という事実から、被葬者はあるいは女性かと推測する可能性もないわけではない。

（森）

註1 久永春男・田中稔「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』）1963
守山市教育委員会

久永春男・齊藤嘉彦「三河国における古墳出土須恵器の編年について」（『岩津古墳群』）1964
岡崎市教育委員会

註2 註1と同じ

註3 水野正好「群集墳の構造と性格」（『古墳と国家の成立』古代史発掘6）昭和50年 講談社

第13章 押越第13号墳

1. 位 置

第13号墳は、丘陵の南西端にあって、北西へ4mの地点に第11号墳が、北へ5mの地点には第12号墳が、北東側は14号墳の墳裾と隣りあっている。標高は57mである。

2. 調査の経過

6月3日から調査を開始した。まず草を刈り、この草を片付ける。墳丘はほとんど痛んでいない。ボーリング・ステッキで石を探り、石室の中心部をつかみ、ここから掘りさげた。1mほど掘りさげると、天井石に使われたと思われる大きな石がみつかった。この石を追っていくと、ボッカリ穴があき、下は空洞になっていた。大きな石はチェーンブロックを使って搬出した。石室床面の清掃にとりかかると、高坏、平瓶、聰、台付長頸甕、直刀、鐵鍔などが相ついで出土した。石室の図面を作成する頃は梅雨で、石室がいつ崩壊するかわからないので、石室の入口付近から作図を行なった。降雨に備えてテントを張ったけれど、テントが小さいので雨が降りこみ、石室内が水びたしになることが数回あったが、6月末までに調査を完了した。

3. 墳 丘（第78図）

第13号墳の墳丘は、盃掘を受けているものの、比較的よく旧状を留めている。すなわち、±0、-25、-50cmの各等高線は、両側が彎曲しているが、これは天井石が落下したことによるものである。この部分を除くと、-25cm～-150cmの等高線は、北西から南東にかけてほぼ等間隔で円を描いている。北東側は第14号墳と接しており、墳丘の裾を一部共有した形になっている。

石室の位置と墳丘を検討すると、墳丘の直径は12mと推定できる。墳丘の高さは、盃掘や石室内に流れこんだ分を考えると、現在より20～30cmは高かったものと推定でき、1.7m～1.8mはあったと思われる。

4. 石 室（第79図）

石室は、奥壁部分の遺存状態は比較的良好であったけれど、中央から後方にかけては半分近くの石が抜きとられていた。

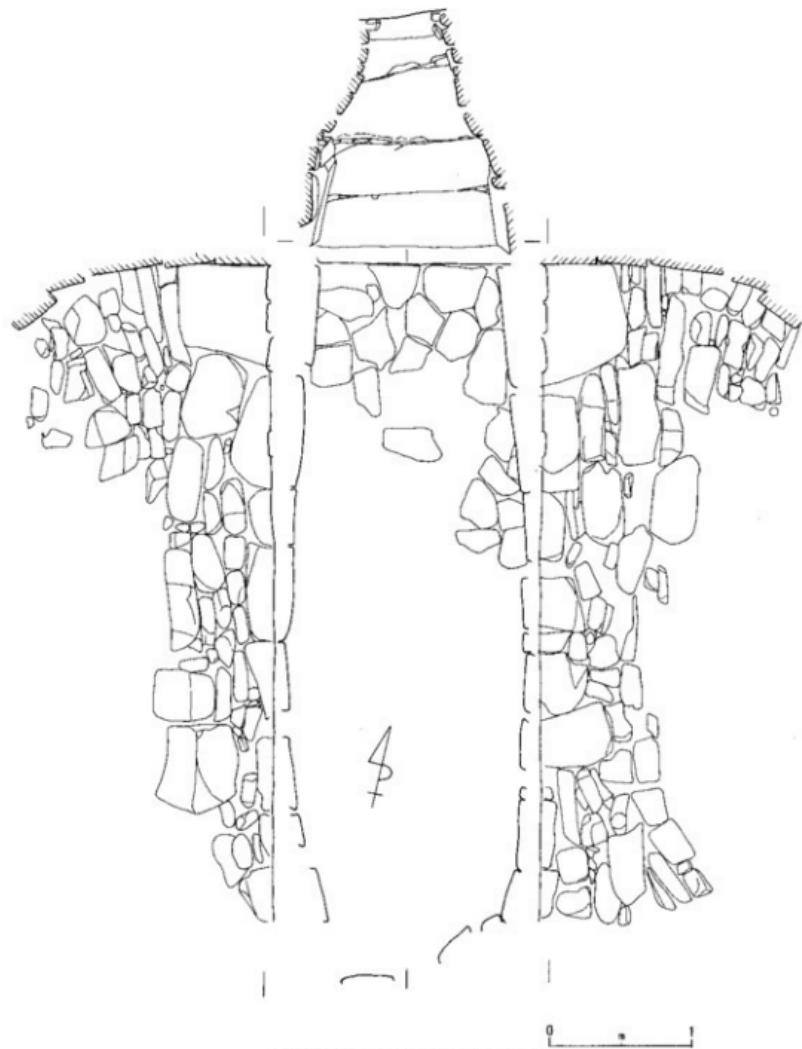
石室の全長は、石室前端にある間仕切石まで5.0m、幅は奥壁で1.25m、中央で1.55m、間仕切石よりやゝ後方で1.0m、間仕切石のある地点では急速に狭くなり、0.7mになり、中央は胴張りしている。

石室の構築法をみると、奥壁は最下段に2個の台形に近い石を据え、その上に4枚の横に長い



第78図 押越第13号填墳丘実測図

石を順次積みあげているが、その幅は上方へ向って次第に狭くなり、天井部では 0.4 m になっており、側壁の持ち送りに合わせている状態がよくわかる。左右両側壁の、奥壁に接する最下段の石は、大形で台形の石を据えて奥壁を固定している。これ以外の下段の石は、中形の石で、地中



第79図 押越第13号填石室実測図

にしっかり埋めこみ、順次中・小の礫を積みあげている。

敷石は、偏平な大楽地石を用いている。ただし奥壁付近に残っているだけである。側壁の石とともに抜きとられたものと思われる。

5. 遺物の出土状態

本古墳の遺物は、すべて石室内で見出された。遺物は、石室左側壁の入口から1番めと2番めの根石付近に集中していた。ここでは高杯、脚付有蓋長頸壺、砾、鐵刀などがあり、これより50cmほど奥壁寄りにもう1個の脚付有蓋長頸壺や平瓶などの破片が出土した。鐵鎌は、奥壁から2mの右側壁寄りで出土した。

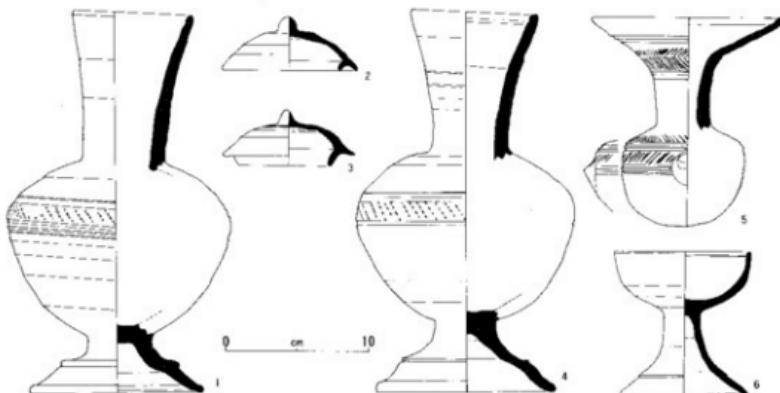
6. 遺物（図版第18・26・31）

第13号墳から出土した遺物は、脚付有蓋長頸壺と蓋各2、砾1、高杯5、鐵刀1である。

脚付有蓋長頸壺（第80図の1・4） 2個出土した。各部の方法は下表のとおりである。

插図番号	脚付有蓋長頸壺計測値				単位 cm
	口 径	高 さ	胸 部 径	脚 端 径	
80 - 1	8.1	27.5	15.6	12.2	
80 - 4	9.5	27.3	15.2	12.6	

両者ともにゆるやかに外反する長い口頸部をつけ、胸部は中ほどよりやゝ上に最大径をもつ形で、脚は途中で屈折させて、屈折するところに突唇をついている。胸部には上下に沈線をひき、

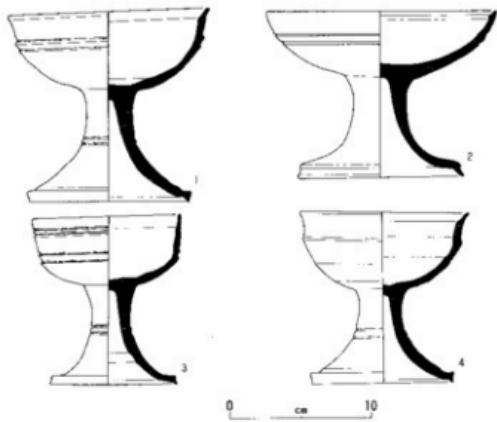


第80図 押越第13号墳出土須恵器実測図

沈線と沈線の間に刺突文を加えている。二つとも灰白色に焼き上り、ていねいなつくりである。各部位の寸法も近似しており、同一工人集団の手になるものと思われる。

蓋(第80図の2・3)

2個ある。半球形の天井部に乳頭状の鉢がつく形であるが、2の口縁は叉状をなし、3の口縁は、天井部の端部より下方へ出ていて、内傾している。脚付長頸壺の蓋と考えられる。



第81図 第13号墳出土須恵器実測図

碗(第80図の5) 口径13.4cm、高さ14.0cm、口縁は頭部上方から急速に外反する。頭部の中ほどに横線をひき、その上方にヘラ状器具を用いた刻線を羽状につけて飾る。肩部は強く張り、ここに2条の横線をひき、肩部の横線をはさんで刻線を羽状につける。注口は斜め上方に向かってつけている。焼成は良好である。

高壺(第80図の6、第81図の1~4) 6は口径9.5cm、高さ10.4cm、脚端径9.8cm、半球形の壺で、口縁内面に沈線がある。脚はだらかに外方へ開き、端部がやや内湾する。脚の下方には段をつけて飾る。灰色を呈し、焼成は良好である。

1は、やや深い壺をもつ。壺の中ほどに突線をめぐらせ、口唇は面取りしてある。脚の中央に、浅い2条の沈線をひき、脚端は折り返してある。口径14.0cm、高さ13.5cmをはかる。

2は、皿状の、口径の大きい壺に丈の低い脚がつく形で、壺の中ほどに2条の沈線がひいてある。

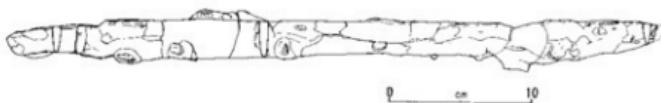
3の壺は、底部から屈折してほぼ垂直に立ち上り、屈折する部分と口縁近くに2条1組の沈線がある。脚にも中ほどに沈線があり、脚端は面をつくる。口径10.4cm、高さ12.0cmである。

4はやや小形の壺で、壺の中ほどで境をつけ、口縁は外反させ、口唇内側は面切りしている。脚には2条の浅い沈線をひいて飾り、脚端は折り返している。口径12.0cm、高さ12.3cm。

鉄刀(第82図) 現存長45.4cm、鋒が著しい。切先を欠くがほぼ完形である。身の長さ38.5cm、身幅は中央で2.5cm、峰幅0.5cm、茎の長さ7.0cmである。闇は上端を辛うじて確認できる。

鉄鎌(第83図) 1は片丸造棘籠被鑿箭式かと推定でき、2と4は片刃箭式と考えられる。残

りは籠破の残欠である。



第82図 押越第13号墳出土鉄刀実測図

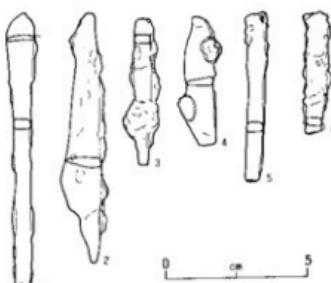
7. 小 結

第13号墳の石室は、盃掘にあつてゐるもの、遺存状態は良好であったといえる。とくに奥壁部は、持ち送りに合わせて、奥壁の幅を順次狭くしていくという構築法がよく遺存していた。つぎに、石室の各部の寸法は、石室の長さ4.75mをはじめとして、25cm単位で統一されており、宋尺を用いていることがわかる。

出土した須恵器のうち、2個の脚付有蓋長頸壙は、須恵器編年上第3型式に比定でき、石室の構築時期をここにおくことができる。また、2個の脚付有蓋長頸壙の各部の寸法と形状は酷似しており、同一工人集団によって作成されたことをうかがわせる。

ともあれ、本古墳の被葬者は、中尾根支群の中では平均的な地位にあるように思われる。被葬者は、農民層のうち富裕な階層に属するであろう。

(七原)



第83図 押越第13号墳出土鉄鏡実測図

第14章 押越第14号墳

1. 位 置

第14号墳は、南西側で第13号墳と墳裾を共有し、北西へ約5mの地点に第12号墳がある。標高は61mである。

2. 調査の経過

5月25日、伐採を行って行く過程で新たに確認されたもので、第14号墳と命名し、早速調査にとりかかった。墳丘の上には大きな山梶の木があり、これを伐採し、広く張った根をやっとのことで取り除いてから下へ掘りさげた。石室内には土砂と礫が落ちこんでおり、これを取り除いていくと、石の間から、提瓶や高环が1箇所にまとまって出土した。石室は、奥壁へ向って、両側が狭くなっている、舟底形の変形した石室にみえたけれど、少しずつ掘りすすめていくと、普通の石室であることがわかった。工事日程の都合もあって、急いで石室の清掃と測図を行なって作業を終了した。

3. 墳 丘（第70図）

第14号墳の墳丘は、東にある第15号墳の墳丘より一段低い位置にあり、第15号墳との境は明瞭でない。

墳丘は、標高59、60、61mの3本を数えることができた。標高61mの等高線は墳丘頂部をめぐる円であるが、不整形で、盜掘による改変を受けている。標高59mと60mの等高線は墳丘の北から南をめぐり、東南方向まではほぼ円形を描いているが、南側では歪みがみられる。

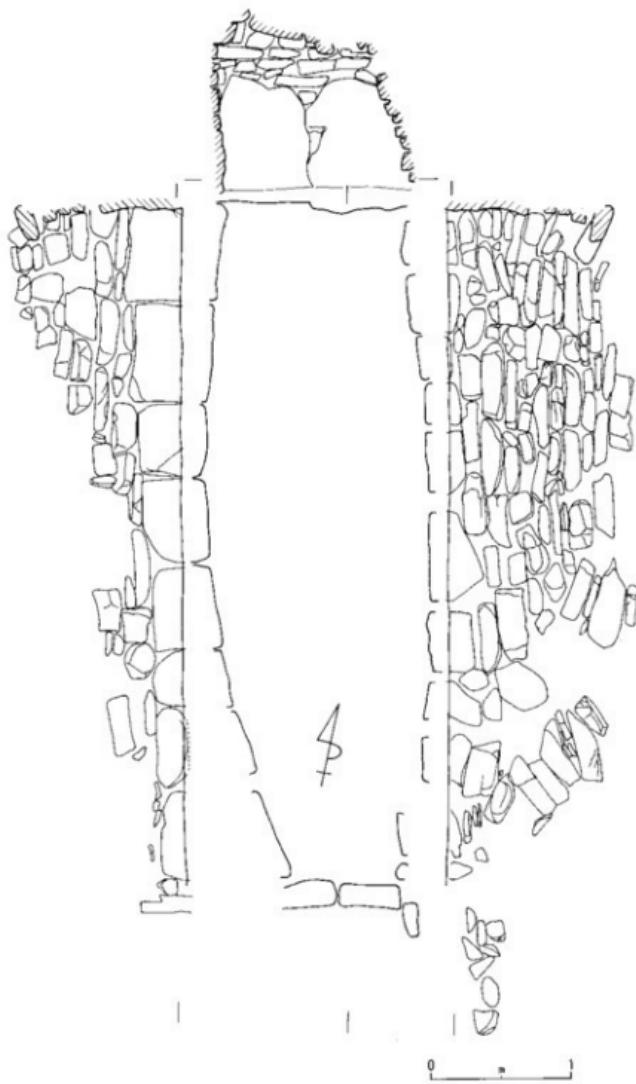
墳丘の大きさは、石室の大きさや、石室の位置から、直径12mはあったものと考えられる。墳丘の高さは、現存する石室の高さと、これを覆うだけの土量を考慮すると、1.7m前後はあったであろう。これは、現存する墳丘の高さより20～30cm前後は高かったものと推定される。

4. 石 室（第84図）

本古墳の石室も盜掘の際に壊されていて、とくに左側壁は半分以上の石が抜きとられており、右側壁の前端部も若干の石が抜きとられている。

石室の長さは、石室の前端にある間仕切石まで4.75m、幅は奥壁で1.25m、中央部で1.50m、前端で0.75mをはかり、中央部が脛張りしている。

奥壁は2枚の大形の石を並べ、その上方には中形、小形の石を横位置に積んでいる。側壁の積み方をみると、左側壁の最下段には、やゝ大形の礫を掘え、その上に中形や小形の石の長辺の側



第84図 押越第14号填石室実測図

面を壁面として用いている。これに対して右側壁は全体に中形や小形の石を使っている点が異なる。

石室の前端には、偏平な石を垂直に立てていて、間仕切石としており、羨道はとくに付設していない。敷石は全く存しなかった。

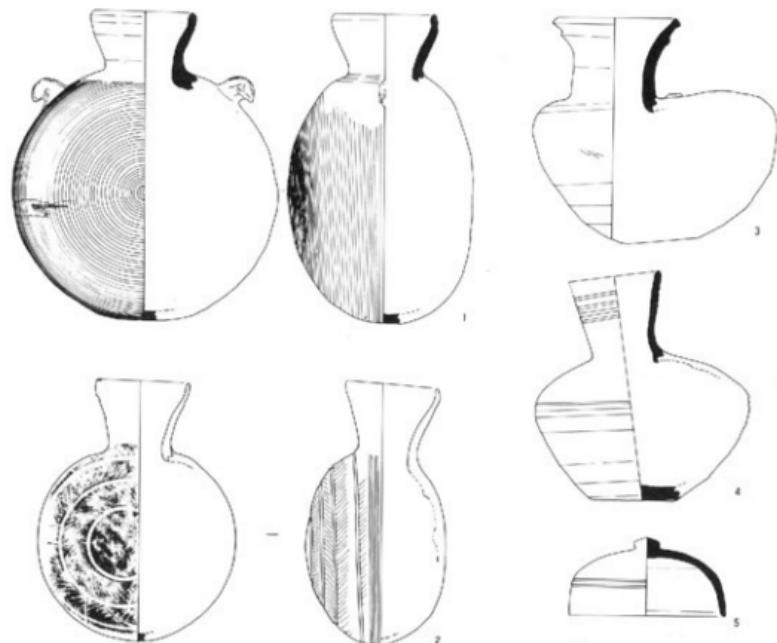
5. 遺物の出土状態

本古墳で出土した遺物のうち、提瓶4個は、奥壁から約1m、左側壁寄りの地点の床面上でまとめて出土した。この他の遺物もこの提瓶の周囲1m前後で出土した。蓋は奥壁から3m、石室中軸線よりやゝ右寄りで出土した。

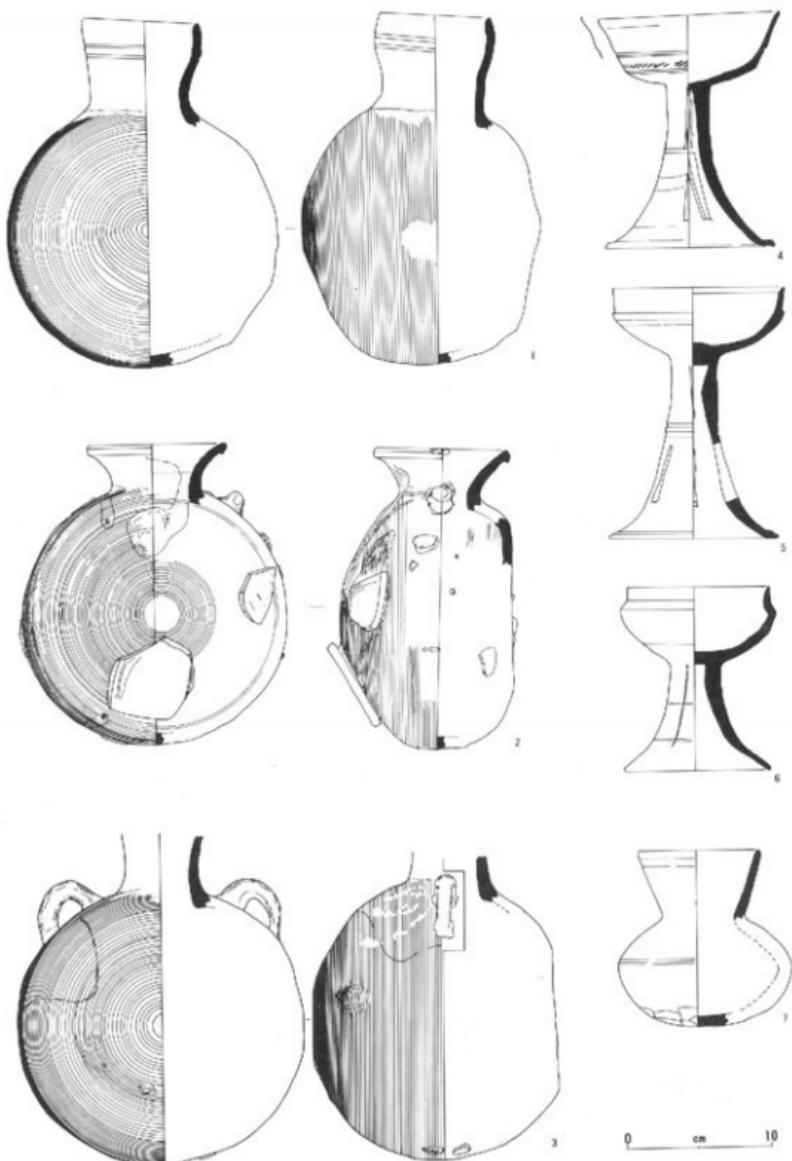
6. 遺物（図版第27～29）

本古墳から出土した遺物は、提瓶4、平瓶2、高环2、脚付小形偏平壺1、小形壺1、蓋1である。

高环（第86図の4・5） 4は口径12.7cm、高さ16.7cm、脚端径11.7cm。环は下方で軽



第85図 押越第14号墳出土須恵器実測図



第86図 押越第14号墳出土須恵器実測図

く屈折して斜め上方に開く。坏の屈折する部分とその上方に沈線をめぐらせ、沈線と沈線の間には、横状器具による刺突文がつけられている。脚は長く、中央に沈線をめぐらせ、沈線をはさんで上下に透しがある。透しは2個1対になっており、上段の透しは細い。脚端には段がつき、端部は折りまげている。黝黑色を呈し、焼成は良好である。

5は口径11.9cm、高さ18cm、脚端の径11.7cm。坏部には蓋受け状に段をつけ、立ち上りはほぼ垂直である。口唇は尖り氣味で、内面に浅い段がつく。脚は長く、中央に2条の浅い沈線をめぐらせ、沈線をはさんで上下に透しがある。ただし、上段の透しは刻線状であるが、脚の内側まで貫通している。下段の透しは長方形で、3個あいており、脚端には段がつく。黝黑色を呈し、胎土、焼成とともに良好である。

脚付小形偏平壺（第86図の6） 高坏の脚の上に、偏平壺をのせた形で、壺の口径9.9cm、高さ13.2cm、脚端の径10cmである。脚には形式的に2条の横線をつけ、透しは3条の刻線で表現している。黝黑色を呈し、焼成は堅緻である。

小形壺（第86図の7） 口径8.2cm、高さ12.5cm、胴部最大径11.9cmをはかる。偏球形の胴部に外開きの口頭部をつける。胴部の中央に浅い横線をめぐらせてはいるほかは無文である。胴部の器壁は厚く、底部は静止ヘラケズリで仕上げてある。灰白色を呈し、焼成は良好である。

提瓶（第86図の1～3、第85図の1・2） 5個出土している。どれも少しづつ形態に変化があるので5種に分けることができる。おのおのの計測値は下表のとおりである。

A類 第86図の3 胴部は片側（表面）は丸く、反対側（裏面）は平らにつくられており、胴部上方には環耳がついている。表面には同心円のカキメが施されている。黝黑色を呈し、焼成は良好である。気泡がところどころにある。

B類 第86図の2で、A類と同形であるが、やゝ小形で、鉤耳がついている。

C類 第86図の1で、口縁が内窪氣味であるが直口に近い。胴部はずんぐりし、表裏の差があり明瞭でない。細いカキメを表裏向面につけている。

D類 第85図の1で、胴部の表裏の差は目立たなくなる。胴上部に鉤耳がつく。

E類 第85図の2で、D類と同じように表裏の差は目立たなくなるが、表面に幅広い沈線で同

第14号墳出土提瓶計測値

単位 cm

插図番号	口 径	高 さ	胴 部 径		備 考
			左	右	
86-1	8.0	25.0	19.0	16.6	他の遺物融着
86-2	9.8	21.4	18.6	12.2	
86-3	-	26(推定)	20.1	17.0	口縁欠損
85-1	7.0	22.1	18.7	13.0	
85-2	6.5	18.6	14.0	9.9	



第87図 押越
第14号墳出土
鉄刀実測図

心円を描き、沈線で区画された中心部には同心円のカキメを施し、これより外側では刺突文を羽状に施している。

蓋（第85図の5） 半球形を呈し、天井部と口縁の境には2条の沈線をひいている。頂部に擬宝珠形の紐がつく。ほぼ完形。焼成も良好である。

平瓶（第85図の3・4） 3は、偏球形の胴部に太い口頭部をつけた形で、口縁は段をつけて飾る。高さ16.6cm、胴部最大径17.0cm。口頭部から胴部上半には自然釉がよくかかっている。胴部の上方には2個の円形浮文がつけてある。室内で高温にさらされたようで、口頭部が陥没しかけている。底部はヘラケズリ調整がなされている。

4の胴部は長頭形と同形で、口頭部も胴部中央についているが、口頭部が傾斜しているので平瓶を意図していることがわかる。胴部上方と口縁部に、簡略化した沈線がめぐらされている。焼成は良好である。

鉄刀（第87図） 現存長84cm、身幅は2.9～3.0cm、峯幅0.5cm、闇は辛うじて確認できる。茎は5.6cmが残っており、幅1.9cmである。腐蝕と破損が著しい。

鉄鎌（第88図） 蔽被の残欠が多い。鎌身は1個だけ確認できた。棘笠被鑿前式と思われる。

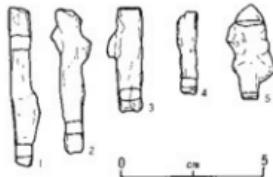
7. 小結

第14号墳の石室は4.75mで、木古墳群の中では大きい方に属する。石室の各部の計測値をみると、石室の長さ4.75m、幅が奥壁で1.25m、中央で1.5m、前端で0.75mは、25cmの倍数であり、宋尺が用いられている。

出土した須恵器をみると、とくに提瓶は5個あって、この器種の変化の様がよくうかがえる。これらの提瓶は、編年上第2型式の伝統をひくものから第4型式に比定できるものであり、6世紀中葉から7世紀初頭にかけて埋葬が行なわれたものであろう。

被葬者は複数であるが、庶民層の中でも富貴な階層であったものと考えられる。

（七原）



第88図 押越第14号
墳出土鐵鎌実測図

第15章 押越第16号墳

1. 位 置

押越古墳群の分布する三つの尾根のうち、中尾根の最も東部、その基部にあり、丘陵の先端より約200m東方の地点である。

2. 調査の経過

第16号墳は調査前すでに土取り作業によりその大半が破壊され、墳丘の後部ほどと、石室の奥壁付近が残存しているにすぎなかった。墳丘の実測完了後、石室内の埋土を発掘、埋土中より須恵器の小片が出土した。

また、床面からは管玉、馬具類、鉄鏃、駒などが出上した。石室の発掘終了後石室を実測し調査を完了した。

3. 墳 丘（第70図）

土取り工事のさい、墳丘の前部ほどが崩落し原形をとどめていない。残存している後約5%の墳丘は北から見て、高さ1.25m～1.5mほど、東西の径約12mを示しているが、築造当初は径15mを下らず、高さ2m近くはあったものと推定される。封土は疊まじりの黄褐色土である。

4. 石 室（第89図）

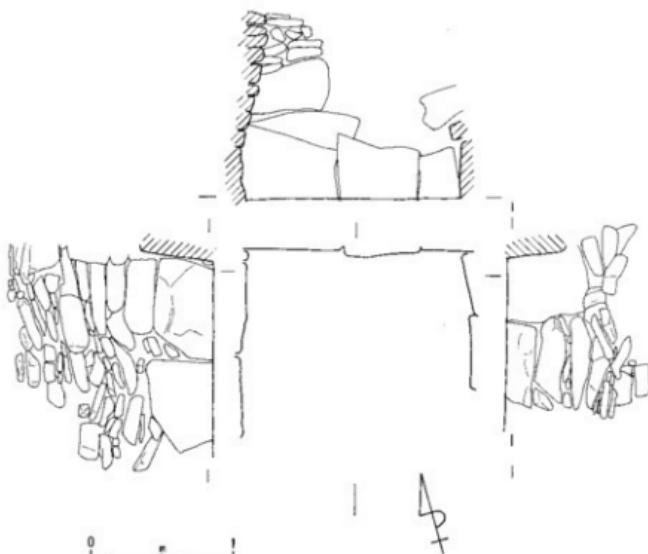
尾根の南斜面で中軸線を南に開く横穴式石室で、奥壁付近は地山を掘り下げて築かれているが、東側壁が奥壁より1.5mまでしか残されておらず、より前方はすでに土取り工事のため破壊された石材が急崖下に落下していた。

奥壁は床面で幅1.5mであるが、それぞれ幅0.3m、0.55m、0.65mの3枚の石を並置しており、さらにその上にいくつかの石を置いて奥壁をかたちづくったものの如くである。しかし大部分はこわされて基盤の石しか残っていないが、西側の残存部からみると、長径0.6～0.7mの大形の石をさらに2段積み上げ、その上は側壁に使用されているのと同様な小形の石を積んでいるものの如くである。

東側壁は残されている部分で見るかぎり、約0.6mの高さまでは奥壁に使用されたとはほぼ同じ大きさの比較的大きな3つの石で築き、さらにその上は小さな石をおぎなって積み上げているのは奥壁の手法と似通っている。

西側壁は東側壁より保存が良好で、奥壁付近では約1.4mの高さまで石組みが残っていた。

そして、この古墳最大級の径0.7m前後の石を並べて側壁の基礎とし、奥壁に接する部分ではそ



第89図 押越第16号墳石室実測図

の上に長径 0.5 m 前後の石を整然と積み上げているがその他の部分は小形の石を雜然と積みあげて いる。

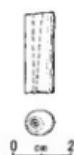
この古墳の石室築造の特徴は、石組みの基盤ないし下部に大形の石を使い、しっかりと組まれているが、それより上部は小形の石材で乱れた積み方がされていることであり、両者の相違は非常に対照的である。

5. 遺 物 (図版第 26・35)

管玉 (第90図) 濃緑色の碧玉製で、長さ 2.9 cm、長径 1.0 cm、短径 0.9 cm、径約 3 mm の貫通孔が出口では径 1 mm と細くなっている。中央に開口せず、やや偏している。重量約 6 g。

辻金具残欠 (第92図 2~5)

本体の一部分と脚の残片が 3 個出土したがいずれも断片である。本体は直径 10 cm 前後で平面形円形の中空の半球体と推定されるものの断片である。3 個の脚は鉄地金脚板で、いずれも 3 個の紙があるが、幅がそれぞれ 2.3 cm、2.5 cm、2.7 cm と同一規格でないことや、脚端の形状も円形のものと、尖っているものがあることなどから、これらは同一個体ではなかったと思われる。

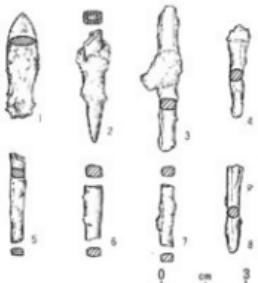


第90図 押越第16号

墳出土管玉実測図

轡（第92図の1） 長さ7cmほどの残片で、端は径3cmの環になっている。おそらく両先、あるいは廻金の部分か、または引手の先端の輪の部分と思われる。

鉄鎌（第91図） 完形のものはないが、細根両丸造りの柳葉式で、茎は断面方形を呈し下端へ行くにしたがい細く尖るものである。



第91図 押越第16号墳出土鐵鎌実測図

臘（第93図）

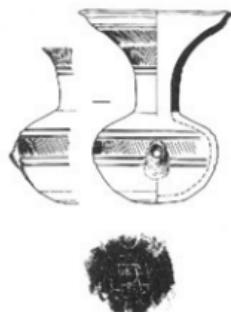
奥壁に近い床面から出土した完形品である。扁球形の器体の上に細く長い頭部が続き、口縁は大きく外に開く形態である。口径11.3cm頭部の最も狭まった部分で約3cm。胴部最大径は8.9cmである器高は13.7cmであるが、口頭部の長さが7.2cmを占めている。

胴部の中央、最大径のあたりに注口が斜め上を向いて穿たれており、その下半部は粘土が付加され約8mmほど突出している。

文様は、口縁下1cmほどのところから、頭部にかけての幅約3cmほどのところに羽状に斜線列があり、文様帶の上・下は浅い2本の沈線で削している。また胴部中央から肩部にかけての幅約1.5cmに斜線列帯がめぐり、上下をそれぞれ2本の沈線で区切っている。なお、底に籠によったと思われる、たて、横4本ずつの短線が不規則に格子状に交差して描かれ



第92図 押越第16号墳出土馬具実測図



第93図 押越第16号
墳出土須恵器実測図

ている。

6. 小 結

第16号墳は土木工事による破壊が著しく、墳丘の後部 $\frac{1}{3}$ ほどと石室も奥壁付近がわずかに残っているのみであった。推定した墳丘の規模も中尾根では最も大きいものであり、奥壁の幅1.5mも中尾根の古墳群中では最大である。出土した須恵器は、尾三地方で第一型式と編年されているもの（註1）と同一の特徴を有していた。

また、奥壁幅1.5mは単独の石ではなく、3枚の石を組み合わせて規格寸法に合わせているが如くであり、1.5mに固執していると察せられる。当16号墳は約25cmを1尺とする宋尺が適用され、奥壁がその6尺で築かれた様に思われる（註2）。

また、中尾根に存在する古墳のなかで、唯一の馬具の副葬が確認されたことから乗馬を有し、他の庶民層の墳墓から一段と抜き出た小豪族のものであったと予想される。（森）

註1 久永春男・田中稔「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』）1963
守山市教育委員会

久永春男・齊藤嘉彦「三河国における古墳出土須恵器の編年について」（『岩津古墳群』）1964
岡崎市教育委員会

註2 久永春男・齊藤嘉彦「尾張・三河地方における後期古墳の横穴式石室に使用された尺度について」（『天神山古墳群』）1967 岡崎市教育委員会

第16章 押越第20号墳

1. 位 置

第20号墳は、押越古墳群が分布する丘陵のうち、もっとも南の支丘の尾根に築かれている。標高は78mである。

2. 調査の経過

第20号墳は、墳丘がほとんどないけれど林道のあるところに石があるので、古墳であるかどうか確認することになった。5月10日、かなり雨が降っているが、調査主任である久永春男先生といっしょに現地へ出かけ、みていただいたところ、疑はしい古墳であるということで掘りさげてみた。

土を取り除いて行くと石室の形が現われ、古墳であることがはっきりした。そこで早速付近の下草刈りをして地形測量を行ない、ひきつづいて埋土を取り除いて石室を消掃した。石室は浅く、夕刻までに石室の大部分を掘りあげた。石室の西側沿いに鉄刀があり、その近くで勾玉が1個出土し、石室の南西隅では須恵器の脚付長頸壺とその蓋が発見された。5月11日、雨が降っているが、上に覆いをかけ作業を行なった。石室中央部の埋土をさらに取り除くと、敷石が残っていることがわかった。朝からの雨で身体が濡れたままであるため、早めに作業を切り上げた。5月12日、消掃を完了し、写真撮影を行ない、石室の図面を作成し、作業を終了した。 (川合)

3. 墳 丘 (第94図)

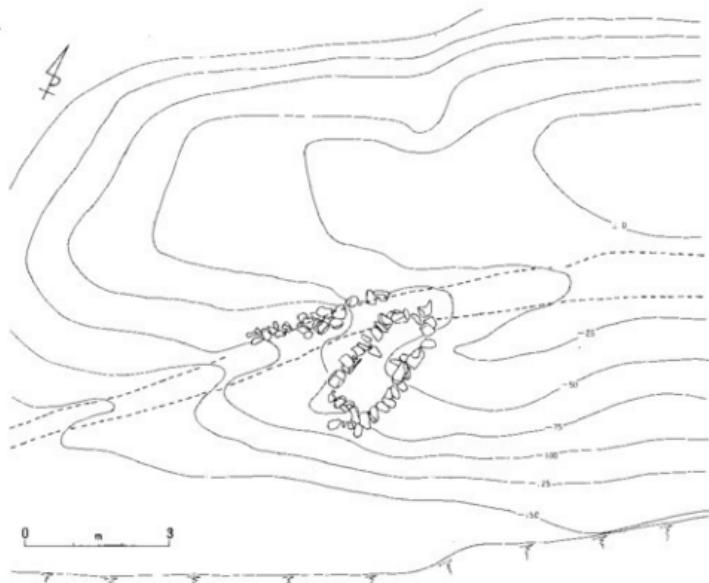
第20号墳の墳丘は、丘陵尾根から分岐した小支丘上にあって、石室の一部をかすめて林道が通るという状態であった。このため封土はほとんど認められなかった。石室を中心に、周辺の地形を50cm間隔で測量を実施したけれど、墳丘と支丘の区別は明瞭でなかった。しかし、墳丘が全くなかったとは考えられない。少なくとも石室の上部を覆うだけの封土はあったものと思われる。その直径は、おそらく4m前後、高さも1m前後であったと推測される。

4. 石 室 (第95図)

現存する石室は全長2.5m、奥壁の幅は0.65～0.70m、中央で0.95m、入口で0.8mで、石室の中央で胸張りしている。

石室の石組は、2～3段積みあげただけであり、奥壁と入口では、1段積みあげているにすぎない。

敷石は奥壁から石室中央にかけて、偏平な角礫を敷いていた。また、天井石に相当するような



第94図 押越第20号墳埴丘実測図

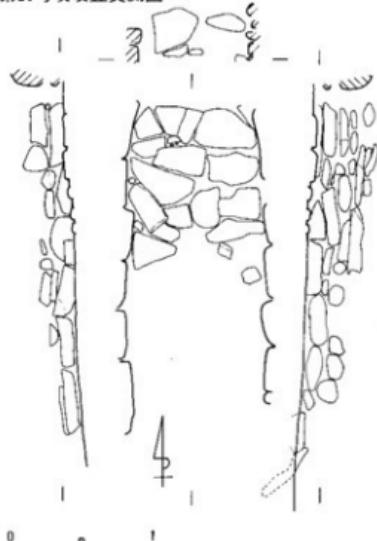
石は、周辺からも見出されていない。

5. 遺物 (図版第26・31)

本古墳の石室から台付長頭塙と蓋、鉄刀、勾玉各1が出土した。

台付長頭塙は石室の南西端で、口縁を奥壁の方へ向けて、横転して出土した。その東側で台付長頭塙の蓋が発見された。鉄刀は、西侧壁に接して、鋒を奥壁に向けて横たえられていた。鉄刀は鋒だけが敷石の面に入った状態で出土しており、その敷石の上で勾玉が見出された。

台付長頭塙（第96図の1） 口径9.5cm、器高22.1cm、台部径9.0cm、最大腹径16cmをはかる。偏球形の胴部に長いラ

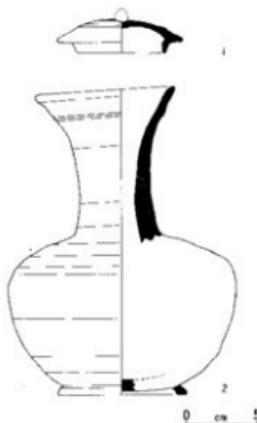


第95図 押越第20号墳石室実測図

ッパ状の口頭部をつける。底部には、断面が台形に近い台をついている。台と底部の接合はていねいでなく、一部に隙間がある。胴上部には自然釉がかかっていたが、現在はほとんど剥落している。焼成は良好である。

蓋（第96図の2） 銚が欠損している。蓋の径8.9 cm、身受の径6.0 cm、身受はほぼ垂直である。焼けひずみがある。台付長頭増の蓋と考えられる。

鉄刀（第97図） 長さ30cmをはかる小刀である。鍔が厚く付着しているため、細部の形状は不明である。両側で、茎は屈折している。目釘穴なども明瞭でない。



第96図 押越20号墳出土須恵器実測図



第97図 押越第20号墳出土鉄刀実測図

6. 小 結

第20号墳は、長さ2.5mという小規模な石室をもっている。墳丘も低く、石室をわずかに覆う程度のものであった。

石室から出土した須恵器の台付長頭増は、その台は退化し、碗における高台と同じ形態をとつてあり、須恵器第5型式に属するものである。

本古墳のこうした状況をみると、さかんに石室を構築する時期からやゝ遅れているが、なお古墳を築くことが続いている頃で、6世紀末から7世紀初頭にその実年代が求められよう。

被葬者は、台付長頭増の他に鉄刀と勾玉を所持していた。玉類は1点だけでありまことに少ない。空掘によって持ち去られたものがあるのかも知れないが、全く所持していないのではない。庶民層のうちでは裕福な階層の一人であったろう。

(七 原)

第 17 章 結 語

このたび調査を行なった押越古墳群の存する静岡県磐田郡豊岡村には、33 のグループ、総数 191 基の古墳がある（註 1）。これらの古墳の大部分は円墳で、後期古墳に属するようである。押越古墳群もそうした趨勢の中にあって、いざれも円墳で、古墳時代後期に營まれたものである。

ここでは、今回調査した 15 基の古墳について、その特色や問題点についてふれてみたい。

(1) **墳丘** 本古墳群は、西方へ突き出る二つの支丘の尾根あるいは支丘斜面に築かれている。北の支丘上には 9 基の古墳が築かれていて、最も高い位置にある第 4 号墳は標高 61 m にあり、最も低い位置にある第 5 号墳は標高 49 m にある。古墳群の両端に位置する両者の直線距離約 40 m であるが、比較差は 12 m、約 17 度の傾斜面になる。こうした地勢上、墳丘をゆったりとすることにはもともと無理がある。こうした地形上の制約を受けて、それぞれの古墳は、丘陵を、予定した石室の大きさに応じて約 1 m 挖り下げて石室のはば半分が地表下に納まるようにし、地上に出た石室の上部と天井部に土を盛って墳丘としている。個々の墳丘は最少限の盛土になっている。

(2) **石室の構築** 石室は、前項で述べたように、予め掘りさげられたいわゆる掘り方に従って構築している。この掘り方も、必要最少限に設定しており、石室の平面プランより 50 cm 前後広いだけで、石室の石と掘り方の空間もできるだけ少なくなるようにしている。

石室に用いた石のうち、奥壁に用いた石は、石室内から見る限り、長さや幅や大きさにおいてきわめてしっかりした石を用いているようにみえた。ところが、調査終了後これらの石をとりはずしてみると、例えは第 5 号墳あるいは第 6 号墳では、厚さわずか 15 cm 前後の偏平な石であって、しかも掘り方との間隔はほとんどなく、石の背後は直ちに掘り方という状態であった。

こうした石室の構築法をみると、本古墳群の石室は、できるだけ少ない労力で築造しようとした意図が読みとれる。石室に用いた石も重量の少ないものが選ばれている。

石室の構築にあたって、二種類の石材の用い方があることがわかる。つまり、第 1 号墳から第 7 号墳までは、大形の角礫や河原石などを用いているが、第 8 号墳と第 9 号墳は細長い河原石を牛蒡積みにして構築している。前者の石材のうち角礫は、本古墳群から、直線距離にして約 10 km の地点にある大桑地で採集できる石であるという。これに対して、第 8 号墳と第 9 号墳に用いた石や、他の古墳の中で一部使われている礫は、古墳群の西を流れる天竜川の河原石である。

このような石材の用い方の違いがなによっているのか、いまは詳らかにしないが、約 10 km 離れた大桑地と本古墳群の被葬者との間にどのような関係があったかということとともに興味深い問題である。

石室の構築についてもうひとつ興味深いのは、第 7 号墳の場合である。調査開始時には、天井石もほぼ残っており、遺存状態がもっともよい古墳と考えられ、調査も慎重に行なったのであるが、

石室は異状に狭く、われわれの注意をひいた。この狭い石室が構築しなおしたものであることがわかったのは、石室の移築を開始してからである。第7号墳の石室は、当初片袖式であったものが、構築後なんらかの理由で崩壊したため、作りなおしたのであろう。他の古墳でもそのようなことがあったであろうが、第7号墳のように、補修のあとが明瞭であったのも珍らしい部類に入ろう。

北支群の石室構築についていまひとつ問題になるのは石室長軸の方位と平面形である。個々の石室の数値は別表のとおりである。まず方位であるが、われわれが調査している時点では、石室の方位は殆んど南北に主軸をとっているものと観察されたが、実際には東へ振っており、各古墳の主軸の振幅は、第6号墳と第2号墳では27度に及んでいた。また、石室の平面形も、徳利形あるいは両袖形、片袖形などがあって、それぞれの古墳独自の形態をとっている。石室の寸法もまたそれぞれ異っており、独自性の強いものになっているのが特色である。

押越古墳群石室数値表

古墳名	玄室長 奥壁	玄室軸		羨道幅		石室型式	方 位	備 考
		中央	前端	長さ	幅			
第1号墳	4.0	1.10	1.35	1.00	1.0	—	N-33°-E	
第2号墳	3.5	1.25	1.55	1.25	1.6	0.6	右片袖式	N-37°-E
第3号墳	4.5	1.60	1.90	1.50	2.0	1.0	右片袖?	N-34°-E
第4号墳	4.0	2.5	—	2.25	3.25	0.75	右片袖式	N-35°-E
第5号墳	5.25	0.75	1.05	0.75	—	—	N-15°-E	前・後二室
第6号墳	4.2	1.25	1.50	1.00	2.1	0.8	両袖式	N-10°-E 前・後二室
第7号墳	3.5	1.05	—	1.50	1.35	1.80	0.50	右片袖式 N-30°-E 補修
第8号墳	3.5	1.05	1.35	1.05	1.50	0.75	—	N-28°-E
第9号墳	3.5	1.00	1.40	—	—	—	N-30°-E	調査中に崩壊
第11号墳	3.9	1.05	1.50	—	—	—	N-16°-E	石室前方探上のため壊れる
第12号墳	5.6	0.70	1.25	—	—	—	N-S	石室前方探上のため壊れる
第13号墳	5.0	1.25	1.55	1.0	—	—	N-14°-W	
第14号墳	4.75	1.25	1.50	0.75	—	—	N-12°-W	
第16号墳	—	1.50	—	—	—	—	N-15°-W	石室大半損壊
第20号墳	2.50	0.65	0.95	0.8	—	—	N-S	

(3) 前溝 木古墳群の第1号墳～第9号墳と第12号墳の石室前方には溝が掘られていた。

第4号墳の場合では、羨道部から始まり、前方へ向うに従ってその幅を広げ、羨道の前端から2.4mまで確實に存した。幅1.8m、深さ0.6m、断面V字形である。溝の中には濃黒色土が埋積し、遺物は出土しなかった。第6号墳の溝は羨道の掘り方を延長した形で、南へ5mまで続いている。第6号墳の東側から西側へ向うやゝ幅広い溝へ接続している。この溝の起点を確認する余裕はなかったけれど、第6号墳の東側で確認できた状況から、第3号墳から始っていると推定できる。溝は第6号墳の前溝よりやゝ深く、幅も1.5mになって西方の第5号墳の前方へ向かう。第6号墳の前溝とその前方を通る溝も濃黒色土が埋積しており、第6号墳の前溝からは多数の遺物が出

土した。第5号墳の前溝はわずかに浅いくぼみがつけられている程度であったが、やはり濃黒色土が埋積しており、羨道の前端から約3mの地点には赤く焼けた土と、その上に土師器の高坏があった。また、羨道の前端から約4mの地点には、直径約1.5m、深さ約30cmの不整形なピットがあり、このピットに連なる溝があった。この溝は、第6号墳の南側を通る溝で、第5号墳の前溝の端と連なるものであった。第6号墳の南側で溝の上層から出土した提瓶の破片が、ピットの中から出土したことは、二つの溝が接続していたことを証明している。第8号墳でもやはり羨道から始って南へ向う溝が確認されているが、採土工事のため、調査未完のまま崩壊した。南尾根にある第12号墳では、羨道部から始った前溝は弧を描いて西へ向っている。これは、南に築かれている第11号墳と第13号墳を避けているもので、古墳築造の時間差を示す好例である。溝の中からは多量の土器が出土した。

前溝はいずれも羨道部から始っており、石室を構築するときから企画されているようである。溝が前方へ向うに従って低くなっている点を考えると、石室内の排水を意図したものと考えられるが、また、溝の中には濃黒色土が埋積しているのが通例であった。この濃黒色土の状態は、古窯址の灰原と同じであり、相当量の有機物を燃焼させたことを推定させるし、事実、第6号墳の前溝からは燃えた木の枝が遺存していた。この前溝で火を燃やすという行為は、先に葬られた祖霊への鎮魂のためであろうか。あるいは石室へ至るいわゆる羨道を清浄にするための行為であろうか。前溝を設定した背景を理解するにはまだ資料が少ない。

ともあれ、前溝を有する古墳は、藤枝市瀬戸古墳群（註1）や浜松市半田山古墳群（B群）があり（註2）、隣接する愛知県豊橋市石巻町二本松古墳群（註3）にもあって、この地域における後期古墳を築造するにあたってとり入れられた風習であろう。

（4）遺物 本古墳群は殆んどの石室が盜掘されており、被害にあっていないのは第7号墳だけであった。盜掘を受けた古墳のうちでは、第1号墳のように銀環2個を残すだけの場合もあって、副葬品の内容については十分知ることはできないけれど、残された遺物を点検してみたい。

副葬された須恵器は、高坏、蓋坏、脚付盤、脚付小形偏平広口壺、偏平広口壺、提瓶、平瓶、横瓶、短頸壺、長頸壺、躰、合付長頸壺、脚付有蓋長頸壺、塊など15種である。いずれも古墳時代須恵器の第3型式に始まり第5型式に及ぶもの（註4）で、ごくありふれた器形と器種ばかりである。これらの須恵器から推して、本古墳群は、6世紀中頃に築造が始まり、7世紀初頭にかけて追葬が行なわれたとみなすことができる。

副葬された鉄器は、鉄刀、刀子、鉄鎌で、普通の副葬品である。ただし、馬具は北尾根の第4号墳と南尾根の第16号墳で出土しただけである。

第4号墳は、北尾根にある9基の古墳のうち標高60cmでいちだん高い位置にあり、石室の石は持ち去られて正確な数値は求められないけれど、玄室長4.0m、幅2.5mと大きく、石片袖式である。遺物も須恵器の長頸壺、躰、提瓶、短頸壺、蓋坏の他、土師器の高坏、脚付盤、小皿など、

他の古墳に副葬されなかったものもあり、鉄刀 6 口、鉄鎌約 60 本という、質、量ともに豊かであった。北尾根支群では第 4 号墳の被葬者だけが乗馬を所有できたのであろうか。

第 16 号墳は南尾根の基部にある古墳で、採土工事で大破していたので、その内容は詳らかにしれないが、辻金具や轡が出土しており、乗馬を所有していたようである。

この 2 例の例をみると、各支群を指導する立場にあった階層が、乗馬を所有できたものであろう。

(5) **押越第 20 号墳** 第 20 号墳は、南支丘の尾根に築かれている。

墳丘は殆んどないといってよく、そのため石室の一部を通って杣道が通っている有様であった。石室も全長 2.5 m という大きさで、側壁の石も 2 ~ 3 段積みあげただけの簡単なつくりである。石室の中には台付長頭棺とその蓋、鉄刀、管下であった。

台付長頭棺は第 5 型式に比定され、実年代を 7 世紀前半に求められよう。薄葬への傾向が、この地域にも及んできたのであろう。

(七原)

註 1 増井義己他『静岡県藤枝市瀬戸古墳群第 1 次調査瀬戸地区その 1』西嶽考古学研究会 1968 年

註 2 向坂綱二・川江秀孝『浜松市半田山古墳群（B 群）調査記録』浜松市博物館友の会 昭和 46 年

註 3 芳賀陽・木下克巳・伊藤惠他『二本松古墳群』愛知県宮開拓バイロット事業石巻地区埋蔵文化財調査団 昭和 51 年

註 4 久永春男・田中繪『尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年』（『守山の古墳』守山市教育委員会 1963 年）

図 版



(1) 壱貫地から押越古墳群を望遠する（西から）



(2) 押越第3号墳から見下ろす（北東から）

図版第2



(1)押越第1号墳石室（南から）



(2)押越第2号墳石室（南から）



(1)押越第2号墳横道部の立石（西から）



(2)押越第2号墳横道部立石近景（南から）



(3)押越第2号墳横道部立石を玄室内からみる



(4)押越第2号墳遺物出土状態

図版第4



(2)押越第3号墳石室（北から）



(1)押越第3号墳石室（南から）

図版第5



(2)押越第4号墳石室（西から）



(1)押越第4号墳石室（東から）



(2)押越第4号墳石室内遺物出土状態



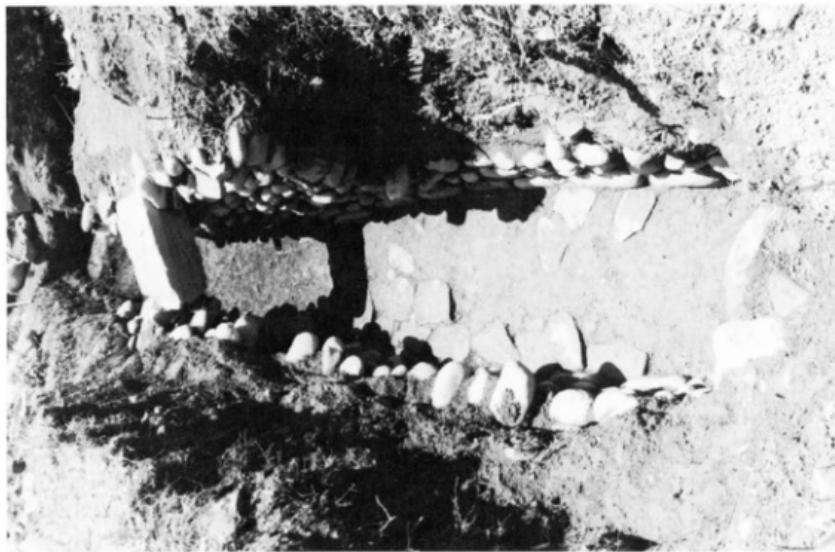
(4)押越第4号墳石室内遺物出土状態



(1)押越第4号墳摸造左側壁(南から)



(3)押越第4号墳前溝(西から)



(2)押越第5号墳石室（北から）



(1)押越第5号墳石室（南から）



(1)押越第6号墳石室と前溝（南から）



(2)押越第6号墳前溝（西から）



(1)押越第6号墳門仕切石の状態（奥道から）



(2)押越第6号墳からみた間仕切石の状態（西から）

(3)押越第6号墳石室全景と前溝の状態（南から）



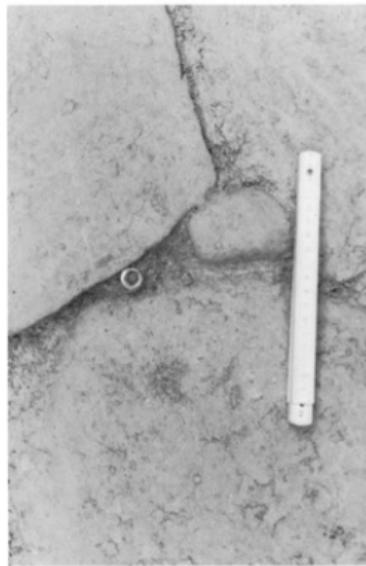
(2)押越第6号墳石室内山茶碗・刀子・古钱出土状態



(4)押越第6号墳通道部における提頭出土状態



(1)押越第6号墳鐵刀・金環出土状態



(3)押越第6号墳金環出土状態

図版第11



(2)押越第7号墳清掃後の石室



(1)押越第7号墳天井石・閉塞石の遺存状態

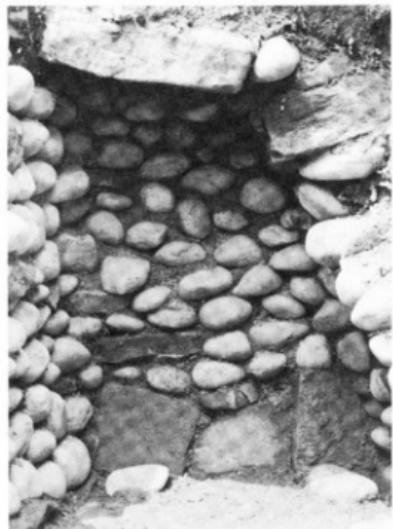
図版第12

(2)押越第8号墳石室(敷石は第1次)(南から)



(1)押越第8号墳石室(敷石は第2次)(南から)





(1)押越第8号墳奥壁



(2)押越第8号墳閉塞石（南から）



(3)押越第8号墳刀子出土状態



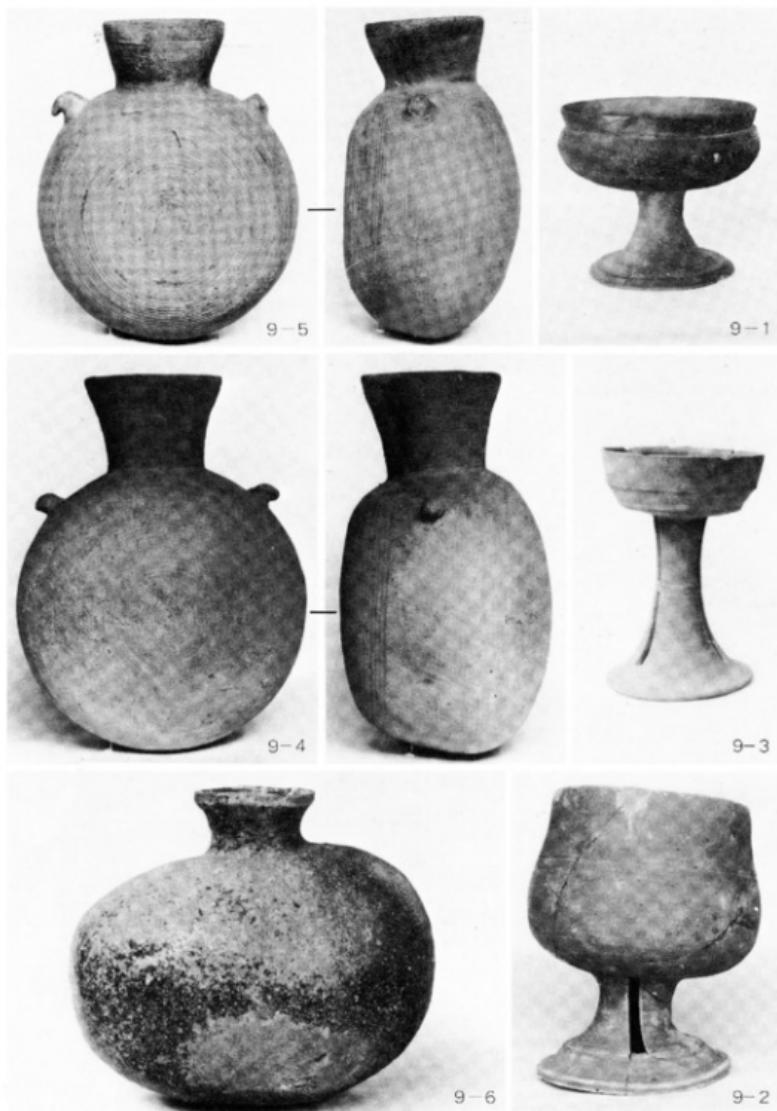
(4)押越第8号墳閉塞石（石室内から）



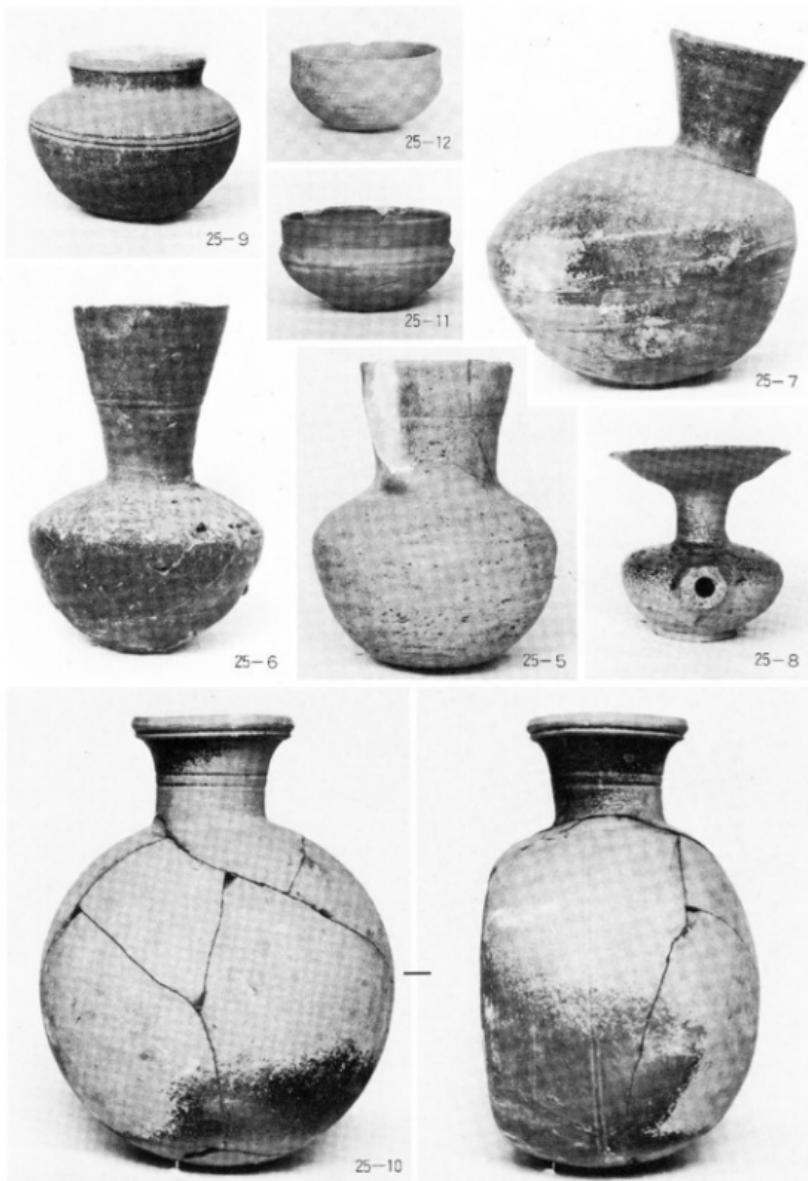
(1) 押越第12号埴石室（南から）上



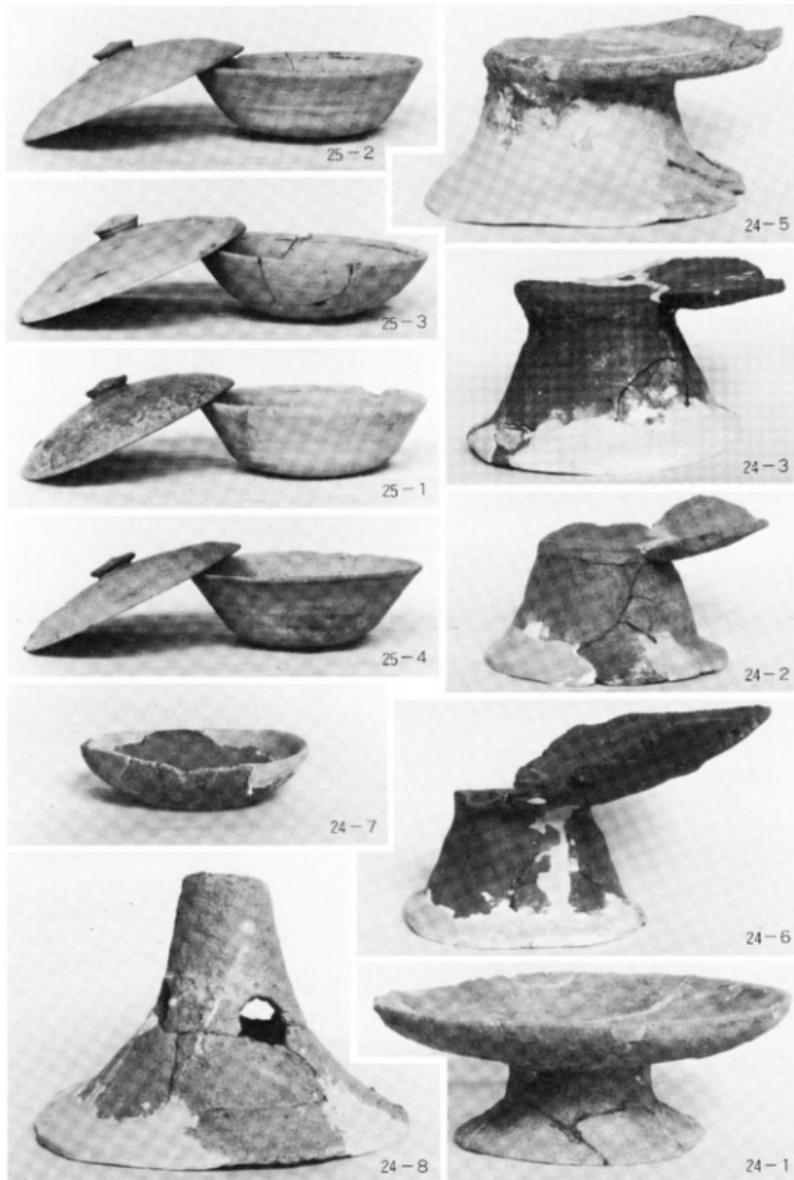
(2) 押越第12号埴石室 右



押越第2号墳出土須恵器

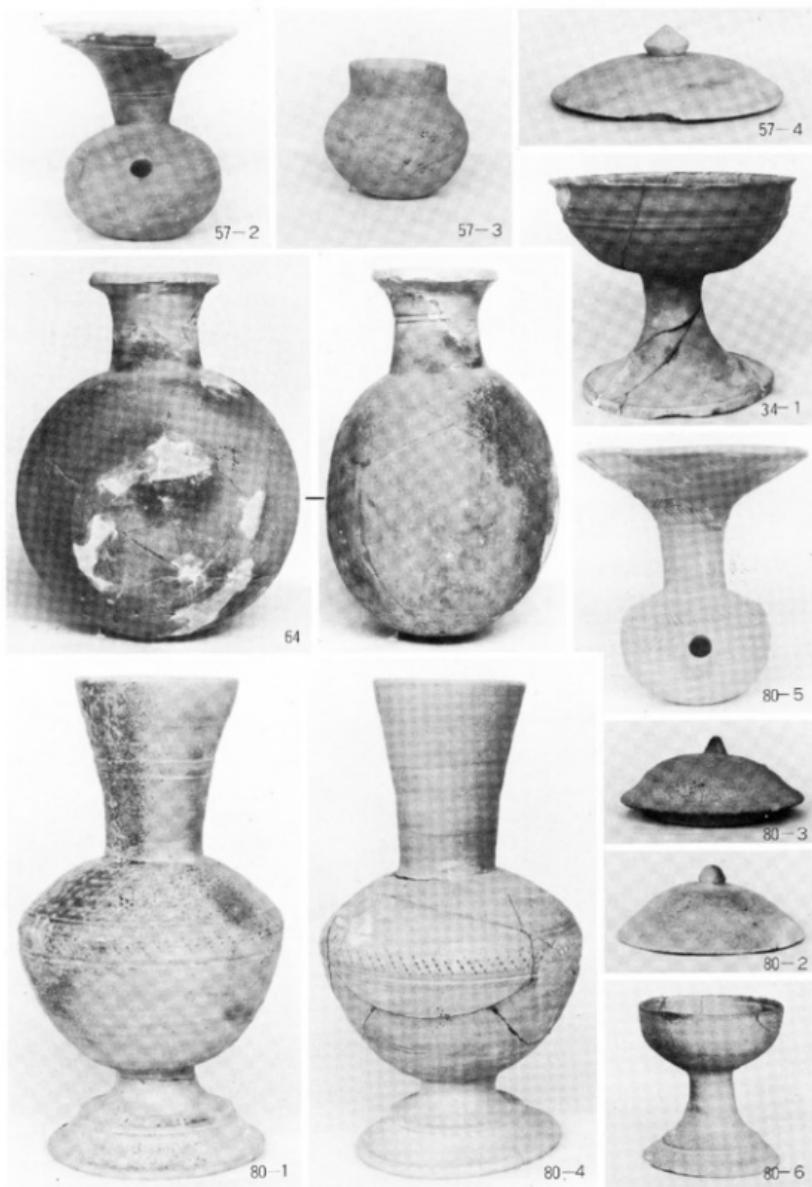


押越第4号墳出土須恵器(1)

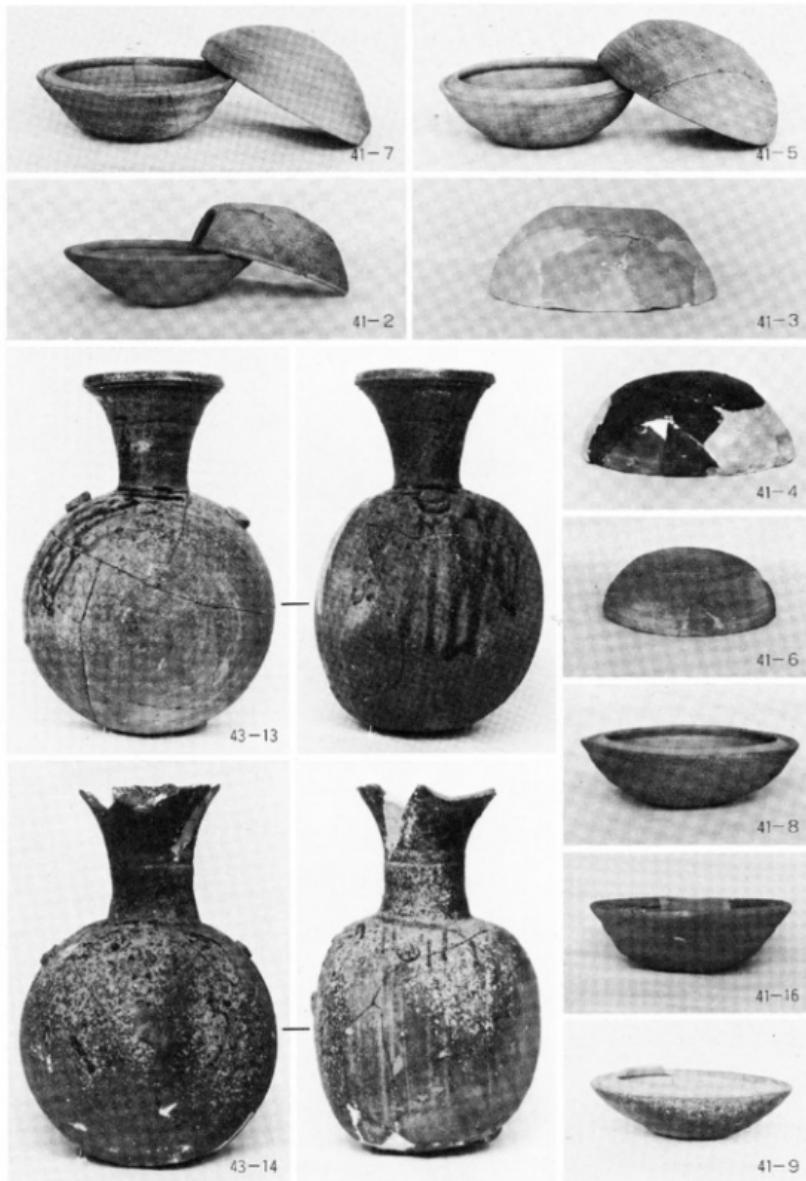


押越第4号墳出土須恵器・土師器(2)

図版第18



押越第5号墳・第7号墳・第8号墳・第13号墳出土須恵器



押越第6号墳出土須恵器(1)



押越第6号墳出土須恵器(2)



43-12



43-7



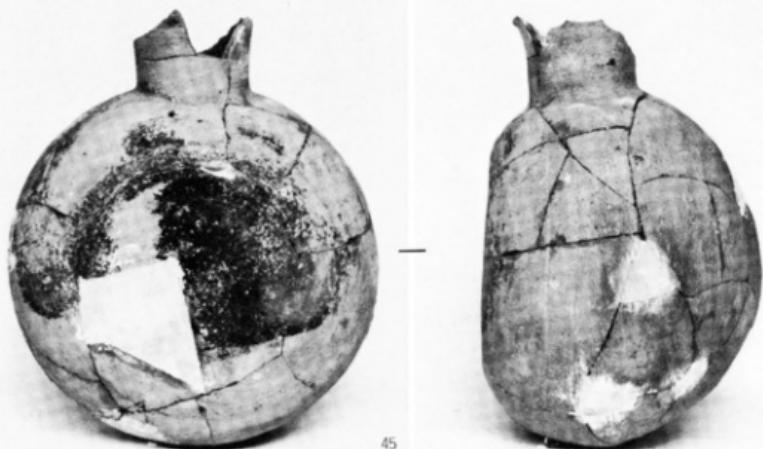
44-2



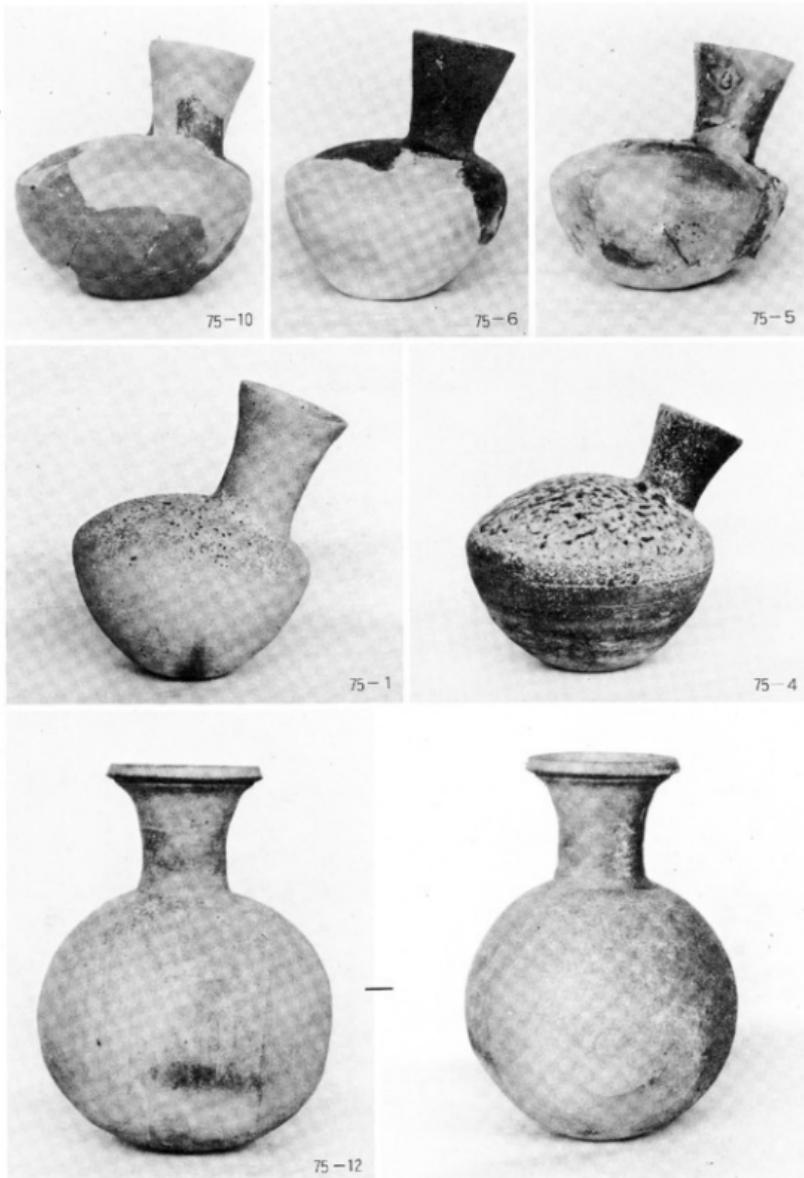
44-3



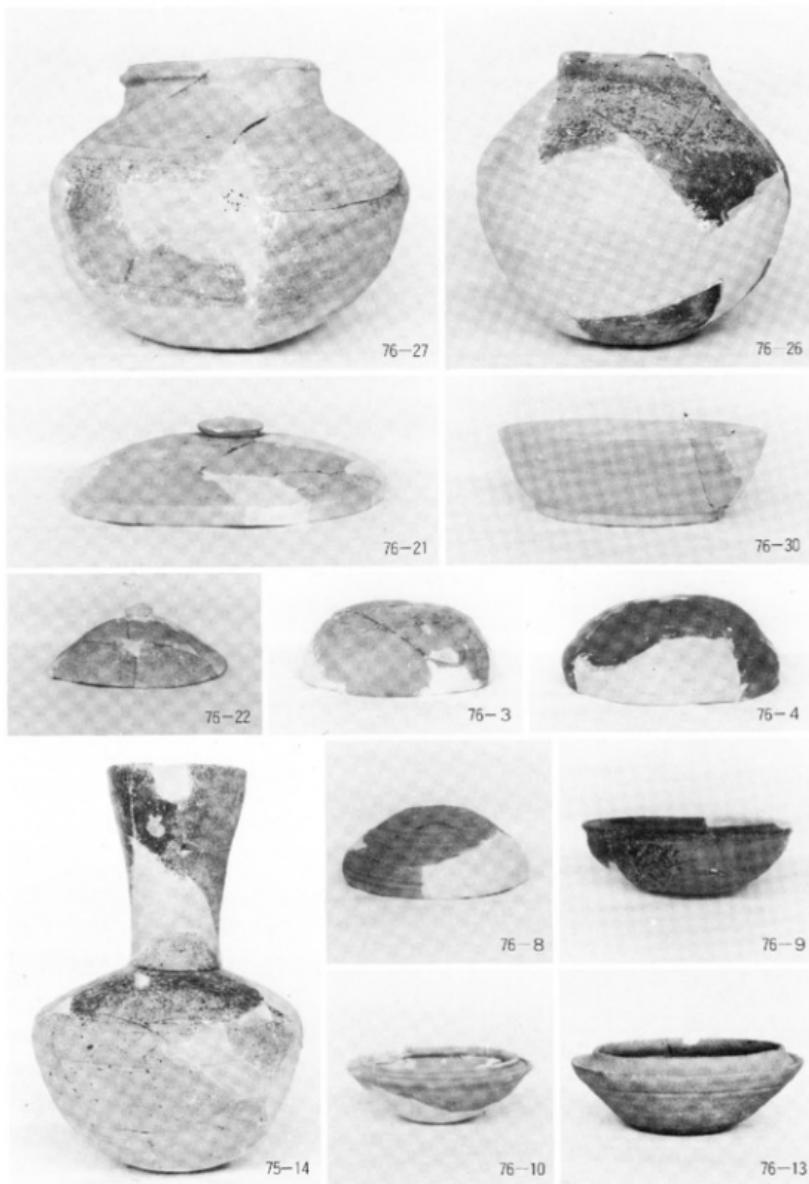
押越第6号墳出土須恵器・山茶碗(3)



押越第6号墳出土須恵器(4)



押越第12号墳出土須恵器(1)



押越第12号墳出土須恵器(2)



77-2



77-7



77-8



77-4



77-9



76-32

押越第12号墳出土須恵器(3)



81-1



93



81-2



96-1



81-4

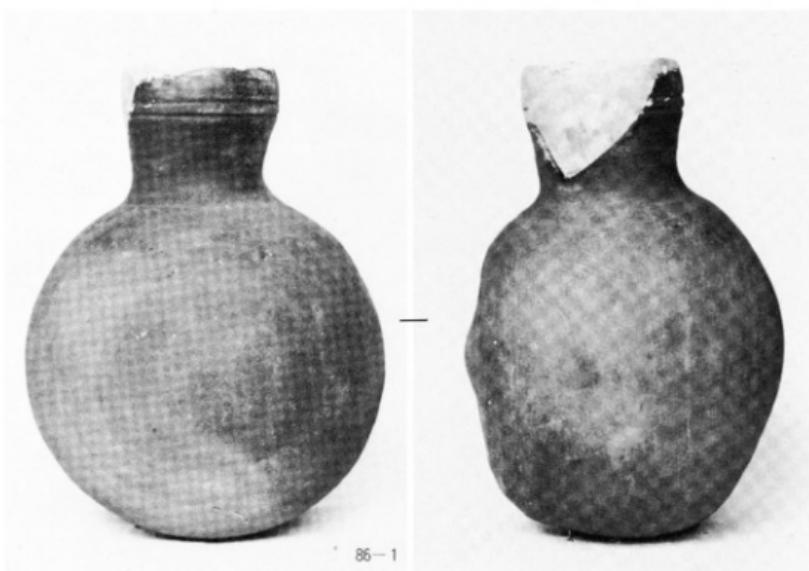


96-2



81-3

押越第13号墳・第16号墳・第20号墳出土須恵器

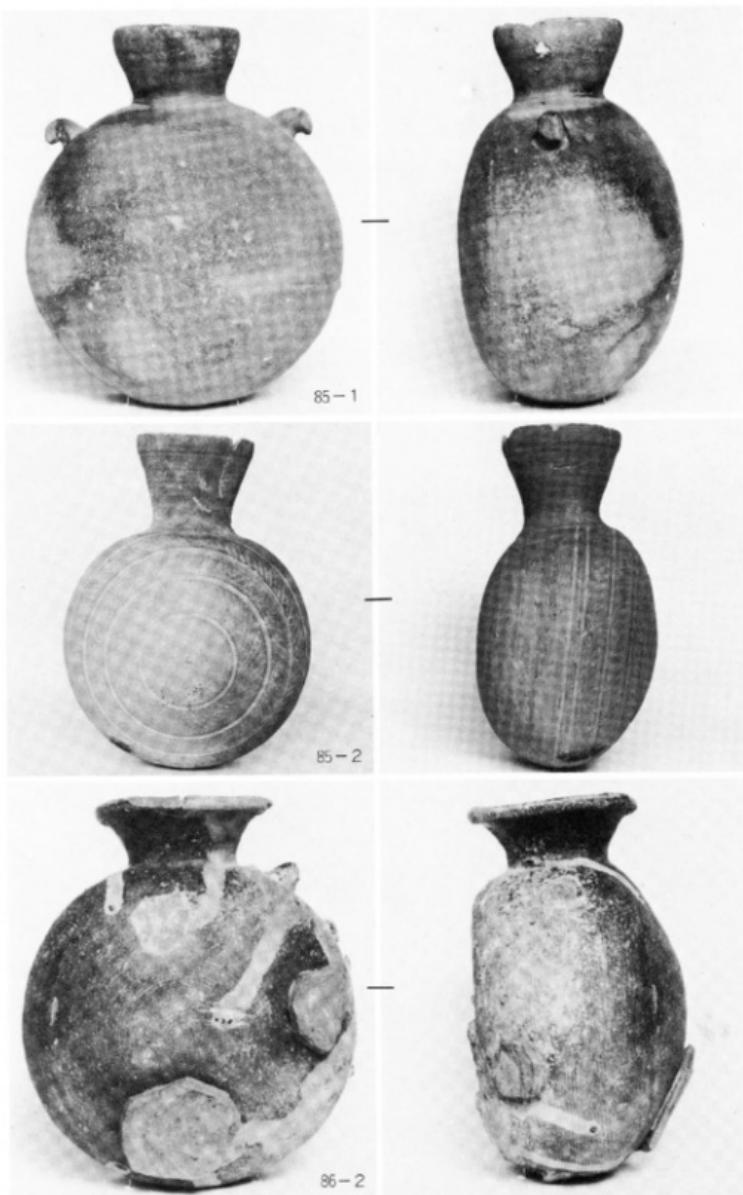


86-1



86-3

押越第14号墳出土須恵器(1)



押越第14号墳出土須恵器(2)



85-3



86-6



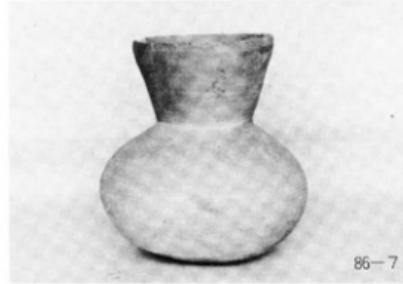
85-4



86-5



85-5

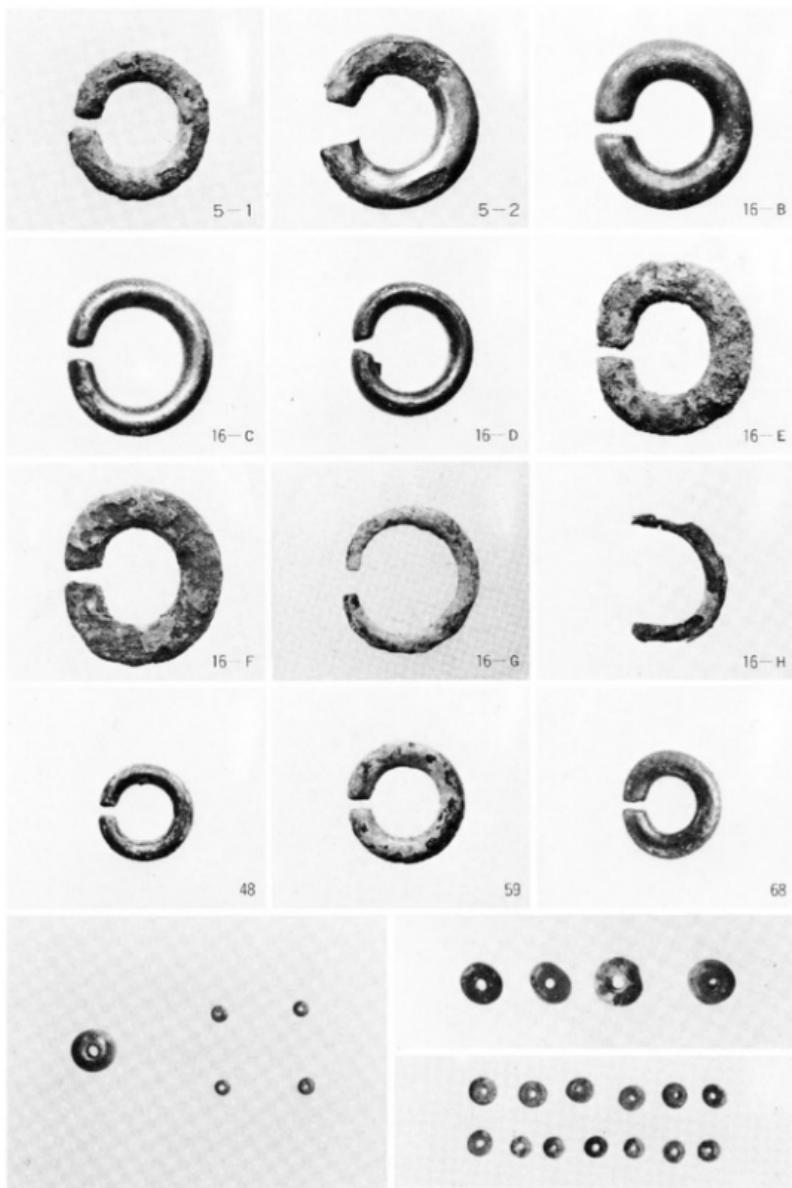


86-7

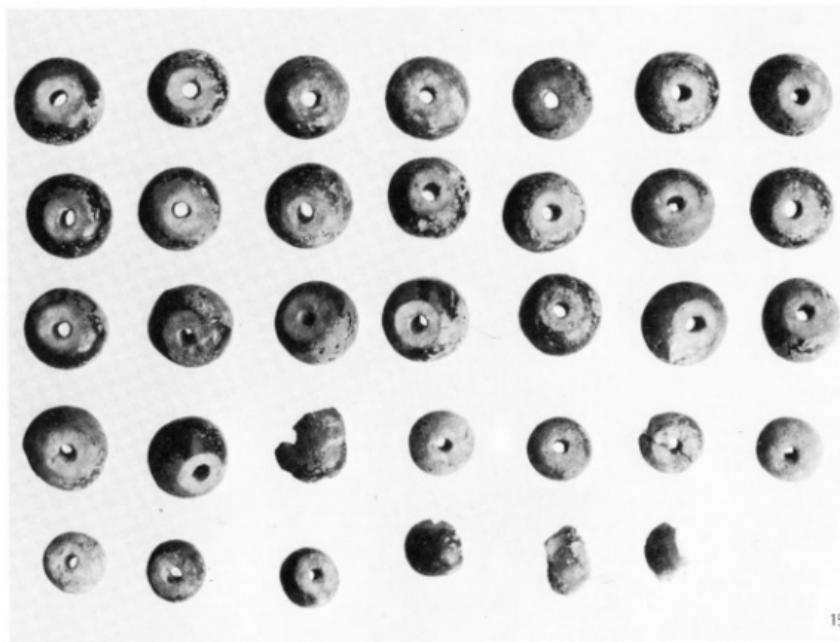


86-4

押越第14号墳出土須恵器(3)



押越第1号墳・第3号墳・第6号墳・第7号墳出土金環・銀環
第3号墳・第4号墳・第9号墳出土玉類



15



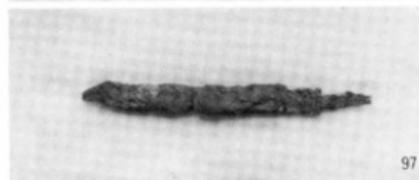
35



82



65-2

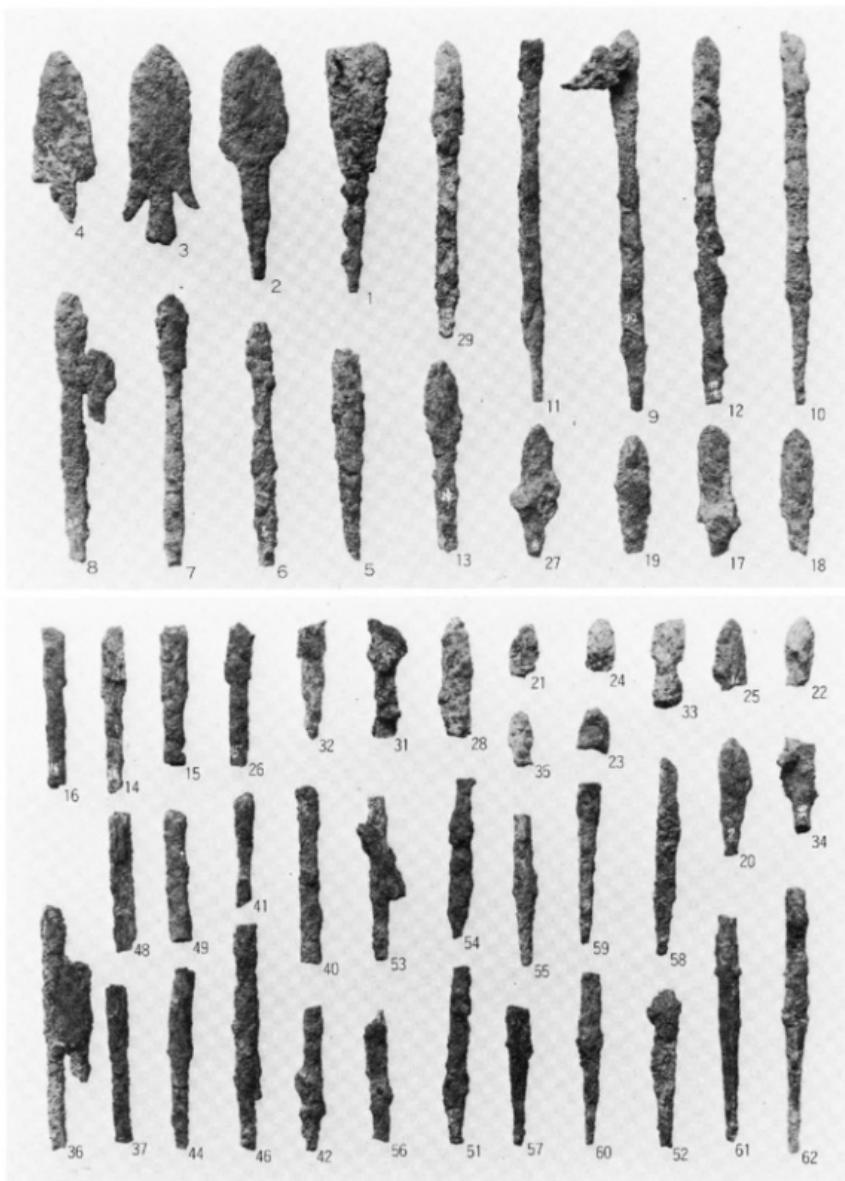


97

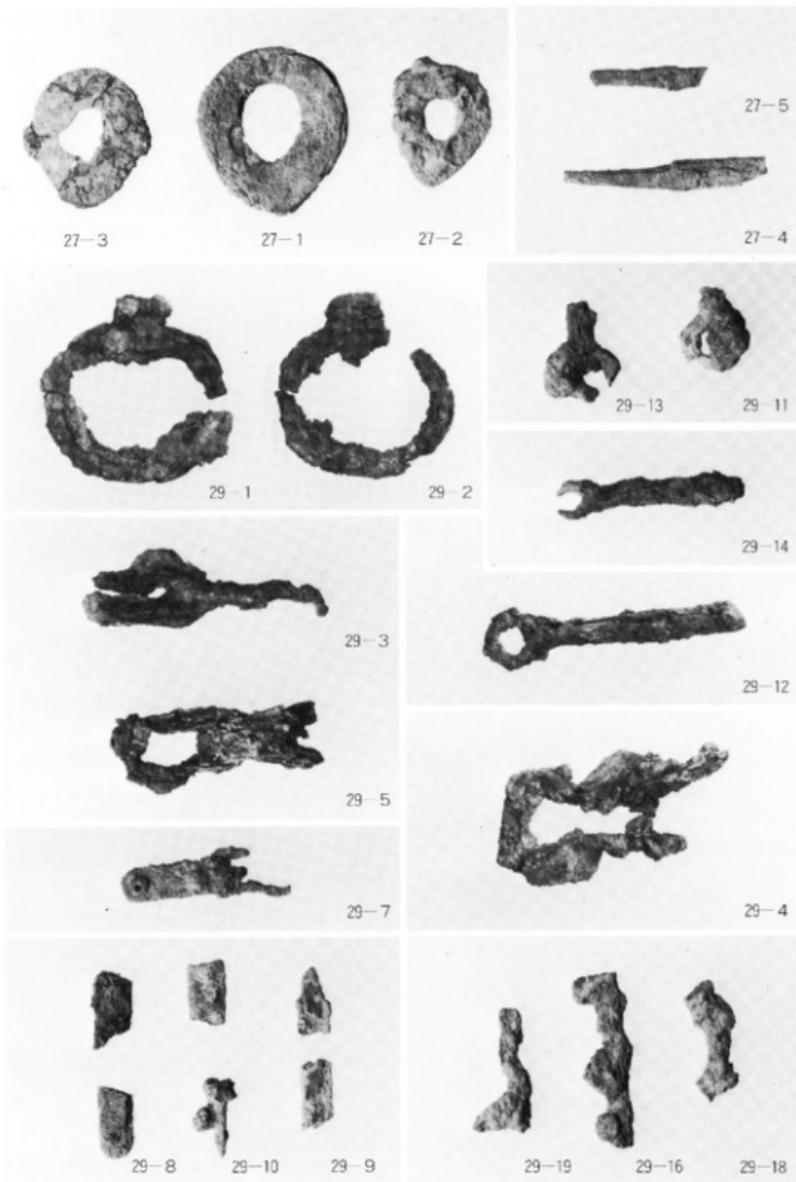


65-1

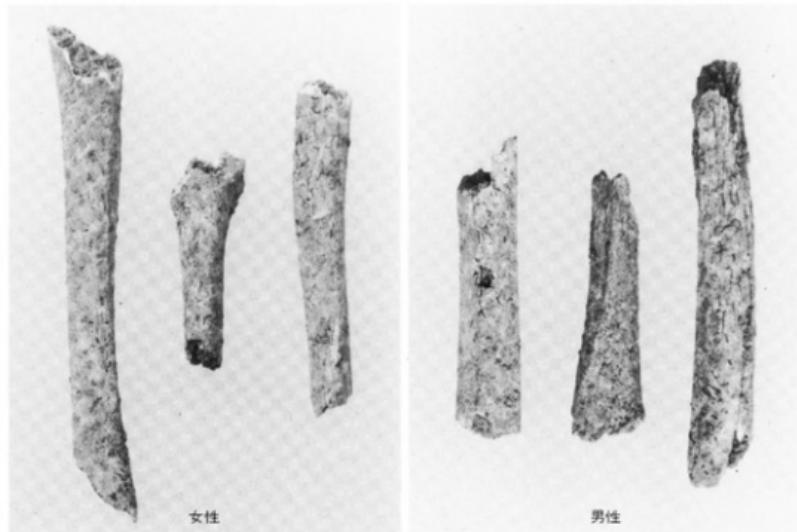
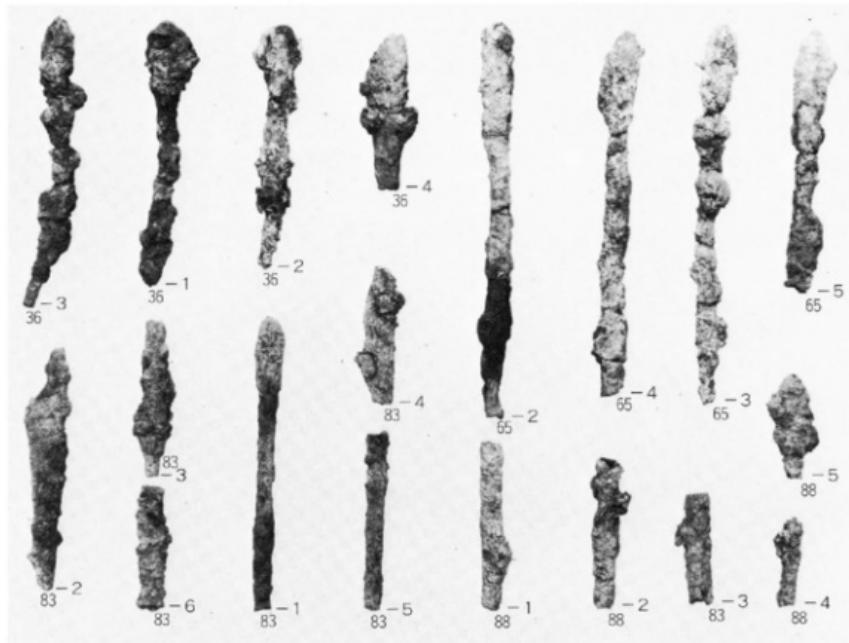
押越第3号墳出土土玉、第5号墳・第8号墳・第13号墳・第20号墳出土鉄刀、刀子



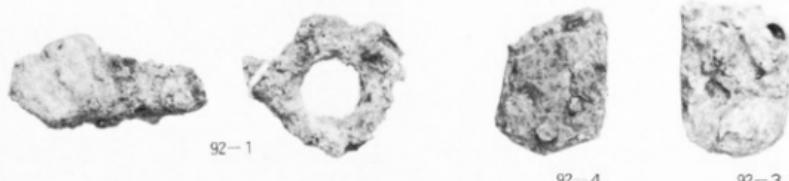
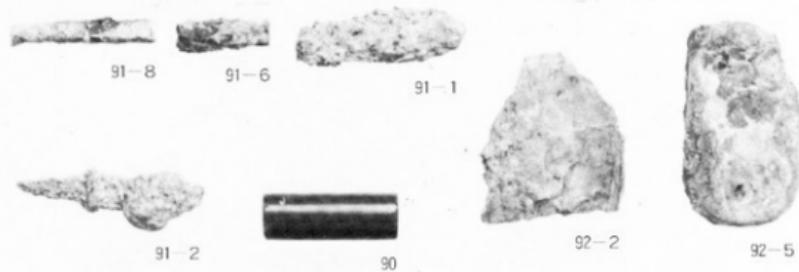
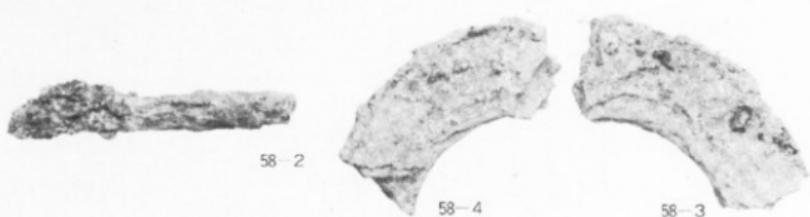
押越第4号墳出土鉄鏃（第28図）



押越第4号墳出土鉗・刀子・馬具



押越第5号墳・第7号墳・第8号墳出土鐵簇 第7号墳出土人骨



押越第7号墳出土鐵鎌・鏂・刀 第16号墳出土馬具・鐵鎌・管玉

社山古墳群

例　　言

1. 本書は静岡県磐田郡豊岡村社山古墳群の調査報告書である。
2. 社山古墳群の調査は、村営上水場建設に先立って実施したものである。
3. 本書に収録した写真は、久永春男、七原恵史、川合昭二が撮影した。
4. 出上した遺物の整理・復原・実測・トレースは、各古墳の調査担当者（執筆者）の他に、東海考古学研究会の木村哲雄、秋田文代、小木卓也各氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、七原恵史、仙田作吉、木村哲雄が行ない、久永春男が監修した。
6. 本書の執筆者は末尾に示した。
7. 本古墳群の調査は下記の者が行なった。

調査担当　日本考古学協会員　久永春男

調査員　木下克己、七原恵史、伊藤　恵、神原治一、森　達也、久永直見、

岡本慎二

東海考古学研究会　仙田作吉、辻　秀樹、木村哲雄、小出良信、畠田静子、

二村江三四

愛知県立明和高等学校教諭　岡本芳幸

愛知県尾張旭市立浜川小学校教諭　西川不二夫、福島美紗子

豊橋市　木下寛四、木村　勇

愛知県立緑丘商業高等学校社会科研究クラブ　内田博明、井上勝則、伊藤一也、稻垣康之

愛知県立明和高等学校生徒　友田倫男、北川末子、小岩井富士子

私立鹿高等学校生徒　今泉直史

天竜市二俣中学校生徒　鈴木康男

名古屋市立守山中学校生徒　北村、堀田、水野

目 次

例 言

第1章 位置と地形	1
第2章 社山第1号墳	5
1. 位 置	5
2. 調査の経過	5
3. 墳 丘	5
4. 石 室	7
5. 遺物の出土状態	9
6. 遺 物	9
7. 小 紹	11
第3章 社山第2号墳	12
1. 位 置	12
2. 調査の経過	12
3. 墳 丘	12
4. 石 室	14
5. 遺物の出土状態	18
6. 遺 物	20
7. 小 紹	24
第4章 社山第3号墳	26
1. 位 置	26
2. 調査の経過	26
3. 墳 丘	26
4. 石 室	27
5. 遺物の出土状態と遺物	29
6. 小 紹	29
第5章 社山古墳群付近の古墳出土須恵器	30
第6章 結 語	32
付載 1 押越第1号墳出土銀環の成分分析	33
付載 2 押越第7号墳出土人骨について	34
付載 3 補 道	35

挿 図 目 次

第 1 図	社山古墳付近地形図 (1:2,500)	2
第 2 図	社山古墳群地形図	3
第 3 図	社山第 1 号墳 墳丘実測図	6
第 4 図	社山第 1 号墳 石室実測図	7
第 5 図	社山第 1 号墳 石室（第 2 次）実測図	8
第 6 図	社山第 1 号墳 出土須恵器、土師器実測図	9
第 7 図	社山第 1 号墳 出土玉類実測図	10
第 8 図	社山第 1 号墳 出土鉄鏃実測図	10
第 9 図	社山第 2 号墳 墳丘実測図	13
第 10 図	社山第 2 号墳 石室実測図	15
第 11 図	社山第 2 号墳 遺物出土位置図	19
第 12 図	社山第 2 号墳 出土鐵鏃、刀子実測図	20
第 13 図	社山第 2 号墳 出土須恵器、土師器実測図	22
第 14 図	社山第 2 号墳 出土石簇実測図	23
第 15 図	社山第 3 号墳 墳丘実測図	27
第 16 図	社山第 3 号墳 石室実測図	28
第 17 図	社山古墳群付近の古墳出土の須恵器	30

図 版 目 次

図 版

- 第 1 (1)社山第 1 号墳墳丘（南西から）
(2)社山第 1 号墳石室上部の状態（南西から）
(3)社山第 2 号墳墳丘（わずかに盛りあがっている）（東から）
(4)社山第 3 号墳の墳丘（ほとんど区別がつかない）（西から）
- 第 2 (1)社山第 1 号墳石室全景（南西から）
(2)社山第 2 号墳閉塞石除去後の石室全景（南西から）
- 第 3 (1)社山第 1 号墳表土除去後の状態（東から）
(2)社山第 1 号墳左側壁の補修状態
(3)社山第 1 号墳奥壁付近遺物出土状態
(4)社山第 1 号墳補修壁背後の遺物出土状態
- 第 4 (1)社山第 2 号墳石室全景（南から）
(2)社山第 2 号墳石室全景（北から）
- 第 5 (1)社山第 2 号墳蓋坏出土状態
(2)社山第 2 号墳提瓶出土状態
(3)社山第 2 号墳碗出土状態
(4)社山第 2 号墳蓋坏出土状態
- 第 6 (1)社山第 3 号墳敷石除去後の状態（東から）
(2)社山第 3 号墳石室清掃後の状態（上方から俯瞰）
- 第 7 (1)社山第 3 号墳表土除去後の状態（東から）
(2)社山第 3 号墳石室外の礫散布状態（南から）
(3)社山第 3 号墳石室内清掃途中の状態（東から）
(4)社山第 3 号墳石室の収容状況（寝ている人物の身長 160 cm）

社山古墳群

第1章 位置と地形

磐田市から北上して天竜市に至る主要地方道（県道）天竜一磐田線は、天竜川に沿ってその左岸磐田原合地の段丘崖下を通過している。

その県道上を磐田駅前から二俣・山門へ通じる遠鉄バスを豊岡村のはば中央部、旧広瀬村地内の慈眼寺前停留所で降りて、北東へ水田の開ける天竜の氾濫原を進むこと約250mで神社の社前に至る。この神社は丘陵麓にあって、社頭を磐田用水の流れが道を横切っている。目前には水田面との比高約60mの丘陵が植林された、杉、松等の美林をのせて迫っている。

神社の南側をすり抜けるようにして、道を登りにとつて右に折れると、左手に神社と接して名刹慈眼寺があり、山門を通して閑静な庭がのぞまる。頭上に常緑針葉樹の縁が迫る切り通しの山道を、左に大きく弧を描くが如く登りつめることおよそ300m程で、勾配も緩やかになり道は右に曲がる。この辺りが丘陵の鞍部で、標高70m前後である。

さらに台地上の散在する民家と畠の道を150mばかり進み、小工場の門前で道を左に折れ溜池の築かれている幅50m足らずの小開折谷を渡り、北へ進むこと200mほどで、北からのびてきた尾根の末端に至る。ここに現在無住の蓮台寺があり、その背後の尾根の稜線や南斜面に多数の古墳が群集している。それを社山古墳群と称している。

この古墳群は、天竜川左岸の丘陵・台地上におびただしく分布している古墳群の一部をなすものである。

社山古墳群は、西方天竜の氾濫原を臨みほぼ南北に続く丘陵の稜線上やその南西斜面に分布しており、この尾根より西に派生する枝尾根に分布する押越古墳群と隣接している。

この地域の丘陵は、下部がおもに黄褐色の砂または礫からなる鮮新世の大日砂岩層で、上部はしばしば赤褐色を呈する砂及び礫の洪積古層で当地域で小笠山礫層とよばれている（註1）。

この丘陵頂は、北部の標高105.2mから南部の97.9mと海抜100m前後であり、東側は傾斜約20度の急斜面で、その下に合代島部落から社山部落に続く幅150m～300mの開折谷がほぼ南北方向に平行して続いている。耕地となっている谷底の標高は50m～60mで丘頂との比高は35m～40mである。

そして、この谷の支流の如き形で、尾根の西側に発して南を通って先述の谷に合する、幅50m前後的小開折谷があり、面積約230m²と約1,800m²の2つの溜凝用溜地がある。丘頂と谷との比高はおよそ30m～40mで、この谷に面する尾根の南西斜面の傾斜は約16°である。

古墳群の位置する丘陵はこの2つの谷に挟まれて東南へ延びる狭長な尾根で、現在はこの丘陵のほぼ南北に走る稜線にそって垂直に切り下げて東側半面は平坦に削平され、みかん畠が造成されており、南西斜面の麓も1m内外の段を作つて平坦化され、同様のみかん畠となつてゐる。



第1図 社山古墳群付近地形図（アラビア数字は古墳番号）

今回の調査区域は、この2つの人工的な崖に挟まれた面積およそ950m²の三角形の斜面でこの区域が村営簡易水道の貯水池築造のため森林が切り拓かれた際、古墳の存在が認められたのが今回の調査の始緒である。

調査区域は、標高92mの頂点より南西へ傾斜して、ほぼ標高86mの等高線と重なるように南西麓の人工崖が走り、斜面も終わっている。高度差は6m、その傾斜は平均9度を示している。この区域内に4基の円墳の存在が確認され、そのうち3基が今回調査され、1基は保存と決定した。

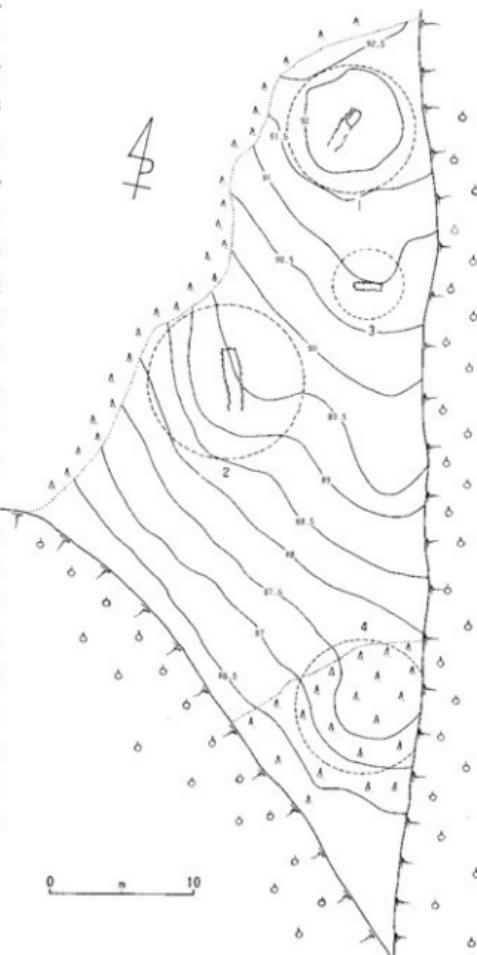
第1号墳は最も高位、すなわち斜面の頂部（稜線上）にあって、標高91.5m線が墳壠をとりまき、直径約9m、高さ70cmである。その東南に墳丘を接して第3号墳がならぶ、直径およそ8.5m高さ50cm内外で、40.5mの等高線が弧状に墳丘の下限を描いている。第1号墳の南々西10mの位置に、標高88mの等高線に墳丘麓をとりまかれて、直径12m、高さ1.5m～1.7mの第2号墳が存在する。

第2号墳より東南14mの位置に、このたび保存がきまとった第4号墳がある。

今回の調査区域の内では最も下方にあって、標高87mの等高線が弧状にふくらんで墳丘の下限を示している。直径は9mほど、高さ約1.2mと推定される。

これら第1号墳から第4号墳までは全て同一地籍の磐田郡豊岡村大字社山字西山437番である。

また、以上4基とは別に南方みかん畑内に、開墾の際、破壊された古墳の痕跡が2ヶ所あった。



第2図 社山古墳群地形図（アラビア数字は古墳番号）

これらの他に調査区域北方の森林中で、第1号墳より北々西へ約40m入った標高97.9mの地点に、直径20m余、高さ1.3m～1.6mの大きな円墳がある。頂は径11mの比較的広い平坦面がある。

またさらに北西へおよそ50m進んだところにも円墳がある。直径は約12m、高さ約1.5mである。

さらに森林中を45mほど北々東に入った、豚の放牧地付近にも古墳の形跡があり、第四型式ないし第五型式と思われる須恵器が散布している。これら森林中の古墳はいずれも尾根の稜線上に位置する比較的日につくものであるが、今回の調査区域には第3号墳などに代表されるような墳丘のあまり目立たない古墳が多いことから、森林中にはなお小古墳が分布している可能性が強くまた開墾により破壊されて姿を消したものも考えられる。

現在までに存在の確認されているのは上述の8基であるが、悉らく稜線上の径20mの円墳を主墳とし、総数十基を超える群であったのだろう。またこの丘陵の南で東西にのびる丘陵上で輪切りにされた石室の残存部を確認したが、断面による測定によって石室の深さ1.55m、幅0.92mであった。

(辻・森)

註1 斎藤正次・磯見 博『5万分の1地質図幅説明書 秋葉山(京都一第48号)』

昭和29年 工業技術院地質調査所

第2章　社山第1号墳

1. 位 置

社山第1号墳は、調査対象になった社山古墳群3基のある丘陵のもっとも高い位置にあって、南へ4mの地点に第3号墳が、西へ10mの地点に第2号墳がある。標高は92mである。

2. 調査の経過

第1号墳の調査は7月27日から開始し、途中に休日を設けたが、8月22日まで、のべ14日間を費した。

調査はまず墳丘の測量から始めた。墳丘の盛土は低く、丘陵の斜面とあまり変わらない。25cm間隔で墳丘図を作成する。いっぽう墳丘の頂部には石室の石が一部地表にでているので、これを手がかりにし、石室の上部を把握した。石室内の土砂をとり除いてみると石室は頗狭く、閉塞石も残っているので堅穴のように見える。石室の清掃をすすめ、奥壁に接して土師器盤とこれよりやや離れて管玉や水晶製切子玉、鉄鎌などを見出し、意外に多い副葬品に驚いた。石室は中央部で極端に狭くなっている部分があったが、これは二次埋葬時に補修したものであった。この石をとりはずすと、石の後側の敷石の上に鉄刀が置いてあった。一次埋葬の副葬品を片付けたものと考えた。さらに閉塞石を順次とりはずしていく、この下に溝があることが確認された。溝の発掘を終え、石室の測図を行って現地の調査を完了した。



社山第1号墳発掘状況

3. 墳 丘（第3図）

社山第1号墳の墳丘は、盛土が少なく、石室を中心にはざかに高まりが認められる程度であった。

25cm間隔で墳丘を実測してみると、±0cm、-25cm、-50cmの3本の等高線は石室をとりまい

て円を形成している。 -75cm の等高線は、石室の閉塞石までを内包する円をなしており、墳丘の裾をみるとことができよう。これを墳裾とすれば直径 8.5m である。しかし地勢上、石室の前方だけが整形されたものと思われる。墳丘の高さは、現存する石室の上に 20cm の土を載せたものとす



第3図 社山第1号墳墳丘実測図

0 1 2 3

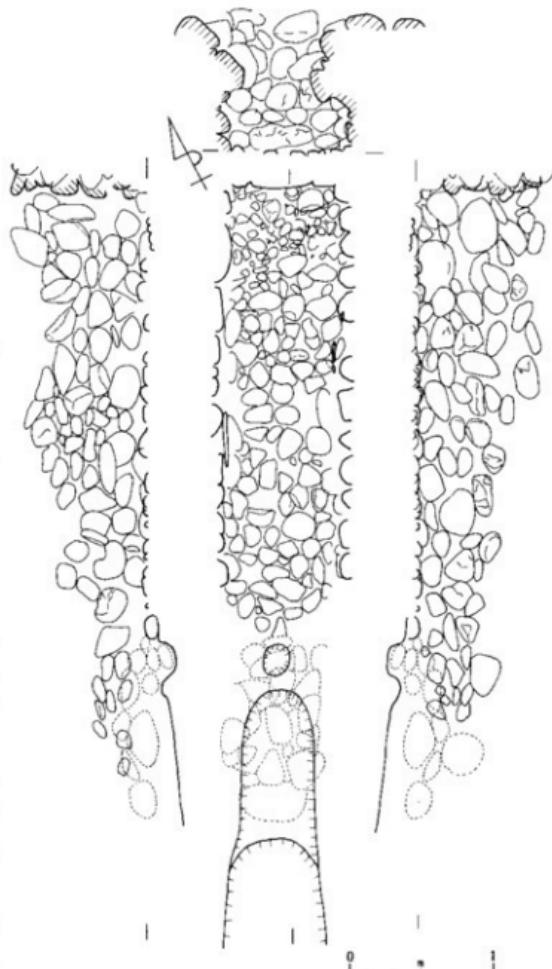
れば、1 mをはかることになろう。

現存する墳丘も、下から見上げればそれと判別できるので、現状より若干高かったとすれば、容易に弁別できたことであろう。墳丘には、葺石や周溝は認められなかった。

4. 石室（第4図、第5図）

社山第1号墳の石室は、主軸をN-35°-Wにとる、横穴式石室である。石室の入口は閉塞石が完存し、石室内の埋積土を掘りあげた段階では堅穴式石室かと思われた。

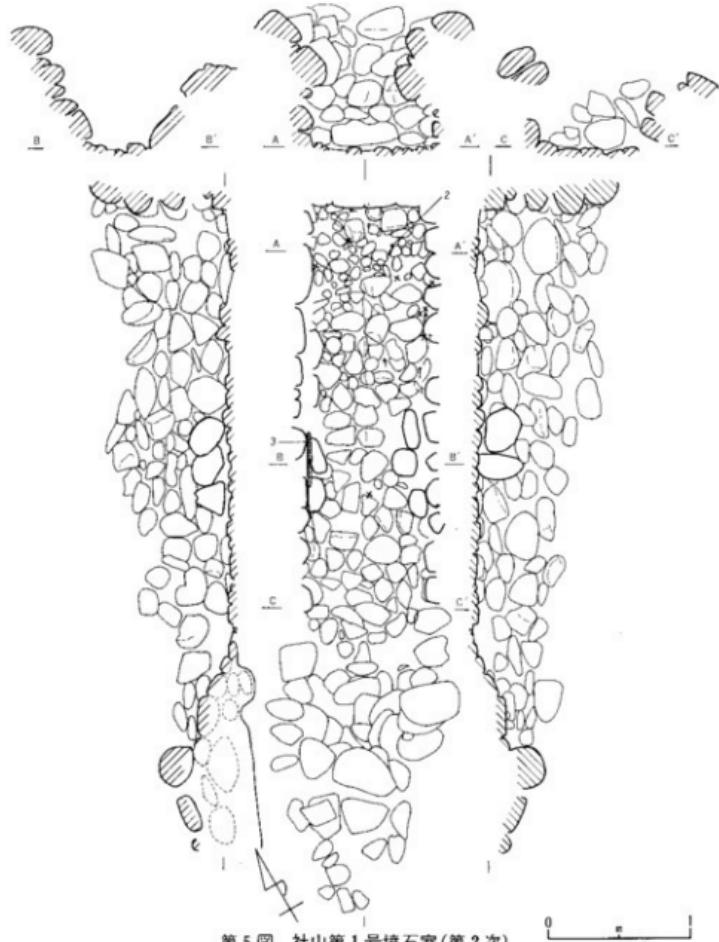
閉塞石を残した状態の石室の長さは、閉塞石の前端までで3.5 mをはかるが、閉塞石をとり除くと、奥壁から3.75 mの地点の石室の中軸線上に基盤を掘りくぼめて、1個の球形の礫が埋めこんでいた。この礫が石室の末端を示しているようで、側壁もこの礫まで終り、閉塞石はこの礫をほぼ中心に積みあげている。石室の幅は、奥壁に接した点で0.75 m、奥壁から1.7 mの地点では0.5 mと極端に狭く、石室前端では再び0.75 mになる。石室中央の幅狭い部分は、第2次埋葬に際して新たに大形の礫を側壁にもたらせたために生じたもので、当初は長方形の石室であった。石室の高さは、側壁のもっともよく遺存している部分でも、



第4図 社山第1号墳石室実測図

敷石から 0.8 ~ 0.85 m と低い。床面には、成人の拳大の礫と、手の平大の偏平な礫を敷石にしている。小形の礫は奥壁近くに用いられている。敷石の並べ方は丁寧とはいいがたく、粗末の差がある。石室には渡道はとくにしつらえた様子はなく、石室の前端には、直に閉塞石が積みあげられている。

閉塞石を取りはずして、この下に黒色有機土層が埋積した溝があった。溝は浅いU字形を呈し、石室の前方 3.0 m まで確認できた。溝の中からは蓋壺の蓋の破片が見出された。



第5図 社山第1号墳石室(第2次)

5. 遺物の出土状態

石室から出土した遺物は、土師器類、菅玉、水晶製切子玉、鉄歎、鉄刀などである。奥壁の、中軸線よりやや右に、土師器の盤があった。原位置を保つ唯一の遺物であろう。菅玉と水晶製切子玉は奥壁から0.4m付近を中心に散っていた。鉄歎は、左右両側壁際と奥壁から1.0mの地点にもあった。左側の第2次埋葬時における側壁をとりはずしたという、敷石の上に鉄刀が置かれていた。第1次埋葬時の副葬品であろう。

6. 遺 物

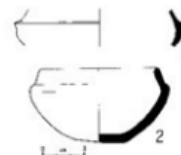
社山第1号墳から出土した遺物は須恵器の蓋環の身1個分、土師器の盤1個、装身具は管6個、菅玉2個、小玉2個、切子玉2個と鉄歎、鉄刀である。

蓋環（第6図の1）蓋環の身の破片である。口径推定約10cmで身の立ち上りは小さく、約20度内傾する。胎土は緻密で灰白色を呈している。第4型式に比定できる。

盤（第6図の2）口径8.2cm、器高5.3cmを有する。半球形の身に口頭部をつける形で身の最大径は10cmである。赤褐色を呈している。

菅玉（第7図の1～6）6個ある。それぞれの数値は下表のとおりである。1は形も寸法もひとまわり大きい。石の節理が認められる。2はその一端を削っている。濃緑色を呈して美しい。3は1と同じく菅玉製でよく磨かれている。4・5・6は材質は悪くもろい。

第6図 社山第1号墳出土須
恵器・土師器実測図



社山第1号墳出土菅玉計測値(単位cm)

掲出番号	長さ	直径	色調	材質
1	3.3	1.25	帶灰緑色	碧玉
2	2.85	0.95	濃緑色	"
3	2.55	0.75	帶灰緑色	"
4	2.5	0.57	"	"
5	2.35	0.85	"	"
6	2.1	0.9	"	"

菅玉（第7図の7～10）4個あるがそれぞれ形状と材質を異にする。7は長さ2.25cm、腹径1.7cm、薄緑色を呈している。滑石製である。10はやや変形している。長さ1.25cm、腹径1.15cmで濃緑色である、碧玉製である。窄孔は片側からであるが細長い孔になっている。8と9は水晶製であるが、透明度も悪く、疵が多い。窄孔は片側から行なわれている。

切子玉（第7図の13・14）2個とも水晶製である。13は長さ1.1cm、腹径1.0cm、7角に面取り

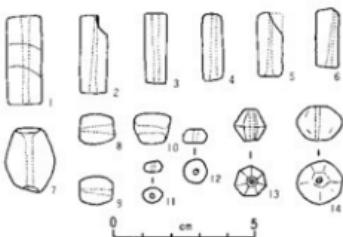
されているが、不規則である。14は長さ1.15cm、腹径1.5cm、不規則に6角に面取りされているが、丸玉かと思われる程磨耗している。两者とも窄孔は片側から行なわれている。

土製丸玉（第7図の12）直径0.85cm、厚さ0.5cmをはかる。土製で、かつては色彩が施されていたであろうが、いまは褐色の地肌を示している。

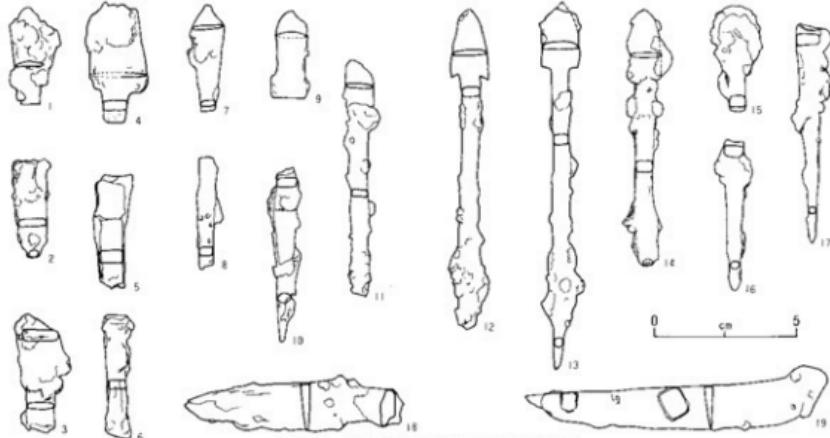
ガラス製小玉（第7の11）直径0.7cm、厚さ0.4cmをはかる。形はいびつであるが淡緑色で美しい。

鉄鎌（第8図の1～17）1～13は奥壁を中心にして出土し、14～17は第1次埋葬の床面から出土した。1は長さ3.5cm、刃部の幅1.1cm、片丸造柳葉式である。2は刃部と茎の破片で長さ3.5cm、4は平造三角形式と考えられる。7は平造三角形式で長さ4cm、9は雨丸造柳葉式で長さ3.0cmまで現存する。11・12・13は尖根式で11は長さ8.5cm、片刃前式、12は長さ11.5cm、雨丸造腹抉三角形式、13は長さ13cm、片丸造三角形式でもっとも遺存状態が良好であった。なお3は長さ3cmの鉄鎌かと考えられたが刃部は厚くその断面形は長方形であって鎌とは別形態のものであろう。18と19は1～13の鉄鎌とともに出土した。18は現長7.8cm、みね幅0.3cm、身幅1.8cm、19は現長10.5cmで、みね幅0.3cm、身幅1.6cmで両者とも刀子の部分とみなされるが、19は茎にあたる部分が大きく、別形態のものかも知れない。

鉄刀（第8図の18・19）石室の左側補修壁の裏側に置いてあったもので、長さ50cmほどであった。



第7図 社山第1号墳出土玉類実測図



第8図 社山第1号墳出土鐵鎌実測図

跡が厚く付着しており、原形を明らかにできなかった。

7. 小 結

社山第1号墳が築造された年代を知る手がかりのひとつは、古墳の前方に掘りこまれた溝から出土した須恵器の蓋坏の身である。破片であるが、身の立ち上りが小形化し、約20度内傾しており、古墳出土須恵器の編年から第4型式に比定される（註）。実年代は6世紀末～7世紀初頭であろう。ただしこの破片は1次埋葬時の副葬品であった可能性があり石室が築造された時期の指標になろう。つぎに、石室は、横穴式石室であることに違いはないが、規模が小さく、堅穴式石室かと思われる程退化した石室である。石室の退化が、この時期に始ったとみなすこともできる。

本古墳の副葬品のうち、数的に多いのは鉄鏡で、先の被葬者も後の被葬者も所持していたように看取される。しかし、最後の被葬者は、装身具を身につけたまま葬られたもので、女性であった可能性が高い。身につけている装身具である水晶製の切子玉や東玉は傷が多く、永く愛用していたものと見受けられた。

本古墳の被葬者たちは、一応、横穴式石室を築きうる立場にあったけれど、その副葬品はさして豊かではないけれどこの地域の庶民の中では裕福な階層であったとみなされる。（七原）

註 久永春男・田中 桢『尾張・三河における古墳出土の須恵器の編年』『農田大報』豊田市教育委員会 1966年)

第3章　社山第2号墳

1. 位 置

社山第2号墳は、第1号墳の南西約10m、第3号墳の西へ約5mの地点にある。標高は89mである。

2. 調査の経過

社山第2号墳の調査は、7月25日から16日を費して実施した。

墳丘の写真撮影後測量を行ない、その後墳頂部に東西方向に幅1mのトレンチを設定し、内部主体を追求した。表土下約40cmで、南北方向に石組があることがわかった。この石組を追って北に奥壁を、南に羨道をみつけた。石室内におちこんだ土砂を排除していくと、石室の中央に柱状の石が左右両側壁に立てられていて、前後2室に分れている状態がはっきりした。床面近くから頸部のとれた瓶や蓋環、鉄錠などが見出された。

石室は奥壁から4.4mの地点で終り、前室の下から前方にかけてU字形の溝が掘られていることもはっきりした。溝の中に入っている小石を除いていくと、蓋環、短頸壺などが相ついで出土した。溝は前方へ行くにしたがって広がっている様子である。遺物の出土位置を記入し、石室全体の写真撮影、実測を行なって終了した。

3. 墳 丘

天竜川に面する西斜面の出張りの稜線寄りに存在するこの円墳は、丘陵の西斜面を利用して築かれている。



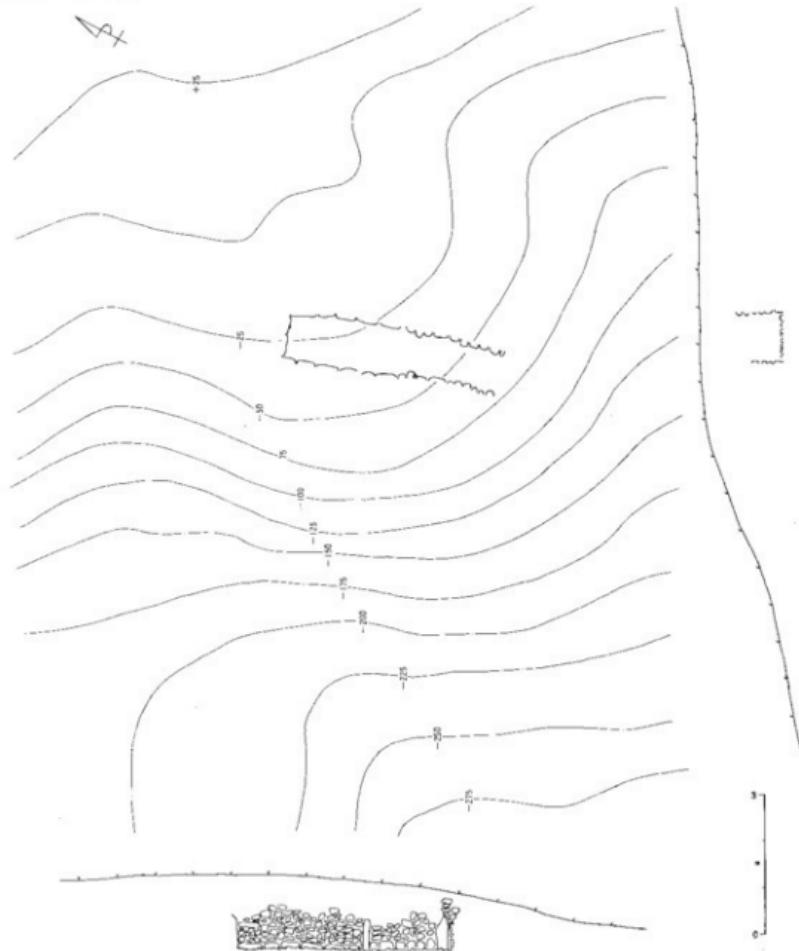
社山第2号墳調査状況



社山第2号墳石室調査状況

今回の調査で、雑木をまじえた松林が伐り払われたこの古墳の墳丘には、盗掘のための凹みは、見られなかった。

しかし、墳頂付近の盛土が、雨に流失したことと、石室が斜面の地山を掘り下げて造られているためか、墳丘の盛土は、南西方面から見たとき最もふくらみある墳丘に感じられ、それ以外の位置からは、墳丘の盛土は目立たない状態であった。



第9図 杜山第2号墳墳丘実測図

発掘前の墳丘の直径は、南北が約11m、東西が11m弱となっていた。墳丘の高さは、墳丘のふくらみの最も高い南西部で約1.5mを測ることができた。

なお、この墳丘には、葺石、石垣などの外部施設は全く認められなかった。

山の斜面を切り込んで出来ているこの古墳の封土は、表上上面より右側壁の奥壁東で1.72m、奥門東で1.36m、左側壁の奥壁西で1.70m、奥門西で1.22mの土量が、石室基底の上に存在した。

4. 石室

石室は墳丘の造られている西に面した山の斜面の一部をU字状に掘りさげ、山の斜面に直角な方向、即ち接線に平行して築かれ、ほぼ、南々東に向けて開口している。

山を削り取って石室を築くための掘方床面の東西の長さは、奥壁付近で約1.90m、玄門付近で約1.74m、南北の長さは、中軸線で約4.44mとなっている。

また、四隅は、ほとんど直角をなし、わずかに前方のつばまた長方形であった。

高さは奥壁直前より玄門末端が、約15cm低く、この間にゆるやかな斜面が作られていた。

そうして、奥壁の後には約12cm前後の巾に粘土が詰っていた。右側壁の外側で、奥壁東にあたる部分では、封土は、赤味のある土と、黒味のある土とが、交互に積み重ねられて、縞状をなしていた。

この床面に造られた石室は、前後に別れる複室型の横穴式石室で、前後室の中間および玄門のところには、いずれも左右に柱石が存在する。

石室の長さは、奥壁から間仕切石までが約2.73m、前室の先端までが約4.40mとなっている。その先に右壁をはめ込まない差道が、3.45～3.60mの羽子板の柄のように続き、その前方には、東西約2m、南北約1.50mの長さをもつ前庭部が存在する。

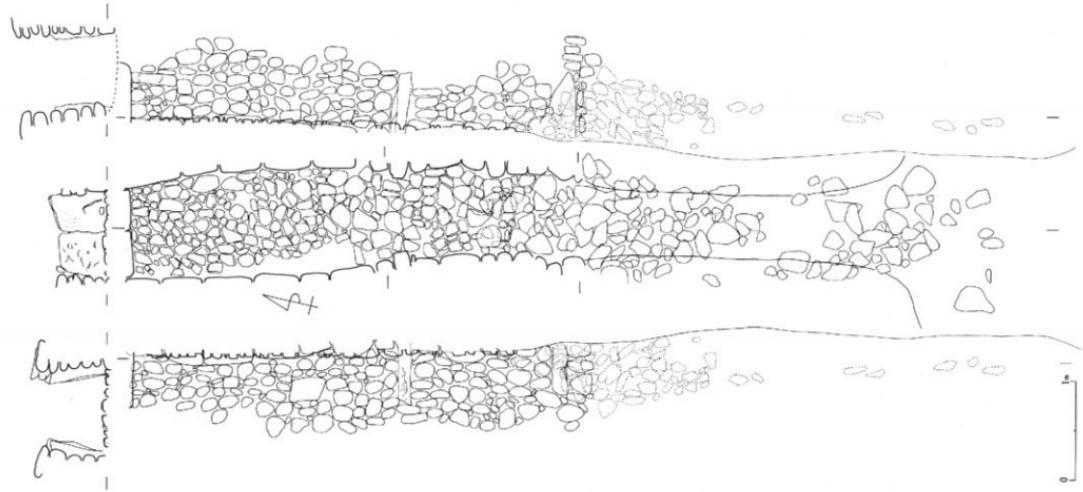
この前庭部の南部末端から、前溝が幅約0.6mで南へづき、奥壁より11.20mのあたりから西へ折れている。

石室の幅は、奥壁直前で0.84m、奥壁より2mのところで1.02m、間仕切石では0.75m、3.20mの地点では0.85m、玄門では、0.84mを測る。

その平面形は、後室では左右の側壁が相対応して胴の小さなふくらみが、認められるが、前室の胴のふくらみは判然としない。そうして側壁の線は奥壁のなめらかなのにに対し、前室では粗雑なものとなっている。しかし、石室全体としては、大体長方形をなしている。

天井石は、石室上にも墳丘上にも発見されなかつたが、奥壁より2.20m付近の石室内の埋土中に、石室を区切るように落ちこんでいる(10～34)×80×14cmの大きさで、板状の石が1枚発見された。これが、おそらく、天井石のうちの1枚であろう。石材は、大樂地石(註1)である。

奥壁は、左右の石を接するように垂直に立てている。この奥壁の前面は、いずれも平たい面



第10図 社山第2号填石室実測図

にするための調整の痕が、石面にうかがわれ、左右の石の接する個所も、削りとったあとがみられる。しかし、この2個の石は全面的に密着するまでに至らず、上端に近いところには、わずかながら間隙がある。

この奥壁の石の厚みは、左の石の上面が11~12cm、右の石の上面が、12~13cmで、板状となっている。敷石からの奥壁の高さは、左右の中央部で約0.46m、左右の石の接する中軸線で約0.44m、右上りのはげしい右石上端、すなわち奥壁の最高の地点で0.55mを割る。

石材は、大業地石で、その大きさは、左が(38~46)×70×(11~12)cm、右は(37~42)×72×(12~13)cmとなっている。

この奥壁の2個の石のうち、右の石の下には左端、中央、右端の下にそれぞれ10cmほどの平たい石を置いて安定させる方法で築かれている。

側壁は、左右とも1部分損壊していた。右側壁では、奥壁から0.6mまでの所で1段、奥壁から1mを越えて間仕切石までの間では、1~2段、前室で1~2段ほどの石積が欠損していた。また、左側壁では、奥壁から1.30mまでの間で1~2段、間仕切石と玄門付近でも、わずかな石積の崩壊がみとめられた。崩壊の少ない後室右側壁と、前室左側壁とで測れば、後室の奥壁付近の石積は4段で、高さ約0.60m、中央部は6段積で約0.85m、前室は6段積で約0.80mとなっている。すなわち、高さの低い奥壁に対応して奥は低目にし、後室中央部を最も高くし、前室はやや低目にして側壁を築いたようである。

奥壁に接する側壁は、左右とも、奥壁の両端に接して半たい長めの石を第1段の石として据え、その上に円くて長めの石を牛蒡積みにし、その前方には、碎石を入れて石積が前方に傾くのを防ぐ方法で、積み上げている。

石材は、天竜川の円くて長い河原石がほとんどであるが、間仕切石や玄門は大業地石を使用している。

また、側壁のうち、右側壁の最も奥の石積の第1段目と第3段目、および左側壁の奥壁から1.80mのところで第4段目に使用された長方形の大きい石と、間仕切石の上におかれた計4個の石が、大業地石であることに注目された。

敷石は、後室から前室にかけて敷き詰められていた。しかし、後室の左側壁に沿って奥壁から1.20m付近から間仕切石までの間では、1個~3個ほどの幅をなして敷石が存在しなかった。また、敷石の末端は奥壁から右側壁では4.10m、左側壁では3.82mとなっており、玄門までにはば台形状に敷石の見られない状態であった。

敷石は、第1次、第2次の二つの面が存在したが、第1次、第2次の両敷石の存在したのは主として後室であった。

敷石に使用した石材は天竜川の円礫で、第1次では長径0.20m前後の石が最も多く、第2次では同じ円礫ながら第1次に使用したものよりも小さいものがかなりあった。

閉塞石は石室の入口を封鎖するために、玄室の前部から羨道および前庭部にかけて多数の石が使用されていた。

すなわち、奥壁から4mに始まって、8.40mまでの間に閉塞石が存在した。そしてその間に奥壁より約6.70m付近で、0.70mほど閉塞石のないところがあった。また奥壁より約6m付近からは、石室中軸線の左側に石が乏しくなり、7m付近からは右側に石が少なくなっている。なお、この閉塞石の詰まり方は、奥壁より4m～5.50mまでは大小の石がぎっしり詰め込まれている。そして奥壁側から次第に上がり気味に積まれた石が、5m付近からは、反対に下がり気味となっている。それより前方は、下部には土をおいて、上部にのみ石が使われていた。石材は、やはり天竜川の河原石である。

5. 遺物の出土状態

遺物はその一部分が石室の内部から発見され、大部分は石室を封鎖した閉塞石の外側から発見された。そして鉄製品は全部石室内で出土したが、須恵器は長頸瓶だけが石室内に存在し、他は、いずれも石室外の羨道部、前庭部から出土した。土師器は須恵器に比べて出土した数量も少なかつたが、これも石室内では小破片数個が発見されただけで、あとは、石室外から出土した。また墳丘からは、小破片となった須恵器が採集された外、縄文文化時代の石鎌1個が発見された。

(1) 石 室 内

後室内にあった遺物のうち、須恵器は提瓶1個体分だけだった。すなわち奥壁から約2.50mの左側壁寄りの地点で、頸部を失った穴を上にしながら、石室中軸線に向ってわずかに傾斜した状態で発見された。この頸部が欠けた穴には、長径0.18m、短径0.13mの円碟が載っており、器底は敷石の上に接していた。そして、この提瓶の一部と思われる口縁部の破片2個は、左側壁よりの奥壁から約0.10mと0.27mの地点で出土した。しかし、この外には、頸部と考えられる部分の須恵器は石室の内外のどこにも発見されなかった。

土師器は2～3cmほどの小片2個が奥壁より約0.20m左側壁寄りの地点で、敷石上から出土しただけであった。この土師器片は、おそらく前庭部から出土した高盤の一部であろう。

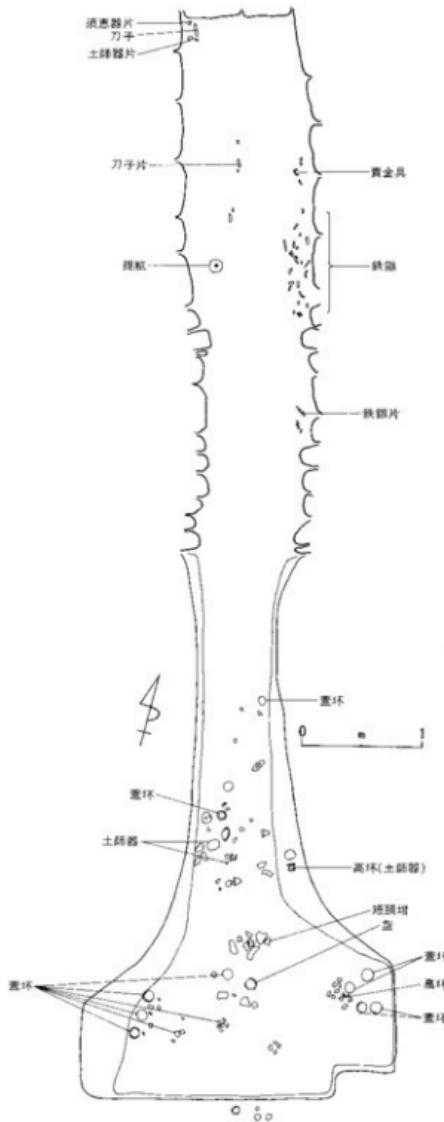
鉄製品は大部分が後室で発見された。すなわち、奥壁より約1.20mと1.65m距った石室中軸線沿いの地点で刀小片が、また奥壁より約1.30m距たり、右側壁より0.15mの地点で責金具が、破片となって出土した。刀子は、奥壁より約8cm、左側壁より約10cmの距たった敷石のないところから出土した。鉄鎌は、右側壁に沿って奥壁より1.20m～2.60mの区間にかたまって存在した。破損がはなはだしい状態であったが、その数は4～5本かと思われる。敷石上のものと、敷石のない土中のものとがあった。前室から出土したのは鉄鎌のみであった。奥壁より約3.20m～3.45mの間の右側壁よりに約2本と思われる鉄鎌が、バラバラに折れて敷石下から発見された。

(2) 美道、前庭部

後室で発見された提瓶以外の土器は、すべて、美道および前庭部で発見された。そして、その土器には、須恵器と上師器がある。

須恵器は、第1次の閉塞石の前端までに当る奥壁より6.40mのところまでには、須恵器の小破片10数個以外に蓋環の身と蓋の各1個が30cm位の距たりで右壁下に発見された。この身と蓋とは、胎土や焼上がりの色などから1対となるものであろう。

第1次の閉塞石より前にあった閉塞石らしき石を除去していくとき、奥壁より約7mの地点を中心としてその前後40cmほどのところに蓋環の身と蓋が出土した。これらのうち完全な形をなして発見されたものは身2個、蓋1個で、のこりは破砕された状態で取り上げたが、その破片を接着して身が計6個、蓋が8個となった。この中には対と思われるものが少なくとも5組はある。この外に、蓋環の破片かと思われるものが2～3個体分存在した。この蓋環群につづく奥から約7.80m、中軸線の右寄りの地点には、短頭増が、10数片に破砕されて床面近い上中に埋まっていた。ここで出土した上器の高さは、床面上約6cmから41cmまでになっているが、床面上10cm内外のもののが多かった。以上の外、ただ1つ、石のない右側壁の上に土師の高环と



第11図 社山第2号墳遺物出土位置図

重なっていた蓋坏の蓋があった。奥壁より 8.20 m の地点を中心とした前庭部では、3 個所において須恵器が発見された。中軸線より右寄り約 1 m の地点を中心にして出土した須恵器は、破砕された状態で出土した高坏 1 個と蓋坏の身と蓋とがいくつか群をなして、ほとんど、掘りひろげられた床面上に存在した。この蓋坏で、完全な形で取り上げられたのは、身と蓋とがそれぞれ 2 個ずつであった。壊かれていたのは身と蓋それぞれ 1 個ずつであった。そして、これらの身と蓋は、いずれも対になっているようである。中軸線に当る前庭付近にもいくつかの蓋坏が出土した。ほとんど破砕された状態で見出されたが、身 2 個体、蓋 1 個体は、つぎ合わせて、ほぼ原型を想像できた。この外に身または蓋 1 ~ 2 個体分の破片があった。完全な形で出土ものは 1 個の盤で、ほとんど床面上に、うつぶせになっていた。

中軸線より左へ 80 cm ほど寄った地点でも蓋坏の身と蓋とが各 1 個ずつ出土した。これも対をなすものであった。このほか器形の不明な須恵器片 10 数個も採集された。

土師器が出土したのは、後室では、奥壁より約 25 cm の地点で左側壁よりの地点で、盤の破片かと思われる 3 片であった。奥壁より約 7 m の羨道部においては、奥壁近くで見つかった破片と同じと思われる土師の盤が、約 25 cm の距たりで 2 個、押しつぶされた状態で、いくつかの須恵器の蓋坏の群れの中で発見された。この盤より約 40 cm 前方に、土師器の破片数片も採集された。

墳丘で採集したものは(註 2)、ほとんどが須恵器の小破片ばかりであった。そして、その数は 40 片以上であった。この中には壊、蓋、蓋坏の身の思われるものが、数片存在した。

その採集された範囲は、前庭部の南部と西部に当る地域で、前庭部の末端から 4 m までの間に散在した。

前庭部西端から 50 cm ほどの表土中から、石轂 1 個が発見された。

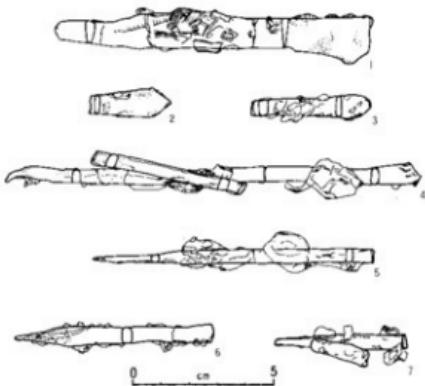
6. 遺 物

社山第 2 号墳の石室内の遺物の品目およびその数量は次のようである。

鉄器 刀子 1 口、鐵鎌 7 本以上、
鞘の責金具 1 個、刀 残欠、不明鐵器
残欠、**土師器** 盤 2 個、高坏 1 個、
須恵器 提瓶 1 個、短頸瓶 1 個、盤
1 個、蓋坏身 16 個以上、蓋 15 個以上、
高坏 1 個

鉄 器

刀子(第 12 図の 1) 完形に近いが、鋒



第 12 図 社山第 2 号墳出土鐵鎌、刀子実測図

の部分等がわずかに欠損し、身は背から見てわずかに左へ彎曲していた。多少欠けている箇の部

分で、身幅が約1.5cm、長さ約12.4cmである棟鉗は明瞭であるが刃区は、欠損のため明瞭でない。区に近い部分に鹿角かと思われる痕跡がみられる。

鉄刀 約5cm、2.5cm、1cmの長さの破片で、板状剥離が著しく、最長の片の厚さは、約2.7mm、幅約2.2cmとなっているが、おそらく刀身であろう。

鉄鎌 (第12図2~7) 全部が折損したものばかりであり、総数7本以上かと推定した。そしてほとんどが尖根鎌である。長さ2.5~3cm、幅0.7~1cmほどの鎌身に角造りで約11~12cmの長い籠被をもっている。鑿筋式が4本平造りが1本あり、他は不明である。

責金具 幅約2.2cmの倒卵形の鉄製の輪金物で、長径約3.4cmを推定する大きさである。この輪金物の中央縁上りに柄を着装させたと思う鉄釘が残っている。

土 師 器

高壺 (第13図の32) 口縁の一部と脚端の大部分を欠損しているが、口径約12.2cm、器高約6.5cmとなっている。半球形の壺部はふくらみのある感じで、内外とも器面を滑らかに作り、その上面に朱を塗って仕上げてある。口縁の内側はへらで、こすって4mmほど面取りされている。脚部は丈が低く外反気味に作られ、脚の内面は、下部に向かって次第にひろがり、最後の1cmほどは、鈍角めいで横にひろがっている。そうしてその末端は胎土を紙状に擦き上げて作られている。

高盤 (第13図の31) 2個ある。全部破片として採集されたものを復原作業の結果、1個は原形を知るまでに至らなかった。他の1個は脚の下半部は復原できなかったが、盤部はかなり復原できた。復原した高盤の口径16.2cmで、浅い盤部は厚さ約5mmを作り上げている。器高は推定8cmであろうか。盤部の口縁に近いところで内面はやわらかく、外はきつく立ち上がりをもち、口縁は、へらで面を削っている。

盤部の中心から細い線で不揃いの放射状線を口縁まで描いて模様とし、器全体を朱で塗っている。

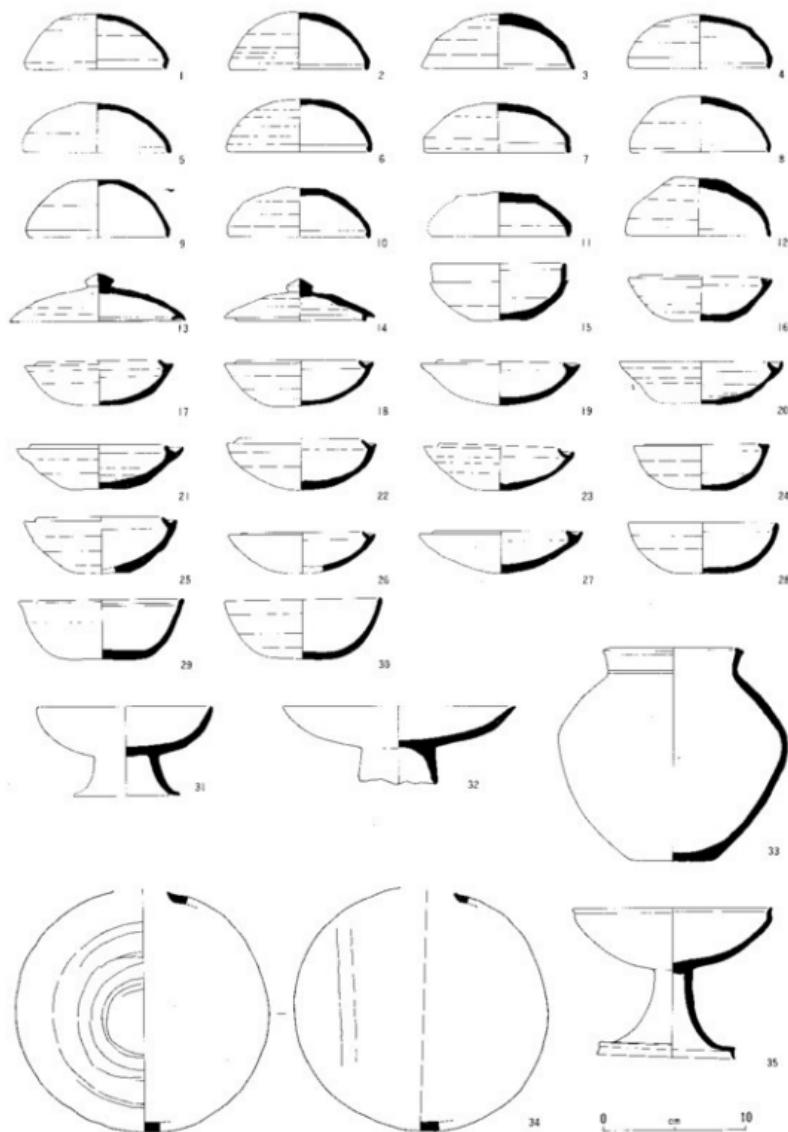
脚部は次第に外反する状態で下り、末端は、1.7cmほどの幅でひろがりを作り、器の安定を図っている。また、盤部と脚部を接着させる工程で指圧した痕跡も見える。

復原出来ないもう一つの高盤もよく似た作りでこれにも朱がぬってあり、ほとんど同じ大きさかと思われる。ただ、盤面の放射状の線模様だけがない。

須 恵 器

提瓶 (第13図の34) 頸部が亡失している。胴部の径左右17.8cm、前後17.8cmの球形をなし、その上部に径3.7~3.9cmの頸とつながる穴をもっている。穴を横にしてろくろを使ったあとと、表面をヘラで調整した跡とがはっきりと見られる。穴を上にして胴部の最も張り出しているあたりまで片側には、自然釉が器面に粗くひろがり、白の強い灰色を呈して固く焼け上がっている。

破片の口縁部は推定口径約9cmで、口縁の外側には2段の段を作りその間は沈線化している。



第13図 社山第2号填出土須恵器・土師器実測図

自然釉が、内外ともに見られる。

短頸壺（第13図の33）復原し得た器高は、約15.1cmである。口縁の直径が約9.8cmで、口縁は面をつくっている。頭部の高さが約1.5cm、肩はなだらかで、腹部の最大径は16.7cm、下腹部には張りがみられる。底部は平底で、径6cmである。全体の色調は、灰白色を呈し、上半部はこまかい自然釉の影響で、黒ずんだところが見られる。内側には、輪積法によって作られた折のこすりあとがはっきりとこっている。

高壺（第13図の35）口径19.2cm、脚部9.8cm、器高10.2cmの碗形をなす壺部の大きな高壺である。壺部は口縁が垂直に近い状態で立ち上がり、外側3mm下に1条の細い沈線をもち、その沈線の部分が、内側へ押し出されてせばまた出来上がりを見せている。腹部にはヘラでこすったあとも見られるが、まだ、巻き上げた粘土の紐がわずかにでこぼしているほどで、ていねいな作りとはいえない。壺部を脚部に接着させる折、口縁の両端の高さが、約1cmの差が出来ている。脚部は脚端が大きく開き、脚端からは9mmほど垂直に近く立ち上がりが存し、脚部全体にろくろのあとも見られる。灰白色にかたく焼け上がった製品である。

鉢（第13図の15）口径9.4cm、腹部の最大径9.5cm、器高4.1cm、底径4cmの大きさである。半球形の胴部にやや外反気味に高さ1.4cmの立ち上がりを見せている口縁がつく。胴部はヘラでこすって仕上げ、底部は糸切の後、ヘラを使った跡が見える。白味の強い薄朱色で焼成は良好である。

蓋壺（第13図の1～14、16～30）蓋壺は蓋が14個、身が15個ある。身は、口径平均8.6cm、蓋受け部の径平均10.8cm、深さ平均2.9cmであり、蓋は、口径平均10.4cm、深さ平均3cmである。

蓋のうち2個は鉢のついたものである。13の鉢の径は2.2cm、高さ1.1cm、14の鉢の径は2cm、高さ1.2cmで、いずれもその後合部にくびれをもっている。13は全体がふっくらとし、14は頂部鉢のまわりを平らにして、どちらも、ろくろを使ったていねいな作りである。13と14はともに優美で、蓋壺の蓋として作られたものではないであろう。14の表面の片方にヘラ先で1線をかいたのは記号かと思う。鉢のない他の蓋は、半球形で、頂上には、身の底と同じようにヘラ切りで、ほぼ平らにしてあるものが多く、その部分の径は3.0～5.8cmで平均径は4cmとなっている。殆んどがヘラでなでた跡が見え、そのヘラ先が口縁近くに沈線を作っている例もある。

身は2.2～3.6cmの深さの曲面をなす器体に水平面より15度内外の傾斜で上向きの立ち上がりをつけ加えたもので、立ち上がりの幅は6～9mmである。立ち上がりの上端は蓋受け部の外端より2～3mm高い例が多く、最も高いものでも5mmとなっている。底部は曲面のままのもの3例外は、底径3.5～5.7cm、平均4.4cmの平らな底を作っている。そうして、この底面に蓋の場合と同じようにすのこ跡のあるものが6個、細い沈線1本あるものが2個



0 cm 3

第14図 杜山第2号墳出土の石鏡実測図

ある。ヘラを使って仕上げたものがほとんどである。

墳丘から採集した遺物

須恵器 細片ばかりである。2～3cmの大きさのものばかりで色も焼き上りよりも、石室や前庭部で出土したものと似ている。破片にのこる器形の特色から、塊、蓋、环と思われるものもある。

石鏡（第14図）先端がわずかに欠損しているが、残存する長さが2.4cm、下端の幅が1.8cmの三角形式の石鏡である。無茎で左右を対称にした形も正しく、石の削ぎ方もていねいでこまかく美しい出来上がりで縄文式土器時代のものである。

小 結

社山第2号墳は今回発掘した3基の古墳のうちで、古墳の造られている上地の高さが、他の2基よりわずかに低いものであったけれども、天竜川流域の水田を見渡せる位置に築造されていた。

石室から、被葬者の遺体は発見出来なかったが、副葬されていた遺物の大部分をなす須恵器は、いずれも三河地方における古墳出土須恵器の編年で、第5型式に比定されるものである。また、出土した上師器も須恵器第5型式に付随するものであった。したがって、上記須恵器の編年が、この遠江地方にも適用できるならば、第2号墳の築造年代は、7世紀前半と考えてよいであろう。

第2号墳の石室の大きさは、この地方では中級に属するものといえようが、墳丘の直径、石室の構造が3基のうち、最も大きく、出土品も多かった。石室が複室をもつば長方形で、石室の前に細い羨道があり、その羨道の前に溝が作られていたことは、同じ豊岡村の押越第5号墳（註3）の平面形と類似している。出土品では、玉類が全く発見されず、武器も刀、刀子各1枚および鉄鏡10本以下と、その量が乏しかった。土器の大部分である須恵器は、蓋環だけ多量で、提瓶、短頸壺、高杯、盤が各1個であった。これらのこととは、この古墳の被葬者が、石室構造は小規模でも、玉類を持っていた社山第1号墳の被葬者とは階層のちがった者であったと考えてよいであろう。

武器以外の出土品として須恵器の提瓶だけが後室に存し、他の土器はほとんど羨道および前庭部で発見された。また、奥壁に近い地点で採集された上師器の破片が、羨道で出土した土師器の高盤の一部分と思われるし、やはり羨道で発見された鏡のある蓋が提瓶あるいは短頸壺の蓋として使用されていたことも考えられる。これらのこととは、後室を主として敷石が第1次、第2次と存在したことが認められたことともに、この古墳に追葬が少なくとも1回は行なわれたと推定したい。すなわち、追葬に際し、第1回の埋葬における副葬品を羨道および前庭に移動した。その折、羨道の閉塞石前部が動かされ、縦断面図における閉塞石の乱れとなっている。また、蓋環が、羨道および前庭部で全部出土し、多量であることは、押越第7号墳や豊橋市流平第3号墳（註4）でも同じ位置で多量に第1次埋葬の遺物として存在したことから、この第2号墳においても蓋環類は発見された位置に最初からおさめたといつていいであろう。

前溝は、埋葬のための道でもあり、後日の參詣のための道でもあったと思う。そうして、この前溝やその付近の埴丘表土から採集された須恵器の小片は、埋葬當時またはそれ以後の墓前祭に使用した容器が、故意または自然に破壊されて残存したものであろう。

(木下)

註1 本墳の近くに大楽地という土地があり、ここに多量に存在する粘板岩を地元では大楽地石と昔から呼んでいる。

註2 本墳発掘の際、地元中学生鈴木裕一君等が、見学かたがたがた来て、本墳の埴丘および、その周辺で須恵器の小破片多数を採集した。

註3 昭和45年7月静岡県磐田郡豊岡村において久永春男氏が発掘調査した押越古墳群の1つである。

註4 昭和44年8月発掘調査したもの

第4章　社山第3号墳

1. 位置

社山第3号墳は、第1号墳から南へ4m、第2号墳から東へ5mで南に延びる丘陵の稜線に築かれている。標高は90～91mである。

稜線の東側は土取りによって崖になり、墳丘の東端もわずかながら削り取られている。

2. 調査の経過

昭和46年7月26日午後から第3号墳の調査を開始。

第3号墳の地点には墳丘らしいものはなかったが、ゆるやかな隆起が見られるのでボーリング棒で探査したところ、石が東西に配列されていることが確認できた。あらためて25cm単位の等高線で墳丘測量をおこなった。27日に主軸を東西に長さ25m、幅1mのトレチを石列と直交方向に設定した。表土下20cmで石室の壁があらわれた。南壁は、きれいに一列にならんでいたが、反対側の北壁はやや乱れた状態であった。28日、29日両日で石室内の発掘を終え、30日、31日両日で石室の実測を完了した。石室の周囲を広げ8月1日より4日まで石室の構築方法を検討した。

3. 墳丘（第15図）

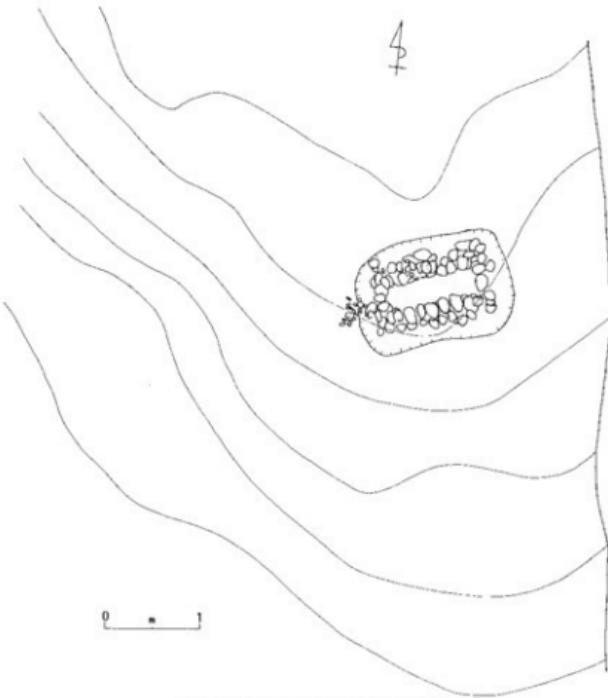
現状では墳丘の形状はきわめて不明瞭で、標高90.5～91.5mの線がかつての墳丘を示しているかにみえる。直径は6m前後の小円墳と推定



社山第3号墳発掘状況



社山第3号墳調査担当者による当日の説明会
(右端は故木下先生)



第15図 社山第3号墳墳丘実測図

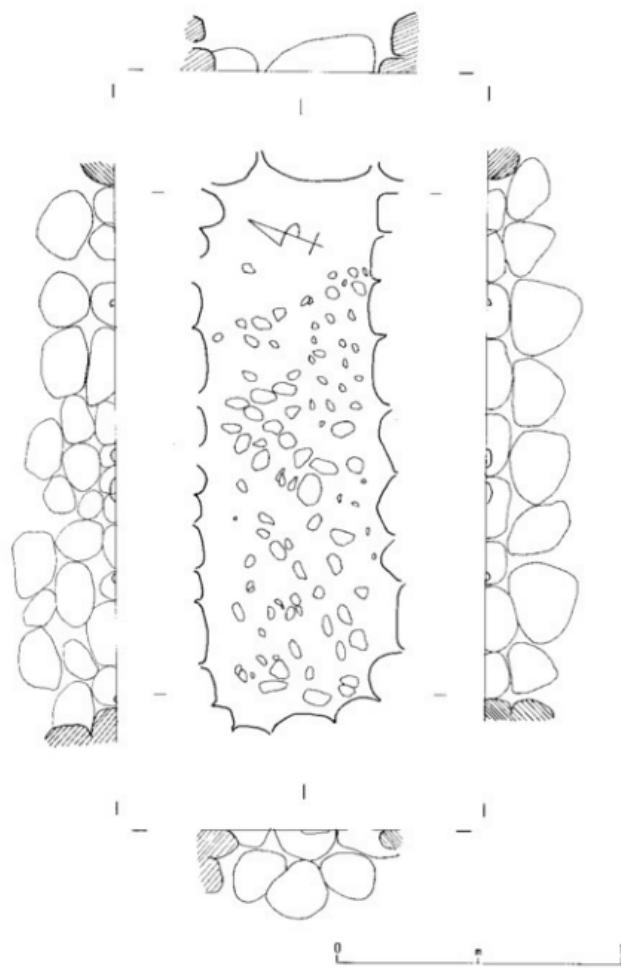
される。

4. 石室（第16図）

石室各部の寸法は奥壁部から前端部まで 1.95 m 、奥壁と中央部では 0.6 m 、前端部で 0.5 m を測る。石室の高さは床面より $0.35 \sim 0.4\text{ m}$ である。床面には敷石はなかった。

石室を作るにあたって地山に長辺 3.3 m 、短辺 2.2 m 、深さ 0.3 m の長方形の掘り方を掘り込んで築いている。石の配置状態を検討すると、石室のまず奥壁に当る石を置いたのち、左側壁から構築し、その後石室に一定の幅を保たせるために右側壁が築かれている。また石室周囲にも石を並べている。外列の石は32個を使用してそのすき間に小形の石をつめこんでいる。

石室に用いているのと同じ大きさの石が石室内に落ちこんでいたが、これらの石は両壁にかかる石ではないので木棺を置いて石をのせたか、あるいは本で犬井をふいたのち石を置いたものと考えられる。床面上には厚さ 8 cm の黒色有機土が堆積していた。棺と遺骸の痕跡であろう。なお、石室の西端には、約30個の礫があった。石室をつくるのに用いた礫が余ったものと思われる。



第16図 社山第3号墳石室実測図

5. 遺物の出土状態と遺物

本古墳から出土した遺物は、石室床面から出土した鉄鎌1本、刀子1口である。

鉄鎌は、奥壁から0.42m、右側壁より0.07mの所に北東—南西方向に向けて出土した。刀子は、奥壁から0.37m、右側壁より0.2mの所に切先を南西方向に向けて出土した。

鉄鎌、現存長5cm、鋒の部分が欠失している。幅広い三角形の身は片丸造りであり、笠被の部分が残っている。刀子、全長9.2cm、身の長さ7.4cm、身の最大幅1.8cm、身の厚み0.7cm、肩丸造りである。茎の長さ1.8cmを測る。

6. 小 結

この第3号墳のように墳丘がほとんどなく、横穴式石室の退化し堅穴化した小形石室は、この付近では前年度調査した押越第20号墳で見られた。そして押越第20号墳からは尾三地方古墳出土須恵器の第六型式（註1）に比定される壺や蓋坏が出土しているので、おそらくこの第3号墳もほぼ同じ墳に築かれたと考えてよかろう。

また、ほとんど封土のない墳丘、退化した石室、また退化した石室の寸法が唐尺を使用している（註2）と考えられることから、7世紀中葉薄葬令の出た前後であると考えられる。

押越第20号墳が、刀や玉類を所持していたのに対して第3号墳は刀子・鉄鎌各1個にとどまつた。おそらく被葬者は庶民層であったろうと考えられる。

（仙田）

註1 久永春男・田中 桢「尾張・三河における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』守山市教育委員会 1967年）

註2 久永春男・斎藤嘉彦「尾張・三河における後期古墳の横穴式石室の築造に使用された尺度について」（『天神山古墳群』愛知県立岩津高等学校 1969年）

第5章 社山古墳群付近の古墳出土須恵器

1. 新原境古墳出土の須恵器

社山第1号墳から北方へ約100mの山林中に所在した新原境古墳は、養豚場の造成工事で破壊されたが、その際、須恵器の蓋坏の1セットが出土し採集されている。

蓋坏（身）（第17図の2）口径は10.6cm、器高4.6cm、深さ3.2cmを測る。口縁部の立上りは7mm内外で、内側への傾斜は30°ほどである。立上りの高さと身の深さとの比は、1対4に近い。立上りの一部にわずかな欠損部分があるが、ほぼ完器である。底部は部厚くつくられ、外面はヘラ削りがなされ、内面は指頭でなでつけられている。器底の色調は青灰色で、胎土は緻密で焼成も堅い。器体内面には気泡によるふくらみが数個ある。外側面には、「川」の字状の記号状刻文がヘラ描きされている。

蓋坏（蓋）（第17図の1）口径は11.4cm、器高4.2cmを測る。頂部の器厚は1.1cmと厚くつくられ、外面はヘラ削り、内面は指頭によるなでつけで仕上げられる。頂部から口辺部に移るところに幅1mmほどの浅い横線を一条めぐらしている。色調、胎土、焼成技法などの点からみて、上記の蓋坏の身と同一手法で製作せられたものと推定される。

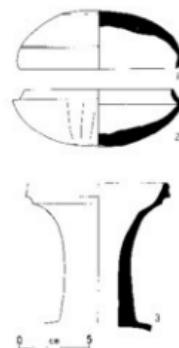
上記の蓋坏は、尾三地方の古墳出土須恵器の第4型式に比定（註1）される。

2. 社山第2号墳西方20mの密柑畑出土の須恵器

社山第2号墳の墳丘端から西方へ5mほどのところで、丘陵の斜面は高さ1.5mほどの段をなして削平されている。これは密柑畑造成のために、この工事により2基の古墳が破壊された。畑の周囲には、石室構築に用いたと思われる石材が多数積み上げられ、地表から須恵器の破片が2点採集された。1片は長頸瓶の口頭部で、他の1片は蓋坏の小片である。

長頸瓶（第17図の3）は、残存する口頭部の下端に球形の胴部へつづく一部をとどめ、ほぼフラスコ型の器形と推定される。口頭部の口径と高さは、共に10cmを測る。口頭部は中ほどから口縁部にかけてラッパ状に口が開く。口縁外面は段状に飾られているが頭部に横線はない。色調は灰白色で焼成がよく、口唇部の内外面には黄褐色の自然釉がかかる。尾三地方の古墳出土須恵器の第5型式（註2）に比定してよかろう。

（伊藤）



第17図 社山古墳群付近の古墳出土の須恵器

註1・2 久永春男・田中一總「尾張・三河地方における古墳出土須恵器の編年」（『豊田大塚』豊田市教育委員会 昭和40年）

久永春男・斎藤嘉彦「三河における古墳出土須恵器の編年」（『岡崎市天神山古墳群』愛知県立岩津高等学校 1969年）

第 6 章 結語

社山古墳群は、12 基からなる古墳群であるが、今回調査したのはこのうちの 3 基である。

3 基の古墳は、丘陵の西向き傾斜面に築かれている、いずれも墳丘の規模は小さく、日立たない。第 1 号墳は、調査対象区の中ではもっとも高い位置にあるので比較的目につく程度である。墳丘の規模は、石室を内包する範囲として 8 m、高さは 1 m 前後である。石室は、約 1 m 挖り上げた掘り方に納るように造られている。第 2 号墳の墳丘は、丘陵の傾斜面を示す等高線がわずかに円弧を描くだけであり、地表の盛り上りは殆んどなかった。石室が、掘り方に中にすっかり入ってしまっているためである。第 3 号墳も、わずかに盛り上りが認められる程度であった。

3 基の古墳の石室はそれぞれ特色がある。第 1 号墳の石室は、奥壁と闇塞石の区別がつかず、一見して堅穴式石室かと思われる状態であった。第 2 号墳は、全長 4.4 m をかり石室は前・後二室をもち、先に調査した押越古墳群（註 1）の石室と比較してもなんら遜色がない。これに対して、第 3 号墳の石室は退化した堅穴式の石室で、長さ 1.9 m、幅 0.5 ~ 0.6 m、河原石を 1 ~ 2 段積んだだけである。

つぎに、第 1 号墳と第 2 号墳では、少なくとも 2 回にわたって追葬が行なわれている。第 1 号墳では、石室中央部に石を補足して、先の被葬者の副葬品である鉄刀を背後に置いている。第 2 号墳では敷石が上・下二面認められ、やはり少なくとも 2 回は埋葬が行なわれている。第 3 号墳では追葬した痕跡を認められなかった。

各古墳の副葬品についてみると、第 1 号墳では鉄刀と鉄鎌が先の被葬者に副えられ、後の被葬者には管玉、棗玉、小玉などの装身具が副えられていただけである。須恵器は、前溝の中から出土した蓋環の身の破片だけであり、第 2 号墳における蓋環の蓋 14 個、身 15 個をはじめとして高环、短頭環、挺瓶各 1 個と比べるとまことに少ない。第 3 号墳は、石室の大きさに比例するかのように、刀子と鉄鎌の残欠が見出されたにすぎない。

出土した須恵器をみると、第 1 号墳の前溝から出土した蓋環は第 4 型式（註 2）とみなされ、第 2 号墳とともに 6 世紀末から 7 世紀前半にかけて貯まれたものと推定される。

第 1 号墳も第 2 号墳もともに墳丘は小さくなっている、第 2 号墳では自然の地形と識別しがたいほど低い。しかし第 2 号墳では依然として大きな石室を築いているのは、厚葬がなくなっているとする時の流れにあらがうようにみて興味深い。

第 3 号墳では、墳丘も石室も全く退化していて、薄葬への道を踏み出したかにみえる。

以上のように、社山の 3 基の古墳は、この地域における古墳時代終末期の一様相を示しているといえよう。

（七原）

註 1 前後二室をもつ押越第 5 号墳の石室は 3.5 m であり、これを上回っている。

註 2 久永容男・田中 稔「尾張・三河における古墳出土須恵器の編年」（『守山の古墳』守山市教育委員会 1963 年）

付載1. 押越第1号墳出土銀環の成分分析

静岡県磐田郡豊岡村押越第1号墳出土銀環の成分分析の結果は次のようである。

1. 試料採取方法

図に示す供試物より表皮の部分と、芯の部分を採取した。しかし表皮部分と芯の部分の割合が完全な形ではないので表皮成分、芯成分として分析した。

2. 分析方法

芯の部分 5 > 1.0%。表皮の部分 67.7% をとり分析に用いた。

(イ) 芯の部分

土水に入れ、加熱しながら溶解させ、溶解後乾固させる。純水 500cc に溶かし銅、ニッケル、鉄の定量分析を行なった。

銅の分析は JIS K-0102 37.1 吸光光度法（イオンを試薬によって白色にし、色の強弱によりかる法。）に従った。

ニッケルの分析は JIS K-0102 41.1 吸光光度法に従った。

鉄の分析は JIS K-0102 47.1 吸光光度法に従った。

(ロ) 表皮の部分

濃硫酸に入れ、加熱しながら溶解させ、溶解後乾固させる。純水 500cc に溶かし、ジチゾンによる抽出一吸光光度法（註）による。



第18図 押越第1号墳出土
銀環実測図・同断面模式図

3. 分析結果

(イ) 芯の部分

57.1% 中 銅 50.5%、ニッケル 12.5%、鉄 5%、その他 48.5%

(ロ) 表皮の部分

67.7% 中 鉄 62.5%、その他 5.2%

以上の結果、押越第1号墳出土の環は銀渡金である。

註 分析化学便覧 P 383、丸善(1961年)

(株式会社 三進製作所)

付載2. 押越第7号墳出土人骨について

一般に知られているように、古墳出土の人骨は保存がよくないが、この人骨もそと例外ではない。骨質は脆くなっている、さらに植物の根が骨体内部に侵入しているため、破損しやすい状態である。若干の四肢骨片を除いては細片化しており、同定は不可能である。

同定の結果、以下のことが判明した。左上腕骨遠位部約1/4、左大腿骨骨幹部、右胫骨骨幹部が残っており、それらはすべて、壮年女性の特徴を示す。

しかし、左大腿骨の骨幹部と遠位部約1/4が混入しており、これは明らかに上記個体と重複するものであり、かつ壮年男性のものと思われる。

さらにもう1個の左大腿骨骨幹部があり、前二者と異なり、扁平度が強く、壮年の男性と推定される。

以上を総合すると、第7号人骨は、いずれも壮年の女性1体、男性2体が、2次埋葬時にいっしょにされたもので、その際すでに主な部分は散逸ないし消失していたと考えられる。

身長、時代的特徴その他は推定不可能である。

(江原昭善)

付載3. 補 遺

押越古墳群出土遺物の整理終了後、次の2点の遺物が残っていることがわかったのでここに追加する。

1は短頸甌で、球形の胴部に短い口頸部がつく形で、口径11cm、胴部最大径18cmと推定される。頸の上方に2条の横線が描かれている。灰白色を呈し焼成は良好である。第15号墳排土中より出土したというメモがあるので、保存が決定した古墳の前方をブルドーザーが通ったときに掘りおこしたものと考えられる。

2は蓋壺の身で、口径9.6cm、高さ4.2cmをはかる。身の立ち上りは内傾している。在部はヘラケズリ調整がされ、ヘラによる直線状の刻線が施されている。出土した地点が不明である。

両者ともに第4型式に比定できよう。

(七原)

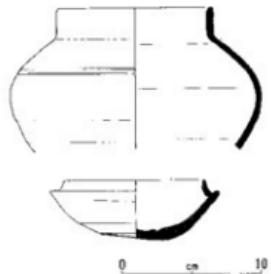
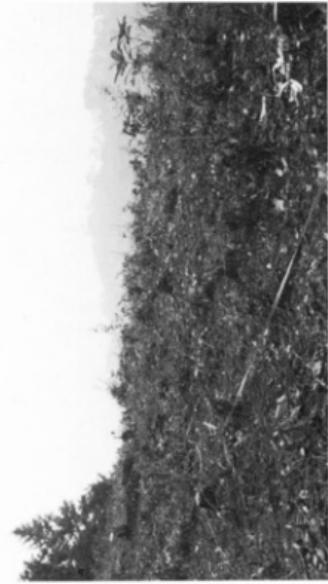


図 版

図版第1



(2)社山第1号墳石室上部の状態（南西から）



(4)社山第3号墳墳丘（ほどんど区別がつかない）（西から）



(1)社山第1号墳墳丘（南西から）

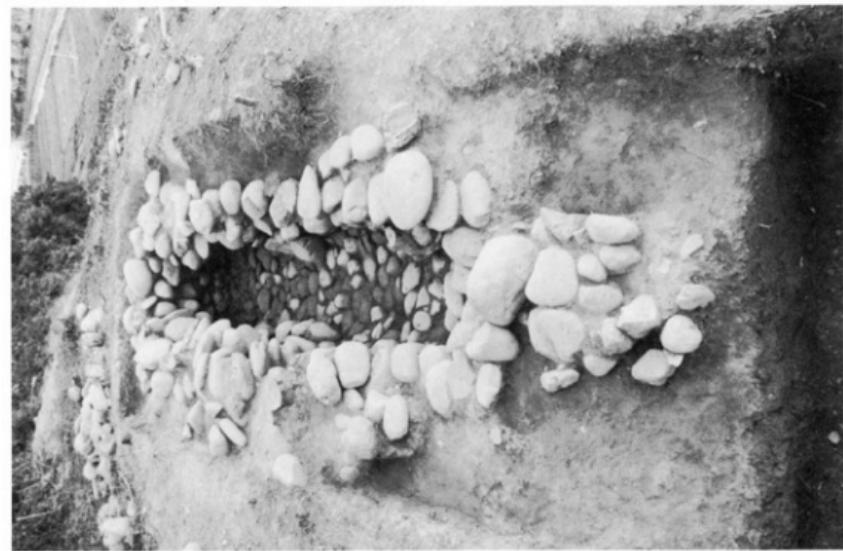


(3)社山第2号墳墳丘（わずかに盛りあがっている）（東から）

図版第2



(2)社山第2号墳剥石除去後の石室全景（南西から）



(1)社山第1号墳石室全景（南西から）



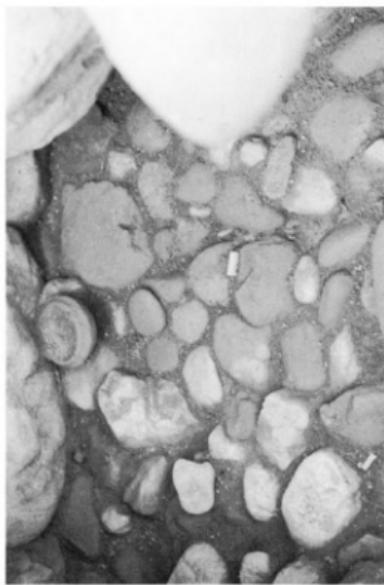
(2)社山第1号墳左側壁の補修状態



(4)社山第1号墳補修壁背後の遺物出土状態

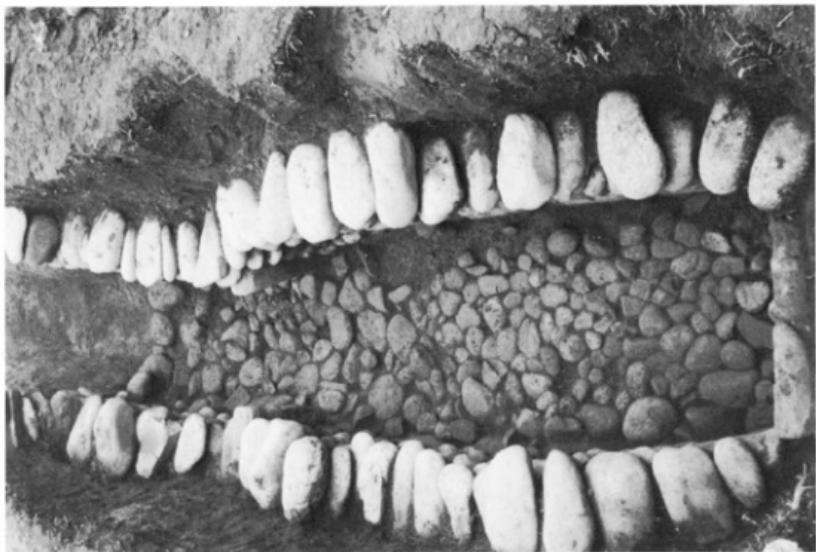


(1)社山第1号墳表土除去後の状態(東から)

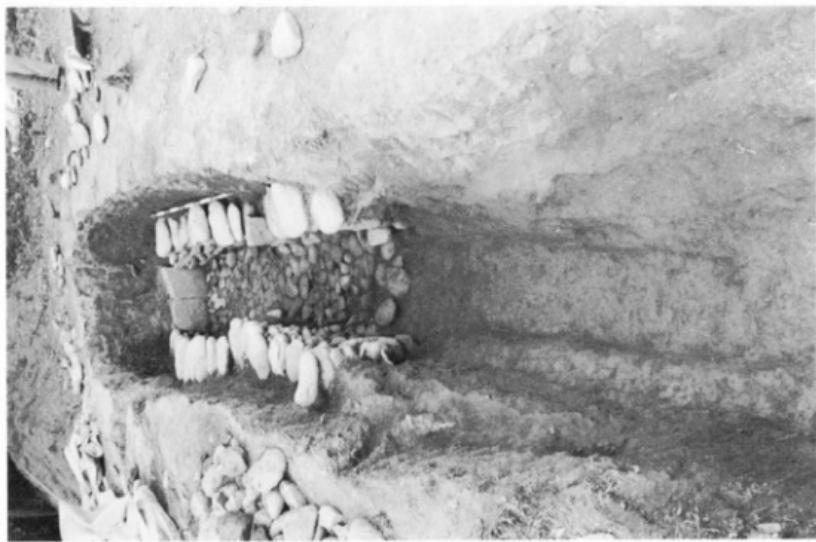


(3)社山第1号墳奥壁付近遺物出土状態

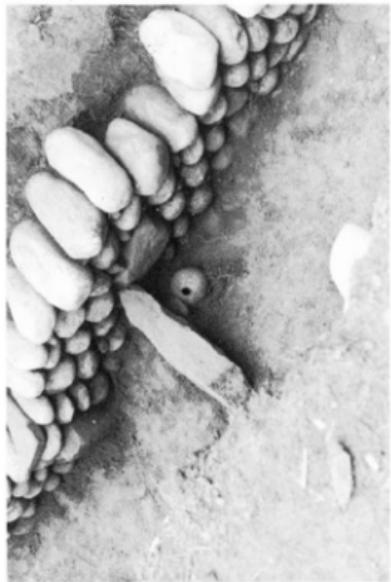
図版第4



(2) 社山第2号墳石室全景 (北から)



(1) 社山第2号墳石室全景 (南から)



(2)社山第2号墳壺瓶出土状態



(4)社山第2号墳壺瓶出土状態



(1)社山第2号墳壺瓶出土状態



(3)社山第2号墳壺瓶出土状態

図版第6



(2)社山第3号墳石室清掃後の状態（上方から俯瞰）



(1)社山第3号墳石室清掃後の状態（東から俯瞰）



(2)社山第3号墳石室外の礫散布状態（南から）



(4)社山第3号墳石室の収容状況（寝ている人物の身長160cm）



(1)社山第3号墳表土除去後の状態（東から）



(3)社山第3号墳石室内清掃途中の状態（東から）

押越・社山古墳群調査報告書

1983年3月25日

編集 豊岡村教育委員会

発行 豊岡村教育委員会

印刷 株式会社 三創
静岡市豊田3・5-30
TEL(0542)82-4031

